大自然の波動と生命

高橋信次著

大自然の波動と生命

高橋　信次　著

まえがき

本書は、生命・物質・現象の三編を組合せて、大自然と私達の関連に就いて、書いたものであります。

私達の肉体は両親を含めて、先祖の、先天的因果と自分自体の、後天的因果により、肉体的諸条件が、組み合っており、この肉体を、支配する意識即ち生命（魂）が、修行するために与えられた、人生航路の舟であることを、具体的に説明したのであります。（舟は人生航路の仮の宿）

意識即ち魂は、過去世において、神（仏）の子として、修行して来た生命であり、再びこの現象界に、自分の魂を修行するために、生れて来たのであります。

また、この現象界の修行が最も厳しく、来世における総ての基準になるのであります。

それは肉体の支配者である意識（魂）は、表面意識が約10％で修行するため、魂が磨かれるのであります。修行は物質的にも精神的にも、耳・鼻・舌・身・意の五感が表面意識に作用するため迷うのであります。

約90％の潜在意識は、実在界（死後の世界の区分）に通じているために、殆んど間違った判断はしないのであり、それは自分の心であります。（意識の中心が心）

やがては、現象界の肉体から、魂はぬけ出して、修行を完了し、実在界（あの世）の肉体を持って、再び魂の生活に入るという生命の不変を、具体的に説いた心算であります。

死はこわいものではなく、魂修行の卒業式であります。

仏教も二五四三年の間に、すっかり哲学に変り、智と意で悟り、心は不在になっています。このように、私達の日常生活から、縁遠いものに、なりましたことを、痛切に感じ私は、仏教の宇宙即我、色心不二の正法を科学的に書きあらためた次第であります。

私はこの現象界において、専ら科学的な事象に就いて研究し、仏教を学んでいませんが、釈迦如来の仏教は、正法であることを、ここに再確認した次第であります。

それは、現世において哲学化した、仏教を学ばなくても、自分の潜在意識の中で修行した過去世の生命が、学んでいるのであります。

自分自身が正法を悟ることにより、潜在されている意識の約90％が開らかれ、現象化することが出来るからであります。

先祖は肉体の提供者、感謝と供養するもの、親には感謝し、孝養を尽さなくてはなりません。

生命（魂）は過去世であり、また来世に循環されて行くものであり、肉体遺伝とは異っています。

過去から現在、現在から来世へ、修行をしていく生命即意識（魂）を自覚し、最も人間らしい、生

活を営むべきであります。

私達が、自分の過去世の魂（自分が誰れであったか）を知ることが出来れば、この現象界における魂の修行に、希望を見いだし、魂の構成を悟り、未来に光を発見することが出来るのであります。

何んの為に生れて来たかを悟ったなら、私達は自分の使命を自覚せざるを得ません。

その為には、人生航路において、自分の表に出ている約10％の意識（智）で判断をせず、潜在している約90％の意識即ち自分の心に問い、常に反省の中に神の光が与えられるのであります。

潜在意識・魂の輪廻を悟ることにより、今の物質偏重による心の不安を解消して、更に具体的に来世の存在を知ることが出来るのであります。

人生はこの世限りと思っていますから、自我我欲による自己保存、そのために闘争が繰り返えされるのであります。

お金や物質は、あの世に持って行くことが出来ません。子供は子供としての生命があり、親子でも魂は異うのであります。親が子供のためにと思って残した財産が、必ずしも子供の修行にならないことを、考えるべきであります。余ったお金は、社会の苦しい人々に還元すべきであります。

財産家が三代続かない理由は、子供達が己れの魂を磨かず、病気やその他、不調和な原因をつくるため黒い想念が神（仏）の光を遮断して、繁栄を断つのであります。

このように子孫のために財産を与えることだけが、親が子に対する愛情でないことを悟る、必要があります。

現代人は、己れの自我我欲・自己保存に走り、人間的な本性を忘れている人々が多いのです。

物質科学時代と錯覚している私達は、重要な己れの意識（魂）の中心である「心」の開発が優先であることを悟るべきであります。実在界より見れば、現象界の科学は、第一歩が始ったばかりである。

資本主義もマルクス主義も、物質偏重主義であるため、自己保存と黒い想念の塊りの社会と化し神（仏）の調和のとれた光を遮断するため、闘争がたえないのであります。

今の人類に欠けているものは、精神（心）であり、神（仏）の存在を再確認する反省の時であります。

物質科学が万能でないということを悟るべきであります。

思想の対立解消は、人間同志の心の、調和以外に解決しないことを強調致します。

大自然の慈悲に対して報恩感謝の心を悟り、人々の心が慈悲と愛による、調和のとれた社会を建設することが、私達の過去世で学んで来た、本性であることを思い出さなくてはなりません。

思想には、慈悲と愛の心が欠けています。そのため心に、安らぎがありません。本書を熟読して、

日常生活に、活用された読者は、必ず心に安らぎが、与えられることを信じます。

猶ほ本書中に、同じ言葉が幾度か出て来ますが、私の最も強調したい問題であるために、御諒解願います。

昭和四三年十二月二五日

高橋信次

もくじ

第一編　生命論

第一章　宗教と科学……一
第二章　神の原理……四
その一の神……四
その二の神……五
その三の神……九
第三章　大自然と生命……一三
第四章　私達の生命と指導生命……二
第五章　生命不変の原理……五八
第六章　大宇宙と小宇宙……七五

第七章　生命と感応……八〇
第八章　実在界と現象界……九一

第二編　物質論

第一章　他界より見た地上界……一〇二
第二章　大自然の循環……一〇五
(1)　エネルギー……一〇五
(2)　エネルギー恒存の法則……一〇九
(3)　エネルギーの源……一一一
(4)　物質の生命……一一三
(5)　太陽系の循環……一一五
第三章　惑星の運動……一一六
(1)　太陽の運動……一一七

(2) 地球の運動……一二〇
(3) 月の運動……一二七
(4) 太陽・地球・月の関係……一二九
第四章 炭素の循環……一三三
第五章 物質……一三五
第六章 原子……一三七
第七章 人体の構造と循環……一四〇
(1) 人体……一四〇
(2) 細胞……一四三
(3) 血液の循環……一四八
第八章 生命体の脳作用……一五〇

第三編 現象論

第一章 人生航路の波動……一五九
(1) 人類の歴史と波動……一五九
(2) 人生の指針と波動……一六二
(3) 大自然と人生航路……一六五
第二章 人生航路波動の原理……一六六
(1) 大自然の三体現象……一六八
1 太陽系の三体……一六九
2 地球の三圏……一七〇
3 固体・液体・気体の三体……一七五
4 液体の三性……一七七
5 波動……一七八
6 光の三原色……一七九

7 色の三原色……一八〇
8 原子の三性……一八一
9 電気の三性……一八二
10 細胞の三体……一八三
11 私達の三体……一八五
12 三世の流転……一八八
13 世界の人類……一八九
14 数と波動……一九二
a 変化数……一九三
b 基本数……一九三
c 根本数……一九四
15 数の組合せ……一九五
16 数と大自然……一九七
17 生年月日の秘密……一九九
第三章 波動の法則……二〇二

法 則 (一)……二〇三
生年月日の陰・中・陽……二〇三
法 則 (二)……二一一
私達の生年月日の春・夏・秋・冬……二一一
法 則 (三)……二一六
陰・中・陽の相互関係……二一六
第四章 自分の波動を知る法……二二三
第五章 生命力と波動……二三三
(1) 陰・中・陽の生命力……二三四
(2) 同属の中に(+)と(−)又は(N)の生命力……二三六
(3) 一般的な生命力……二三七
(4) 同属の位置を持っている生命力……二三九
第六章 家族の波動……二四〇
(1) 子供は両親の波動を受ける……二四一

もくじ

(2) 平穏な家庭……二四五
(3) 変化の多い家族の波動……二五一
第七章　男女の波動……二六〇
(1) 恋愛の波動……二六一
(2) 結婚と波動……二六五
第八章　事業と波動……二七四
(1) 経営者と組織……二七五
(2) 日通事件と役員の波動……二八一
(3) 経営者の理想的組み合せ……二八〇
第九章　就職と受験……二九〇
第十章　現象の実例……二九二
(1) 日蓮上人と波動……二九二
(2) 全日空元社長の波動……二九〇
(3) スカルノ大統領とデヴィ夫人……三〇二

(4) 実　例……三二二
(5) 全日空の事故……三二六

第一編　生命論

第一章　宗教と科学

広大な宇宙を基幹とする、大自然界の現象は万物に遍く恵みを与え、万物の循環は、寸分の誤差なく、一定のリズムで、生死と盛衰が行われています。

この輪廻の中で、宗教は大自然生命の真理を説き、道徳を教え、正しい秩序ある社会を造り、人間の幸わせを教示しているのであります。

科学は日進月歩、大自然の恵みを理論的に究明し、〃実証〃づけています。

宗教と科学は、過去の世界においても、密接な関係があり、また歴史的に見ると、宗教は生命の科学であり、物質科学より〃位相〃が一歩進んでおります。

宗教の究極は、「大自然即生命」の教理であって現世における私達の在り方を教えています。

宗教と科学は深い関係を持ち、人類社会に欠くことの出来ない物心両面の姿であります。

精神、物質の両文明が進むにつれて、宗教と科学は切り離すことの出来ないような社会に変って行きます。

科学は現象界（現世）の時間と空間を超越して精神界に入り、正しい宗教の姿を実証して行きます。

大自然生命の真理を説いたキリストも、仏法によって生命の不変を説いた釈迦も、偉大なる科学者であり、大自然の真理に到達した偉大な先覚者であります。

大宇宙の真理を探究し、生命開発の真理を教えた諸聖人達は、自我を没却して、人間性を高揚し、高い境涯に立って、神即ち大自然生命本体エネルギーの源に通じ、万人に慈悲と愛の教理を「現象」によって示したのであります。

その教理こそ正しい教典であり、私達小生命体が幸わせを得るための教えであります。

宗教と科学が一体に近づくに従って真の人間性が大宇宙生命と調和され、心の安らぎによる、自分自身の極楽浄土が意識の世界に築きあげられ、大衆の意識（心）が正法を悟ることによって現象界（現世）地球上に極楽浄土、即ち真の菩薩界が完成されるのであります。

過去における、科学者の研究努力の一念力が蓄積され、その宝庫の中より、私達の研究努力が調和され新しい物質文明を築いて行くのであります。

極大の宇宙世界から極小の原子世界に至るまで探求され、過去に生じた、いろいろな疑問を解き明かしています。

代表的な弱電部門においては、電球ぐらいの真空管から、親指ぐらいのミニチュア管に変り、更に

ダイオードの発見により、煙草のフィルターの¼位になり、更にダイオードは米粒大となり、電気化学の進歩はICの発明によりダイオード数個分が一ミリ立方体の佳素結晶にまで、小さくなり性能が良くなったのであります。

これは写真の原理を応用して佳素結晶体に回路を照写することによって、佳素の化学的物理的性質を応用して集積回路を完成したのであります。

この研究の結果、テレビやラジオが小型化され更に性能が良くなりました。

また電子計算機やレーダーも進歩し、このようにその他の物質文明も急速に進歩を遂げています。

私達の脳細胞は二〇ミクロンから一〇ミクロン位の大きさでありますから、ダイオードも生体電子や光を応用して、更に精度も良くなり生命の神秘を実証する時代が到来するのであります。

しかし、このような研究をしている科学者は自分自身の頭の中から自分自身で考えたものであると錯覚を起す人々が多いのであります。己れの意識（心）が無限大の宇宙体の意識に通じていることを知らないのです。

そのために物質偏重主義に変って行くのであります。

如何なる物質文明の発達も、科学者の宗教的な精神作用が働いていることを忘れてはなりません。

現代科学も未だ初歩であります。今後現象界の人々は、大宇宙体の意識即ち神（仏）と自分の意識

が調和することなくして、生命科学の真髄を実証することはおろか、安らぎのある生活も破壊されることを悟らなくてはなりません。

また一人、一人の意識（心）の調和こそ、衆生及びその他の調和につながって行くのであります。

第二章　神の原理

神と人間についての実生活関係を昔から難かしく考えて来ました。

神の問題に関しては、洋の東西を問わずいろいろに宗教論議が交わされて来ましたが、科学が高度に発達して来た今日においては容易にその解明が出来るようになりました。

一体神とは何んであるか。**その一**は

大宇宙体の意識こそ、大宇宙体の支配者であり、

「大宇宙生命本体大神霊」であり万物に慈悲を与えている、絶対の神（仏）であります。

エネルギーの根本であります。

その生命は智識と正義を含む慈悲と愛の姿であります。

太陽系は宇宙体の小さな諸器管であり、地球は細胞の一体にしか過ぎないのである。

私達の人体も九兆六〇〇〇億という小さな細胞の集団によって五体を構成し、各諸器管は人体機構を維持するための使命を持っており、神の慈悲によって、環境と熱光のエネルギーを含む万物が相互関係を持って、肉体保存に協力しているのであります。

その五体も自分自身の意識によって、支配しているのであります。

私達の五体も地球上において生存していることを考えると、大宇宙の広大さを悟ることが出来るでありましょう。

大宇宙の意識は宇宙全体であり、私達の意識は五体全体に関連しており、大宇宙の意識に通じているのであります。

このように神が私達に与えられた慈悲と愛に対し、私達は報恩感謝の心（意識）を持たなくてはならないのである。

その二の神は、現人神（あらしとがみ）としてこの世に肉体を持って、大自然大宇宙生命本体の神意に通じ、私達に人間として生命活動をつづけていくための真理を教え、自我我欲を捨て、自から多くの衆生に慈悲と愛を教えた聖徳をたたえて神と仰いだのであります。

現人神は大神霊と表裏一体であり、神の使者であります。

現象界の人々や次元の異った世界の魂に安らぎを与えて下さる、如来（上段階光の大指導霊）菩薩

（上段階光の指導霊）であります。

この現人神は、実在界と現象界に通じ私達に生命の進路を教え導いて下さるのであります。

その教理が宇宙の真理と違う所がなく、私達は大自然生命本体即ち大神霊を見たことがないのに、神を信ずるようになったのであります。

私達の心即ち意識は体（からだ）全体にありますが、見ることが出来ないように、宇宙体の意識も現象界の人々は見ることが出来ないのであります。

実在界（神界、菩薩界、如来界）でも、上段階光の大指導霊以上の方でなくては実体を拝することが出来ないのであります。

このように現人神（神と表裏一体の意識）の聖徳が大衆を救い神と私達の心（意識）の調和を助けて下さる光の天子であり、その聖徳が大衆を救い、現人神と尊ばれ、崇拝されているのであります。

神は神でも私達の上（かみ）と考え、神の使者として崇拝すべきであります。

実在界の光の天子には、厳しい意識の段階があり、霊子（れいし）によって意識は構成され神と調和し、光子（こうし）の体（からだ）を持って居られます。

魂の修行によって、体から出る光量が異っているために、段階が区分されるのであります。キリスト教では光の天子と申されており、仏教では如来・菩薩といはれています。

名称は異っても、実在の世界においては同意義であります。

また、日本の古事記や日本書紀に依りますと、神々の御徳を継いだ天照大神が慈悲寛大の聖徳を実現し、続いて神々がその聖徳を体得されて犠牲的努力に依って、人類を幸福に導き、日本を完成せられたということになっています。

従ってその聖徳を宇宙根本の神として祀ったのであります。

中国においては、孔子が現われ堯・舜・禹・湯・文・武・周・公の聖人が天道に従って仁政を施し、人類を幸福に導いたと称して、これらの聖人の事績を広めたのであります。

孔子は人類の安心立命、幸福な方法を説き自我を捨て、天道に従い、人心開発に一生を捧げたのであります。

この至誠は後世に人心を感動させたので、天道の存在や古聖人の高徳を否認する者が無いのであります。

釈迦・キリスト・モーゼも歴史的時代の差こそあれ、慈悲・愛の姿で大自然生命本体の教理を持って人類を救済に導いたのであります。

また、ソクラテスは、終身無我の一念を持って人類の幸福の為に尽くしましたが、人間の造った不自然な悪法律に依って死刑に処せられたのであります。

キリストも十才の時に実在界に呼ばれ、現象界の邪法悪魔より人類を救うことを神より命ぜられ、アガシャー大王、モーゼー、釈迦の上段階光の大指導霊の前に出て人類救済の使命を与えられイスラエルに父をヨセフ（聖ヨセフ）と母はマリヤ（聖母マリヤ）の子供として誕生せられたのであります。

ながい苦しい修行の中から、大宇宙生命に通じ多くの迷える人々や、病める衆生を救い、その教理は、人心開発、愛の姿で救済して来だのであります。

正法を説く暇もなく民衆を救いましたが、異教徒の迫害にあい、自分を犠牲にして大衆を救い、焼かれている自分の姿を実在界から見られ、残した仕事を完遂するために復活せられ弟子達に正法を解かれたのであります。

以上述べました諸聖人は、大自然生命本体大神霊に人間として肉体を持ちながら、自我我欲を捨て神意・神理・即ち真理を悟って多くの衆生を正法によって導いて来た聖人であります。

人生航路の一生を慈悲と愛、神との調和で過したのであり、全く神と同じであるために、現人神と仰がれて来た訳であります。

神話などは、その時代の衆生に神の存在を信じさせるために、国々に依ってまた衆生の基根によってつくられたのであります。

聖人の教理及び事跡は、総て智徳一体であり、信仰の対照は、当然智識・正義・慈悲と愛であり神

との調和以外にないのであります。

ただ、物質的な物の考えかたでは、自分の心が常に不調和であります。

その三の神と称されて来たのは、

一般の動物霊であります。現世において、犬や猫を飼うと同じように、実在界では、使い姫として使う場合があります。

そのために狐、竜等の動物霊を崇拝する場合があります。

一般動物霊を神々の眷族として崇めたものでありますが、やはり動物は自分の本性を人間に見せたくないために色々な霊視的現象、主として菩薩の姿を見せる場合が多いのであります。そのために神々の声と間違えて、自分が悟ったような錯覚を起す者があり遂に動物霊に支配される結果となるのであります。

動物霊を私達人類が神として信仰の対象にしてはならない。

神の眷族であり使い姫であることを私達は忘れてはならないのであります。

しかし商売等で稲荷を信仰する場合は、この眷族が手伝ってくれますが、必ず稲荷大明神（主として菩薩）に厚く心からの礼を申して御返しすることを忘れてはなりません。

稲荷大明神は、五穀の神として祀ったものであります。

他の動物霊より私達の魂が上段にいることを悟り人間の本性を忘れてはならない。

自我我欲で求め自己保存のためにこのような信仰に入ると、自分自体の意識が動物の本性に通ずるのであります。

真の正法を得て信仰しないと危険であります。神の意識と自分の意識が調和されれば、光の保護を与えられて、動物霊に支配されることはありません。

このように神と私達の関係は洋の東西を問わず、信仰の一念で結ばれて来たのであります。

しかし歴史の変転に従って正法も後世の人々の智と意により仏教は哲学化し、キリスト教は新旧その他に分離して、真の正法は慈悲と愛の調和を失いつつあります。

時代時代の衆生の基根に合せて、正法を解いて来たのであろうが、仏教は寺の専属と化し民衆から仏教はむずかしくなったために遠のき、現象界は乱れ闘争闘争の明けくれ、心に安らぎがなくなってしまったのであります。

死者の霊も現象界と幽界の地獄界をうろうろして現象界の黒い想念を持った衆生につき、社会を混乱に落とし入れています。また病気の原因も造っています。

釈迦は涅槃に入る時、「私の説いた仏教は、インドから中国に渡り、日いづる国に渡る。五の五〇〇才後（二五〇〇年）にはこの仏教も末法となり法の力を失う。

その時は正法が人々によって書き変わり哲学と化し衆生を救うことが出来ない。ミロク菩薩も聖観世音、及び他の仏弟子達も、その時には、再び現象界に肉体を持ち、正法をとき衆生を救うのだ」と弟子達と約束をしました。

今こそ正法を私達は悟らなくてはなりません。若い学生達は闘争のあけくれ、一部の宗教家も闘争の明け暮れ、また動物霊に支配されて、ある者は病気と闘争、思想の闘争、現象界は地獄界の姿であります。

富士山も今は狐の巣と化し、天下の霊峰富士も泣いています。

動物霊が変化(へんげ)して菩薩の姿を見せても自分達が悟ったが如く錯覚をおこし、すっかり動物霊に支配されているのであります。動物霊につかれて、いかに先祖を供養しても幸福は得られず、地獄に落ち死後はみな人間が狐の姿になっているのであります。

私達は目をさまさなくてはならない。いかに法華経がわかったようなことをいっても智即ち頭のみで悟り、滝にうたれて修行しても、自我我欲の本性は動物霊を己れの意識に呼びこむ結果となるのであります。

また偶像崇拝に関しても誤った考えを犯しているのであります。

大宇宙生命本体大神霊こそ私達の真の正しい神（仏）であることを忘れ、釈迦・キリスト・大日如

来・阿弥陀如来、況や日蓮聖人までが、御本尊（久遠の仏）なりと考えるのは、仏教も二五〇〇年の間に変ったものであります。

このような如来・菩薩は神と表裏一体神の使いであり、光の天使であります。

過去における聖者の教理は真理であり、智徳一体の神意であり真理であります。

是等の聖者は大自然生命本体大神霊に通じて一般の衆生を救う使命によって、現象界に肉体を現わした上段階光の大指導霊（如来）であります。

大神霊（仏）の加護によって、上段階光の大指導霊や光の天子が現象界に現われ、多くの奇跡によって迷える人々を救済し、現象界に慈悲と愛による、調和のとれた社会を造ることに一生を捧げたのであります。

これらの如来（上段階光の大指導霊）菩薩（上段階光の指導霊）は神に人々の心を伝える現神であり、その前に大神霊を拝してから調和をよりよく御願いすべきであります。

第三章　大自然と生命

大宇宙大自然界は大神霊の本体であります。本体あるが故に意識があります。

動物・植物・鉱物を含めて万物が総て、生命の塊りであります。

生命のエネルギーは大自然生命本体エネルギーの塊りによって調和せられ、然も一定の波動で循環を繰り返しているのであります。

また、私達の生命（魂）も、過去・現在・未来の三世をそれぞれ、神より与えられた使命を持って、動物・植物・鉱物相互扶助の中で循環されていることを知らなくてはなりません。

私達も大自然の恵みなくして生命の保存は不可能であります。

熱・光・環境・一切が神より与えられている慈悲でなくて何んでありましょうか。

神に対し即ち仏に対しまた万物に対して報恩感謝の精神を忘れてはならないのであります。

もし太陽に対して熱・光のエネルギーの代償を支払うとしたならば私達は破算することになります。

電力会社や瓦斯会社に、光熱量の代償を支払った心算りで、神（仏）にまた万物に真心をこめて感謝すべきであります。

私達は余りにも環境に甘え過ぎているため、真実の姿をないがしろにするのであります。

大自然界の仕組みを考えて見ますと寸分の狂いもなく完成されています。

私達の人体を見ましても精巧に出来ています。

現代の科学で果して、この精度を造り出すことが出来るものであろうか。

然し人類は万物の霊長であり、物を考え作り出す智恵を持っているのであります。

現象界の未解な諸問題については、諸先輩の築き上げた研究成果を足場に、私達の研究努力の一念力によって、何時の日か、結果となって解明される時が来るのであります。

生命と物質の相互関係の仕組みも極大と極小の世界を極めて行くに従って「謎」は解明され、私達の使命を自覚する時が来るのであります。

物質偏重主義から精神文明の向上に転換しなくては、人の心が不調和となり、黒い想念は自分の体をこわし、人々の心は自我我欲に走り、真の諸天善神は、力を発揮することが出来ないのであります。

図表「第一」は大宇宙生命本体神霊の体（からだ）の姿であり、大自然界の略系図であります。（一六頁と一七頁間の折込参照）

この図表を見ますと、私達は単独で生命の肉体的保存が不可能であります。

大自然界総てが相互関係にあることが解ります。

大自然の姿こそ慈悲であり、愛であります。私達は自分自身を反省する必要があります。肉体を与えられた両親の恩、神に対する感謝の心を忘れてはならないのです。

神（仏）は天地万物の資源を私達に与え、開発せしめ、私達の研究努力による一念力のエネルギーは光となり神（仏）に通じ、守護霊・指導霊の光の天子が新しい製品や理論に感応を与え、その人々

に新発見をさせていることを悟らなくてはならない。

自慢、自信の過剰は自己保存になり、自我我欲の黒い想念と化すことを忘れてはならないのであります。この時こそ報恩感謝の心を守護、指導霊と大神霊に示さなくてはならないのであります。

私達は神（仏）から与えられた能力に依って物質を独占し、自己保存に走るために、黒い想念となって、対立から闘争・闘争から破壊に追いやって行くのであります。それは総て自分自身が造りあげて行くのです。

大自然生命本体大神霊から与えられている大慈悲の精神を持って、神・人・物に対し、生活をして行くならば、調和された神意の極楽浄土が完成されていくのであります。

私達は神意によって、実在界（あの世）の光の天子に与えられている万物を駆使させて頂いているのであります。

神意に逆らった自己保存（国家も同じ）は相互の不信となり闘争と変って行くのです。

正法を悟って心から話し合うことにより必ず調和することが出来るのです。

神（仏）から預かっている物質を独占することは不満を呼び、闘争は破壊を呼ぶのであります。

また不調和な衆生が多い処には、天変地変の原因となり、黒い想念の塊りが爆発するのであります。

私達の肉体に悪質な腫れ物が出来れば、切開するか、化膿して自然爆発をするかであります。殆んど二酸化炭素のいたずらであります。

私達の肉体と同じように地球も大宇宙体の細胞であります。

人々の黒い想念のエネルギーが大きく作用することを知らなくてはならないのです。

エネルギーには質量があり、質量があれば当然空間が存在するのであります。

私達はこの神意を一日たりとも早く自覚しなくてはならないのです。迷信であると思ってはならない。

私達は自然の姿、真の正法に帰依しなくてはなりません。

闘争と混乱は逆法であり、破壊であります。真の正法は、目的の如何に拘わらず、大自然生命本体大神霊（仏）及び本体である万物に報恩感謝を具現し、慈悲と愛の心を持って万物と調和し、自分の真心と頭（智）心身体、一体となって悟ることであります。

意識とは自分の身体全部であり、自分の意識（心）は誤まかすことは出来ないのです。

心配は心をくばることであります。エネルギーの損失であり疲労の原因となります。

この姿がまた黒い想念となり不調和を呼ぶのです。

相互扶助、愛と慈悲こそ調和の根本であります。

また自分の悟りを開こうとして、真の正法を智・情・意で悟らず、智と意で悟ると、自我に通じ黒

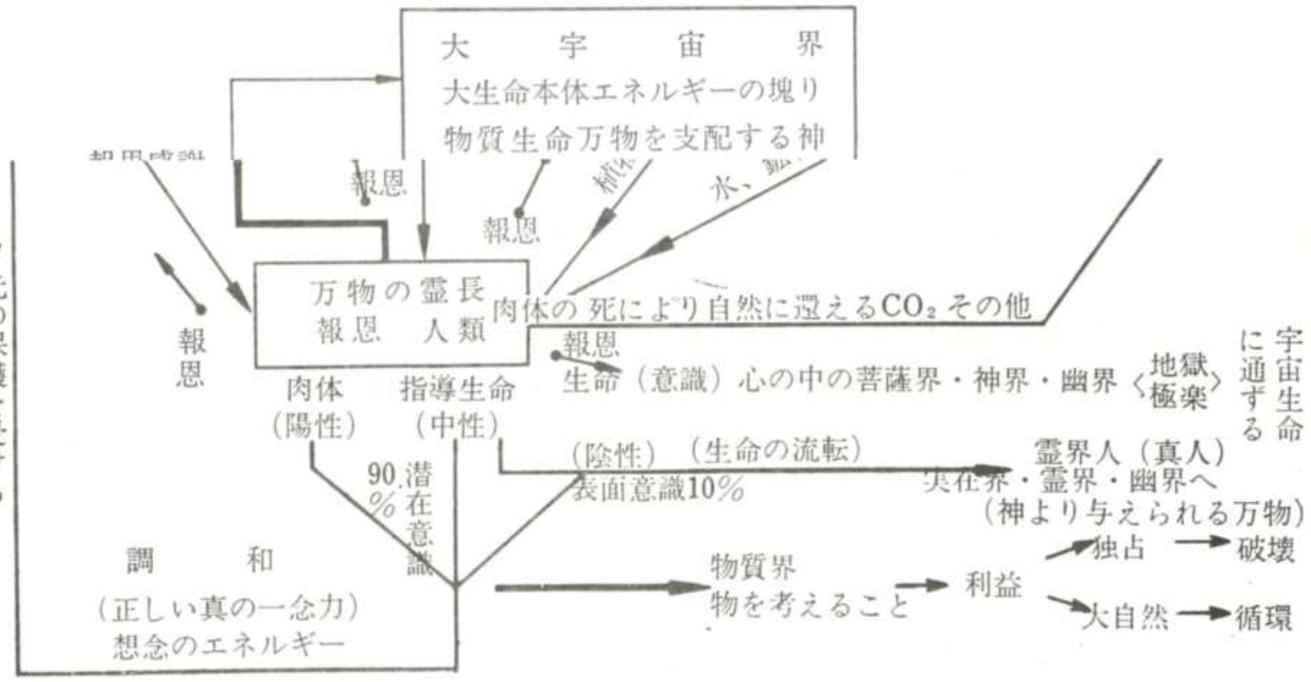


図　表　(1)
（許可なくけいさい・写すことを禁ず）

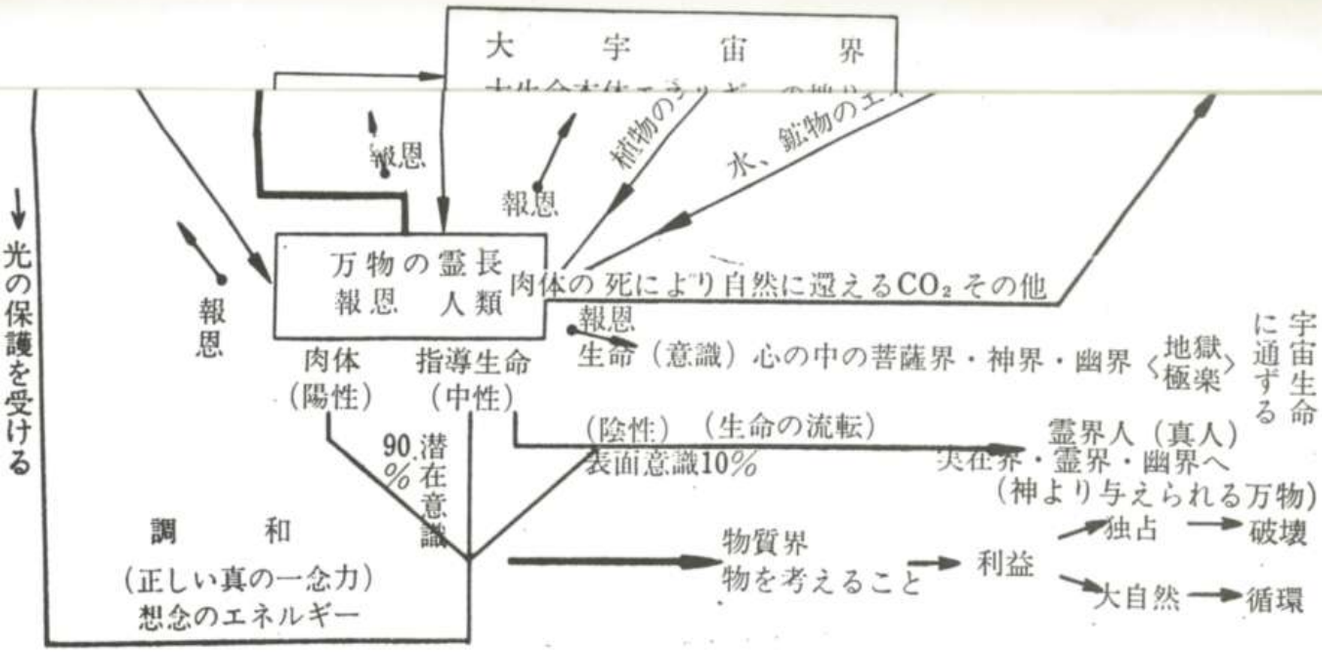


図　表　(1)
（許可なくけいさい・写すことを禁ず）

い想念と化し、正法も逆法と化すことを悟らなくてはならない。

例えば肉体的荒行をして滝に打たれたり、他の肉体的自我を取りはらう修行は、意識の中に肉体的自我が生じ、この自我が意識を支配すると黒い想念となり神の光が遮断されるために、低級な動物霊を呼び込む結果となり、その動物霊に肉体意識を支配されて、神の声の如き錯覚を起し、ある時にはいろいろな変化を見せたり、神の如きしぐさをして、恰も神の使いの如く思ってしまう人々が多いのであります。このような指導者が信者を集め、多くの衆生を迷わして、動物霊の囮と化してしまうのであります。

このような信仰をしている人々は、口で正法の如きものを頭だけで知った法を説きながら、自我我欲に塊り、一時病気を治しても、すぐ元に帰り、心に安らぎがないのであります。

早死にをしたり、経済困難、相互不信、闘争、強制がつきものであります。

真の正法を逆法に導いた責任者は、黒い想念につつまれて、自からを地獄に導いてしまうのであります。

神は罰を私達に与えないのであります。罰は自分自身の黒い想念が自分自身に与えるのであります。

また不調和な黒い想念は病気を呼び、その黒い想念の場所に迷える地獄の魂を呼びこみ医学的にも治すことの出来ない不治の病となることを悟らなくてはならないのであります。また動物霊は必ず信

者に対し、先祖の供養をするように申すのであります。

先祖の霊はわかりやすい言葉（言魂）で悟し経文をあげてやることにより成仏し、益・彼岸に供養すれば良いのであります。

光の天子や上段階の光の大指導霊、即ち如来、菩薩が実在界より地獄界や現象界で迷える魂を常に救っていることを忘れてはなりません。

動物霊の指示によって先祖を供養することは私達の生活に不幸を呼ぶ結果となります。

また病気になれば信仰が足らないからと極まり文句で強制するものであります。

迷える衆生は「溺れる者は藁をも摑む」例えの如く益々狂信させるのが常であります。

この現象界を去って始めて自分が動物になっていることを知りどうにもならなくなってしまうのであります。

現象界の動物霊を拝んでいる衆生は死者が動物になっていることがわからないのであります。

法華経の如き正法であっても、一つ指導者が誤れば正法も逆法になることを悟らなくてはなりません。キリスト教とて同じこと、厳しい戒律は自我の温床と化すものです。

先祖の霊は供養するもの、自分の過去世は自覚するものであります。

過去世は潜在意識の世界であり、魂の修業を積んで来た己れ自身の意識であります。

潜在意識は無限大の宝庫であり、自分が自覚して正法を悟ると物心の調和ができ、心に安らぎが生れ自分の使命を思いだし、目的に向って努力するようになります。

現代人は精神・肉体・経済の調和の中に幸福があるのです。

一般動物霊は私達が支配するものであり支配されるものではありません。

教祖となるべき指導者が重い病魔におそわれたり、若死にすることは必ず神意に反した邪法であることを私達は知らなくてはなりません。

不調和な想念が肉体をむしばむのであります。

正法である仏法は二五〇〇年の間に、歴代の僧侶達の意（自我）が入り自己保存に変り、末法（法の力を失う）となったことを悟らなくてはなりません。

末法により法の効力が失なわれて行くことは、不調和な現象界の衆生を見れば解るはずであります。

病魔と闘争・自己保存・分裂総てが不調和であり、不自然な人間の意である自我と化し、あるいは動物霊の囮と化しているためであります。

多くの衆生よ目をさまさなくてはなりません。私達は自然の仏法に帰らなくてはならない。真の釈迦の仏法に帰らなくてはなりません。

今の仏法は「さわらぬ神にたたりなし」と化してしまったのであります。

そのために心ある人々は仏法をあきらめ、また一部のインテリーは神仏を否定し、科学者と自称する多くの衆生は己れの本性を忘れて、物質本意の自己保存に明け暮れていることは、このような宗教の惰落に起因しているのであります。

衆生よ、自分自身の過去世の精神に戻れ、貴方達は前世で、魂の修行をして来ることを約束して来たのではありませんか。人間的本性をとり戻さなくてはなりません。己れの使命を思い出しなさい。今からでも遅くはありません。

エネルギーは恒存されています。魂の修行も永遠に続けられているのであります。

現象界のみが意識生活ではありません。正法を得て己れを反省し、自己の目的と使命を思い出しなさい。

神（仏）は衆生に暖い手を差しのべているのです。実在界の如来、諸菩薩も現象界の衆生に救いの手を慈悲深く差し出しています。

迷える衆生よ、心を開いて、大自然の慈悲にすがりなさい。

己れの本性を悟りなさい。己れの悟りの中から心が安らぎ現象界の極楽界が出来るのです。

それは私達個人個人の悟りの中から調和な社会が出来るのです。

私達は修行の生命（魂）故に自から己れの悟りを実行しなくてはならないのであります。

第四章　私達の生命と指導生命

私達は大宇宙大自然の本体の中で生活し、神意に依って現象界で肉体を持ち、魂の修業をしているのであります。

万物の霊長として、神より与えられている万物を、社会人類のために、応用研究して、考え造り出す能力を持っています。

生命は意識であり、意識の中心に心は存在し意識と心を霊魂というのであります。

五体の支配者は、自分自身の霊魂であり意識であります。

霊魂の意思によって頭脳の細胞は活動し、物を考えることが出来るのであります。考える一念力はエネルギーであり無限大の力であります。

五体生命は一念力の発電所であり、神に通ずる真心の製造所であります。

私達は肉体的労働をしても疲労しますし、精神的に一念力を使っても疲労を感じます。疲労することはエネルギーの消耗であり、このエネルギーも質量を持っているのであります。

このように肉体と生命は、ともにエネルギーの塊りであります。

更にこのエネルギーの供給源は、大自然生命本体であり、神であり万物であります。

私達は神（仏）の神意によって、この現象界に魂の修行のため先天的・後天的因果を持った肉体を与えられたのであります。

私達の魂を磨く過程においては、意識の約10％が表面に出て約90％は潜在しているために、仲々悟ることがむづかしいのであります。約90％の約潜在意識は、正しい努力の一念によって表面意識と調和することが出来るのです。これを過去世の生命（魂）といいます。

表面意識の10％で魂の修行をするため、幽界・霊界、実在界の過去世の生命か、過去世の友達である霊人が指導して下さるのであります。

この生命を指導生命といいます。自分自身の、潜在意識は指導生命（過去世）に通じているのであります。

眠っている時は五体の休息であり、自分の意識が五体を離れて、次元の異った世界に行くために、五体を支配することが出来ないのであります。眠りよりさめてこそ、意識は戻り五体を支配することが出来るのであります。

指導生命は、主護霊・指導霊・支配霊があります。

私達は、肉体と生命にまつわる、因果関係生命の集合体であり、常に自分自身の潜在している意識

は時間・空間を超越した次元の異る世界に通じていることを忘れてはならない。

現象界（この世）のみが私達の生活環境ではないことを悟らなくてはならないのであります。

意識はエネルギーの塊りであり、質量がある以上空間の異る世界が存在することを、私達は否定出来ないのであります。

それは現象界の人々が目で見ることの出来る範囲は物理的にも限度があります。

可視光線も、私達の目にとまるほんの一部分であり、目で確認することの出来ない光線も存在することを知らなくてはならないのです。赤外線・紫外線・X線・宇宙線、などは、普通で目視することは不可能でありますが、将来において、私達の研究努力によっては解明出来るものであります。

肉眼で見ることが出来ない、手でとって見ることが出来ないから、私達の意識（魂）は存在しないものと結論ずけることは、科学者として、不勉強であり、探究してこそ結果が出ることを忘れてはならないのです。

原子もまた電子も目視することは出来ませんが、存在していることについて、現在は常識であります。

疑問の解明こそ真理への近道であります。研究努力の一念力は、無限大のエネルギーであることを忘れてはならないのです。

正しい目的に対する努力こそ、私達の肉体的・精神的心の修行であります。

神（仏）は私達に慈悲として万物を与えているのです。

その万物の応用こそ、私達の使命であり、私達自身の研究努力の一念力によって、絶対の真理を悟ることが出来るのであります。悟りは自分以外には出来ないのです。

しかし正法を悟り正しい目的に対して神に祈り、冥想にふけることが出来れば必ず指導生命が私達の意識の中で目的に応じた反応を与えて下さるのであります。

自分自身の研究努力以外にないことを悟らなくてはなりません。

また私達小生命体の人格形成によって、高位な指導生命が指導する仕組みになっているのであります。魂の流転の過程において、私達の魂を指導・守護する霊人は人それぞれ異っています。上段階の指導霊・守護霊は、私達の五官に感ずる現象を超越して大自然生命に通じ、慈悲と愛の権化であります。自分の意識は調和され不生不滅を超越され、実在界におられます。

このような高級霊が如来（上段階光の大指導霊）と菩薩（上段階光の指導霊）であります。

正法を得て自分自身が悟った実在界の姿であり、魂の修行の結果現われて来る未来の世界であります。現象界にも深い深い関係があるのであります。

また現象界においても、自分自身の使命を知って悟りを開いた人々もおります。

このような人々は実在界に通じています。

如来・菩薩の光の天子は生死・老病もなく時代を超越し新旧に関係がないのであります。

私の指導霊は紀元前二三五年三月生れの通称ワン・ツー・スリという上段階光の大指導霊であります。エジプトに生れ不思議なことから王様にひろわれて成長し、自から正法を悟り、育てた王の後取りとなられ多くの衆生を救った人で、生命・科学にくわしい方であります。

守護霊は紀元前約二〇〇〇年にエジプトに生れ、宗教政治家であり、医学者でもありました。

その後紀元前三五〇年にも現象界に出られ更に紀元前三二年にイスラエルに生れて多くの衆生を救い、通称フォワイ・シン・フォワイ・シンフォと呼んでいます。

そのために主護・指導霊はいろいろな現象を見せて下さったのでありますが、自分の本性を忘れ肉体を持つと、こうも変るものであろうかと、すっかり私をあきれ返って見ていたのであります。

意識が実在界に行っている時は威張っておるのに、肉体に意識が戻ると一八〇度変るので自分のことなぞ仲々わからないものであります。私は自分自身の愚かさを反省しております。

私は自分の偏歴を見ますと、今までの行動に対して非常に責任を感じています。現象界で神（仏）を勉強せず、科学関係の研究であり、その中から色心不二・宇宙即我れを悟らなくてはならないのであります。

私の過去世は日本で三回・中国で二回・インドで一回現象界に肉体を持ったことがあり、自分の潜在意識を見て行くと、不変的な魂の循環を不思議に思って来ます。それは私の人間として、過去世の人々にいろいろ忠告されることであります。また最も正しい歴史的な話が出来るからであります。このように自分の過去世がわかると無謀な生活をつつしむようになり、過去世に負けない自分を作り魂を磨こうという堅い自覚が生れて来ます。

肉体的遺伝はまた別であります。大日如来は印度で悟りを開き、後、中国で肉体を持った時は、一般人として魂の修行をしたのであるが、余り人を救うことなく現象界を去り実在界に行かれたそうであります。本体が、現象界で肉体を持った時、分身は実在界にのこります。分身は本体の悟りを開くことに躍起になるのでありますが、自分自身で悟らなくてはならない規則があるのであります。

そのために大日如来は、死後如来席に案内され面くらったといはれています。「私はもっと下段でよいのです。」といわれても、如来席に強引につれて行かれたそうであります。

悟りというものは、簡単でもあり、またむずかしいのであります。如来でも余り悟らずに帰る人がいるのであります。

現象界に肉体を持つ時は、実在界において今度こそ、頑張って来ると約束して来ても、肉体的条件である耳・鼻・舌・身・意の抵抗が大きいため、自分の過去を忘れて自己満足の人生を送り、指導霊

や主護霊の教えを自分自身で悟ることは、大変なのであります。

現象界の修業が終ってから、ああしまったと思う時は、「あ」と「こ」の異いでこの世を去り、あの世に行ってしまうのであります。

このように現象界の人々は肉体を持つと自分自身を見うしなってしまうのです。

そのために自分の過去・現在、未来の三世を否定する人々が多いのであります。正法によって己れを知る以外にはありません。

私達の現象界には因縁ということがあります。即ち物事にはすべて起原と果によって結ばせる作用によって定められています。

私達の隣に住んでいる人々もまた、袖すり合うも多少の縁と申しますように必ず過去世において、因果関係があった人々であることを知らなくてはなりません。

また過去世の生命（魂）が必ずしも日本人とは限らないのであります。中国人・フランス人にかかわらず、私達の生命はそれぞれの過程を経て循環されて行くのであります。自分の意志と神意に依って定まるのである。

このように魂の世界は一つであることを、悟らなくてはならないのであります。

この現象界も自国他国の自己保存を捨て、互に心から調和を計って共存共栄の天国界を造らなくて

はなりません。

物質より心の調和が優先であります。天国界以上は現象界のような、経済機構は存在せず、調和された物物交換であり、自我我欲・自己保存は殆んどありません。しかし約10%の潜在意識があり、いくらかの自我があります。

実在界には金銭的関係があります。但し現象界とちがって、殆んど調和されていますから、不平等な生活環境は存在しないのであります。私達も真心を持って真実に生き、一人一人が精神革命をし、闘争のない社会を造らなくてはなりません。

思想は人間の自我で作ったもの、自我はしょせん黒い想念で、己れが苦しむ原因となるのであります。この社会も宇宙の真理にかなった、宗教的神理であるならば、完全なる調和で築かれて行きます。常に闘争の思想は己れ自身を破滅に導くことを悟らなくてはなりません。

自分自身の過去世の本性を知ることによって、物質経済偏重による、闘争の愚かさを悟ることであります。

また過去世の中にもいろいろあります。人間から地獄の畜生界に落ち動物になった者もいます。

私の友人が太郎という小犬を飼っていました。この可愛い子犬と友人は親子同様に生活をしており、この子犬は自分のすきなテレビをいつも見ていたそうであります。

九年の歳月は流れ、我が子同様の小犬も病気によって此の世を去り、老夫婦の悲しみは、ひとことうりではなかったのであります。早速多摩動物霊園で手厚くほうむったのであります。この子犬を忘れることが出来ず、いつも墓参して涙にくれていました。

この友達がある日親しい家に行き、この話をしたところ突然その家の人に霊的現象が起り、犬の遠吠えをして、友達の胸の中にとびこんで泣きだしました。暫らくしてから、「私は太郎です。お父さん、私は可愛がられて育って幸福でした。おとうさん、永生きをして下さい、私はいつまでも守ります。お父さんは神様だ」と申され涙にくれていました。

良く尋ねて見ると、九州の炭鉱で働いていた坑夫の子供で、会社はつぶれ食べる物がなくなり、餓死してしまいました。その時に犬なら何処でも食べ物をさがせるのに、なぜ私達人間は餓死するのだろうか、こんどは犬になりたいと思ったそうであります。この少年も太郎という名前であり、九才で亡くなりました。

犬として現象界に生れたが、全部人間の言葉がわかったと申していました。

このように一つ人生航路を踏みはずすと、犬であっても過去世は人間の場合があるのであります。

私達の魂の偏歴を考えるとき、現象界の衆生は、人間の本性を忘れてはならないのであります。

信ずる一念力のエネルギーは莫大なものであります。

正法に基いた信仰であるのなら、狐や他の動物霊が入ることが、出来ないのであります。常に神より光の保護を与えられるために、入る予地がないことを、知らなくてはなりません。正法である仏法も過去における人々の自我によって、変えたために力を失っているのです。

私達は目覚めなくてはならないのであります。魔力には正法による神の光で、自分を守る以外にないのであります。

私達は自我を捨てて、自分の意識（心）の波動と、大自然生命本体大神霊の波動を合せることが重要であり、自己を自然の姿に還してこそ、真理を自から摑むことが出来るのであります。

現象界の衆生が信じようと信じまいと、厳然として神（仏）の存在することを、否定出来ないのであります。

また眠っている時、私達の意識が、肉体から離れて、次元の異る世界に行くことも否定出来ない事実であります。

私達が自然に還る方便が何であろうとも、正しい目的に向って一意専心、努力の一念力が光の真のエネルギーとなって、神に通ずるものであり、方便に左右されるものではありません。

悟りというものは、一秒でも悟ることが出来ますが、一生かかっても悟ることが出来ないものであります。

それは自分自身の心のおきかたであり、決してむずかしいものではありません。

肉体は、先祖より続いている両親の先天的因果と、生命の過去世における先天的因果の上に、自分自身の意識が組み合って、私達の人格が形成されているのであります。

肉体は魂の修行をするための現象界における仮の宿であります。潜在意識の世界に存在する過去世の宝庫を開くことこそ、現象界における成功の根本であり、この開発こそ、自分を自覚する重要な鍵であります。

その中から自分自身は磨かれ、進歩向上されて行くものであります。

顔や形は肉体的遺伝でありますが、魂の遺伝はまた肉体と同じように、過去世の人に近いのであります。

幼少の頃より、特定な部門に天才的な力を示す小生命体は、先祖代々の肉体的遺伝と、過去世代々の霊的遺伝によるものであります。

諺に「名医は三代にしていず」と云われていますが、祖父の医術に対する研究の執念、父の医学に対する仁術等が、息子に受け継がれて息子の研究努力と、慈悲と愛の調和のうちに息子を名医たらしめるのであります。

即ち両親の持つ先天的因果と魂の過去世がもつ先天的因果及び自分自身の修業の結果、天才的現象

となって現われるものであります。

しかし自己保存と増長慢になりますと、この現象は取り去られ凡人と化してしまいます。

主として人間性の修行に左右されるのであります。

人間的に自分の本性を悟ることが重要であり、いかに社会的地位が偉大であっても、人間性を欠いている人々は、自分を悟らない限り、自からを不調和な黒い想念によって、心に安らぎを得ることが、出来ないのであります。

現象界の短かい人生航路において、正法を悟らず、この世を去り、実在界に来た生命は、地獄におちて苦しい修業をなさらなくては天上界に昇ることが出来ないのであります。

己れがわからない現象界が、魂の修行場として最も厳しいところなのであります。

しかし誰でも眠っている時は、実在界や、地獄・極楽に自分の意識は行っているのでありますが、眼がさめて、肉体に入ると、耳・鼻・舌・身・意・識にさまたげられて、本性を忘れてしまうのであります。

そのために自我我欲の塊りとなって、神「仏」の慈悲を忘れてしまうのです。

そして、実在界や天上界に来る自分自身の意識は、神（仏）を信じているのであります。魂の修業とはいえ、自分の本性を悟ることが出来ないのが人間であります。

自分自身の過去世が修行している実在界においては己れを知り、10%の表面にでている自分自身の意識は、正法を否定する、このように現象界の修行は、むずかしいのであります。

己れを悟れば、またこれ程楽な境涯を送ることが出来、安らぎの人生航路を過すことが出来るのであります。

そのために、表面に出ている自分自身の意識に対して、指導している生命が、主護・指導霊の霊人であります。指導生命を知ることが出来ないのは、自分自身の自我我欲が抵抗となり、正しい指導を受けることが出来ないのであります。自分の心はうそをつくことが出来ない理由はここにあります。

己れの頭で悟ると指導生命も実在界や霊界・幽界で更に修行をしなくては、指導力を失うのであります。

悟ることは私達小生命体である自分自身以外にないのであります。

また現代のキリスト教や仏教も魂の輪廻に関して説いて居ますが、過去世の生命を具体的に示していないのであります。

それは自分自身の悟りに依って知ることが出来るからであります。

私達は過去世の自分を知り、指導生命を知ることが一番重要であります。

それは自分を自覚するためのものであります。肉体を頂いた両親及び先祖は、現象界で見ているか

ら孝養と感謝によって示されるからよいのであります。

正法を悟れば、自分自身の潜在意識の中に記されている、自分自身の本性を知ることが出来るのであります。

肉体的遺伝より、魂の遺伝こそ修行の過程において、必要であることを強調致します。それは厳しい現象界の修業故特に必要であります。

肉体的先祖に対する報恩感謝は私達の魂の修業の場及び人生航路を渡るための舟（肉体）を与えて下さったのでありますから、当然なことであります。

釈迦は来世のことを全部弟子達に告げ、二五〇〇年後私の仏法も、時代の遍歴の内に人々の意（自我）によって解され、仏法は法力を失うことを予言したのであります。

キリストも末法について、このことを聖書中に予言しているのであります。

釈迦もキリストも正法を説き、多くの衆生を救って来たことを、私達は悟らなくてはなりません。

末法の世の人々は闘争と破壊の世に変るから、多くの衆生を救うため、肉体を持って弟子達と供に再び正法を説くことを約束されたのであります。

ミロク菩薩も聖観音菩薩も、また他の弟子達も、現象界に肉体を持って出現しているのであります。今は懐かしい弟子達とともに、涙の再会をしていることであろう。この人達は殆んどサンスクリ

ト語で話をしております。

また外国からも、日いずる国を目指して懐しい弟子達が集って来ることでありましょう。

そして全世界の衆生に正法を説き、物質偏重のおろかさを説き、心に安らぎを与えることでありましょう。

生命は永遠に続いているのであります。肉体は滅しても、魂は現世から来世へと循環されていくことを悟るであろう。

悟りということは、物理学者が極微の世界を研究していても、極大の大自然界を探究しても、また医学者が人間の肉体的研究によって発見した生命の真理も、文学者が文学を通じ、芸術家が芸術を通じ、スポーツマンは、スポーツを通じて得た真理も表現こそ違いますが、到達点は神（仏）の意即ち真理に通ずるのであります。

芸術家が己れの自我に走って創作された芸術は、多くの衆生から見向きもされなくなってしまいます。その時にこそ、反省をし、己れの本性・心に問いて正法につくことが救いであります。

衆生の一時の興奮がさめればそれで終りであります。正法を得て真理を悟れば、己れの心も浄化され、衆生の心をゆさぶる、真の芸術が生れることを悟らなくてはならないのであります。

政治家を含めて多くの指導者達は、己れの立場に慢心せず、多くの衆生の身になって考え、自分の

心に問い、常に反省の中より自分の心を磨き、多くの衆生を指導しなくてはならないのであります。

自己保存の黒い想念を捨て、真心で接すれば必ず調和されるのであります。

正法は一宗教家の独占物ではないのであります。

正法を知った一念力の発露は触媒的方便に左右されるものではありません。

過去現在に通ずる、各宗教の経文・呪文もその中の意味を知ってこそ、正しい目的達成のための努力の一念力に、悟りの触媒的効果が生れて来るのであります。

水は冷却されると氷となります。しかし零下以下に温度が下っていても、氷結しない場合があります。

その時に食塩を入れればすぐ氷結致します。

この時の食塩を触媒と申します。

経文もまた私達の魂の修行に対して悟りの触媒的効果があるのであります。

しかし死者に対する経文も死者がその意味を解せないなら、百・千回経文を供養しても、成仏することが出来ないのであります。

故人にわかる言葉で正法を諭し正法である仏法の経文を供養してこそ魂（故人の意識）は、自分の死を悟り成仏出来るのであります。

正法の悟りは現象界に魂を修行している時に、自分自身を自分の心に問い、反省の中から得られるのであります。

自己保存に自分自身を持って行くため、大自然の真理を悟らずに臨終し、自分の死を悟らずあわてふためいている霊魂にむずかしい経文なぞ通ずるものではありません。

わかりやすい仏教や、キリスト教の正法で諭してこそ、己れを知ることが出来るのであります。

自分の使命を悟らない迷える霊魂が多いために、地獄は一杯であります。

そのために、地獄の苦しみを離れようとして、現象界の衆生の黒い想念の中に入りこみ、病気や闘争の不調和な現象を起すのであります。

法を説く僧侶は智（頭）で悟るものではありません。意（自我）で悟るものではありません。慈悲と愛による己れの心で悟らなくてはならないのであります。

自分の意が高じれば自我と化すのであります。

心・頭・体の三身で悟るものであります。

武道で云うならば、心・技・体一致の姿こそ悟りの極意である。

発明発見総てに通ずる真理であります。

僧侶よ、地位でも、名誉でもありません。また形式でもありません。

心をひらいて正法を悟りなさい。今迄の経文の中にも記されておりますが、余りにも不自然な仏法と化しております。

衆生の基根に合った法こそ、正法であります。

永い年月の間に古人の意が入り智が入り仏法も哲学と化してしまったのであります。

仏法は、もっと身近かな衆生のものであることを悟りなさい。

自我我欲、自己保存を捨て真の仏法を悟らなくては、衆生の心を開く僧侶としての義務使命を果すことが、出来ないことを悟りなさい。

キリスト教徒の指導者も同じであり、宗教の真理は一つであります。

自己保存は作用反作用の法則に従って、己れにふりかかって来ることを悟らなくてはなりません。

今の宗教は永い年月の間に各宗派の自我の塊りと化しています。衆生の心が離れて行くことは、自己保存と自我にかたまっている指導者達に責任があるのであります。

黒い想念のかたまりとなって、更に自我を増長し正法を説くことが出来なくなります。

このような仏法は、正法なりといっても人を救う力を失ってしまうのであります。

その結果死者の霊魂も救うことが出来なくなります。余計なことだと思う僧侶は己れの心に聞きなさい。またあなたの檀家の衆生が苦集滅道の四諦をどのように、悟っているかを問いなさい。また、

八正道も自分のおこないとしているかを、きいて見ることです。その結果によって、自分を反省し、正法を悟ることであります。

仏教も今は狐や他の動物霊に喰い荒らされています。人間が動物霊に支配され、動物霊は先祖の供養しか申しません。亡くなった先祖の霊は、なくなった自分自身の生命が悟る以外に、成仏が出来ないのであります。先祖の霊に対して経文の意味もわからず、いかに供養しても成仏は致しません。

現象界において衆生が正法を悟ることによって先祖の霊もしずまることを悟りなさい。

またこのような迷える霊魂に対しては実在界の光の天使（如来・菩薩）があの世において指導していることを知らなくてはなりません。

僧侶よ目をひらき現象界の不調和な姿を再確認しなさい。

闘争・闘争の宗教は仏教ではありません。真理ではありません。意（自我）で悟って書きあらためた古（いにしえ）の僧達が仏教哲学と化した間違いをそのまま現在信じてはならない。その当時の基根ではそれで正法として通じたのでありましょう。

慈悲から生れる調和の心こそ、仏法の真理であります。

あなた達が実在界に来てから、あわてても、まにあいません。今の内に正しい仏法を悟らなくては

ならないのであります。

頭でわかっても心で悟らなくてはなりません。

慈悲の心を説いた釈迦の仏法、大自然の仏法に帰らなくてはならない。正法は永遠につづいているのであります。

正しい法は、自然と衆生に調和するものであります。反省反省の中から正法に目ざめなくてはならないのです。それはみな様の潜在意識の90%がすべて知っているのであります。

実行するも、しないも自分自身であり、神（仏）は指導者達の反省の心を見守るであろう。

釈迦の仏法は、貴方達の意識（過去世）の中に正法が厳然として残っているのであります。

また、多くの衆生の中には物質至上主義に落ち入り、不調和な心に安らぎのない、人々が多いのであります。正法を悟った指導者は、あわれな人々に対し慈悲心を持って、さとさなくてはならないのであります。

精神文明の上にこそ物質と調和された、平和な浄土を築くことが出来るのであります。

破壊は文明の否定であり、自分自身の否定であります。

正法は精神文明の上に築きあげられた、物質文明でなくてはならないのであります。理証・文証・現象の三体が具備された法こそ、正法というのであります。

今日の物質文明も大自然の法則に従って、築きあげられて来たのです。

総て、大自然の法則即ち神の意思に従って、築きあげられて来たのであります。これ等も、大自然生命本体の慈悲以外にないのであります。ところが現象界の衆生は、自分自身単独の研究によって、出来上ったものだと、増長慢になり、己れを反省しないために黒い想念を造り出して不調和な姿にしてしまうのであります。

潜在意識の中で指導している自分の過去世である、指導霊のことなぞわからず、10％の表面意識で反省することなく、満足してしまうのが常であります。

大神霊（仏）の慈悲に感謝し、90％の潜在意識の過去世の指導霊（心）に、自分の反省を問い、報恩の姿を慈悲と愛によって、多くの人々に与えなくてはならないのであります。

このような生活の中に、調和のとれた社会が生れるのであります。

調和な生活の中で、私達に神の加護が与えられることを、悟らなくてはなりません。

指導霊は潜在意識の開発者であります。それは自分自身の正しい、目的完遂の努力が作用されなくては、出来ないのであります。

このように発明・発見総てに守護・指導霊は、助力を与えているのであります。

私達の理解を深め、人々の経験を調和し、私達の意識（10％）を豊かにする傾向の仕事を行い、潜

在意識（90％）の記憶を、よみがえらせて、私達に霊感を、また現象報告を与えているのであります。

幽界にも物質的光景があるのであります。なぜならば、私達の生命はエネルギーの塊りであるため、質量が存在し空間があり、その空間こそ次元の異った私達の死後の世界であります。私達の現象界では、肉体が亡びれば、滅亡であると考えることは、非常におろかなことであります。肉体は自然界の物質に循環されても、生命即ち霊魂は新たな修行に入るのであります。

また、私達の地球は多くの動・植・物が存在している、居住遊星の一つに過ぎません。

この現象界の地球は、大宇宙体の細胞の一つであります。地球は太陽系に属する惑星であり、各惑星は、一体系を成している同心球の中心的天体であり、最も粗雑で固体的な部分が物質界で、その惑星の表面に当る部分であります。

惑星を含む同心軸球天体には、波動の程度または、位相の差異に依って、それぞれ波動の世界があって、惑星の表面から離れるに従って、その波動形態が非常に物質的ではなくなり、精妙となって来ます。天体や、遊星の配列や相互の関係は、原子の電子構造や物質元素の周期律の如く精密であり、漸進的であります。

直接地球を包んでいる世界が、幽界であり複雑な世界であります。

他の惑星も地球と同様な幽界を持っているが、その幽界の性質は遊星人の意識の発達によっては消

浄になるのであります。幽界は平面ではなく、意識の平面の集り、または、意識の程度の集団で構成されているのであります。

低級な生命の生存する領域の上には、暗い地獄の地帯と恐怖と苦悩に満ちた世界があり、地上界の地獄に堕ちた生命即ち霊魂が住んでいるのであります。

彼等は自分自身の本性を発見しないために、地獄に堕ちたのであります。

幽界の環境は心の動きに、直ぐ反応する意識的世界なのであります。

この世界は、現象界において人間としての使命を忘れ、他人をそしったり、軽蔑したり、誹謗し自己保存・自我我欲に徹し、正しい心を捨て去った人々の世界であります。

自分自身の死を悟らず、黒い想念の塊りとなって、自分自身の欲望を満たしている世界で、何億何千の霊魂が生存しているのであります。また、人を憎んでいる念力を持つ生命は、その憎んでいる人々の中で、心を洗はれているのであります。

色欲の生命は、男女が常にその中で自分の生命（魂）が悟るまで、取り合いや孤独の徹底的な現象で苦しむのであります。

この様な魂は、暗黒と悩み・絶望・陰うつな霧の中の生活であります。

私達の現象界にも大きな影響を与えられるのであります。

私達は自分の本性を悟らず、物質生活のみで、死後の世界に生命もなく、光もない世界と信じている場合、この様な暗黒の地獄に堕ちるのであります。

それは私達の現象界で積み重ねて来た人間性に依って、自分自身が定めて行く場所であります。

魂の意識によって造り出される世界であり、悪魔の地獄界なのであります。

また幽界は低段階の霊位の集りでありますが、この世界の中に極楽界が存在しています。この極楽界は現象界と同じような生活をしています。

自分自身の魂即ち意識の中に組み込まれていた人間社会と同じような仕組みになっております。この極楽界の経済面は完全に調和されています。

幽界も魂修業の正否に依って、自分自身で定めた世界であり、規則正しい幽界人の生活が行なわれているのであります。

欲しいものは総て手に入り、自分の正しい目的完遂のために努力した、一念力に依って物質が出来る世界なのであります。勿論自分自身で働き魂の修行をしているのであり、地上界と異り、経済は物物交換が行なわれ、金銭売買ではないのであります。

動物は地球上で、見ることの出来ない古代のものから、植物・鉱物共に存在する世界であります。

幽界人と現代人の交流は、霧のような白いベールに依って閉されており、特定の人に依って対話が可

能なのであります。

私の、指導霊、守護霊はこの事実をスポーツやその他の原因に依って意識不明になった時、自分自身が花園のある、自由な世界を漫遊する人々が多い、その人々が行く場所は幽界の天上階の姿に接したのであると説明しています。

地上界の、生活経験をした魂即ち意識の一念力により、天上界にもそれぞれ専門の人々によって同じ建物を造り、その生活は私達の地球上とは、はるかに異った上段階の生活を営んでいるのであります。

それは生命の意識が完全な自分の環境を作るのであります。私達の地球上における物質の固体・液体・気体の循環も、また一切の物理法則がそのまま適用する世界であると指導霊は教えています。

時間と空間も、太陽・地球・月の周期とは異った大自然の回転に基づき、更に精密な計算によって造られた時間・空間があるのであります。

また地球上の生物には地球の幽界があり、火星には火星の幽界があり、太陽系には太陽系の各惑星毎に幽界の存在があるのであります。

地獄にいる暗い世界の生命も、神の真意を自覚し、自分の魂即ち意識に、きざまれている罪の償いが終ることにより、光の天子が保護して、天国界へ光の波動によって進むことが出来るのであります。

幽界の生命も、真の正法を確立することに依り、更に霊界、神界へと永遠の世界へ修行されて、魂は磨かれて行くのであります。それは総て、魂の修業によって光りの度合で決っているのであります。その中には神意に依って肉体を持ち、地上界へ新しい使命を果すために、生れて行く生命もあるのであります。（第二図生命不変図参照）

物質科学ばかりを私達が云わず、己れの意識・心の本性を考える必要が優先であります。神（仏）は大宇宙の姿であり、私達の意識は五体全体であります。神の意識は無限大の生命であり、私達の意識が神の意識と調和しなくてはならないのであります。科学者を始めとして私達は肉体以外、魂の輪廻をもっともっと科学すべきであります。

物質科学のみに支配されるべきではありません。精神科学こそ、人生航路の基本であることを悟らなくてはなりません。

その中から物質文明の花を咲かすことが順序であります。

剣の道も自分の心が出来ず、技術と体力のみの剣術であるならば、気違いに刃物であります。

品性と教養、即ち慈悲と愛の心なくして、真実の剣の道を悟ることが出来ないと同じであります。

私達は自分自身のみの世界ではありません。私達は己れを自覚して、更に大宇宙に目を向けなくてはなりません。

現象界における、地球上の人類と、火星の生物が一番不調和な生活をしているのであります。

他の天体には、調和のとれた、はるかに進歩した生物が存在していることを、私達は悟らなくてはなりません。

現象界の人類は精神文明の廻転ピッチを、速やめなくてはならないのであります。

それには私達一人一人が、自分の本性を悟ることにより、実在界の諸如来（上段階光の大指導霊）諸菩薩（上段階光の指導霊）は手をさしのばして、私達を救おうとしているのであります。

己れの心を開いて正法を悟り、真理は、決してむずかしい法ではないのです。

人間らしさを失わない、生活の中に存在しているのであります。

如来・諸菩薩の慈悲は寛大なものであります。大神霊と一体の光明であり、見知一体総てを見透す力を持っているのであります。

大宇宙の富は正しい法を悟った如来、諸菩薩のものであり、このような霊人は、一切を不生のままに満足していることを、自から悟っているからであります。

私達はその如来、諸菩薩（光の天子）から魂修業のため万物を与えられていることを、悟らなくてはなりません。

注、「一切は不生のままに満足している」とは如来（上段階光の大指導霊）菩薩（上段階光の指

導霊）の心（意識）が大神霊の心と光明が一体ということであります。

物質と生命は不二であり、神の心が、富（万物）と一体即ち如来・菩薩と心が調和している所に光明があり、生命の、永遠を悟って居られると云う意味であります。

真の正法を悟り、総てに聡明な解答を与える力は、神の外に、如来・菩薩以上の権威者は、いないのであります。

天地一切、総ての権利をこの諸如来・諸菩薩が持っていることを悟らなくてはなりません。

ただ現象界に肉体を持っている諸如来・諸菩薩も、耳・鼻・舌・身・意の五官により、自我我欲の諸現象に惑わされ、折角悟った、仏の心境を持続することが難しいのです。

私は実在界の如来（上段階光の大指導霊）の指導によって自分の本性を、悟ることが出来たのであります。

今は自分の暗い想念を、反省の中より常に自分の心に問うて行動をし、そして心の安らぎを得ることが出来たのであります。

私達は自己反省が必要であり、他人の自分に対する態度に、一喜一憂したり、人を憎んだり、腹を立てたりしないか、生死に心を囚らわれていないか、偽りの生活をしていないか、と常に反省の冥想にふけって、真の道を悟らなくてはならないのであります。

自分自身の心は自分が一番良くわかっており、自分の心を、自分自身で誤魔化すことは出来ないのであります。

それは90%の潜在意識が控えているからです。

真理は広大無辺であり、私達はその真理をみな悟ることは至難であります。

しかし、実在界の如来（上段階光の大指導霊）や、菩薩（上段階光の指導霊）の教えを日常生活に生かすことが出来たなら、明らかに悟りを開いたことになるのであります。

若し、肉体を持った、如来・菩薩が悟りの境地に入ったなら、大自然の総てがその人の手中にあり、日・月の光明にも勝る明知が、その人にあるということになります。

しかし、肉体という人生航路の舟にのっているために、人間としては非常に難しいのであります。肉体を持った生命は五官の隙間に悪霊が入り、増長慢となり、己れの本性を忘れるからであります。その為に道はとざされ、光は消えて困難が訪ずれて来るのです。

それはすべて暗い想念が神（仏）の光を遮断するからであります。

いかに指導する上段階の光の大指導霊が教えても、現象界における行動は、自分自身が決定するものであり、指導霊が決定を下すことは出来ないために、魂の修行になるのであります。

それは実在界と現象界の違い、魂の修練所である現象界故に、どうすることも出来ないのである。

このように悟りというものは、自分自身の心・頭・身の三身で行なわねばならないのであります。

自分自体が正しい目的に対して、一念力を集中して念ずれば、必ず一念の波動は、実在界に通じ、生命本体に調和されるのであります。

私達の肉体の支配者である意識にも、自分自体の意識界が存在するのであります。

この意識界にも、地獄と極楽の世界があります。この意識界も無限大の世界に通じているのです。

自分の心の置き方によって、一秒一秒異って来るのであります。

食べ物で苦しみ、お金で苦しんでいる姿は、互いに我欲を出しあって生活している己れの心が、餓鬼界に通じ、また闘争の生活は、修羅界に通じているのであります。

このような衆生こそ、あわれであります。心は常に格闘の生活、正法に非らざる仏罰の強迫、仏罰のおそろしさから、闘争へと心が変る姿は、迷える自分を見失なってしまうのであります。逆法を正法と信ずる衆生こそ、目をさまさなくてはならないのであります。

一時たりとも速く、修羅界より脱出して、神仏の慈悲にすがるべきであります。

功徳は自分自身が日常生活の中より、実行努力してこそ得られるものであり、次元の異った宇宙の意識に通じているのであります。

神仏は己れの意識の中に厳然として存在しているのです。

己れの、心に安らぎのない信仰は正法に非ず。闘争と誹謗の宗教は正法に非ず。
自己保存による、暗い想念の塊り以外に何者もなく、自から孤立の運命に落ち入るのであります。
また法華経を看板にし、先祖供養を旗頭にたてて、信仰を強制している宗教も正法に非ず。
このような信者の多くは畜生界に落ちて、心の安らぎがありません。
信者も不治の病に自からを追いこんでしまうのであり、一時は病気もなおりますが、自分の本性を悟らないために、再び、黒い想念が病魔を呼び込むのであります。
仏法の法力も今はこのような、動物霊に侵かされて来たのであります。これも仏法の真理・正法を永い年月の間に、智と意によって改められ哲学化したための産物であり、
この姿こそ末法というのであります。
自分自体が生れて来た目的も悟らず、「親が勝手に私を生んだのだ」と親不幸をし、神仏を信ずることなく、自我我欲、己れの本能のままに、日常を送る人々の心は、地獄の意識界であります。
自分の行動を反省し、いかなる環境であろうとも、己れに打ち勝つ一念力を発揮しなくては、人生航路の脱落者となってしまうのであります。脱落者を待ちかまえている世界は、非情な世界であることを悟らなくてはならない。誰をも楽な道楽に、日々を過したいものでありますが、それでは魂の修行にならないのであります。苦労してこそ、楽しみが湧くものであります。

病気病気の生活の中で、常に心の安らぎのない生活も、地獄の意識界であります。
自分の心を常に反省し、その原因を追及し、正法を悟って、黒い想念を心体より取り去り、神の光の保護を受けることにより、心・頭・体の三身に安らぎが生れるのであります。
医者にかかるなら、医者を信じ、己れの病気に打ちかつことが、病魔退散の秘決であります。
このような人々には、必ず地獄の迷える魂が、現象界に来て、黒い想念に救いを求めて、生活している場合が多いのであります。
肉体の支配者は、自分自身の意識であることを良く悟ることであります。
正法を悟った意識なら、必ず病魔の肉体を完全支配出来るものであります。諸器管に命令を下すことが出来るのです。
生活苦のために、家庭の中が不調和になり、心に安らぎのない人々も、自分の意識界は、現象界における地獄の生活であります。
自分自体の、欲望を満たすための自己保存によって、家庭内の調和がとれず、家族がそれぞれ目的不一致の、各個生活をするようになります。
親は子供の人格を考えず、小供は親の意見を聞かず、どうすることも出来ない家庭があります。家族が自我を捨てて、良く話し合いの場を作り、真心を持って己れの心に問いながら、相手の心にきづ

つけぬよう相談し、自我を通さなければ必ず調和な家庭に変るものであります。

このような家族にも、迷える地獄の魂が入りこむものであります。

現象界における仏法の法力が、効力を減少しているために、迷える魂が多くなったのであります。正法を悟らず、道徳の退廃からくる秩序の乱れに原因があります。現象界のみの生活ではなく、来世の生活を考えなくてはなりません。

正法を悟り、自分の環境を魂の修行所として、日々の生活に熱心な人々の心には、慈悲と愛があり調和のとれた日々を送ることが出来ます。このような人々が、極楽の生活であります。己れを悟り最も人間らしい生活の中に、正法が存在するのであります。

自から精神的・肉体的・経済的な安定した、生活に恵まれて来るのであります。

このように、私達の意識界も大自然界の意識界に、常時通じていることを、悟らなくてはなりません。私達の考える、正しい一念力のエネルギーは、無限の力であり、現象界から、幽界・霊界・実在界へと波動が常に通ずるのであります。

総てのものの根本である一念力のエネルギーが、正しく用いられるならば、あらゆる他の生命現象をことごとく解決して、形を造形することが出来るものであり、一念力こそ私達が支配しなくてはならないエネルギーの、コントロールタワーなのであります。

実在界では波動の周波数が大きいために、敏感に作用し、一念の小さな動きでも、直ちに、具体的な現象を生み出すことが出来るのであります。

現象界のエネルギーの波動より、はるかに敏感に作用します。

自分自身の中に謙虚な正しい真の調和した心を持ち、自からの力で物を考える者こそ、生命は躍動し、自分自身の意識の中に有るところの、本来の神(仏)、即ち過去世の智恵を自覚することが出来るものであります。

自分が、三身による悟りの、正法を考えるようになった時、始めて私達の魂は成長を開始して、魂の潜在意識の中より、真の智恵を表わすことが出来るものであります。潜在意識こそ、感応の源であります。私達の日常生活の試練の中で、自分自身が何を見い出すか、正しい反省の冥想的な考え方は、魂を浄化し、不調和な人間の雰囲気を改め、正しい法を悟ることに依り、大自然生命本体の光の保護を、受けることが出来るものであります。

私達の人格は、正しい一念力のエネルギーの総計であり、一念力は物であり、私達の行動も支配する力を生み出すことが出来るのであります。

暗い一念力の集積を、一掃することによって、私達の意識と実在界の意識が調和され、霊感が与えられるのであります。

迷妄の、一念力の汚穢が曇っていることは、不信の力が、汚れたこれらの雰囲気の中に忍び込み、不幸な姿に変って行くのであります。

意識の作用は、私達の脳細胞を発信機・受信機と同じように、作動させることが出来るのであります。

人間は何事にも熱心になれば疑問を生じ、一念力に依る正しい想念のエネルギーは、波動となって宇宙の生命に調和され、霊感作用が起るのであります。

究極における疑問の解決は真理であり、神意は神の理であり、神の理は真理であります。真理は私達が実践することによって、真実と化すのであります。

この真理も正しい仏法として、現象界の衆生の心の中に存在して来たのでありますが、多くの衆生に対して、真の正法に徹することの出来ない、指導者の意と我によって、正しい仏法の精神を、曲げられ、伝えられている場合も多いのであります。

その為に、信仰の精神を誤解する衆生が、多くなったのであります。

正法に、自分の思想を入れて、不自然な法を説く所に原因があるのであります。

私達の幸福は、正法による信仰の一念の中に、自分自身が発見出来るのでありますが、余りにも先天的・後天的因果や、自我の念が強いために自己保存の執念で、神仏に信仰を求める衆生が多いので

あります。

信仰は自分自身の黒い想念を捨て去り、己れの行動を心に問いて、反省の繰り返しの中に、魂は磨かれ、自分を含めて、多くの衆生のことも考えてこそ、神の光が受けられるのであります。

自己保存と自我我欲を満すための、信仰は正法ではありません。神仏の前のみが、信仰の場所ではありません。一秒一秒の生活の中に信仰があり、神の子として、恥じない生活こそ正法であり、安らぎの姿であります。

自分の生活のすべての中に信仰があるのであります。

如何に何時間も経文を供養しても、自分の心が不調和なものは、神仏には通ずるものではありません。それは真の正法を三身で悟り、一念力を持って心の安らぎを祈れば、瞬間でも結果が出ることを悟らなくてはなりません。

正法を悟らずに一時間・二時間経文をあげても、自分自身の発声練習以外、何ものでもないことを悟りなさい。

己れの正しい心の持ち方であります。自我我欲・自己保存の念が強いために、経文の真理も理解出来ずに、事故や病気を神罰・仏罰と誤解して、自分自身を見失ってしまうのであります。事故や病気は自分自身の造った黒い想念による、不調和な生活から起るものであり、いかなる神も罰は絶対に与

えないことを強調致します。

私達は、小宇宙小生命体であります。私達は、宇宙即我れであります。大自然と同体であります。私達は神意によって、地上界で自分自体の魂を磨がいているのであります。

迷える狂信者は、自分の本性を忘れて、反省することなく、自分自体を組織の細胞と化して仕舞うのであります。

いかに正しい正法であろうとも、その教えを説く指導者が、指導方法を誤れば逆法となり、幹部の自我我欲による自己保存が作用して、自分の地位を固執し、団結という美名のもとに、信者に信仰を強制するのであります。

慈悲と愛の調和を失った指導者は、仏法を説く資格はないのであります。それは多くの衆生を迷わす結果となります。

大自然の真理仏法は哲学ではありません。仏法は理屈ではないのであります。

大宇宙の真理であり、私達の日常生活の中にあるのです。

無知と狂信の組織は一つの「ファッショ」と化し、恐しい暗黒の生活に堕ちこむことを悟りなさい。その事実は洋の東西を問わず、歴史が物語っているのであります。

如何に自我我欲で神仏を信仰しようとも、神は、物質を私達に与えるものではありません。既に神

は万物を私達の為に与えているからであります。

私達の生命・魂が磨かれない限り、一念力のエネルギー・真の光は神に届かないのであります。

自分自身が正法を悟らなくてはならないのであります。

自己の心を開いて真心を持って生活をする中に、真理と調和され、必ず幸せな現象を見いだせるのであります。その現象も自分自身の努力によってのみ生ずるのであります。

正法を悟り、常に良い原因を作り良い結果が循環されるように、努力してこそ幸福が得られるのであります。

自分の魂の練磨なくして、人間的成長は不可能であることを悟らなくてはなりません。

第五章　生命不変の原理

前章で述べた通り、肉体と意識は別々であり、意識の中心に心があります。これを霊魂と申します。生命のエネルギーであり、質量があります。

そして指導生命が、私達の意識を指導しているのでありますが、自分の行動については、自分の意志によって決定するものです。

肉体と意識（生命）指導生命が一体となって、私達の存在と人格が形成されているのでありまして、この姿を色心不二というのであります。それは物質・生物全部がエネルギー（生命）を含んでおります。

大自然生命本体の意識こそ、大神霊（仏）であり大宇宙全体の姿であります。

神（仏）の慈悲は拡大無辺とどまるところがありません。

その慈悲は私達の生存できる一切の環境であります。

例えば、太陽の熱・光のエネルギーは万物生命に平等に与えています。

熱と光は生命保存の根元であり、河川・沼・海の水を蒸発させ、気温の変化を起し対流を作り、慈雨を地上に降らせています。

このように生物の成長を助けているのであります。光は植物にあたり二酸化炭素を、光合成によって澱粉、蛋白質・脂肪を造り、また私達の日常に欠くことの出来ないものであります。

また磁場・引力は地球の自転公転の運動により、地上の気圧、太陽・地球・月の相互関係によって生ずるエネルギー、地熱のエネルギーこのように私達の環境は総てエネルギーの塊りであります。

このような環境においてこそ、生物の生存繁栄を繰り返えすことが出来るのであります。

この姿こそ、神（仏）の大慈悲でなくて何でありましょうか。

この偉大な慈悲に対して報恩感謝の生活をすることは、万物の霊長として当然であります。犬畜生なりとも尾を振って喜ろこびます。小鳥も美しい自然に、綺麗な声でさえずっています。花も美しい姿を自然界に現らはして喜んでいます。

大自然の生物はこの大慈悲に、感謝しなくてはならないのであります。

私達の生命は、物理学的に云う、質量不変の法則や、エネルギー恒存の法則と同じように、過去から現在・現在より来世と三世の世界を循環して、自分自身の魂の流転を続け不滅なのであります。

（三世の流転は後出版にて詳細を記します）

生と死は、現象界の肉体と実在界の肉体即ち衣の着替えであります。意識も変らないのであります。この世とあの世と申しますが「こ」と「あ」の違いであり、死は現象界から実在界へ一転（ひところび）で、背中あわせのような処であります。

現象界と、次元の違いであり、生活は現象界とそんなに変らない世界であります。

ただただ、現象界と異る点は、調和のとれた厳然とした世界であります。

現象界において、いかに偉大な政治家であろうと、王様であろうとも、大実業家であろうと、人間性に乏しい人々は、来世において自分自身の行為を自分自身で裁き自分の罪をつぐなわなくてはならないのであります。現象界における地位や名誉のいかんにかかわらず、実在界において通用しないこ

とを悟らなくてはならないのであります。

実在界の生命は表面意識が90％となり、潜在意識が10％の意識界であるために、神理である正法を殆んど悟っているのであります。

現象界における人生航路も魂修行の循環過程にしか過ぎず、自分自体の意識の練磨、慈悲と愛の心で人々と調和した生活以外にないのです。

その修行の中で最も人間らしく、リラックスして喜びの生活を過すべきである。

自分自体の本性を忘れて、間違った不調和な集団の細胞と化しては、魂の修行は不可能であります。

仏罰・神罰という脅迫や強制は正法ではありません。神は私達に罰を与えることはしません。罰は自分自身の黒い想念で造りだすのであります。

己れの本性を忘れず、慈悲と愛の調和のとれた集団でなくては、己れの魂を磨くことが出来ないのであり、戒律と厳しい規則にふりまわされて、自分を忘れてはならない。

私達は神意によって、魂の修行をするため、現象界へ肉体を持って生れて来たのであります。

肉体・生命即ち意識は、現象界以外の世界に往む霊人が、指導生命として、正しい人間的なありかたを教えて居られるのであります。

私達の生命即ち魂も、実在界や幽界・霊界で、それぞれ魂の修行をして来た生命であり、現象界に行ったなら、今度こそ一生懸命に多くの人々を救おう。立派に人間としての勤めを果して来ようと必ず約束して、生れて来た人々ばかりであります。

しかし肉体に入って、自分の意識で支配しはじめますと、そのような約束は忘れてしまうため、に不調和な生活をして、自分を苦しめる結果になるのです。

しかし、自分の意識は特にねむっている場合は、次元の異った世界に行っており、肉体と生命の二重生活をしているのです。

人生航路の苦楽も盛衰も、神より与えられている修行の手段であることを、自覚しなければならないのであります。

その為には、神意である正法を悟り、現世に真の極楽浄土を建設して、神（仏）より預っている万物を独占することなく、多くの衆生を幸福に導かなくてはなりません。

植物・動物のように生きた生命を私達のエネルギー源として必要であり、野菜は野菜として私達に供養する、使命があるのであります。

動物は動物として、それぞれの使命を持って現象界で生活しているのです。

人間のエネルギー源となることについて、私達は感謝の心を持ってこそ、動植物の、霊はよろこん

で自分を供養するのであります。動・植・物の冥福を祈り、心から感謝しなくてはなりません。

将来においては、人造食物が出来るまでは、神（仏）は許しておられるのであります。

私達は、個人個人の自我を没却して、真の正法に従うことが、最も必要な時代に直面しているのであります。

私達は、魂の修練所として肉体を持ち、生命循環の過程として現象界が存在しているのです。

そのためには子孫繁栄の場所が必要であり、魂の修練をするために、人生航路の乗り舟として肉体保存が出来る環境を、絶やしてはならないのです。

私達は、大自然のエネルギーを吸収した両親の調和によって、母体内の卵子と精子が成長ホルモンの作用によって、受胎されるのであります。その調和の一念力のエネルギーが光となって次元の異った世界に通じ、生命（魂）が与えられるのであります。（生命不変の循環図第二図参照）

この魂は、極楽界以上の生命（魂）であり、地獄界の生命が入ることは出来ません。

肉体的欠陥（けっかん）は両親及び先祖の先天的因果によるものであります。

生命（魂）も類は類を呼び、友は友を呼ぶ法則に従って、それぞれの環境に応じて、肉体に宿る使命があるのであります。肉体的欠陥も魂修行の良い環境であり、その中で自分自身を悟ることが偉大なことであります。

肉体的欠陥は、先祖か両親の黒い想念によって生ずる現象であります。

これを肉体の先天的因果というのです。

意識の内10％は、自分自体の後天的と先祖・両親の因果を受けます。90％は過去世の魂の因果であります。

これを過去世の生命即ち魂の先天的因果というのです。

10％は自分自体の後天的因果も含まれており、それは、肉体的先天的因果以外に成長するに従って、自分自身肉体と魂の、後天的因果も含まれて来ることを、知らなくてはなりません。

しかし意識は、自分の肉体の支配者でありますから、正しい一念力のエネルギーによって、体質も変りますし、あらゆる精神作用、環境等の作用が、精神と肉体に影響致します。

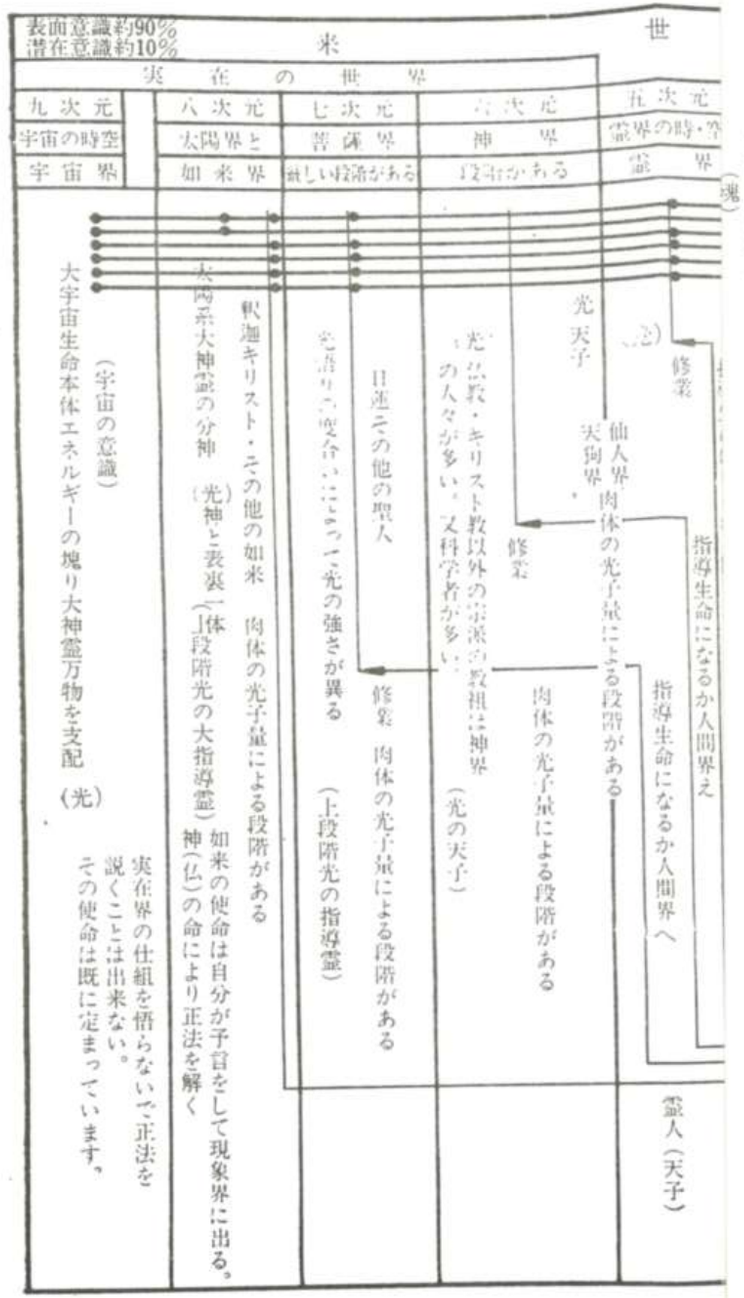
受胎された細胞は、母体のエネルギーを吸収して、細胞分裂を起し、肉体細胞は、五体を完成して行きます。

この間の生命は、次元の異る世界と常に交渉しております。

九ケ月を経て、胎児はこの現象界に生れて来るのであります。各細胞の生命は各諸器管と連絡されて各諸器管は、五体を維持するために使命を持っており、動・植・鉱のエネルギーを吸収して、五体は調和された、環境を作りあげて成長を続けて行きます。

三世を修業する
（魂）

第二図　生命の循環（仏教的な名称を使用）（過去世は来世に通じている）
（循環は円型である）



生後二～三日位で初笑いを致します。この時は、魂が次元の異った世界から友人達によって祝福されている時であります。

成長するに従って意識（魂）は肉体の支配をたかめて行きますが意志は、殆んど持っておりません。目が見えるようになるに従って、次元の異る世界と分離されて、完全に自分の10％の意識が支配して行きます。

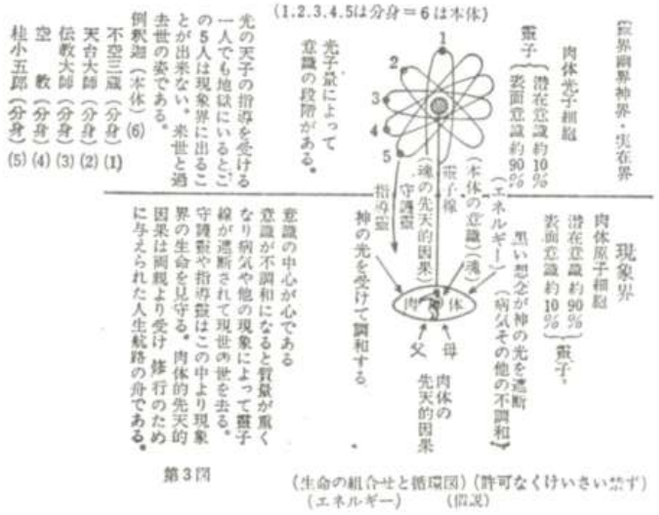
この時には、90％の潜在意識が大自然の生命と実在に、通じているのであります。魂の流転は核である本体を中心に、分身が五人の意識によって組み合っており、現象界においての名前が異るのみで、本性は変らないのであります。

如来、菩薩の本体が現象界に出た時は、必ず上段階の光の天子（如来）や菩薩は悟りをひらき、自分の目的を果して実在界に帰ります。本体は生命の核であり五体・五感同様に五人の分身と調和されています。

このように私達は5分身と本体によって、永遠の旅を続けているのであります。（詳細は別冊にて記す）5身が90％の潜在意識であり、10％は現象界で自分自身がつくりあげている表面意識であります）

肉体が成長するに従って、自分の意志を持つようになり、自我我欲が芽生えて来ます。

勿論、自分の過去世などは忘れてしまい、人生航路における魂の修行が始って行くのであります。



第3図

（生命の組合せと循環図）（許可なくけいさい禁ず）
（エネルギー）　（信況）

守護霊も指導霊も暖く見守っています。

耳・鼻・舌・身・意の五感が強くなるに従って自我が入り、自分を悟りずらくして行くのです。

正法を知ることによって、小学校位いから自分を悟り始めると、必ず自分の過去世もわかって来ます。

守護霊は殆んど過去世の人々がついている場合が多いのです。（過去世は生命の循環過程の人）

また肉体的先祖の生れ変りということもありますが、殆んどそのようなことは、すくないのであります。

因縁によって、指命されますから確定的なことは申されません。

肉体だけは完全に先祖の先天的因果を受けます

が、過去世の人と性格は似る場合もあります。

魂の過去世は、本体が出る場合もありますし、分身が現象界に出る場合もあります。（分身については別冊に記します）

過去世の中でも修行した人が殆んど守護霊を勤めています。

また霊的感応が強い人々は、殆んどかって現象界において、修行した守護霊が指導しています。このような時は、神界クラスの霊人が多いのであります。

神の声を聞いたなど申されますが、絶対にそのようなことはありません。そのような現象は幽界・霊界・神界の守護・指導霊が教えている場合が、多いのであります。

現象を見せる霊人は、実在界や現象界で相当修行した人々が多いのであります。

神の声などと信用しては、間違いのもとになります。

狐を含む他の動物霊は、自分の本性をかくすために、神の声と似せる場合があり、例えば、菩薩や不動明王なぞ名前をかたることがあります。これは殆んど動物霊であります。そのような人は、日常生活を見ればわかります。神は大宇宙そのものが大神殿であり、人間の造った小さな神殿なぞ喜ろこびません。またそのような人々は、自我我欲のために、心の安らぎがありません。自分自身の黒い想念によって、自分自体が正法を侵しているために、難病にかかって畜生界か地獄界で苦しみます。

また富士山に姿を現わす、諸菩薩は全部狐の変化（へんげ）であることを、私達は悟らなくてはなりません。

人間は自分の本性がわからぬために、だまされてしまうのであります。

そのために、富士山は事故が多いのです。私達は万物の霊長であることを、自覚しなくてはなりません。

人の心が清まれば、霊魂も浄化され、富士も霊峯と化すことでありましょう。

このように、人生航路の偏歴をたどって、成長しやがて、結婚、人生航路の波浪は私達に、いろいろと魂の修行をさせるのであります。

先天的因果の悪い人々も、自分の正しい努力の一念力で、必ず神の光の保護を受けられるのであります。

太陽の熱光のエネルギーは万物に平等に与えています。神（仏）は差別しないのであります。己れの心が正法を悟れば、絶対に幸福になれるものであります。

それは、一人一人が正法に、目ざめなくてはならないのです。

現象界では太陽を中心として、地球と月の相互関係から年・月・日・時間を定めています。

空間も、物質的観念で定めています。この考え方は、人間が計算上の単位として定めたものであり、一〇〇年で1/1000秒しか、誤差が生じません。

このような空間を、太陽を中心とした地球を始め、太陽系の惑星も寸分のくるいもなく、自転公転の運動を続けているのであります。

私達の生命（肉体を除いて）も現象界より実在界へ、循環を限りなく続けて、行くのであり、肉体も、大自然の万物に、循環されて行きます。

自分の意志で生活出来るようになった小生命体は肉体・生命・指導生命・一体の正法を悟ることによって、調和な生活をして、心に安らぎを得ることが出来るものであります。

このような人々が、社会的な指導者とならなくてはなりません。

宗教団体が教祖の意志によって、政治を取ることは絶対さけなくてはなりません。宗教の名のもとに、独裁を強行することが多いのであります。

それがを自分自体の意志で正しく判断が出来て、常に反省をし、自分の心と相談するような人々なら先ず、多くの衆生の心を豊かにするため指導者として、心配はないのであります。

党利・党略も同じであります。このような原因は正法を悟らず、自我我欲・自己保存に走るための不調和が原因であります。あくまでも、真理によって調和された、組識でなくてはなりません。

このように現象界で、いろいろな修行をした生命も、やがては自分自体の肉体を去らなくてはならないのであります。

魂の乗り舟、肉体との決別であります。

いよいよ人生航路の成果を自分自体で調べ、ある者は地獄へ、ある者は天国へと、自分で定めなくてはならないのであります。

あの世に行っても、殆んどの人々は自分の一生しか、わからず、意識の90％が表面に出て来ますが、過去世の、本性を悟ることに時間がかかるのであります。

自分を悟っている人々は経文の供徳によって楽に成仏出来るのでありますが、自分を悟らない人々は地獄の苦しみに耐えかねて、現象界へ迷える魂となって、何百年も苦しまなくては、ならないのであります。死は絶対であり、いかに科学が発達しようとも、肉体的生死の循環を、停止させることは不可能であります。一時の寿命を延ばしても魂の修行のためあの世へ帰らなくてはならないのであります。魂の流転における現象界の修行は、花火のように短かいのであります。

それだけに、私達は真実で生活しなくてはなりません。

次元の異った世界では、何万年という人々が生活しているのであります。

人生航路の百年は短いのです。最も人間らしく、快く暮すべきであります。

現世に思いのこす、執念のエネルギーは低段階の幽界の人程強いのであります。

そのために墓に執念がこもるのであります。地獄界の霊魂は、自分自体のことしか、自分の意識は

考えていませんから仲々悟ることが出来ないのであります。

光の天子によって指導され、悟った順から、天上界に導びかれていくのであります。極楽界より上段階になりますと、来世の、最も精密な時間と空間の中で、生命の意識は強くなり、正しい想念の考えるエネルギーは、光のエネルギーに変り、肉体も光子から出来ているのであります。勿論、質量を持っています。

人間生活の記録は総て、自分の意識の中に、寸分の狂いなく記されております。

このような生活の中から、再び魂の修行のために、現象界に生れて来るのであります。

私達の現象界における生活の中で、正しい想念による、行動力は、精神・肉体・経済の柱を完全に造り、更に反省の冥想は光となって実在界の天子に通じ、神に伝達されるのであります。

真心も、悪心も、私達の姿を鏡に写すが如く、幽界・霊界・実在界に写っているのであります。

しかし自分の意志決定は肉体を持った自分自身で定めなくてはならないのであり、いかに指導・守護霊がついていても、決定権は自分以外になく、それが魂の修行なのであり、その修行は、自分自身が努力努力の結果、正法を得て悟ることが出来るのであります。

悟ることは、あらゆる事象に対して、自分の心に問い、自分自身が正法に基づいて納得し、生活して行くことです。

このように、生命の流転は、永久に繰返えされて、行くのであります。

現象界において、魂を磨いている私達も、一秒一秒死に近ずいているのであります。

死は新しい門出であります。肉体は自然界に帰しても、光子という安定した肉体を持って、再び実在界で生活を続けるのであります。

現象界で過した、自分の人生航路を懐かしむ時であり、そのためにも、現象界において自分自身の魂をそれぞれの目的の中で磨き、己れを悟らなくてはならないのであります。過ぎ去った原因は現在の結果となって現れ、現在の原因はまた未来の現象となることを、悟らなくてはなりません。

日々の修行こそ、私達に与えられている使命であり、その目的を果してこそ、心に安らぎが生れるのであります。

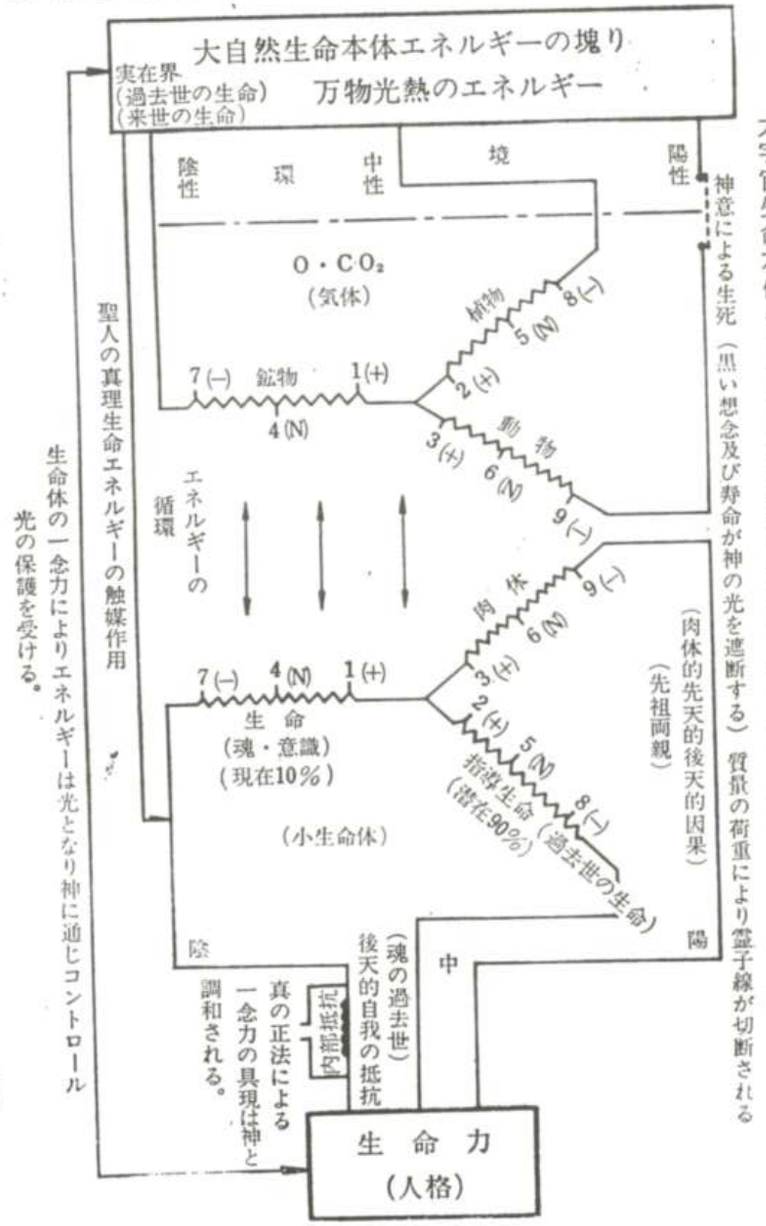
現象界の衆生は、自分のおかした罪には寛大であり、他人の過ちに対しては、許すことが出来ない人々が多いのであります。

我田引水・自分自身を、反省しなくてはならないのです。

人の過ちを許す心の中に、調和の第一歩があります。「罪をにくんで、人をにくまず」の心が必要です。

人間は自分の本性を忘れる場合が多く、そのために苦しむのであり、過ちも、またいつの日か、自

大宇宙生命本体エネルギーと小宇宙生命本体エネルギーの循環（第4図）



分自体に、降りかかって来るかも知れません。他人ごとではありません。

私達の意識が、常に慈悲と愛による、調和な環境を造りだすことにより、実在の世界と、交信することが出来るのであります。

それは自分の心が神（仏）に通じ、光の保護を受けるからであります。

魂の修業によって、神（仏）より与えられる光の多小があります。それは現象界における金の力でもなく財力でもありません。自分の意識（心）の調和力であります。

私達の意識が大脳に作用して起る、考えるエネルギーも、脳波となって電気的現象が起きるのであります。

私達の想念の一念力は、動物・植物・鉱物を応用して、新しい製品を物質化することが出来るのであります。

それは、電気の変圧器と同じような変化が起こるのです。大自然生命本体より、一〇〇％のエネルギーの供給があっても、私達小生命体は魂と肉体的因果による自我我欲に依って一〇〇％の出力を出すことが出来ないのであります。

第三図は私達と生命本体のエネルギーの循環の姿を、分り易く図示したのであります。

先天的因果を上回る、後天的努力の正しい想念の一念力は、私達の生命力を強め、自我の抵抗を正

しい、大自然生命本体の、神意に感応することに依って、自分の反省のうちに消滅されて行くのであります。私達の正しい一念力は、肉体・物質を支配することが出来るのであります。

神意に依るスキッチがはいることにより、肉体に生命が与えられ、動物・植物・鉱物・光・熱万物に必要なエネルギーが、大自然から供給され、私達小生命体が成長発育して行くのであります。

魂と肉体の先天的後天的因果である悪い内部抵抗は、自我の消滅によって大自然と調和され生命力は強くなり、自然のリズムに乗った能率的な生命体活動をするようになるのであります。

死は生命本体から、エネルギー供給の停止であり、肉体は大自然に還り、生命・指導生命即ち魂は生命本体エネルギーの（来世）に循環されて行くのであります。

大自然界も、この循環図を更に複雑化した姿であり、物理法則も、生命の法則も、総て神意に依って出来たものであり、不自然な現象ではありません。

第六章　大宇宙と小宇宙

大宇宙は拡大であり、その中に、銀河系宇宙があり太陽系が存在しているのであります。

太陽系は、太陽を中心に九個の惑星が、一定のリズムに依って、自転公転を続けており、太陽系は、

全体としてヘラクレス座の方向に向って、進んでいるのであります。

一年間に走る距離は、太陽と地球の距離、約一四九五四万粁の四倍に当るのであります。

この太陽系も大宇宙から見ると、小さな一恒星にしか過ぎないのであります。

更に地球は太陽系の一惑星であり、一定の秩序を保って、自転公転の運動を続けているのでありますが、大宇宙から見ると、一点の塵のようなものであります。

このように大宇宙の恒星も、一定の法則に従って循環しているのであります。

このエネルギーは莫大なものであり、また生命の塊りであります。

大宇宙は銀河系のような小宇宙が沢山集まり、大宇宙体を構成して、その循環は、大自然生命本体大神霊（宇宙体の意識）が支配しているのであります。

地球上における物質を構成する分子、更に極微な原子も、太陽系と同じように原子核即ち中性子・陽子を中心に陰外電子が一定の法則に従って運動し、エネルギーをはらんでいるのであります。

太陽も、九惑星を引き連れて運動を続け、各惑星も、大きなエネルギーを持って、大自然の法則に従っているのであります。

物質は物質としてのエネルギーを含み、外力に依ってバランスは崩れ、エネルギーの移動が行われています。

生物は物質と異り本能を持ち、時限に依って生と死の循環を繰り返しているのであります。

物質は外力に依り風化作用を起こし、大自然に循環されているのであります。

大宇宙から極微の原子・電子及び生物の細胞に至るまで、総てエネルギーの塊りである上に、秩序を保って、即応した環境の中で、安定しているのであります。

大宇宙は物質と生命から成り、渾然一体となって適合した環境を構成しているのであります。

物質の生命は外力に依って変化し、加工された物質は、目的に適合されている状態で生命を保ち、目的に、合わない物質は、目的の生命を失い、不動的生命の本来に還るのであります。例えばコップは使用出来る状態においてのみ、コップとしての生命を保ち、破損された場合は目的に適さない物質と化し、コップとしての、生命を失って仕舞うのであります。

生物の生命は動物・植物・鉱物のエネルギーを吸収して、細胞生命を保ち、自己保存と子孫繁栄保存の本能を持っているのであります。

このように、生物は生物としての生命を持ち、鉱物は、鉱物としての生命を持っているのであります。この生命も鉱物は風化作用に依って原形を崩し、生物は死に依って大自然に還り、この法則はどうすることも出来ない神意、即ち法則なのであります。

地球の成因過程において、その環境に応じた生物が繁栄していた事実は、化石やその他で実証され

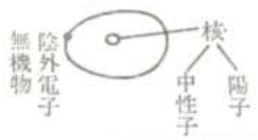
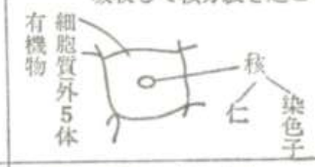
ています。またN極・S極の地磁気も一定の周期を持って氷河時代、常夏生命発祥の原因を、造り出していることは、否定出来ない事実であり、人類は永い年月を経て調和され、大脳は他の動物よりも発達して、その細胞の大きさは他の動物と比較にならない。人類は、理性と思考力を持って、永い年月に現代文明を築き上げて来たのであります。地球と私達を具体的に比較対照して見ると、地球は七一%が水圏であり、二九%が陸地から成っています。人体も約七一%が水分で、二九%が蛋白質やカルシウムその他の成分より成っているのであります。

血液の循環も大自然の河川と同じように一定の速度で流れ、肉体細胞の核分裂を助けております。口より入った食物は、食道より胃腸を経て血液となったものは心臓に行き、更に手足の指の末端迄、余す処なく行き渡り、残滓は排泄されて、自然界に循環され、このように大自然と変る所はないのであります。

地球が太陽より受けている熱量は一秒間に約$\frac{9.3\times10^{22}}{2.5\times10^{3}}$キロカロリーであり、人体の体内温度も約三七度Cの熱量を保っているのであります。（但し外部温度は空気冷却されているために三六～三六・五度位）

地球の、衛星である月の公転は約二八日で、地球の干満潮に深い関係があり、女性の生理現象にも深い関係があるのであります。

大宇宙と小宇宙の相似図

	大自然生命本体 生命が物質を支配している エネルギーの塊り大神霊	
	大宇宙の中の太陽系（分神）	
1	太陽・地球・月	肉体・指導生命・生命
2	地　　球	人　　間
3	大自然界の池河川	内　　臓
4	太陽より地球が受けている 1秒間の熱量 $\frac{9.3\times10^{22}}{2.5\times10^{3}}$ Kcl	体内温度　体外温度 約 37℃　約36.5℃
5	地球の 水圏　71% 陸地　29%	人体の 水分　71% カルシウム外　29%
6	（原子）外力によってエネルギーを出す（核反応）  	（細胞）動植鉱物のエネルギーを吸収して核分裂を起こす 
7	CO_2・Ca・H_2O その他の化合物 ← 可逆作用	細胞の死ぬことにより 自然に還る
8	大　宇　宙	小　宇　宙
9	物質のエネルギーは現世の時間・空間に左右される $E=MC^2$	正しい想念のエネルギーは現代の時間・空間を超越して物質を支配している $E=\infty$
10	大自然界の春夏秋冬	自分の春夏秋冬

第5図

物質界における極微の原子、電子の運動も、太陽系の惑星運動の極大も、その運動形態は一定の法則に従って、循環を続けていると同様に、生命体の細胞もこの法則を無視して生存は不可能であります。私達の魂の流転もまた同じ仕組みで循環しているのであります。

このように、私達は大宇宙の太陽系の中にある、地球上の環境に生存するからには、この法則に従って生命・肉体を持った小宇宙であります。従って地球上の春、夏、秋、冬と同じように、私達も出生を基にした春夏秋冬が当然あるべきであります。

私達小宇宙の四季は、受胎の月が春で、夏秋の九ケ月を経て生れ、冬を迎えるのであります。

人生航路の第一歩は冬の季節で、私達が持つ大自然生命本体に依って、定められた個人のリズムなのであります。

第七章　生命と感応

私達の脳は、生命即ち意識の正しい目的完遂の想念のエネルギーを集中すると、脳内に電気的反応が起こり、万物の目的に応じた感応現象が現われるものであります。

これを霊感と言い、殆んど守護霊・指導霊が感応作用を与えるのであります。

人それぞれに依って感度は異っています。その場合意識の作用によって、脳内の神経繊維の外側に(+)、内側に(−)の電気が帯電して、あらゆる事象に多少なりとも電気的変化を起こし、常に受信・発信の機能を持ち、電気的変化が生ずるのであります。

また私達の生命を指導する霊は、大脳内の一室に入ることが出来る場所があるのだと私の指導霊は教えています。現代医学では恐らく、一笑に伏されるであろうと、申されているのであります。

物理的に見た脳波の波長も、自分の意識即ち生命の発信する想念の力に依って、大きく変ることを示しているのであります。この波長が、感応作用に深い関係があるのであります。

感応は後天的な学問や研究、経験の多少、先天的に因っても感応力の強弱があります。

感応力の強い人は現世の時間・空間を超越して、未然に起こり得る、現象を感知する能力を持っている者もおります。

つまり、遠隔地の変化を見透したり、その結果を実証することが、出来る能力を持っている人々がそれであります。

このように感応作用「テレパシー」は、私達の本能でもあり、古代人は自然の災害や外敵から身を守るため、強い感応力を持っていたのであります。

大自然はそれぞれの環境に応じて生命の保存が出来るように、色々な本能を与えて呉れるのであります。

ねずみや猫は、火災の起きる前に、何処か他の安全な場所に移動するということは、誰でも一度は耳にしたことがあると思います。

実例に、ニューヨークの大地震の時、殆んどの犬や猫が、事前に避難してしまったと云うことがありました。

また、一九六八年の十勝沖地震の時、十勝沖から三陸沖の深海に住む「ダイオーイカ」が、三日前に三浦沖に姿を現わし、つかまえられたと云う。彼等は未然に、天変地変を、予知する能力即ち本能を持っているのであります。

このような、現象は新潟・福井地震にも見られた現象であります。

また、動物の保護色も、外敵から身を守るための本能として、大自然から授かったものであり、慈悲の姿であります。

私はかって飛行機乗りでありました。当時一九四五年代の飛行機は、羅針盤・時計・スピードメーター即ち速度を頼りにして、目的地に到着することが出来たのであります。

然るに「つばめ」はあの小さな体をして、山を越え、海を越えて、目的地に何百粁の道を飛んで行くのであります。私達は、この小さな鳥の現象を一、口に帰趨性本能と云うことで、片付けることが

出来るものでしょうか。

また、植物が光の差し込む方向に、伸びようとする本能も、総て、大自然生命本体大神霊の神意に因るものであります。

釈迦やキリストの時代は、霊的感応の強い人が、多数生存していたのであります。

彼等は自己の煩悩を捨て自然の姿に還り、大自然の真理に通じ、自分の意識と神（佛）の意識が調和され、自からを悟り、実在界に通ずることが出来たのであります。

当時の人々は、精神修養をする、環境に恵まれていたのであります。山中に入れば果物があり、生命の保存に心配がなく、修行も易い環境に置かれていたのであります。現代の人々は経済的物質文明によって、私達の心にゆとりが無くなり、物質至上主義に陥って行くから、心の安らぎが与えられないのであります。現代人は現代文明の中において、修行をおこたっては、ならないのです。

私達は、は精神文明と物質文明を再確認して、人間が神より与えられた、使命を考え直し、真の道に入らなくてはならない。

現代人は、その為に必要以外の潜在意識の中に含まれている、感応力が眠っているのであります。この眠って仕舞った感応力も、目的に応じ研究努力の、一念のエネルギーによって目覚め、大自然の法則を捕えて、感応現象を物質化し、ラジオ、テレビ、送受信機、電子計算機等あらゆる必要品を作

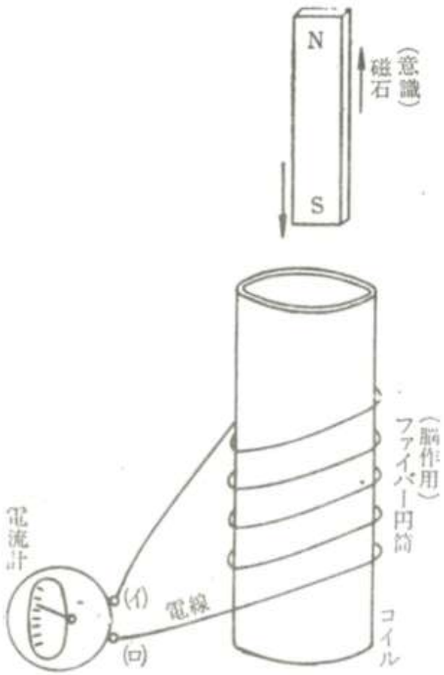
り出して来たのであります。念力は、表面意識と潜在意識の調和力が、大きく作用するのです。

物質化されたこれらの品物は、現世の、時間と空間に影響を受け、、私達の感応作用は、現世の時間・空間に影響されず、現象界以外の世界にまで、通信されるのであります。

今感応を、ラジオの原理で、考えて見ると相似点がわかります。

私達の脳も、自分の意識の意思が作用すれば、脳内の皮質に感応が生じ、これを脳波と言っています。電気的感応現象では、ファイバーで造られた円筒にコイルを巻き、「イ」「ロ」の両端に検流計を結び、ファイバー筒内に永久磁石を矢印の方向に出し入れすると、検流計に感応電流が流れるのであります。この電流は磁力線と感応コイルによる物理的現象であり、私達の周辺にも光・熱・電波・磁気が包んでいるのであります。

この総てが感応によって作用しているのであります。

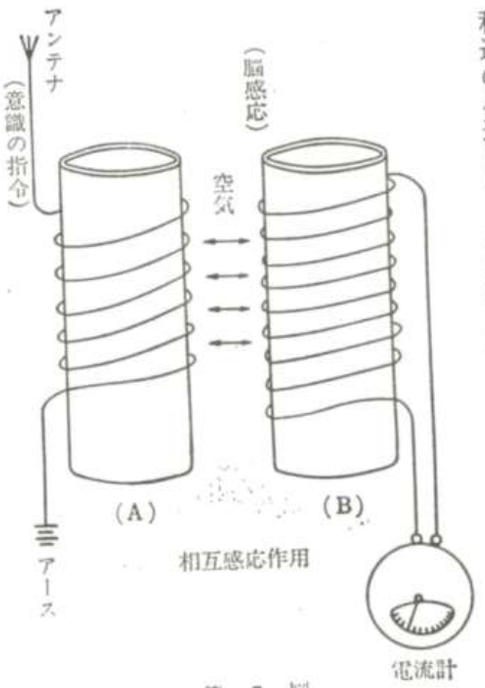


第6図
感応コイル

また、Aのコイル、Bのコイルを巻いた、ファイバーの円筒を第六図のように配列します。Aコイルの巻始めの線を「アンテナ」にして巻き終りの線を地中にアースすると、Bのコイルに感応作用が起こり感応電流が流れます。空気中の電波がAコイルに作用し、Bコイルに感応するのであります。

この作用を相互感応という。

私達の身辺にも、物理的な電気や磁力、光等が常に作用しているのであり、精神作用とその本質は変らないのであります。

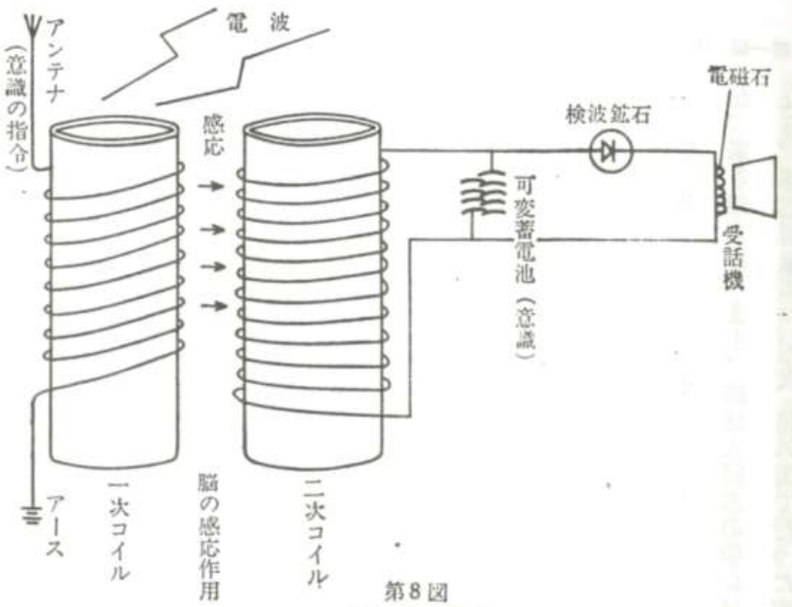


第　7　図

物理現象である「A」「B」二個のコイルも私達の大脳・小脳、神経繊維と同じ原理に基づいて作用するのであります。

第六図の相互感応作用を応用して出来たのがラジオの原理であります。

一次コイルのアンテナから、空気



第8図
ラジオの原理

中の電波を受け、二次コイルに感応し、電波の波動は電流に変わり、可変蓄電池によって、自分の希望する電波を得て電流は、検波鉱石の中を通り、必要な電波を検出し、正しい選択電流が電磁石に働き、その強弱の電流の流れによって、振動板に作用し音に変わり、私達の耳に伝わるのであります。

ラジオの受信機・発信機も波長によって長波・短波があり、各種の波動があります。

長波は、比較的近距離の電波で、短波は地球の裏面から発信されて来る電波を、キャッチすることが出来るのであります。私達の研究努力の一念力が受信、発信機を完成させたのであります。つまり私達の脳内に眠っていた、感応力（潜在意識）が物質を応用して物体化したものであります。

このように、私達生命体の、感応力の波動にも、人により長波あり、短波ありで、先天的後天的因果によって、千差万別であります。

物質化された送受信機は、地球上の時間・空間に、また物理的遮蔽に影響を受けるのであるが、私達の感応作用は、これらに、影響を受けないのであります。

これら物質文明の陰には、常に精神作用があり、この作用が、研究努力の一念力のエネルギーであり、潜在意識の約90％の力を、呼びさますのであります。

このエネルギーは新しい理論を生み、不自由を感ずる現象を次々と物質化し、文明を更に進展させて行くのであります。

科学の力は時間と空間を縮小し、地球上の文明は他の天体に伸び、未開の分野を解明し、月を足場に九惑星に達し、地球上の人類以外に、高度な文明を持った惑星人と交渉する様になるであろう。

また、実在界との交渉も容易になります。

更にまた、他の天体へ、新天地を求めて行くでありましょう。

人類の夢は、どしどし実現化され、人間に与えられた使命を自覚し、誰も大自然の真理を悟る時が、来るのであります。地球人同志の争いは、おろかであり皆兄弟同志であることを悟るでありましょう。感応現象について、諸外国で行った実験の例を見ますと、未だ初歩の段階でありますが、生命

体の感応力が、如何に研究されているかが、分ると思います。

一九五九年七月二十五日、アメリカ原子力潜水艦ノーチラス号で、テレパシー実験の詳細が、ソビエット通俗科学雑誌「知識は力」の一九六〇年十二月号に「遠隔感応は可能か」という表題で掲載されたのであります。

ノーチラス号に、一人の見知らぬ人物が乗り込むと、潜水艦は直に潜水を開始して、十六日間大西洋で潜水航行を続けました。

この不明の人間は、その間ずっとあてがわれた船室に入り、一歩も外に出ず、食事を運ぶ水兵と艦長以外はその顔を見た者はいません。

この見知らぬ人物は、一日二回艦長から「十字」「星」「円」「四角」「三本の曲線」の五つの符号を書いた、紙片を渡されます。

双方が、サインを終わると、艦長はそれを光を通さぬ封筒に入れて密封し、更に、その上に日付と時刻、極秘の文字を書き添えました。

一九五九年八月十日の月曜日に、ノーチラス号はクロントン港に入り、この謎の男を上陸させたのであります。

そして、今度は飛行機に数時間乗せ、メリンランド州フレンドシップ市空港に送られた後、自動車

でアメリカ空軍宇宙局付属生物学研究部長ボヤルス氏の許に連れて行かれた。

無言のまま、封筒を差し出すと、ボヤルス部長も、金庫の奥深く仕舞っておいた同じような封筒を取出し、日付順に揃えて中味を照合すると、ピッタリ、符合の合うものが、七〇％に上りました。

この部長が、金庫より取出した封筒は、別の男が十六日間、陸地の立入禁止区域内の、一室に閉ぢ籠ったまま、自動機械で掻きまぜた、一千枚のカードから選んだものであります。

一日二回タイムスキッチで一分間隔に次々とカードが弾き出される。それをジット見つめ全神経を働かす一念のエネルギー念波力が二千キロも離れた海中、しかも、数百メートルの海底の潜水艦にいる、人間に見事伝達されたのであります。

一九三二年から三七年頃、ソビエトでは、人間感応作用の実験が具体的に行なわれていました。この研究も大変進歩しています。

またイギリスの文豪H・G・ウエルズの、予言も感応現象であります。

ウエルズの一生は科学とテクノロジーの発達に依る、人類の無限の進歩に対する、希望の中に生きた人であります。

物質文明の発達に従って、政治・経済・精神文明の歩調が合致しないと、人類は自分で自分を滅ぼすようになることを、常に、警告して来た人であります。

ウエルズは、一九三三年即ち満州事変の勃発後二年で書かれた未来の小歴史の中に、支那事変、アメリカの介入、日本の敗北その他一九五七年まで、世界に起こった多くのことを見事に予言しているのであります。

この予言の的中も、感応力の作用により、偉大な指導霊が文豪ウエルズに書かせたものであると、私の指導霊は教えています。

私達が、機械的に造り上げた送信機は、電波を、機械の波動に合致するものを、正しく受信することが出来るのであるが、私達の、感応力は霊界との交信によって、得られるものであり、その時の、雰囲気によって、予言の確当に差異があります。私達人間にもそれぞれ人格、教養、専門の研究者によってレベルの違うように、感応力は人間と霊界通信者のレベルの高い霊人の交信は、その精度が高いのであります。通信機械は磁力電波を遮蔽した場所では、送受信は不可能であるが、人間の、感応作用は、物理的遮蔽に影響を受けないのであります。

誰でも、正しい目的に向って、一念力のエネルギーは、必ず他界に通じ、感応現象即ち霊感が与えられるのであります。

大自然界の波動について、考えて見ると、万物に関連しています。

潮の干満を始めとして、地球内部のエネルギーによって、生ずる地震波・電波の波動・音波・光波

・更に、私達の心臓の波動も、血液の循環によって生きている肉体を示している。このように、波動は大自然界のあらゆる変化を、教えているのであります。

昔から教会や寺院の鐘は、洋の東西を問はず、私達の生活に関係が深かったのであります。私達は時刻を知らせるための道具位にしか考えなかったのでありますが、更に重要なことを指導霊に教えられたのであります。

鐘の波動は、私達の心の波動を神（仏）の神意に調和させるための道具であり、正しい想念の波動は心を浄化します。

清らかな波動は心に安らぎが与えられ、心の調和を生み出すことが出来るのであります。

第八章　実在界と現象界

実在界より、現象界へ、魂の修行に来ていることは、前述の通りであります。

大宇宙は現象界・幽界・霊界・実在界（神界・菩薩界・如来界）太陽界・宇宙界に、区分されています。霊界と神界の裏側に仙人界、天狗界があります。この世界は智と意で悟り、慈悲が少く正法を悟っていないのであります。

最も人々に対して、不幸に導くものは幽界にある地獄の迷える魂であり、また邪霊であります。

迷える魂は、人間を気違いにしたり、病気にしたり、命を取ることもあります。

畜生界の、魂も人々をごまかして、不幸にします。

幽界の、極楽界や実在界の魂は人間を迷わすようなことは殆んどありません。

神界の指導霊は病気をなおしたり、ある程度の法を説きます。

この指導霊も現象界の人々の、自己慢心によって、法力を失うこともあります。

如来界・菩薩界の指導霊は、現象や正法を説き、現象界の人々に心の安らぎを与えます。

大宇宙界神（仏）と表裏一体の力を持っており神（仏）への伝達者であり、神の使者であります。

この現象界の人々に、正法に基ずく感応作用を与える力は、実在界の霊人即ち、指導、守護霊が伝達を与えるのであります。

狐や竜のような動物霊は如来、菩薩の姿を、自分で変化（へんげ）して見せますから、正法を悟っている人々に相談しなくては人々に恐怖を与えるようになります。

このような人々は、お金を、信者に強制します。真の神はお金ではなく、正しい心の調和以外にありません。

御礼として、感謝の印しは神（佛）ではなく、私達を指導して下さった人に布施することは当然であ

ります。どんなに、大きな寺院や神殿を造っても、神はよろこばないことを、悟らなくてはなりません。それは宇宙が大神殿であります。心の修養道場・娯楽場、などを建て、衆生の心に安らぎと憩のん。

場を造ることなら、良いのです。莫大な金をかけて、神仏を祀っても、私達の魂を磨くことは出来ないのであります。衆生の魂を救うことが、先決であることを悟らなくてはなりません。イエス・キリストや、釈迦も神殿や佛閣を造っていません。実在界から神の命により如来・菩薩が肉体を持って、修行している人々も居ります。

一九六九年現在如来は、四名現象界で魂を磨いており、必ず衆生を救うことでありましょう。（予言は別冊に記す）

この如来（光の大指導霊）菩薩（光の指導霊）は使命を持って現象界における、人々の不調和を救うためであります。必ず私達に福音を与えて下さることでしょう。

例えば、マグネチオ（イエスの分身）はフィリピンに出ており、如来（上段階光の大指導霊）であります。ドイツ・アメリカにも今活躍を始めています。また聖観世音菩薩もミクロの菩薩も、現象界に居られ、他の諸菩薩（光の指導霊）も肉体を持って居られます。

イエス・キリスト（キリストは本体である）の過去世である、クラリオもフィリピンで、指導霊として、活躍しています。クラリオ（キリストの分身）はエジプトで活躍をせられ、慈悲と愛の塊りの

ような人であります。医学と政治を、宗教的環境から得られた、偉大な指導者でありました。

今から約四〇〇〇年前のこと、エジプトの田舎にアシカミョータという村娘が居りました。

この娘が家の外へ水吸みに行きますと川土堤の上に、一人の、慈悲深かそうな旅の修行者がいました。永い旅の疲れか修行者の着物のすそは、破れており、娘は傍によって、その破れたすそを修理してさしあげたのであります。

修行者は、村娘の美しい心にうたれて、娘の足に赤く腫れあがっているできものを、神に祈って、なおしてあげ、人間としての心のありかたを、慈悲深く教えられたそうであります。

この人こそ、クラリオであります。クラリオは、この村娘に「聖」という名前を与えたのです。

魂の遍歴は続きこのときの「聖」はBC五一〇年頃インドの中部マガタ国、迦蘭陀長者の三人兄妹の末娘として、現象界に生れたのであります。（悟ることによって自分の過去世は潜在意識が調和されて、わかります）カリルレナ通称カリナと呼ばれており、竹林精舎を建てられた長者の娘であります。

小さい時から、釈迦の弟子として仏教を学んでいたのであるが、結婚後主人は、信仰を、余りこのまず精神的悩みが解決しないため、28歳の時に正式に弟子となりましたが、仏教に疑問を持ち、修行が苦しく悟ることが出来なかったのであります。

「仏法は自から悟るもの！　山の中で修業をしなさい」と釈迦にいわれ、入山したのです。

山中は、ハイエナや蛇が多く、夜中になると、木や草までが悪魔に見え、おそろしくなって一日で家に逃げ帰られたのであります。

わがままな女で、仲々自分の本性を掴むことが出来ず、遂に夫と別れ、再び36歳で釈迦にお願いし、仏門に入られたのであます。

肉体を持つと過去世のことはわからなくなり自分の本性を見ることが出来ないのであります。その頃、バラモン教で阿閦婆（阿閦如来）（上段階光の大指導霊）の弟子であった、タレーヤ（通称サチ）は師のすすめによって、釈迦の弟子となっていたのであります。阿閦婆のバラモンは智と意の悟りであるから心の悟りを学ぶことをすすめられ、名前をミロクとつけて下さったのです。

タレーヤとカリナの出合いはこの時から女性同志、釈迦の仏法を学びはじめたのである。

タレーヤは一段一段自からを悟り堅実な人でありました。

しかしカリナはやはり本性は信じていても、意識の内カリナの10％は信ずることが出来ず、心がいつも不安でありました。

タレーヤは釈迦より19歳年が少いのでありますが、常に身の回りのことをやられ、地味な女性であった。

釈迦の涅槃（BC五七五年二月一五日）後舎利弗・目連・富留那の三大弟子は、既に現象界を去り、文珠・迦葉・優波離・阿難・タレーヤ（サチ）・カリナ・羅睺羅その他の仏弟子達が口述された正法をまとめて、仏教典を作ったのである。その後不空三蔵等が中国へ仏教をひろめたのであります。

話は戻りますが、タレーヤも、カリナも修行の結果、自分自体を悟ることが出来たのであります。

カリナは69歳で現象界を去り、実在界で観世音菩薩となり、クラリオより贈くられた聖をつけて、聖観世音と呼ばれたのであります。

タレーヤ（サチ）も78歳で現象界を去り、実在界でミロク菩薩の称号を与えられたのであります。

その後、生命の流転において、聖観世音の分身は二～三世紀にイスラエルに生れ神学を修め、五世紀頃中国で林蔣という名前で観音力を説き、多くの衆生を救われたのであります。

広東から中国全土に布教し朝鮮、日本にも伝わり、悩める人々に福音を与えたのであります。このように観音の正法によって衆生を救ったのであります。

ミロク菩薩も、マンダド（通称マンド）と呼ばれ、林蔣に協力されたのであります。

三十三体の観音は聖観世音菩薩の弟子であり、分身を使って観音力を与えたのであります。

日本においては分身が、鎌倉時代に生れ、現象界で楽しく魂を磨かれたのです。

ミクロの分身も平安時代に奈良に生れています。

このように魂の流転は永久に続いているのであります。私達も現象界において、悔いのない生活をするべきであります。

正法を知って、自分の仕事に専念することが、魂の練磨になることを悟らなくてはなりません。

現象界における事故や災難の総てが自分自体の黒い想念による、不調和が原因であります。

自分達の生活を反省し、あやまちをあらため、常に感謝の心を持って、生活しなくてはならないのであります。

現象界から、実在界の姿を見るには、自分自身の本性を悟り、魂の修行をした人（最も人間らしい人）でなくては、出来ないのであります。

実在界から、現象界の姿は一目で解ります。またいかに、大組織をほこる団体であっても、その指導者が人々のために尽さず、自己保存、自我我欲によって、組織を利用すれば、己れの黒い想念によって、魂の系が切れて、しまうのであります（死亡）。神や仏は罰を与えません。自分自身の黒い想念が、神の光を遮断するため意識の質量が重くなることを悟らなくてはなりません。

その不調和な想念が病魔を自から呼び込んでしまうのであります。宗教の信者を食いものにすると、必ず己れに、反作用の来ることを、自覚しなくてはならない。

それは多くの、衆生を救わなくてはならない、指導者が偽善者であり、人に尽すは少善なりとは、

言語道断、苦しい衆生を救ってこそ、大善であることを、悟らなくてはなりません。

ただ、祈ることのみが信仰ではなく、自分の日常生活の中にこそ、魂を磨く環境があることを、忘れてはならない。間違った集団の細胞になると、已れの意識まで腐ってしまいます。

報恩感謝、慈悲と愛によって人々を救うことが大善であります。

不調和な生活は、己れ自身に反作用が起るのであります。

仏教も現代においては人々によって変えられ哲学と化してしまったのです。

自然の法則・宇宙即我れ、色心不二の真の正法に、もどさなくては衆生を救うことが出来ないのであります。

仏法もキリスト教も真理は同じであり、古に帰った純粋の正法こそ、神の理であり真理であります。

永い、年月において変り果てた仏法も、今は自己主張と自己保存、闘争の法に変りつつあります。

智と意で悟った過去の人々は正法を哲学化したことを悟り、実在界で何百年も苦しい修行をしていることを読者は知らなくてはならない。

例え、菩薩であろうとも、不調和の原因をつくれば、自分の光は黒い想念によって遮断され、修行の一歩からやらなくては、ならないのであります。

現象界の、私達と殆んど変らないのであります。

神は万物に平等であり、肉体的遺伝も、己れの意識（魂）の過去世の遺伝も、神は平等に慈悲を与えているのであります。

正法にかなった、心の置き方が、一番己れの魂が高揚され、調和のとれた人間であることを、神は教えているのであります。

実在界は、現象界の延長であり、財産や名誉には関係がないのであります。

お金があっても、あの世には持って行くことが出来ないことを悟らなくてはなりません。「冥土のさたも金次第」とは人間が作ったものであります。正法でないことを悟らなくてはならないのであります。現象界における私達の過去世の人々が、意識を支配した時に私達の体重に変化が起ります。

これは、生体エネルギー故に、質量の存在は、否定することが出来ません。

私達は、何人をも魂の流転における、過去世が厳然として存在し、肉体は両親より与えられた、魂修行の舟と考えなくてはならない。

魂は過去世が約90％、自分自身は自我による約10％であります。

実在界の生活環境は、現象界よりはるかに調和された世界であります。この世界の意識は表面意識が90％であり潜在意識は10％で、修行の度合いは、自分の肉体より出る光量によって、調

和不調和がわかるのであります。

光の量は、自分の悟りのバロメーターであります。

現象界の不調和を修正するために、実在界では、現象界の人々に常に指示を与えていることを、悟らなくてはならないのであります。

作詩・作曲家には、神界の人々が調和のとれた、波動を教えています。

低俗的な作詩・作曲は一時の世に悪の花を咲かしても、人々から忘れ去られます。真理の歌は多くの衆生に心の安らぎを、与えるのであります。

不調和な作詩作曲は必ず現象界を去ってから、自分自身で反省せねばならなくなります。

悪は一時の現象で終り、真理は永遠であります。

音楽は人々の心の調和力が強いものであります。

また、漫画家も同じであります。漫画家の創作の一念力に、実在界の指令が与えられるのです。また予告であります。

冒険ダン吉や、ノラクロ上等兵の出た頃は、日本は戦争に向っていました。

三角翼のロケットは、現代では普通であります。またテレパシー漫画などでも、現象界に起り得る事実を予告し、人々の心を調和するために、実在界より指令されていることを、悟らなくてはならな

い。

偶然であると思う人々は、信ずる必要はないのであります。正しい一念力のエネルギーは光となって、実在界に通じていることを悟らなくてはなりません。

新聞やテレビで、霊的現象を問題にとりあげているのも、担当者が、次に何をなすべきか企画する一念力に、作用を与えていることを忘れてはなりません。

私達の意識に働いて、その姿を多くの衆生に教えているのであります。

空飛ぶ円盤も同じであります。多くの衆生に突然変化を起さないために、基根を整えさせて、いるのであります。実在界の交通機関であります。

円盤は他の星からも飛んで来ますが、実在界とは型式が変っています。

このように実在界と現象界は、密接な関係にあることを知るべきであります。

信じようが、信じまいが、厳然として魂は転生輪廻の法則に従っていることを、悟らなくてはなりません。

第二編　物質論

第一章　他界より見た地上界

大自然界における地球は、人間及び他の動植物が生存している、居住遊星の一つであります。

各遊星は、一体系を成している球体の、中心的天体であって、その、遊星の最も固体的で、粗雑な部分が物質界で、表面に当る部分であります。

天体や遊星の配列や、相互関係は原子の電子構造や、元素の、周期律と同じように、精密であることを、私の指導霊は教えています。

この地上界は神意によって、私達の魂を磨き地上界に極楽を築く目的を使命とし、肉体という舟に乗った、生命の修行場であります。

しかし、この修行場は、大自然生命本体大神霊より、万物を与えられている宝庫を、私達は人類を中心に、万生、平和共存の理想境を築くために、使用することによって、報恩が神に通ずるのであります。ところが、神より預っている資源を、特定の、国家や個人の、独占物として、私利私欲をむさぼっている人々が多いのであります。

その結果、経済的、物質的不平が、争いの原因となっているのであります。

欲心は、自らの人間性を失い、暗い想念は闘争となり、破壊を呼ぶのであります。

私達は、地上界の万物を、魂、修行の目的に使用すべきであり、万物相互扶助の精神を、忘れてはならないのであります。

それには、各国民一人一人が、自分の使命を想起して、正しい真の法を悟らなくてはならない。霊性の高い人類同志が、互いに憎しみ合い、闘争に明け暮れるということは、神の子として、恥なくてはなりません。

私達は、自覚しなくてはならない。思想でもない、経済でもない。それは人間性の再確認であります。

その結果、真の正法に叶う地上界が出来るのであります。

石炭も石油も金・銀・銅総ての資源を、私達一人一人の正しい想念による調和された社会を築き、大衆の幸福のために、使用されるべきであります。物質界は、そのために与えられているのであります。

他界では、相互扶助による生計であり、闘争のない極楽地なのであります。私達も、過去世において誰しも魂を磨いて来た生命であるが、現象界に生れると本性を忘れ、自我我欲に満足するのであります。人間よ自然に還えるべし！　反省せよ！　万民協力して、平和境を地上に建設しなくてはならない！　一部資本家の独占物でもなく、宗教家の独占物でもない。幸福は万人のものでなくては、な

らないのです。指導者は、更に品性の高い境涯に立って、慈悲心を持って、指導しなくてはならないのであります。

第二章　大自然の循環

（1）エネルギー

私達の日常生活の中に、エネルギーという言葉が良く使われています。

余りにも、日常生活に溶け込んでいる、言葉でありますが、正しい物理的意義について質問すると、なかなか説明の出来る人は多くはいないのであります。自分の意識の中では分っているのですが、具体的説明は難かしいのであります。

この物理的定義は

仕事をすることが出来る能力をエネルギーと言います。従って仕事量の多少は、なし得る仕事の量で測られるのであります。

仕事は（加速度×質量）と距離の積で測りますから、その次元はML^2T^{-2}となり、エネルギーも

同じ元を有しています。

エネルギーは、機械的エネルギー、電気的エネルギー、化学的エネルギー、磁気のエネルギー、熱のエネルギー、光のエネルギー等多種多様なエネルギーがありますが、これらのエネルギーは、相互変化を起こすことが出来るのであります。

機械的エネルギーは大別して、二種類あります。

一つは投げられた石、発射された弾丸、弦を放なれた矢のように、運動している物体の持つエネルギーで、運動のエネルギーと言います。

他の一つは、高い所にある物質、圧縮した気体、曲げられた鉄板のように、物質の位置、形が変化しているために持っているエネルギーで、これを位置のエネルギーといいます。

火薬やガソリンは、物理的作用を加えて、化学変化を起こすエネルギー源であります。

また、大宇宙も太陽系も、莫大なエネルギー源によって、一定のリズムで自転、公転をなし、エネルギーの消失循環を続けているのであります。

このエネルギーには、質量があるります。一定の秩序を持って循環しているその元、即ち総てを支配している元、これこそ大自然生命本体エネルギーの元であります。

私達も肉体を持ち、生命即ち意識を持っています。そして自分自身の小宇宙を支配しているのであ

ります。

体内外の機能は、一定の秩序を持って働き、鉱物・植物・動物のエネルギー源よりエネルギーを吸収して、成長しているのであります。

この肉体も、自分の意識、考えるエネルギーによって、自分自体を支配しているのであります。

私達が物を考える場合、脳内の感応に因って電気的現象が起きるのである。一念のエネルギーは脳内、皮質の外側に(+)の電荷が、内側に(−)の電荷が帯電して脳波が変ります。心臓が止り、諸器官が停止すれば、脳の波動も停止するのであり、生命即ち意識は、現象界より去るのであります。

私達が日常生活の中で精神的な問題で悩んだり、あらゆる問題を深く考えた場合も疲労します。この疲労もエネルギーの消失であります。

また、肉体労働をしても疲労します。疲労することは、エネルギーを消費していることであります。音のエネルギーは空気その他を媒体として、耳の鼓膜に振動し、その波動は脳内の聴覚に伝わり、その音を知り、物を見るエネルギーは光の波動と目の波動により、物体を見ているのであります。嗅覚も波動によってかぎ分けるのであります。

私達の声も、波動に因って発生し、波動に拠って伝わって行くのであります。それ等、総てがエネルギーの作用であり、総て元があるはずであります。この元こそ、自分自体の意識即ち生命・魂であ

り、肉体の支配者であります。私達は私達の考えるエネルギー、即ち生命魂のエネルギーと、物理的な肉体のエネルギーによって送受作用をして生活を続けているのであります。

熱・光・磁力・電波等も、私達に波動を与えているのであり、総てがエネルギーであります。

(A)　仕事（作用と反作用即ち原因と結果の物理的現象）

「物体に力を作用させてその方向に物体を動かした時、この力または力を加えた物は仕事をした」というのであります。

仕事の大きさを「W」

加えた力を「F」・

動いた距離を「S」とする時、「仕事」は、Fと距離Sの積で表わされます。

$W = FS$　であります。

第　9　図

Mgの物質を矢の方向に力を加えた時、AからBまで運動をした場合、物質が仕事をした時、その仕事に等しいエネルギーを獲得し、物体が他の仕事をすればそれだけエネルギーを失うことになります。

(B)　加速度

物体に力を加える時、物体の最初の速度を「v。」「1秒」後の速度

を「v」とすると、

加速度 $a = \frac{v - v_0}{t}$　　$v = v_0 - at$

（C）力

Mgの物質に、力「F」を加えると力の方向に加速度「a」を生じる。

$F = Ma$　で質量mgと加速度の積は力であります。

仕事は総てエネルギーの移動であります。このように原因が発生して結果が生じるのであります。

（2）エネルギー恒存の法則

エネルギーを持っている物体が、仕事をすると同時に、そのエネルギーは種々形を変えて、他の物体に移ります。

ある速度を以て、運動をしている物体の速度が減少したならば、この物体は必ず仕事をしています。また、速度が増したならば、必ずそれだけの仕事を外から、与えられているのであります。

このように、外見的エネルギーは消失したり、また、無い所から生じて来たように見えることがあっても、良く調べると実際はその体質を変えて熱のエネルギーになったり、音のエネルギーや光のエネルギーに変化しているのであります。

そして、これらの変化の時でも、変化の前後におけるエネルギーの総和には変りがないのであります。

即ち、エネルギーは恒存されていると言えるのであります。

私達が利用している電気を考えて見ましょう。

高い山から太いパイプで水を落し、即ち位置のエネルギーによって水車を動かし、この機械的エネルギーは発電機を廻して、電気エネルギーに変化するのであります。

送電線内において一部分は熱エネルギーに変り、一般の家庭や工場に送られるのであります。

家庭に入って光のエネルギーとなったり、熱のエネルギー、機械、音のエネルギーと変化し、私達の生活を助けているのであり、エネルギーは恒存されているのであります。

即ち、変化の前後におけるエネルギーの総和には変りがないのであります。

これと同じように電流について説明しますと、電流「I」を流したA・B・C・Dの各回路を通った電流　Ai・Bi・Ci・diとすると、各回路を通った電流の総和は、流入する電流と同じであります。

$$I = Ai + Bi + Ci + di$$

これは、キリフホッフの法則であります。

即ちエネルギーは恒存されているのであります。

（3）エネルギーの源

地球上に起こるさまざまな自然現象は、殆んど太陽の熱エネルギーに因って起こるのであります。

また地球の自転・公転、月の自転・公転、総て莫大なエネルギーが働いているのであります。

熱エネルギーは水圏の水を蒸発させ、空中で冷却して雲を作り、大地に雨を降らせ、生物に慈雨を与えて成長を助けています。

水は山間より水路に入り、川は大河となり、自然のままに流れて大海に注ぐのであります。途中の汚水も大海に行って清められ、また蒸発し大自然の中を循環しているのであります。

ある場所では水力発電のエネルギー源となり、また肉体保持のエネルギー源となるのであります。

水は生物生存に欠くことの出来ない大自然の恵みであります。

また、太古に生育した生物は、熱のエネルギーと物理的作用によって化学変化を起こし、石炭・石油となり、熱エネルギー源として欠くことの出来ない物質であります。

このように考えますと、地上のエネルギーの殆んどのものは、太陽が源となっているのであります。

潮の干満は地球・月・太陽の運動に因る引力が原因となり生ずるのであります。

地球の火山や温泉は、地球自体の熱エネルギーが源となっているのであります。地球の支配者は地球の意識であり、その他の物質も、それぞれエネルギーをはらんでいるのであります。

相対性理論によると、質量もエネルギーも同一のものであって、光の速度の平方に質量を乗じた数になり、莫大なエネルギーに変るのであります。即ち質量mgの物質はc^2即ち光の速度の平方であります。

$$E=mc^2 \quad 即ち\ mg\times(3\times10^{10})^2\ エルグ\fallingdotseq mg\times(299774)^2$$

右のような方程式が成立します。

この莫大なエネルギーと質量が、相互変化を為し得るとすれば、僅少な質量でも莫大なエネルギーに変化するのであります。

例えば、一グラムの物質が全部エネルギーに変化すると、一馬力（七四六ワット）のモーターを三八〇〇年間運転することが出来るのであります。

原子核に関する種々の現象では、質量の一部とエネルギーとの相互変換は、実験的事実として証明されているのであります。

けだし、原子の質量が全部エネルギーに変るように、現代化学は更に進歩し続けるでありましょう。

大気上層部にある宇宙線は、原子核と電子との衝突によって全質量が、輻射のエネルギーに変化し

たものであると考えられるのである。地球の磁力はこれらの宇宙線宇宙塵をさえぎっているのであります。

このように大自然は、エネルギーの塊りであります。

（4）物質の生命

生物は細胞で構成され、細胞は原子で構成されている。細胞は各機能を造り、動物・植物・鉱物大自然界のエネルギーの供給によって成長し、子孫繁栄の本能を持って大自然の中に順応して生命活動を続けているのであります。

私達の各機能は適材適所に応じた細胞集団で構成され、骨格によって支えられており、各細胞もエネルギーを持って核分裂をする小生命体であります。

意識は脳細胞に働き、生命体として感応作用を持ち、物を考えるエネルギーを持っています。

このエネルギーは更に知性と理性を持つ生命力であり、小宇宙生命体であります。

この生命体の一念のエネルギーは、肉体細胞の小生命を支配しているのであります。

大自然生命本体エネルギーの根本は、物質・生物、即ち万象を支配しており、私達の生命は生命本体の分身であり、一念のエネルギーは時間・空間を超越して大自然生命本体に通じているのであります。

す。私達の生命、肉体を含めて万物のエネルギー供給の基は、宇宙大自然生命本体神（佛）が与えていることを、忘れてはなりません。物質は総て現世の時間と空間に影響され、質量と空間を持っています。私達の肉体は、死後において大自然に還元されて二酸化炭素その他の化合物となり、あらゆる分野に分解し、循環されて、行くのであります。

鉱物は、それぞれの性質を持った、結晶合体によって分類され、鉄は鉄として、ニッケルはニッケルとしての、特質と分子構造を持っているのであり、それぞれある物は化合し、ある物は単体として自然界に、存在しているのであります。これらの、物質は分子の結合によって体を造り、分子は原子から構成されているのであります。

原子は、更に核と電子の組合せによって、存在しているのであります。

原子は、原子としての生命を持ち、エネルギーを含有して、外力に影響を受けない限り、中性子のバランスが崩れない限り、安定を保っているのであります。

私達は、この物質を、自分の研究努力の一念力によって合成し、形付けることが出来る能力を持っているのであります。

この形付けられた物質は、目的に応じた生命を持ち、原形が崩されて形付けられない場合でも、本来の物質としての生命は失わないのであります。

このように、物質界は、私達の考えるエネルギーによって、未開の謎を解き、私達は物質を征服して、行くことでありましょう。それは、私達の考えるエネルギーが、宇宙生命に通じ、無限大でありますから、万物を支配出来なくてはならないのであります。

（5）太陽系の循環

大宇宙における太陽系は、地球を始め多くの惑星と、その衛星の集りが、太陽の引力に因って、整然と運行する力学的集団であります。

太陽系の惑星には、火星・水星・金星・土星・海王星・天王星・冥王星・木星・地球の九大惑星があります。この外に、火星・木星・土星の間を廻る数万個の小さな衛星群や流星となる、微小な天体群及び惑星を廻る衛星などがあります。

木星は、最大の惑星でありますが、その質量は太陽の千分の一に過ぎません。

全惑星を集めた質量も、その七五〇分の一に過ぎないのであります。

その他の小天体を集めた質量も、極めて僅少であり、太陽系に属する惑星群の全質量が太陽に集中しているのであります。

また、太陽系の広さは、太陽から最も遠い冥王星までの距離が六十億粁あり、地球までの距離の約

四〇倍にも達しています。

彗星には、それ以上の距離を往復するものが、多くあるのであります。（第八図参照）

この力学的集団は、一定の自転と公転の運動を続け、循環の法則に従っているのであります。

第三章　惑星の運働

太陽系の惑星は、太陽を中心として運動を続け、その軌道は、ほぼ円形に近く、水星と冥王星は楕円形の軌道を公転しており、地球の軌道面に対する傾斜は、水星が七度、冥王星が十七度であり、他は三五度以内であります。

各惑星の、自転は天王星を除いて、公転と同じ方向であります。

惑星を廻る衛星の公転も、殆んど円形に近い軌道を同一方向に廻っていますが、一部は楕円軌道を描くものもあり、太陽より遠い距離にある、天王星・冥王星等のように、特異な運動をするのが似ています。

その他、多くの小衛星も殆んど同一の運動をしていますが、彗星にはこのように揃った共通性は見受けることは出来ません。

公転の速度も地球上の時間に換算すると、水星が一一六日、冥王星は三六七日で内側より外側へ規則正しく変化しているのであります。

このように、太陽系の惑星が一定の秩序を持っていることは、太陽系の成因に深い関係があって、大宇宙空間の中で太陽系も一定の秩序で公転しているのであります。

このエネルギーも大宇宙体の意識より与えられているのです。

（1）太陽の運動

太陽は、太陽系の中心にあって、地球を始めとする、多くの惑星の運動を支配している恒星であります。

この強大なエネルギーを持った太陽も、銀河系の中心から、三五万光年外れた恒星集団であって、主系列星の一つであります。

太陽に光と熱のエネルギーが無かったなら、月も他の惑星も光を失い、大海は凍り、風もなく、川の水も無くなり、生物の生存は不可能な状態になるのであります。

しかし、このような変化は、今直ぐ起こるものではなく、今後数億年は同じように光と熱を私達に与え続けることでありましょう。

人類の使用するエネルギーは、殆んど太陽から得られているのであります。水力も風力も太陽が元であり、木材・石油・石炭も皆太陽のエネルギーを貯えたものであります。

しかし、潮の干満は太陽・地球・月の引力によって生ずるエネルギーであるが、火山・温泉・原子力等は太陽によらないエネルギー源であります。

太陽のエネルギーの強さは、一秒間に 9.3×10^{22} キロカロリーの熱量を宇宙空間に放射しているのであります。

地球はこのエネルギーの二十五億分の一近くの熱量を受けているのであり、この熱量は、石炭を毎秒二〇〇万トン燃やしたカロリーと等しいのであります。

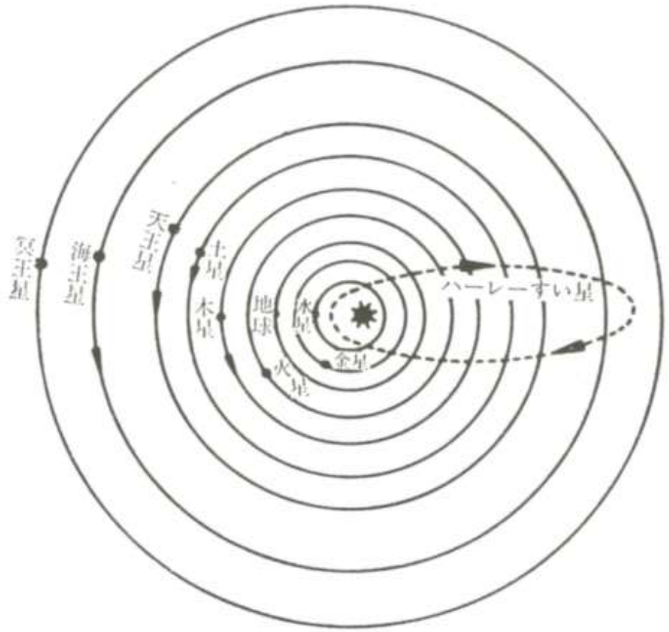
私達地球人が太陽に熱・光の代価を支払うとしたら莫大なものであります。

これこそ神の慈悲でなくて何んでありましょうか。太陽は貧富の区別なく、万物万人に平等な慈悲を分与しているのであります。

私達は、余りにも身近な太陽のため、感謝の心を忘れがちであります。

この感謝を万物に対し、平和な環境建設のために、努力することが、報恩の姿であると確信するものであります。

太陽は太陽系の惑星の集団を引き連れて、一秒に十九kmの速さで、ヘラクレス座の方向に、運動を



第10図
太陽系の惑星集団

続けているのであります。

（2）地球の運動

地球の気候は、地球の公転・自転の運動と、太陽のエネルギーが主役を演じている結果であります。

冬における太陽のエネルギーは、地球の地表に斜に当り、夏は直角に当るため、地表面の単位面積に受ける熱量が変化して寒暖の差が生ずるのであります。

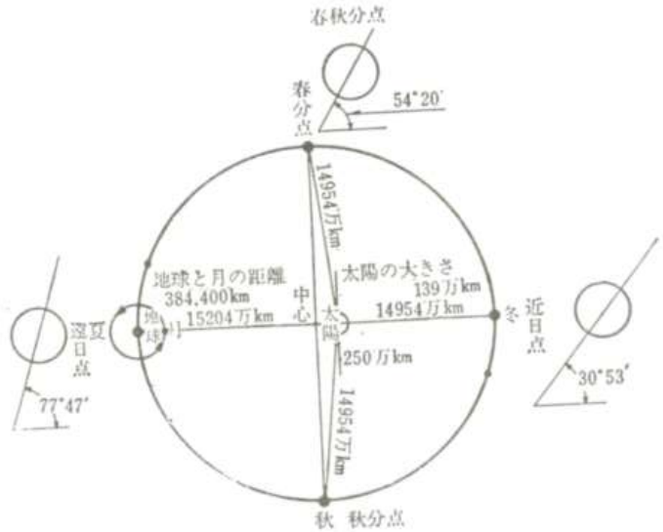
この寒暖が、地表の水分に循環作用して、雨や雪となって大地を潤おすのであります。

土中の種子は、成長して地表に芽を出すと、大気中の酸素や二酸化炭素、その他の化合物と光のエネルギーが作用し、生育し、種子へと循環されて行くのであります。

地球の自転・公転は、地表万物に作用し、私達の肉体・生命もこの法則の中に秩序ある循環を繰り返しているのであります。

太陽より地球までの距離は、平均一億四千九百五十四万kmでありますが、近日点となる一月二日には、一億四千七百四万km、七月四日頃は一億五千二百四万kmになります。

遠日点・近日点における太陽は中心から地球の距離は二百五〇万kmのずれがあります。



第11図
地球の公転軌道

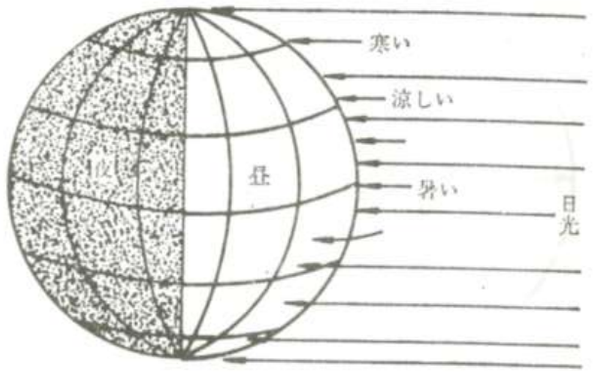
夏は、太陽の光が直角近くに当るために気温が上昇する。私達の住む日本は七七・四七度の角度で地球が軌道を公転している時が夏の季節であり、三〇・五三度の時が冬の季節であります。

冬は、私達の住む地表に太陽の熱・光が低角のため照射の焦点が外ずれているために寒いのであります。

私達の地球が、少しでも太陽に近ずけば、極寒が極暑に変り、太陽の照射角度によっても大変化を起こすのであります。

規則正しく、運動を続けている大自然界が、如何に精妙であるか、寸分狂わぬ循環、この姿こそ大自然の生命であります。

私達の顔を見ても、太陽の照射によると鼻の



第 12 図
地表と日光の関係

頭が一番早く焼けてきます。これが自然の姿であります。

惑星によって引力が違う為、地球上の重量とは当然違って来ます。（第十三図参照）

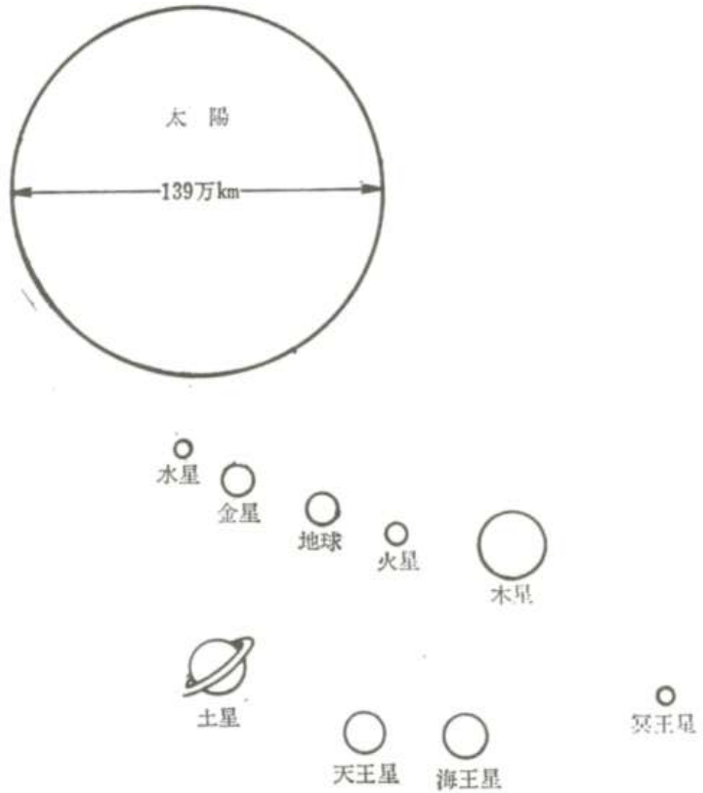
太陽は、地球と同じ方向に自転し、自転の仕方は地球の場合と違います。太陽の直径は約一三九万kmで、地球の直径の一〇九倍、体積は地球の一三〇万倍であります。

若し太陽で地球の大きさを造るとしますと、地球が三拾三万三千個出来ることになります。

地球は、太陽から数えて第三番目の惑星であり、他の惑星と比較して色々な好条件に恵まれ、生命の発生、進化を繰り返しています。

地球は、南北軸の回りを自転し、太陽の回りを公転しているのであります。

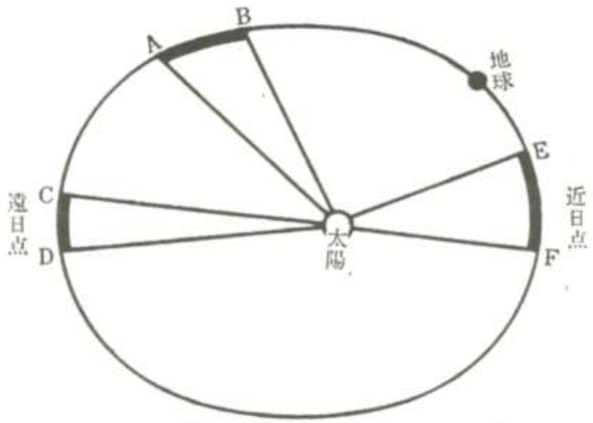
自転の周期　23時間56分4091秒



第　12　図

重量の差	地球	太陽	木星	土星	海王星	天王星	金星	水星	火星	月
	40kg	112kg	102kg	42kg	40kg	38kg	36kg	16kg	15kg	7 kg

第　13　図



第　14　図

$\overset{\frown}{AB}$ $\overset{\frown}{CD}$ $\overset{\frown}{EF}$ と移動する時間が総て等しいとき、斜線の面積は夫々等しい。

公転の周期　365.2422日

赤道の地点は、自転により毎秒四六〇米の速さで働き、地球の中心は公転により毎秒約三〇キロの速さで動いています。

地球内外に起こる潮汐や、物質によって生ずる摩擦の為、百年につき千分の一程度の割合で誤差がでて来ます。

また、地球が軌道を公転する速さは、地球と太陽を結び直線が一定の時間と一定の面積を描くように動いているのであります。

地球の地軸は、公転面に垂直でなく、六六・五度の傾斜角度をしているのであります。

公転は、一年を周期として北緯三五度の時点で、冬至の日は三一・五度から夏至で七八・五度と変化します。

中緯度では、春夏秋冬の四季が生れ、北半球と南半球とでは逆になり、日射量に大きな変化を起こすのも、地軸の傾斜に起因しているのであります。（第十図、第十一図参照）

先に述べた通り、地球が太陽より受けている熱量は、近日点と遠日点では相違があり、後者の場合は前者の約六・五％減少することになります。

公転は近日点近くで速く、遠日点付近では遅く運動をしているのであります。

暦は、一年の季節の春夏秋冬の移り変りを知り、地球の公転周期は一日の整数倍でなく、年々季節とのずれを生じるのであります。

その為に三六五日の平年と、三六六日の閏年（うるどし）とを組み合せて調整しているのであります。

これで平均日数は三六五・二四二五日になります。

また、地球の自転により磁場内の物体は引力を受けているのであります。

私達が物体の重さを感じるのは、引力と自転に因る遠心力との合力の為であり、この合力を重力と言います。

地球上で物体を落すと、加速度を生じて落下します。この加速度は、九八〇グラムで地表の位置によって多少異ります。

これは、地球の運動に起因する為であります。

地球は、楕円体なので赤道に近づく程、地球の中心より遠くなり、引力は少くなります。

また、遠心力は赤道に近づく程大きくなり、重力を減少させる方向に働くので、結局重力は最大となって、約九八三グラム、赤道で最小となり九七八グラムとなります。

地球全体の質量は、地表の重力の値から求められます。総ての物体は、互に引力を及ぼし、その大きさは質量に比例し、距離の二乗に反比例する。球形の物体が、球の外部に及ぼす引力は、その質量が、全部球の中心に集中したと考えた場合の引力に等しくなります。

地球の半径や重力の加速度がわかれば、地球の質量を算出することが出来るのであります。

その値は、六兆トンの十億倍となり、従って地球の平均密度は一立方糎当り約五・五グラムとなります。

しかし、引力の法則も、アインシュタインの相対性理論によると、磁場内においては通用するが、原子核の中ではニュートンの法則は成立しない。また引力外の空間においても利用出来ないことが解明されています。

地球は、巨大な磁石であり、地表には磁力が働いており、地磁気と磁石には誤差があり、これを磁針偏差という。磁力は温度変化によって起る電気作用が大きく地表面の磁性体に働いている。

場所によっては磁針のN極が北から東に、または西に傾いている場合がある。この傾きを偏角とい

う。

重心に向かって吊した磁針が水平から傾く角度を伏角と言います。

これらの偏角、伏角に因って磁力の強さ（全磁力または水平分力）の三要素は地球上の場所によって異ります。

（3）月の運動

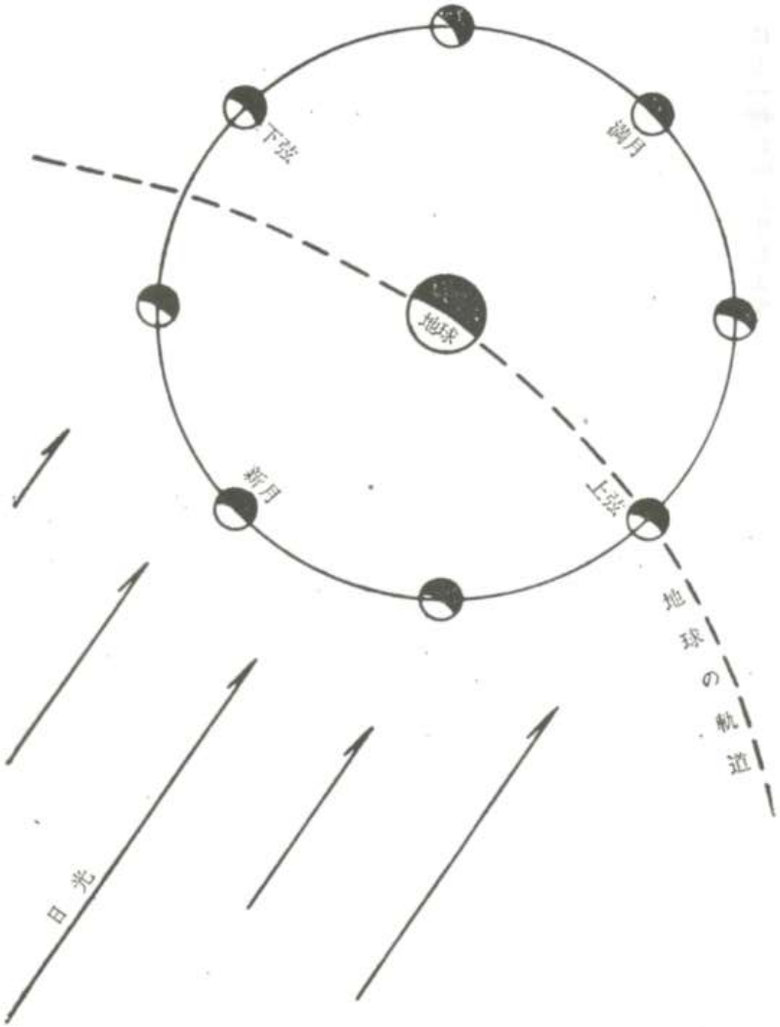
月は地球の唯一の衛星であり、また、地球に一番近い天体であります。見かけは、太陽の大きさとほぼ等しく、明るさも太陽に次いで明るい。

月の一定周期による現象の中に「月の満ち欠け」現象は最も著しい天体現象であります。

月は地球の四分の一で、三八四、四〇三kmと計算され、直径は約三八七六kmであります。体積は地球の四十九分の一、質量は八十一分の一、表面積は十三分の一、比重は三・三四で、五・五の地球と比べれば軽い物質で出来ています。

引力も地球の六分の一に過ぎないので、月の面を出発する宇宙船は、秒速二・三八キロで月の引力から脱出することが出来ます。

月は地球の回りを二十七日七時間四三分一秒かけて一周、即ち公転し、またこの間に月自身も一回



月と地球

第 15 図

転、即ち一自転をしているのであります。

月が地球に対して、何時も同じ面を向いているのはこのためなのであります。

地球で月を造るとしますと、月は八一個作ることが出来ます。月の重力は地球上の⅙になります。例えば三〇kgの人は月では5kgということになります。

（4）太陽・地球・月の関係

地球の引潮・満潮は、月と太陽、地球の相対的な自転・公転による引力に起因した現象であります。また、満月時では両者の引力により地球にゆがみが生じ、内部エネルギーにまで変化を起こし、地震などの原因に関係が深いこともあります。

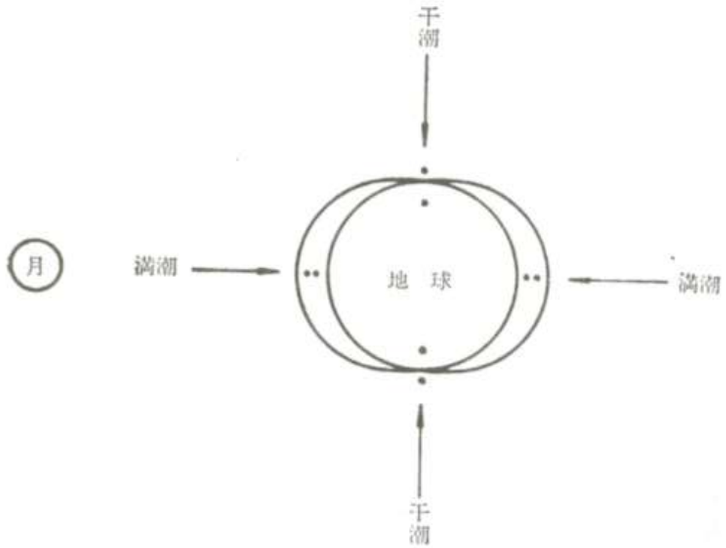
地球から見て新月から新月の間までは、太陽暦の一ケ月に当ります。一朔望月は二九日一二時間四四分二八秒であります。

月は自転で約二週間毎に昼と夜がめぐり、昼は約一五〇度の炎暑、夜は日没と共に冷えて零下一五〇度の極寒となります。

地球の引力によって月の運動が起こり、更に太陽や他の惑星の引力が月に作用して地球に向ける面にも「揺れ」が生じます。

干潮・満潮を起こす自転・公転による力の作用
（地球の歪）

第 16 図



（波の移動）

第 17 図

月の引力によって、地球上の太洋に潮の干満が生じて海水の運動を起こします。そのため、地球自体摩擦が生じ、地球の自転が遅れる効果が現われるのであります。

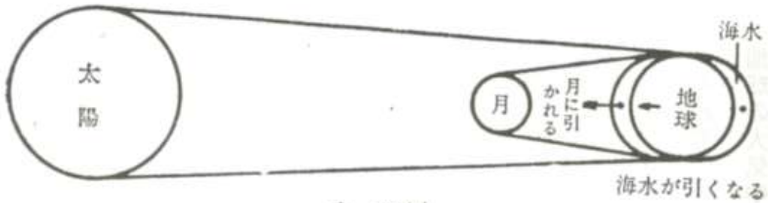
このように、月と地球は、力学的な関係を持っているのであります。

月の光は、太陽の反射の光でありますが、月の光そのものも地球上の生物に大いに影響を与えています。

太陽・地球・月は、私達の生と死に特に関係が深く、この三体の因果関係は総て莫大なエネルギーの循環であります。

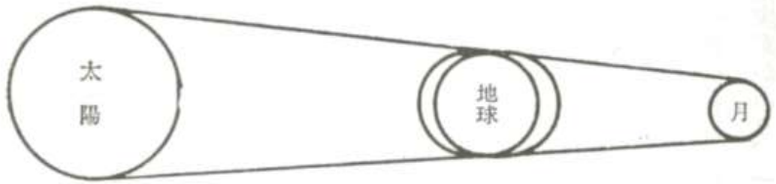
地球上の生命は、この三体即ち神（仏）の意識が支配しているのであります。私達も小宇宙である肉体の総てを自分の意識によって支配していますが、地球は地球としての意識即ち生命が、月・太陽それぞれに関連し、更に太陽系内で関連し、銀河系宇宙に通じ、大宇宙の根本にその波動は合致しているものであります。

私達はたまたま太陽系の太陽・地球・月の関連を考えているように、火星やその他の惑星、更に大宇宙のそれぞれの恒星内の住人も私達と同じように考えているのではないでしょうか、そして生命の不変を！

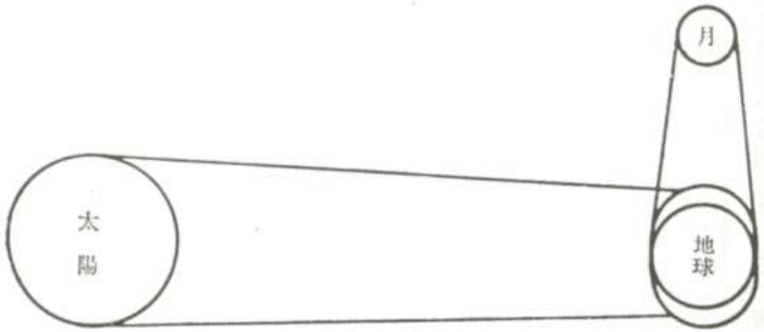


大　潮 (1)

月は地球を引き、地球は月を引く、そのために海水に大きな引力が作用し、地球を後に残して月に引き寄せられる。



大　潮 (2)



小　潮 (3)

第 18 図

第四章　炭素の循環

炭素は、有機物の中核をなす元素であり、大気中には二酸化炭素の無機化合物として約〇・〇三%容量が含まれている。

この二酸化炭素は光合成の働きで植物体に吸収され、澱粉・蛋白質・脂肪などの有機化合物に変わるのであります。

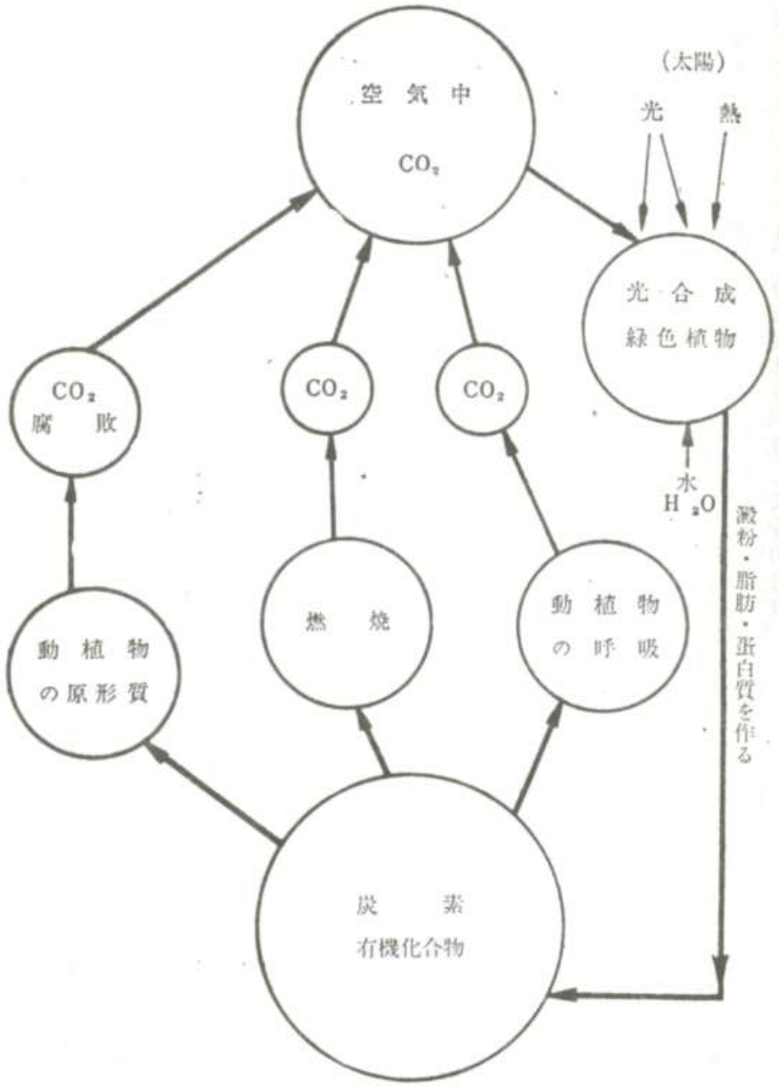
その一部分は植物の呼吸に用いられ、その結果生じた二酸化炭素は、再び大気中に循環されて行くのであります。

植物は、動物の食物として利用され、有機物は動物体の構成成分になるのであります。

動物の排出物や死体の有機物は、微生物によって分解されて二酸化炭素になります。動物や植物その他の生物の一部は、地中に埋まって地熱や圧力によって石油・石炭になりますが、これも私達の力で何れ燃焼されて大気に循環されて、行くのであります。

即ち自然の緩やかな酸化作用を受けて二酸化炭素となり、大気中に戻って行くのであります。

地球の大気中には21×10^{11}屯の二酸化炭素があり、一年間に植物から同化される二酸化炭素は$6\times$・



第 19 図
大気中のCO_2は生物体内の炭素化合物の源である

10^{10}屯近くと推定されるのであります。

微生物の分解作用、動植物の呼吸、石炭石油の燃焼で、大気中に放出される二酸化炭素の量はほぼ等しく、また、濃度も一定に保たれているのであります。このように炭素も循環しているのです。

第五章　物　質

宇宙空間に体積を持ち、質量を持っているものを物質と言います。

宇宙にある物質は、殆んど形と、それぞれ特有な性質を持って、大自然の法則に従って、構成され循環しているのであります。

鉱物・植物・動物の三体も物質より成り、更に分子によって組織化され、分子は原子から造られています。

鉱物は原子・分子の組織から一定の結晶体によって、合成されているものから、液体として分子間の力によって体をなすものがあります。

植物・動物は有機物の合成によって、原子は細胞体を造り各組織を造って、細胞は分裂して生長を続けて行きそれぞれ、特質な体を形成してをります。

これらの、万物物質は、それぞれが一定の時間・空間の中で、目的に応じて一定のルールによって循環されて行くのであります。

水は温度の上昇によって「気体」となり、この気体が上空で冷却され「液体」となり、更に冷却されると液体は「固体」に変るのであります。

このように、水も三体の相に循環されるのであります。この三体変化は、総て水の意思ではなく、熱の作用に起因するものであり、太陽の熱エネルギーと私達の人工的熱エネルギー、地熱のエネルギー等の三大エネルギーによってその変化の相は支配されているのであります。

水は正直者であり、生命活動には欠くことの出来ないエネルギー源であります。

自分の進路は自分で決定する。宇宙の真理に順応している姿が水の精であります。

大自然の意思により、水は自ら地中に入り、地球の熱を冷却し、地下水となってまた温水となり、あるものは、清らかな清水となって小さな流れをつくりやがて谷間の流れに合流し、自然に逆らわず、多くの生物に慈悲を与え、如何なる障害も自らの力で乗り越え、ある時は「ダム」に入って、電力のエネルギーの源となり、また、ある時は莫大なエネルギーと化し自分の進路を自分の力で進み、平地に入った水も旅の疲れで濁り、大川となって、あらゆる処から、集って来る同志と共に一体となり、長い旅路を終えて、大海に注ぐのは水であります。地上の濁りも自分の力で清められて再び天に

昇って、循環されて行くのであります。

私達も、人生航路の真理をこの水に学ぶべきものがあります。そして、水の本質は変るものではない。物質は熱により、化合により物理的・化学的に変化するものであるが、総てエネルギーを含んでおり、素直に大自然に循環しているのであります。

第六章　原　子

原子は、化学的にこれ以上分割が出来ない、微粒子をいうのであります。

即ち物質の究極的単位として仮説的に考えたものでありますが、現代では実験的にも確められています。

原子は原子核と電子から構成され、原子核は更に陽子と中性子より成り立っています。

原子の大きさは、半径二乃至六オングストロームの微小なものでありますから、若し直径一五粍のあめ玉を地球の表面に拡大するとしても、原子は僅か三〇粍位の大きさにしかならないのであります。

（一糎は一億オングストロームである。）

原子核の質量は電子より大きく、水素原子の場合は、電子より一八四五倍近くの大きな質量を持っているのであります。

原子核の質量はこの場合 1.67×10^{-24} グラムで、電子は 9.1×10^{-28} グラムの質量であります。

また、原子核の半径は 10^{-13} センチメートルで、電子が存在する最外部の半径は 10^{-8} センチメートル程度であります。

原子は、太陽系の惑星と同様に、一定の軌道を描いて運動をしているのです。原子核に引きつけられて、その周囲を電子が、大変な高速度で廻っているのであり、この電子を核外電子といいます。

核外電子は、陰性の電荷を持ち、原子核の電子は陽性の電荷を持っています。

それぞれの量が等しいので、原子全体は電気的に中和しているのであります。

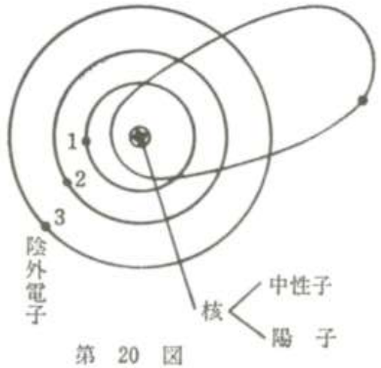
水素原子は核外電子陰性一個を持ち、やはり同量の陽性電子を持つ微粒子が原子核となって中和しているのであります。

水素以外の電子は、数個の陰外電子があり、核は、数個の陽子と中性子で、電気的に中和しているのであります。

原子核の質量は陽子と中性子の質量の和に等しく、陽子と中性子の質量はほぼ等しくなっています。

水素原子の核外電子の軌道は、太陽系と同じように一定の軌道を運動しているのでありますが、外部からのエネルギーが加えられると他の軌道上に移り、電子は一定の規則に従って、エネルギーを放出して再び元の軌道に戻ろうとするのであります。

水素原子が、電子を多数有する場合、次の図のように1・2・3の順に分配されて安定しているのであります。



第　20　図

原子核と核外電子陰性に働く相互の電気的力は、距離の二乗に反比例するのであります。右図のように、電子は原子核の半径に比べてずっと離れた所を運行しており、この離れた空間は真空であります。

原子番号は原子の質量の順に元素を配列して番号をつけているのであります。

原子の質量は、核外電子の数と一致するので、元素の原子番号と電子の数はやはり一致するのであります。

元素の原子量、及び化学的性質の大半は、核外電子の個数と配列によって決定されるのであります。

以上のように、大宇宙もまた原子と同様、一定の軌道を運動して、大宇宙と同様、極微の小宇宙で

あります。

大宇宙の真理も、極微の小宇宙の真理も、真空の中より電子を生ずる過程の研究は、遂に生命界も物質界も、その実在は一つであることに科学者も結論を出す時が来るでありましょう。

大自然界の物質も生命も真理は一つである。

万物の奥の真空、そして大宇宙万物の姿が大宇宙生命の本体であり、生命を自由に造り出すことの出来るエネルギーの源なのであり、これこそ支配者である大宇宙本体の意識（神）であります。

第七章　人体の構造と循環

（1）人　体

大宇宙の恒星も強大なエネルギーを持ち、恒星群との因果関係によって安定した環境の中で運動を続けている。

太陽系も、また極微の小宇宙原子核と電子も同じ法則に従って一定の軌道を循環している。私達の身体も地球という大自然の環境（第一図参照）において生存しているのであります。その構造や機能

は、大自然界、太陽系の惑星の整然とした運動と同じように、肉体内の、あらゆる相互関係によって肉体生命の保存に適合するように、各構造や機能が運動を続けているのであります。

生命は意識であり、考えるエネルギーの源であります。肉体の各諸器官総ての細胞は、小宇宙として小生命を持っているのでありますが、生命即ち考えるエネルギーの源、即ち魂によって、または生命の意思によって「支配」されているのであります。生命は、何兆何億何千の細胞小宇宙を支配しているように、大宇宙にもこれを支配している生命・意識の存在を否定することは出来ません。この生命こそ大宇宙生命体大神霊、私達の根本の親であります。大神霊は大宇宙の恒星・惑星の組合せによって完成されている体であり、大宇宙自然界は神体であり、又大神殿であります。

総て波動によって結ばれ、宇宙即ち自分自体であり、小宇宙生命体である私達の生命意識の舟、五体を考えて見ることにします。

大別すると、頭・胴体・四肢の三部であり、頭部は耳・鼻・舌・眼・身の五官を持ち脳内の波動によって意識につたわり総ての判断が下され、頭骨・椎骨・肋骨・四肢の骨を中軸として、多くの筋肉が付着し、その外側は、皮膚によって覆われているのであります。皮膚は寒暖その他を感知し、身体の機能を保全しているのであります。

内臓を見ると、胸腔には左右に呼吸作用をする肺があり、酸素を吸入して、体内の炭酸ガスを排出

して血液を浄化し、この血液は両者の左下方の心臓によって、体内の末端まで血液を送る循環ポンプの働きをしているのであります。

食道はこの中央を下って胃に通じています。動物・植物・鉱物の食糧、即ちエネルギー源を、口を通し食道を通過して胃に入れ、酵素によって分解され、十二指腸・小腸・大腸を通じ肛門となり、体外に不必要分を排泄しているのであります。この体内にも極微の生命が存在して消化を手伝っているのであります。

それは乳酸菌やクロレラのような小生命は、私達の体内を彼等の宇宙として生命活動を続けているのであります。

横隔膜の右下には胃に接して肝臓があり、胆汁を分泌してしているのであります。

左方には脾臓があり、膵臓は胃の後方にあって膵液を分泌しているのであります。

脊髄の左右には腎臓があり、ここで血液から尿を取出し、尿管で膀胱に導き、尿道によって、体外に排出しているのであります。

大自然界の河川と法則は変っていないのであります。

背後には脊髄があって、その上端は頭蓋骨となり、頭蓋腔を囲んでいます。

この中に脳があり、脳の下方は脊髄で三〇余りの椎骨から成っております。

背脊柱は、頭蓋腔に続いた管を作って脊髄を保護しています。

臓器を細かく分割すると細胞に分けられ、心臓は心臓特有の細胞の集合体によって造られております。肝臓は、肝臓特有の細胞の集合体で、機能を発揮しているのであります。

細胞小宇宙の集合体が私達の人体を構成しているのであります。

（2）細　胞

生物は総て細胞によって造られ、細胞は常に細胞核分裂によって生れ循環しているのであります。

人体の細胞は二〇ミクロン近くの直径を持って、他の生物より大きく厚みもあり、表面は細胞膜に覆われ、中には原形質という内容物と核から成っています。

この核が無ければ、細胞は生存して機能を営むことが出来ないのであります。

核が崩れると、細胞は死んでしまうのであります。

細胞は一定の場所に固定しているものと、移動しているものとがあります。

神経細胞・皮膚細胞・筋肉細胞等は一定の場所に固定しており、血液中の血球等は固定せず、血管の中を流動しているものもあります。

細胞は、同一の働きをするもの同志が集って、造ったものが組織であり、調和しあって活動をし、

その組織に特有の機能を営ませています。それ等の不調和な原因が病気という現象になって現われるのであります。（類は類を呼び友は友を呼ぶ法則に従っている）

骨組織・軟骨組織・筋組織・上皮組織・腺組織・結合組織・神経組織等があり、軟組織と硬組織とに分けられます。

これらの組織が集って一定の働きをするものを、器官または臓器というのであります。

上皮組織・結合組織・筋組織・腺組織が寄り集って胃腸・肺・心臓・脳等機能の諸器官が造られております。

一つ以上の機能の異る器官が、一定の組み合せのもとに共同の働きをする場合、これを系統または系というのであります。

胃・腸・肝臓・膵臓等の消化器官が一緒になって消化系統と呼ばれるのであります。

人体はこうした構成のもとに各部分がよく調和統一されて全身の生活作用を営んでいるのであります。

神経系統や内臓や腺・血管等のように、自分の物理的作用によって自由にならない部分、即ち無関係で反応し、自動的に調節する神経を自律神経と言います。丁度機械と電気的にエレクトロニクスを応用して作ったオートメーション機器と同様にエネルギーの供給が可能な限り働き続けているのであ

ります。その精度は、私達の頭脳で造り出したオートメ機器とは本質的に異る性格のものであり、オートメ機器は感情を持っておりませんし、私達の研究努力の一念力と実行の結果、物質を応用して造り出されたものがオートメ機器であります。

自律神経は生命に関する植物性機能に関する系統である所から植物性神経と言い、脳脊髄神経を動物神経と言っているのであります。

この動物性神経は、私達の一念力のエネルギーによって植物性神経に作用することが多いのであります。肉体の支配者である私達の意識はこれらの機能に活動を命令することが出来ます。

私達の造り出したオートメーション機器も、私達の意思で、いかようにも調整出来るのであります。私達の考える一念力の意識は自分自体の身体に強く影響し、五体を支配することは、自在であります。物質化された機械は、私達の研究努力の一念が自然の法則を捕えて、物質化したのであり、機械としての生命は持っていますが私達の肉体とは次元が異っています。

主体性は肉体生命自体が利用出来るものであって、機械は自由意思を持っていないのであります。

私達の意識は、自分自体五体を支配し、また物質界も支配することが出来るのであります。

また、元に戻して説明をします。

私達の筋肉は七一%が水分であり、乾燥物質中二〇%は蛋白質、九%の脂肪や炭水化物・燐酸カル

シューム、その他の化合物であります。

筋肉と骨格が内臓を固定しており、七一%が水分、二九%が蛋白質、炭水化物・脂胞、カルシュームその他の化合物より成り立っているのであります。

（3）血液の循環

血液は、体内の生きた細胞に対し、好的に安定した生活環境を与えています。

血液の化学的性質と物理的性質は、動物の外部環境の変化に対応して良く恒常性を保つ特長を持っています。

血液の循環は、体内の物質の輸送機関であります。消化器より吸収した栄養素を体内の各種器官や組織に送り、新陳代謝の原料や産物を体内の器官や組織同志の間でやり取りをするのであります。体内の組織が排出する老廃物を腎臓まで運び出すのであります。

呼吸器を通して外気との間にやり取りされる呼吸が酸素を体内に送り、二酸化炭素を輸送する動物の活動性の発達によって重要な機能になっているのであります。

また、各種のホルモン器管から血液中に放出され、体内の特定器官に働きかける科学的輸送もします。

循環系は、神経系同様体内の通信伝達の役割を果しているのであります。

また、血液は体外から侵入した細菌や、ビールス等の病源体、異物に対して血清中に特殊な蛋白質である免疫体を造り出して毒素を中和・凝集・沈降・溶解等の抗原体反応等をして体内を防衛する重要な作用をするのであります。

血液が輸送する物質の多くは、単純に血漿中に溶けた状態で運ばれますが、呼吸気体である二酸化炭素等は唯血漿に溶けるばかりか、血漿の中に含まれるアルカリ分と積極的に化合するので、血液の組織から大量にこれを取り込んで運び去ることが出来るのであります。酸素は赤血球中に含まれ「モグロビン」と結合して運ばれるので、水の場合より数十倍も大きな収容力、輸送力が発揮されるのであります。

体内の組織は、常に酸素が消費されて、含有量が低下しているので、血液中の酸素は容易に「モグロビン」の結合から離れて細胞に供給されます。

私達が海抜数千メートルの高地に永く住むと、血液中の赤血球が著しく殖えて酸素の受容力が増加し、空気の希薄さに人体が良く順応出来るように循環しています。

血液の流れの原動力は心臓であります。心臓は血液の逆流止めの弁膜を備えた袋状の器官で周期的に収縮し、一分間に約七〇回繰り返します。

毛細血管
（動脈と静脈の転換の姿）　第21図

心室から大動脈へと毎回六〇cc近くの血液を送り出し、各動脈に移動循環しているのであります。

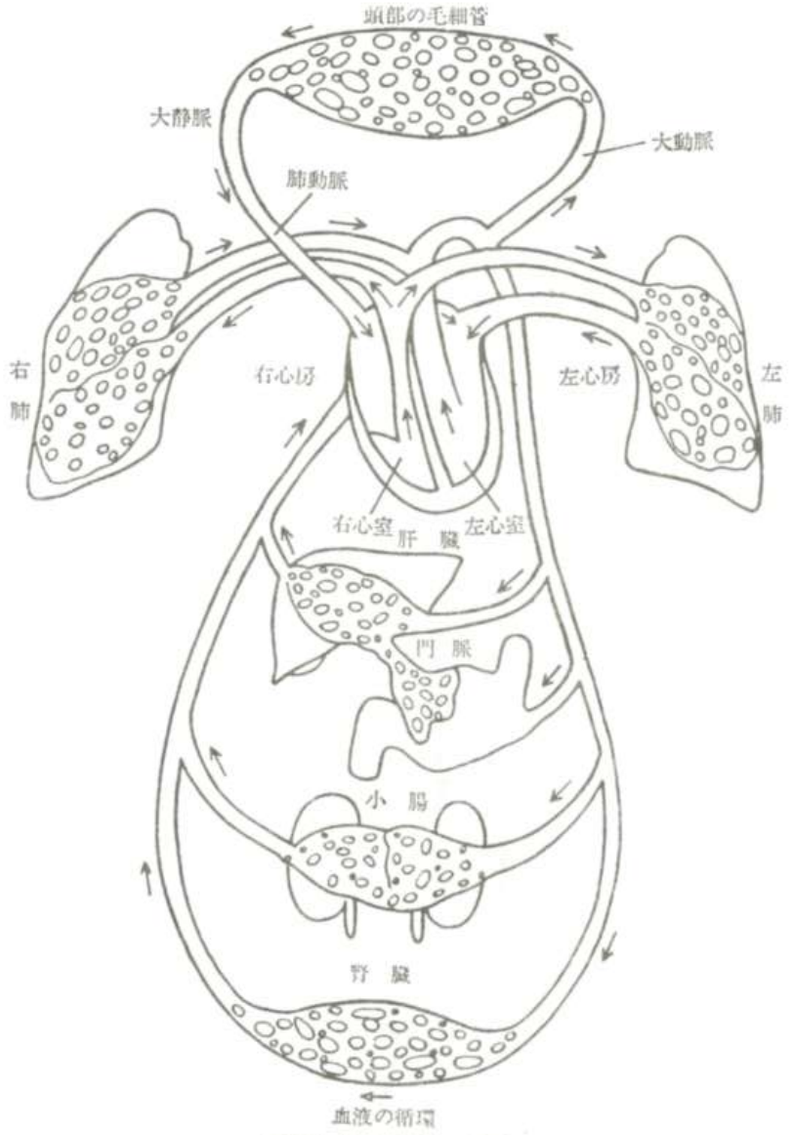
大動脈は動脈、更に小動脈へと分流を重ねて血液を体内の各器官や組織内毛細管へ循環されているのであります。

血圧は動脈内に保たれる水銀圧を言い、心臓の拍動と共に一定範囲、つまり壮年者で最高一二〇㎜、最低八〇㎜位で、年令によって多少の差が出るのであります。

毛細血管から心臓に戻る血液の帰路は静脈系血管で、血圧は殆んど消失して仕舞います。

血液も一つの波動によって動いており、波調が合致しない時には体の何れかに故障が生じている証拠であります。

今は電気的に波調を検査して健全な体を造る医学的研究が進んでいるので、疑問は必ず解明せられるでありましょう。



（動脈と静脈・転換の神秘）　第22図

第八章　生命体の脳作用

人間の脳は大脳・間脳・中脳・小脳・延髄の五つから成り、足等の脳には神経単位が無数にあります。

大脳や小脳では細胞体が表層部に集っている。

これを皮質と言います。内部は髄質とか白質と呼ばれています。

大脳の皮質には約「一四〇億」の細胞があり、各脳は部分部分によって異った働きをしているのであります。

皮質の部分が脳として、一番判断をする場所で、髄質の方は報告や命令の通り路の役をしています。大脳の前部は知覚中枢と呼ばれ、感覚器の報告を受ける所なのであります。

その前半部が運動中枢と呼ばれ、後半部が運動の指令を出す場所であります。

また、記憶することを分担する「連合領」の部分もあります。

感覚器から脳へ報告が送られ、脳から筋肉に命令する報告や命令の通路役をするのが神経繊維と呼ばれる所であります。

この中を報告や命令が通る時は、一方通行で、一本の神経線が報告命令を併行させることはないのであります。

この報告命令は、総て電気的な変化であります。

神経繊維は常時外側に「＋」の電気を帯び、内側に「－」の電気を帯電しているのであります。

感覚器にはこのような神経の末端が来ているのであります。

感覚器に刺激を加えると帯電している「＋」「－」の電気が中和して、零の状態が起こります。

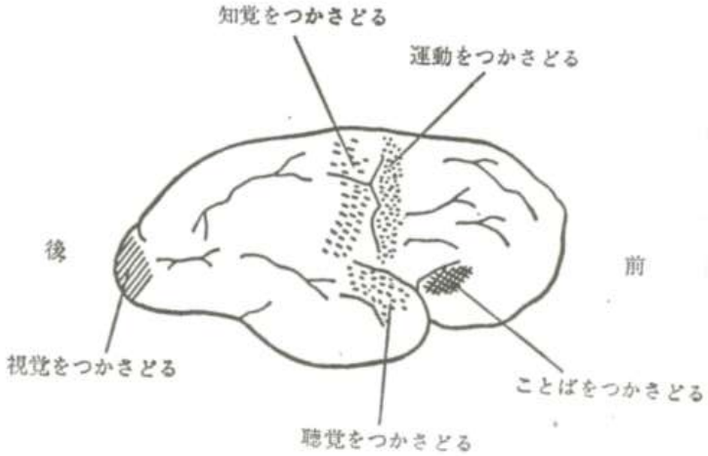
この状態が起こった時、興奮状態になるのであります。

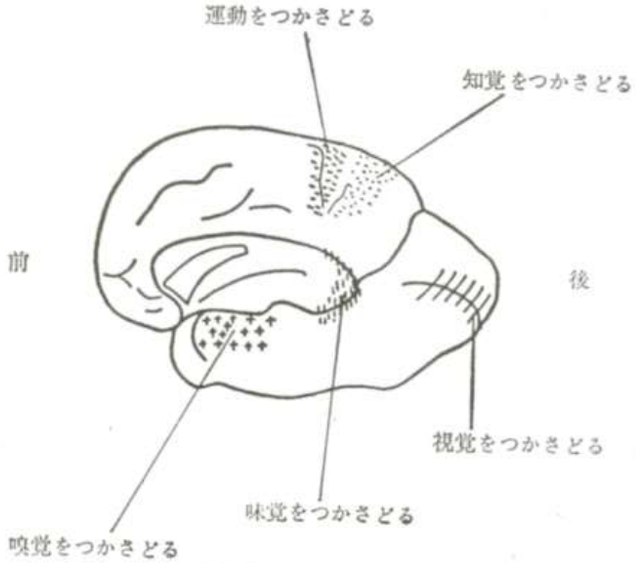
一つの目的に対して努力する一念力は、眠っている感応力を呼び起こし、大自然の法則を捕えて、あるいは理論的に、あるいは物質化に、発明発見という結果が生ずるのであります。

私達生命体は大自然の生命本体に通じる強い発信機と受信機を本能として与えられているのであります。又ラジオやテレビにおいて発信受信の電波が調和されている時は、脳の興奮状態と同じで、波動が最も大きいときであります。

調和されない原因は物質経済が一つの抵抗となり、自己保存、自我我欲に因って一時閉されているのであり、自己反省がたりないのです。

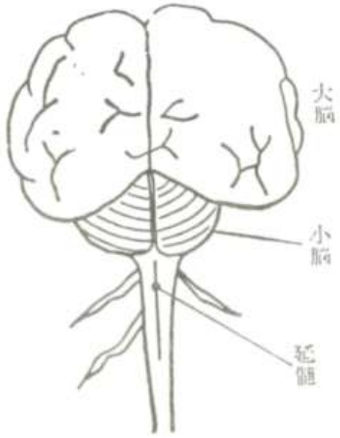
心の安らぎの波動は、正しい真理を得て神の光による保護を受けるのであります。私達の意識は、





（自分の意識によって脳が働く）

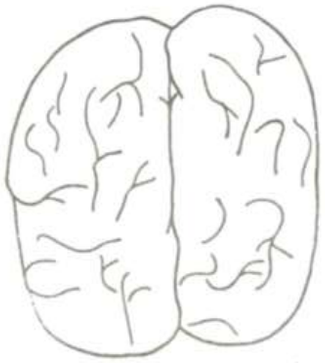
大脳の感覚　第23図



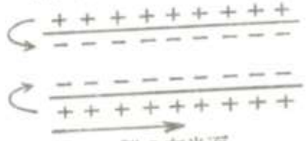
背中からみた脳と脊髄

大脳・中脳・小脳・間脳・延髄

第24図



神経せんいのまわりに(+)、内側に(−)の電気が帯電している。



脳の右半面

努力によって更に更に磨かれて、自分自体に感応力が与えられるのであります。

それは強固なる意思と実行力以外に一般の人々は会得することが出来ないのであります。

私達小宇宙体の構成は、大宇宙体の恒星群と同じように何兆億という細胞体の集りによって五体を形成し、諸器官によってエネルギーを吸収して肉体生命は保存されています。

エネルギー源である動物・植物・鉱物は、酵素・乳酸菌その他あらゆる細菌によって分解され、各諸器官で精成されて各機能に供給されているのであります。

このように小宇宙体の中で生命活動をしている細菌から見ますと何という広大な宇宙であろうかと驚嘆しているに違いありません。

私達の生命即ち意識はこの小宇宙体の支配者であります。

私達は自分の意思によって五体を自由自在に動かすことが出来るのであります。

正しい心、即ち意識による想念のエネルギーで支配されている五体は病魔によって侵かされることはありません。

病気の根元は八〇%以上正しい想念の光のエネルギーによって防ぐことが出来るのであります。

真の悟りの根源は頭で悟るのではありません。自分の意識即ち心で悟らなくてはならないのであります。

暗い想念の集積は自分の使命を悟ることが出来ず、意思は硬い石と化し、正法を悟ることが出来ないのです。

自我・我欲・対立・誹謗が暗い想念の根本になるのであります。その暗い想念は反作用となり、病難・苦難の原因となるのです。

意思は石と化してはいけない。人間は肉体を持っているのですから疑問が生ずることはあたりまえであります。

疑問は真理に近付く為の道程であり、疑問に対する解答の循環は真理に通ずるものであります。

意思は総て正しい目的に対し柔軟でなくては自在を失い、石のような意思は自我と化すもので、真

理を悟ることは出来ないのであります。

私達の意識の中には小宇宙の幽界・地獄・極楽・霊界・神界・菩薩界の区分があるのであります。

幽界には地獄・極楽があり、人の心は一秒一秒の中に意識界の姿が変るものです。

人生航路の盛衰の波動も、自分自体の意識の調和の段階によって定まって来るのであります。

現象界の姿は自分自体が演出している活動写真であります。

人間は誰しも生命の流転において仏心を持っているのです。

過去世において皆学んで来たのであります。

現象界における私達の意識は、殆んどの人々は10%位しか意識が表面に出ていないのです。

そのため、九〇%は意識の裏面に秘められているのであります。

秘められた意識は自からの正しい正法を自覚することにより、表面意識が増加され、悟りを開く道が出来るのであります。

地球は大宇宙体の細胞であり、太陽系も細胞体の集団であります。

大宇宙体の意識こそ大神霊生命の根元であります。大神霊こそ大宇宙の支配者であります。

太陽界は大神霊生命本体の分神であり、私達の地球もまた分神によって治められているのです。私達の来世は四次元以降の生命界に循環され、90%の表面意識と10%の潜在の意識界となるのであります。

悟れない生命は、自分自体の人生航路における意識を、寸分も間違いなく記録された過去帳によって、自分の罪を償うために、ある者は地獄界に、また、正しく生きた生命は悟って極楽界で更に魂を磨くのです。

地獄界の生命はその苦行に耐えかねて現象界の人々の黒い想念の集積所である肉体に自分の住所を移し、苦から逃がれようとするのであります。

このような霊が入った人は不幸にあえぐのであり、苦難な人生を送るのであります。

しかし、自分の意識即ち心の中に正法を得た正しい想念は、光のエネルギーとなって神（仏）に通じ自分自身の心身を神の光によって包つまれ防止することが出来るのであります。

迷える霊魂には正法を悟し成佛させ、自分から離れて頂くことです。

物質文明の現代社会において、そんなことがあるものかと一笑に付すとしたならば、その人は大きな誤りを犯しているのであります。

一笑に伏している貴方達の意識、即ち生命が、一念力の正しい目的に対し、考えるエネルギーが作用し物質文明を、築いて来たのです。しかし已れの本性を忘れて、自我の塊りとなれば、物質至上主義は破壊を呼びます。

唯物論者は対立を起こし、独占資本家は大自然界の神から与えられている、万物を独占しようとして対立を呼ぶのであります。

太陽の熱光のエネルギーは、万物に平等であります。神は人々を差別しないのです。各個人の意識が真の正法に目覚めれば誰も幸福になれるのであります。

物質偏重主義者同志は人を信ずることが出来ず、今日の友は明日の敵、人民の敵、裏切り者と誹謗されて自分自身の自由がなく、心の安らぎを得ることが出来ないのであります。

誹謗する人もまたいつの日か自分自体がその姿に変ることを忘れてはならない。また、一部の既成宗教の中にも他宗を誹謗し、対立を造っている信者が多いのですが、これは真の真の正法を曲解しているのであります。

そのために真から心の安らぎを得ず、自ら闘争という暗い想念の魔に恐れ戦くのであり、真の正法は対立がなく自分自身の想念が自分の意識の中にある神界、菩薩界の神意を悟り、大宇宙の根本の神・如来・菩薩の意識と調和した時こそ、自分自身の安らぎを感ずるのであります。

私達個人個人の意識の中にある仏心を開き、宇宙の生命と調和しなくてはなりません。

物質と生命の一体化こそ真の調和された社会が訪れて来るのです。

理由の如何に拘わらず今や私達は悟らなくてはなりません。悟らなくては破壊であります。

全世界の衆生よ、目を開いて自らを反省し、人類の生れて来た使命を悟らなくてはなりません。

対立は争を呼び、争は破壊を呼ぶのであります。神（仏）の存在は最早否定出来ません。

私達は神（仏）の子として、生命の永遠を悟り、最も、人生航路の修行を、人間らしく生活して、来世に、循環して行く、生命として、修行せねばなりません。今や大自然生命と私達は調和する時が来たのです。

調和しなくてはならないのであります。

第三編　現象論

第一章　人生航路の波動

（1）人類の歴史と波動

私達は、何の目的で、この世に生れて来たのであろうか。歴史的に考えて見よう。

古代人は、原始共産社会を営んでいたのである。それは、天変地変から、また外敵から部族を守る為に、個々の力ではどうすることも出来ない環境であった。一族の集団が、殖えるに従って不平不満が募り、闘争の第一歩が始ったのであります。智力と腕力の強い者が支配者となり、この様な環境においても、まだ共存共栄的な生活は続けられていたのであります。

平和の楽園も、他の部族によって侵され、他の部族との戦によって、敗者は支配され、部族は権力を持った、豪族によって統一されて行ったのであります。

豪族は一族を守る為に、武力を生み、武力は武将を生み、原始共産制体は、武将の権力によって崩壊し、遂に、封建社会の出現となったのであります。古代人は天候の変化や、天変、地変、外敵、その他の生活に対して、本能的予知能力が強かったのであります。

人間性の発見は、宗教を生み、神意を悟る環境を、生みだしたのであります。人々の自覚によって、武力の力は、自己保存と、自我我欲の心が、自から破滅を呼び、科学的集団は国家を形成し、学問は更に深く、物質文明の進歩は続き、戦争は拡大されて、国家間の問題に発展し、経済物質戦争へと、変って行くのであります。

宗教も、哲学も、また人として為すべき真理も、解明されているにも拘わらず、幾度かの争いを、繰り返さなくてはならないのであります。ある時は、宗教戦争に、ある時は、経済戦争、更に、集団化されて、思想戦争へと進んで行くのであります。科学兵器は、大きな犠牲者を出し、人種的偏見も、思想的経済戦争も、やがては人間一人一人が自覚して、戦争の無益を悟るようになるのであります。

物質文明の向上に従って、政治経済、人間性の向上、即ち、精神文明が確立されてこそ、平和な社会が建設されて行くのであります。

一時の争いが生じても、人間は理性を持って、新しい経済機構の中で、共存共栄、原始共産制体より、更に、次元の高い、個人個人の人間としての使命に生きる、真の共存共栄の社会が、完成されるでありましょう。マルクスの共産主義は、地上より亡び、唯物論は、人心を離れ、独裁者の犠牲にならない、真の光明に満ちた、地上極楽界が生れる時が、来ているのであります。二十一世紀の中期から、二十二世紀には神意が実現されて行くのであります。

自覚された、人間一人一人の力によって、築き上げられて、行くのであります。

肉体は進化し、私達の生命即ち魂も、転生輪廻の法則に従って、肉体という舟に乗り、魂は磨かれて来たのであります。

小さな波動から、大きな波動へ、歴史は変って行くのであります。

大自然における、現象界の輪廻は、一時も休むことなく、過去から現在、現在から未来へと循環されて、行くのであります。

過去に説いた聖人の教えも、総て真理であり、あらゆる人生航路の試練の中に、自らを悟り、魂は、進化されて行くのであります。

現代の肉体に宿った生命は、その時代の同級生であり、総て経験して来た過去世の実在を、現象界に具現することが出来るのであります。それは、過去の約90％の潜在意識である。

物質と生命の一体を知り、地上界の極楽浄土が建設されて行くのであります。

それまでには、幾度かの天変地変を経て、真の人のみが現象界に生存することが、許されるのであります。

精神・物質両文明発達の推移は、地磁気の波動と、太陽の熱・光の波動が調和している場所に、影響されるものであります。

昔はエジプト文明も、インドおよびインカ文明も、現代緯度の南側に発達していたのであります。現代文明の中心は、アメリカのワシントン・東京・パリー・ローマ・北京・ロンドン・モスコーと北側に、文明発達が推移していることに、気がつくはずであります。それは、気象条件の寒暖に影響があるのであります。即ち、肉体条件と気象条件の波動が、調和している民族が、発展しているのであります。しかし、人心は、物質偏重主義に陥り、唯物的思想が、人間本来の霊性を失い、資本主義は大自然界の、万物を独占的支配に落し入れ、常に対立的闘争によって、平和な社会を、破壊に至らしむのであります。

人類は霊性に目覚めよ！　自然の姿に還るべし！　自由と平等、平和な楽園を、地上界に造らなくてはならない！

今や、現象界と実在界の謎が、解き明かされる時が、到来しているのであります。

科学は、生命の実在を証明し、地球外の惑星に、他の天体へと発展し、高等動物の存在を知り、真の人々は、無限の現象界へ発展して行くでありましょう。

物質偏重主義の愚かさを、人々は悟るのであります。

（2）　人生の指針と波動

私達は、万物の霊長として、大自然生命本体大神霊（仏）の子として、肉体生命を持ち、その、慈悲の中で、生存しているのであります。

それは、現象界の万物を人類に貸し与え、人類は預っている万物を、支配しているのであります。

勿論国家の独占物でもなく、個人の独占物でもない、神と表裏一体である実在界の、光の大指導霊が魂修行のために、私達に与えているのであります。

独占の、自我我欲が争を呼ぶのであり、争は破壊であります。

私達は、神の子として、万物に感謝し、大神霊即ち仏に対し、報恩の精神で応えなくてはならない。過去世において、修練を積んで来た生命が、再び現世において修行のため、肉体に宿ったのであります。報恩の形式は、宗教団体のみが実現するのではなく、宇宙即我れ、即ち、自分自体が具現しなくてはならない。

正しい真の正法による一念のエネルギーは、神（仏）の意識に調和し、心身の安らぎが与えられ、霊感によって自分自体の指針を、自覚することが出来るのであります。

想念の正しい冥想は、神（仏）の光によって保護され、魔の入る隙間が、無くなって、しまうのであります。しかし、私達は全知全能ではありません。

悩みは、山積しているのであります。それは魂の修業のため約10％の表面意識によって、生活しているからであります。その抵抗は、

過去世における生命が、殆んど、自分自身の指針を意識しているのでありますが、生命（魂）が肉体の舟に乗って、人生航路の、波浪を乗越え、修養に向うため、五官に作用され、自己保存、自我我欲、魔によって自らを、苦難に陥しこむのであります。

類は類を呼び、友は友を呼ぶ法則の如く、自分自身が、総て定めているのであります。

一旦、人生航路の暗闇に堕ち込むと、自分の本性を見失うのであります。

また、過去世における「業（かるま）」によって、魂修練の苦行が、定められている人々もあるのであります。如何なる苦楽も、過去世の約束であると、自分自身が悟り、反省の日々を送り、一念力の努力と、実行で体当りすることが出来たなら、総て、自分の未来は解明されるのであります。

運命という言葉は、過去には存在しても、将来には、正法を得れば空であります。

大自然の理法を悟って、自分の使命を知り、慈悲と愛の調和を作り、自由自在に活動することが、出来るのであります。

しかるに、中々肉体的条件が、自由自在に制約を受けるのであります。

それは、大自然界との調和に至らないからであります。

私達の指導霊によって、教えられた、人生航路の流転における、盛衰の波動について、次章から述べて見ることにします。

（3）大自然と人生航路

船舶は、海洋航海に対し、あらゆる諸条件について、研究されて来ました。

針路を定める羅針盤・緯度計・速度計・海流・気象・航路の海図等に関し、私達の頭脳が、物質化た必需品であります。

この必需品も、私達の必要に迫られ、安全航海の目的を達するため、研究者の一念力が、大自然の真理法則に適応して、物質化した、神意以外にないのであります。

更に、レーダーも、私達の脳内には既に与えられている本能を、物質化したに過ぎないのであります。勿論眠っている本能を、物質化されるのであるから、その研究努力は、それに匹敵する以上の、波動が真理に調和されなくてはならないのであります。

船舶の装備品が、如何に優秀であろうとも、それを動かす指令、最終的責任者は、如何に自動化した船舶も、操作の意思は、人間以外にはできないのであります。

渡り鳥は、何千キロの海や山を越えて、目的地に到着します。私達は、大空に揚がれば、方向を誤・

ります。しかし、考える力があります。鳥は神の保護を受けて、目的に応じた、本能を与えられているのであります。

生物総てが、環境に適応され、大神霊(仏)の慈悲なくして、一秒たりとも、生存は不可能であります。

如何なる生物も、大自然界に目的を持って、生命活動を続けているのであります。

私達は、人生航路の波浪を、具体的に知ることも必要であります。それは、大自然界の循環や、その他の事象と、非常に関連している問題を、観察することにより、私達の未来に起こり得る、現象の近似値を見出すことが出来ると思います。

第二章　人生航路波動の原理

大自然界における諸現象は、規則正しく、循環の法則に従って存在しているのであります。

私達に直接関係のある、太陽・月・地球も、莫大なエネルギーによって、太陽は太陽の黄道を、地球は太陽を中心にした、一定の軌道を、月は地球の軌道を自転公転して、運動を続けているのであります。この原因によって、地球上の波動が、大洋の干満潮として、起こるのです。

太陽の光も、熱も、電磁波、音、総て波動によって、永遠の運動を続けているのであります。

地球の四季「春夏秋冬」も、小宇宙である私達の、人生航路における盛衰も、大自然の諸現象を無視することは出来ません。何故ならば、私達は細胞体の集りによって、諸器官が造られ、五体を形成しているのであります。

この五体は、自分自身の意思によって、吸収した動物・植物・鉱物の原料を何億何千万かのバクテリア・酵素の働きによって、細胞分裂を助けているのであります。

血液の循環も、消化器の諸器官も、大自然と変る所がありません。

血液の細胞は、私達の、肉体宇宙の中において、安定しているのであり「バクテリア」から見れば私達の体内は、彼等の偉大な宇宙なのであります。私達の、生命意識は、この五体の支配者であります。この支配者は、五体を自由自在に動かすことが、出来るのであります。

しかし、この五体も、地球という大宇宙体の一つの細胞の中で、生存を続けているのであります。大自然界は神体であり、この神体は神意によって、支配しているものであり、この支配者こそ、大自然生命本体大神霊(仏)であります。大宇宙・小宇宙は、一定の波動によって、連動されているのであります。そのために、人生航路の波動も大自然の波動を、組み合せることによって、将来起こり得る、現象をある程度見通すことが、出来るはずであります。

自分自身以外、総てを不必要であると思うなら、生命活動は出来ません。

先ず太陽の熱・光を停止されたら、万物生命の細胞活動は止り、現世に、生存することは不可能であります。大自然界の万物があり、相互作用が、働くから安定しているのであります。

これより、具体的に大自然と私達の相似点を組み合せて、人生航路の波動を研究し、羅針盤を造り出して見ましょう。

その、一番の鍵は、私達と自然を知るために、大自然三体現象を考えて見ることであり、それは、大自然の法則であります。

いかに、三体現象を知ろうとも、自分自身の意識（心）が、正法を悟らなくては、幸福になれません。正法を悟れば、現象は人生航路の参考としてのみ、通ずることを悟らなくてはなりません。正法は、日常生活における、努力が一番重要であります。

（1）　大自然の三体現象

大自然界における、万物の現象を、大別すると殆んど三組に分類されます。

この三組、即ち三体が、複雑多岐な現象や、変化を造って、万物を安定した姿に、置き変えているのであります。

その姿を幾つか考えて見ましょう。

1　太陽系の三体

宇宙空間に、熱と光のエネルギーを供給したり、地球と他の惑星に対し、等速運動を与えている太陽と、地球の衛星である月とは、地球の磁場内に生存している、私達や他の生物にとって、大変深い関係を持っていることは、申すまでもありません。

動物・植物・鉱物の三体は、熱・光の合成により、有機物や無機物に変化を与え、私達人類や、その他生物の生命保存に、深い相互関係を持っているのであります。

私達の、肉体生命を保存することが出来るのも、太陽・月・地球の三体が成因となっています。

あらゆる現象界の三体を、陽性・中性・陰性に区分して、考えて見ますと次のようになります。

(A)　「陽性」

太陽は熱・光のエネルギー源であると同時に、地球や他の惑星に対して、自転公転のエネルギーを与えております。

この大自然の姿を、陽性と考えられます。

(B)　「中性」

地球は月を衛星として、太陽のエネルギーと、地球自体のエネルギーによって、生物生存の環境を与えております。

気温を始め、あらゆる環境が、地球上に住む生物の生存に、適合しており、太陽と月の中間的相互関係にありますので、これを中性と考えます。

(C)　「陰性」

月は地球の引力と、太陽のエネルギーによって、安定した運動を続けております。

大洋が満潮、干潮の現象を起こしたり、私達の生と死や、女性の生理的現象に、周期的な相互関係を与えています。

この大自然の姿を、陰性と考えることが出来ます。

大自然界は、陰陽中間的因子によって、安定しており、中性的環境においてこそ、生物の生存が可能であります。

陽性である太陽は、熱エネルギーに因って、私達の肉体生命細胞の保存を可能にして、地球、月とともに、陰中陽、相互関係があってこそ、万物に安定な、環境を与えているのであります。

2　地球の三圏

地球を大別すると、気圏・水圏・岩圏の三圏によって構成され、生物生存の環境に適合した、光と熱のエネルギーを吸収しています。

(A)　気圏

地球は、大気と呼ばれる、厚い空気の層で包まれています。地表から、平均一一キロ付近までは、対流圏と呼ばれている大気圏であり、高さに従って、気温は下るのであります。

高気圧、低気圧、雲等が地球上に、色々な気象現象を起こすのであります。

この、対流圏の上、約五〇キロまでは、成層圏と呼ばれています。

この、成層圏は高さに関係なく、温度は一定しており、最も安定している層であります。

成層圏の上八〇キロメートルまでは、中間層と呼ばれる所であります。

この、中間層の五〇キロメートル付近は、かなり高温で、地表の気温とほぼ同じであります。

六〇キロメートル以上から、気温は除々に下って行くのであります。

八〇キロメートル以上は、電離層と呼ばれ、気温は次第に上昇して行きます。

その原因は、太陽から輻射して来る紫外線やX線を吸収して、そのため、空気分子が分離して、電子が出来るからであります。

気圏の下部層の大気は、化学的に窒素と酸素を主成分とする、混合気体で、少量のアルゴン・炭酸ガス・水蒸気を含んでおります。

酸素は、動植物の生存に、欠くことの出来ない元素であります。

水蒸気は場所によって、異っているのですが、気象現象に、深い関係があります。

また、気象現象である、雷に因って出来るオゾンや窒素は、植物に対して、成長のエネルギーを供給しているのであります。

地上より、一千キロメートル位までの気圏は、これらの上層気圏によって、太陽の強い紫外線や宇宙線、流星塵の大部分をさえぎっているため、生物の生存を保護しているのであります。

(B)　水　圏

地球の表面は、七一%が海洋および陸地内の、河・川・湖・沼であり、これらを含めて水圏と呼ばれているのであります。

海洋は、太陽のエネルギーを貯えて、それを地球上に広く、慈雨の分配をする作用を果しているのであります。

そのために、海洋は各地の気象や気候に深い関係があり、水は蒸発して水蒸気となり、岩圏に入って雨や雪等になって再び水圏に戻り、循環を続けているのであります。

(C)　岩　圏

地球は固体であり、その構成物は、岩石から成っています。この部分を岩圏というのであります。

この岩圏には、色々な種類がありますが、その成因から分類すると、次のようになります。

(1)　火成岩

(2)　水成岩（堆石岩）

(3)　変成岩

以上の三種類に大別されるのであります。水成岩は、地表の七五%を覆っていますが、岩圏を地下一六キロメートルまでとすると、全質量の九五%は、火成岩となります。

また、科学的にその主成分を見ますと、酸素が四六・七%、珪素二七%、アルミニウム八・一%、鉄五%、カルシウム三・六%、ナトリウム二・七%、カリウム二・六%、マグネシウム二・一%等八元素となっているのであります。

鉱物は、岩圏全体としては、比較的少量であります。このように気圏・水圏・岩圏の三体に分類され、水圏も硬水・中性・軟水に分類され、更に酸性・中性・塩基性の三性に分けられるのであります。

岩圏も火成・水成・変成の三岩に大別されているように、三という変化は、私達の環境に、色々な変化と、現象に関係深いことに気が付くことでありましょう。

地球の内部について考えると、古くは、紀元前六二四年から五四五年頃、ギリシャの哲学者ターレスによると、「地球上の万物は、水から出来、水に還える」と考えていました。またピタゴラス学派や一部の宗教学者は、地球上の総ては「地水火風」の四元素の種々の割合によって、造られていると唱えていたのであります。

しかし、地球の、構成物質についての古代人の考え方は、科学の急速な進歩によって、十七世紀以後は、全く姿を消して、仕舞ったのであります。

地球表面における、岩石の比重は、殆んど平均二・七グラムでありますが、地球全体の比重は五・五グラムであります。

これから見ても、地球内部の比重は、かなり大きな物質から出来ています。

隕石の成分は、超塩基性岩と呼ばれて、深成岩の成分に似ており、隕石は鉄とニッケルが主成分で、鉄九%にニッケル八・二%程度の割合であります。

若し、隕石が、他の天体の外側の部分で、隕鉄が、内部の破片と考えると、地球の内部は、比重の重い物質であるという符合が一致します。

地質・岩石・隕石・隕鉄・地震波等の研究を始め、天体としての、地球の運動・重力・地磁気・火山活動等の研究結果から、地球内部の構成物質を考えると、地殻の上部は花崗岩、下部は玄武岩から成っており、平均比重は二・七乃至二・九程度であります。

地殻の、上部を化学的に見ると、アルミニウム・ナトリウム・カリウムが多く、下部はカルシウム・マグネシウム・鉄が多く、カルシウム・マグネシウム・鉄のように重い比重の物質の上に、軽い物質があって、地殻の均衡が、保たれているのであります。

私達の、肉体が、骨格と柔らかい肉体細胞が組み合って、安定されているのと同じであります。

地球の中間層は、比重三・四乃至五・五グラムの鉄や、マグネシウムに富んだ、超塩基性岩から成っていると考えられます。

地球の核、全部は液体でなく、中心部は固体であるという、科学説が有力であります。

中間層、は地球全体の八二％余りで、全質量の約六八％を占め、核の体積は、一六・二％、質量は、約三一・五％を占めています。

地下の温度は、地表の温度に余り影響されません。逆に地球全体の熱伝導は、地下から地表に供給されていて、その熱量は、一秒間に約六兆カロリーと計算され、地球が太陽から与えられている熱量の、約二五〇〇分の一に当ります。

日本だけで見ると、約七〇億カロリーの熱が、地球の内部から放出されていると算定せられ、石炭を、一秒に約五〇〇〇トン燃焼している熱量に相当します。

私達も、太陽の熱・光のエネルギーを、体内外に受けていますが、体温は、自分自身の内部から発生している熱エネルギーであります。

地球も、大自然の法則通りの仕組みによって、構成されていることが分ります。

3　固体・液体・気体の三体

固体は、一定の形態を保ち、それを変形しようとする外力に対して、抵抗を有する特性を持っています。それは、気体や液体に比べて、引力が遙かに大きいためであります。

液体は、一定の形を保有しないのであります。また、温度や圧力の変化に伴う、体積変化が小さい。体積変化が小さいことは、分子相互の距離が、極めて小さいためであります。この事は、摂氏百度の水を同じ百度の水蒸気にする時、その体積が約千七百倍となる事実を見ても、よく分るのであります。気体は、非常に大きい圧縮率を持っています。

常に与えられた空間に充満しているのである。その性質は何れの部分を取っても同一であります。

他の、気体の充満する器の中に、押し込めれば、良くそれと均一に混合する性質を持っています。

物質によっては、固体・液体・気体に変化するものもあります。

例えば、氷点下の水は凍って、固体となり、温度上昇に従って液体に循環し、温度を沸点まで上昇すると水蒸気となって気体となり、冷却されると再び、水に循環されるのであります。

このように液体は、物理的化学的変化を与えることにより固体にも気体にも変化するのであります。

これらの三体を大自然の陰中陽に代入すると、

(A)　陽性は　固体

(B)　中性は　液体

(ハ)　陰性は　気体

となります。液体は固体にもなり、気体にも変化する中間的な物質であるから中性と定めたのであります。

固体は、目で見ることが出来、また、分子間の引力が液体・気体と比べて遙かに強い集団で構成されており、陽性的性格を持っております。

気体は、分子が個々の運動をしている集団であり、一つの気体を目視することが、非常に難しいのであります。

この気体も、周囲の温度の冷却・気圧の変化によっては液体となり、更に固体的変化を生ずる性格を持っており、固体・液体・気体は循環の法則を、具体的に示す良い実例であります。

この三体現象から気体は陰性的性格を持っているので、陰性と考えたのであります。

4　液体の三性

液体は、一般的性質として温度・圧力等の変化によって固体化したり、気化する性質を持っているので中性と定めたのでありますが、この中性的液体も化学的性質で分類すると、酸性の強い液体・塩分の強い液体に分けると酸性・中性・塩基性の三性になります。

(イ)　陽性は　酸性液体

(ロ)　中性は　中性液体

(ハ)　陰性は　塩基性液体

5　波動

静かな、水面に石を落すときは、その点より輪状の波紋が四方に伝播します。

これは水波であります。

この時、水面に浮ぶ物は単に振動するのみで、波と共に進行はしない。振動のエネルギーのみ進行します。

波の進行方向に相隣れる点は、次々遅れた状態にある。弾性物質の一部に振動を与える場合にも、波の有様は四方に伝播するのであります。このような現象を波動と言います。

波動を伝播する物を媒質と言います。

音波・光波・電磁波等も波動の一種であり、空気は音波の媒質であります。

私達が、日常使用している電球に交流の電気を流す時、五〇サイクル又は六〇サイクルの波動によって、一秒間に点滅回数が五〇又は六〇回行われているのであります。

私達の眼は、残像という現象によって、前の光が残っているために、連続点灯されているような錯覚を起こしているのであります。

光の直進及び逆進と、光の反射及び屈折の法則を基礎として、単に光の伝播に関する幾何学的現象を取扱う光学を幾何光学といい、光を、波動として取扱うものを物理光学又は波動光学といっています。

私達の、生命現象も総て、波動によって続けられているのであります。

光も私達の視覚と調和されなくては、物を見ることも出来ません。即ち、光と私達の視覚の波動が調和されてこそ安定しているのであります。

耳もまた、聴覚と音波の調和によって事象を判断することが出来るのであり、私達の、諸器官の作用は、総ての波動が調和されて完全であります。

今物理的・幾何学的に光の性格を説明せず、波動と生命の関係について説明したのであります。

6　光の三原色

互に、余色をなす二種の色の光を混ぜると白色が得られます。

また、赤・緑・藍の三色を適当の割合にして一個所に集めても矢張り白色が得られます。

光の三原色の内、赤と緑を混ぜると、赤の余色である紅が得られます。このように、光も三種に分けられます。

(イ)　陽性は　赤色

(ロ)　中性は　緑色

(ハ)　陰性は　藍色

7　色の三原色

絵具の色は、光と異り、色光を出している場合は殆んどないのであります。

ある色の絵具に含まれている白色の部分には、光を吸収して、その他の色の光を反射して出す為に、生ずるものがあります。

即ち吸収する色の光の余色を呈する。従って絵具の混合によって得られる、色は光の場合と違うのであります。

例えば、黄色と青の光は余色に近いから、これらを混ぜると、白っぽい色が得られるのであるが、絵具の黄色と青を混ぜると緑色になります。

それは、一般的に黄色の絵具は青・藍・黄の光を吸収し、青色の絵具は赤・橙・黄の光を吸収するので、二つを混ぜるとどちらにも吸収されない緑を反射するからであります。

青・紅・黄の三色の絵具を、適当の割合に混ぜると任意の色が得られるから、これを色の三原色というのであります。

この三原色は光の三原色、赤・緑・藍とは違います。

絵具の三原色の、二つ、例えば、青と紅を混ぜると、他の一つの黄色の余色である藍が得られるの

であります。

これは光の三原色の一つであります。

また、紅と黄を混ぜると、赤が得られ、黄と青を混ぜると緑が得られます。

このことから、絵具の原色は、丁度それぞれ光の三原色の余色になっているのであります。

(イ)　陽性は　紅色

(ロ)　中性は　黄色

(ハ)　陰性は　青色

紅色は暖さを感じ、炎のように陽性であり、黄色は中間色であり中性、青色は冷たさ、清浄さを感ずるので陰性と考えられます。

8　原子の三性

物質は、分子から構成され、分子は、数個の原子から成立っています。

この原子は陽電子と中性子から成る原子核と、その周囲を回転する陰外電子から成っているのであります。

電子の、質量は極めて小さく、水素原子の質量等は一八〇〇分の一に過ぎません。

この電子は、陽電子を持った原子核との間の、引力に因って、その周囲に拘束され、安定な軌道を

運動しているのであります。

このような電子を束縛電子または軌道電子と言います。

陽電子から、陰外電子にエネルギーが流れると中性子は陽電子に変り、陰外電子に作用し、核と陰外電子が、調和されているときは安定しているのであります。

原子の直径は約10^{-8}センチ程度であり、一五ミリの飴玉を地球の表面に伸ばして約ピンポン玉位の大きさのものが原子の大きさであります。

(イ)　陰性は　陰外電子

(ロ)　中性は　中性子

(ハ)　陽性は　陽電子

太陽系の惑星と同じように、原子核を中心に陰外電子が運動を続けており、エネルギーをはらんでいるのであります。

9　電気の三性

三相交流の場合、電気の流れは陽性(+)より陰性(−)に流れ、各相の中間は地中にアースされています。

陰性・中性・陽性の極によって回路が成り立っています。

（＋）（N）（－）の相も三性であります。

(イ)　陽性は　（＋）

(ロ)　中性は　（N）

(ハ)　陰性は　（－）

大自然界の、三体現象と同じように、電力も三性を持っており、電動機は三相電力を使っています。

10　細胞の三体

物質は、原子から出来ているように、生物は生活体の最小単位である細胞から出来ているのであり、細胞は原子から出来ているのであります。

細胞を大別すると動物の場合

(イ)　原形質

(ロ)　細胞質

(ハ)　核

の三体に分類されます。

細胞質は更に一個の核があってその周囲には、ミトコンドリア・中心体・コルジ体、脂肪粒があり

ます。

ゾウリ虫・アメーバー等の原生動物や藻類のうち、クロレラ・ミカバキモ等は、体が一個の細胞から成っていたり、またある藻類は四個、八個の少数細胞から、成っているものもあります。しかし、一般の動物・植物は、多くの細胞の集りから出来ている組織や、器官が組み合わさって、一つの体を造っているのであります。

私達の、血球や生殖細胞の卵子や精子は遊離した、一個の細胞であります。

皮膚や筋肉は、沢山の細胞が集って出来ている組織であり、このような、組織が組み合って、いろいろな諸器官が出来ているのであります。

細胞の大きさは生物の種類によって異りますが、同じ生物でも、体の部分によってはその大きさが異っています。

私達の体を造っている細胞の中でも、卵細胞は直径二三〇ミクロンで、最も小さい細胞は六ミクロン位で、平均一七ミクロン位の大きさであります。

細胞の形は、卵細胞は球形、神経細胞は糸状、白血球の如きは無定形であり、いろいろな種類があります。

細胞は、生物や組織の種類によって色素体・液胞・中心体等があります。

それぞれの細胞は、特別な機能を持っており、細胞器官と呼ばれています。
ミトコンドリアの顆粒には、細胞が呼吸するのに必要な酵素があり、細胞が生活に使う、エネルギーを生み出しているのであります。
細胞は、その分裂によって一個より二個又はそれ以上の細胞になり、細胞の分裂は、一般に核分裂から始ります。
生物は受精した、卵細胞から始って、一生を終るまでの間、常に体の何処かで細胞分裂を続けて行き、細胞は、核が死ぬと総ての機能を停止してしまうのであります。
生物と物質の相違は、大自然のエネルギーを自分の意思によって吸収して成長するか、しないかであります。
物質は、物理的化学的外力によって、含有する相対的なエネルギーを出すことであります。
生命は、物質を支配しており、物質は、肉体・生命の保存上に欠くことの出来ないものであります。
生物も、物質も、共にエネルギーをはらんでおり、大自然界において循環し、生命も物質も、また、意識（心）即ち精神的作用も物質科学も根本は一体であります。

11　私達の三体

私達は大自然の中に生存し、時間と空間のある現世において、肉体的に生と死の循環を繰り返して

おります。物質は時間と空間に影響を受けるのでありますが、私達の生命は（意議）（魂）現世の時間・空間を超越して、転生輪廻の法則の中で生命（意識・魂）は保存されて行くのであります。
私達の、考える念力のエネルギーは、物を造り物質の如何なるエネルギーをも、支配することが出来る莫大なエネルギーであります。
即ち時間と空間の現世に影響されないので、
E＝8　エネルギーは無限大の大宇宙生命に調和することが出来るのであります。
物質の、エネルギーは相対性理論により現世の時間と空間及び、地球上の制約を受けて
$E=mc^2$であり、光の二乗で計算されるのであります。
私達の理性・品性・教養・徳を兼ね備えた、誠実な人間は総ての支配者であります。
私達を大別すると次のようになります。
(イ)　陽性　　肉体（原子細胞）
(ロ)　中性　　指導生命（意識は霊子）又（過去世の生命即ち守護・指導霊）潜在意識の90％
(ハ)　陰性　　生命（意識は霊子）（魂又は意識）表面意識の10％
この三性が調和してこそ、立派な人間として、社会の調和を実現することが出来るのであります。
肉体は両親の先天的・後天的因果の結晶体であり、現象界で人生航路の修行を目的として、与えら

れた生命の舟であり、生命流転の修行船であります。指導生命は守護・指導をする次元の異る霊人であり、現象界の師匠であります。

肉体は、現象界において生命を確認する代名詞であり、目視することが出来るものであるから陽性と考えられるのであります。

生命は、その人の意識（魂）智徳であり、肉体的現象によって示された、あらゆる業積であり、客観的な姿であり、陰性と考えられるのであります。

指導生命は、肉体生命の指導者であり、その人間の意思と大宇宙生命本体の意思を調和せしめるための霊人であり、右に片寄らず、左に片寄らない、真理を守る中道的生命であるから中性と考えることが、出来るのであります。

指導生命は、その人々の生命修養の段階によって、上段階の霊人から、下段階の霊人と、千差万別であります。（殆んど、自分の過去世の生命）

如何なる、諸問題に関しても、指導生命が決定を下すことは出来ないのであり、小宇宙生命即ち私達の魂の意思によって、総ての行動は決定されるのであります。守護、指導の霊人が決定することは出来ないのであります。

死後の世界においては

(イ)　陽性　生命（意識は霊子）潜在意識の約10％

(ロ)　中性　指導生命（意識は霊子）（過去世の意識の連帯者）表面意識の約90％

(ハ)　陰性　肉体（光子細胞）

生命は、意識界に入って、自分自体の表面意識が90％と潜在意識が10％見出すことが出来、陽性に変り、指導生命は現象界と変らない生命で中性と考えられます。

現象界の肉体は物質界におきさり、生命の流転に、持ち歩くことが出来ないのであります。

あの世の肉体は、自分の意識が支配する更に精妙な肉体を造り出すことが出来るのでありますが、光子細胞故に現象界においては、陰性と考えられます。

このように、私達はこの三体によって人格を形成し、過去世・現世・来世と循環が続けられて、行く小宇宙生命体なのであります。

12　三世の流転

生命の流転は永遠に続き極限が無いのであります。

大自然界における春夏秋冬のリズムも、昼夜のリズムも何万何千年と繰り返されて来たのであり、生命も滅することなく保存されて来たのであります。（生命論参照）

何万何千年の間には地磁気の波動により、幾多の天変地変を経て、現代文明が発達して来たのであ

ります。

歴史的にはエヂプト・インド・インカの全盛時代から、現代は東京・北京・パリー・ロンドン・モスクワ・ニウヨーク・ワシントンのように、文明の中心は北側に移って来たのであり、太陽と地球の関係に因って、気候の変化が人類の文明度に影響して来るのであります。

このような現象界における、私達は、偶然に生れて来たのではありません。

私達の生命は、人体に入る前から、魂の修業を積んでいるのであり、人体に入ると共に、過去の修業は意識の中に隠されて、五官の抵抗の中で、新たに魂を磨くため、現象界に生れて来たのであります。

人生航路を、肉体と共に航海し、苦楽の修行が続き、来世へと循環されて行くのであります。肉体とは異り魂の流転であります。

(イ)　過去世

(ロ)　現　世

(ハ)　来　世

総てが神の意思によって万物が使命を帯びて過去から現代え、現代から来世へと流転し進化を続けているのであります。

13　世界の人類

現象界に、生存している私達は、人種の差別なく平等に大自然の慈悲の中で、生活を営んでいるのであります。

然るに人類は、文明の尺度や経済的尺度、または皮膚の色によって、人間自身が不平等な差別意識を持ち、厳然と対立意識を造り出しているのであります。

神は平等に、現象界へ使命を与えて、生存を許しているのであります。

差別待遇の最も大きな問題は、人種問題であります。

この人種も大別すると、白色・黄色・黒色人種となりますが、知能・気質・性格のような精神的特徴の点で、人種間に差があるということは理論的には、証明されていないのであります。

また、異った人種間の混血、それ自体が、生物学的に悪い結果を生むという、正確な証拠がないのであります。

人種は生物学的に扱われるべきであります。

多くの人は人種という言葉を国籍、地域、宗教、言語等文化を等しくする人間を誤って、人種と呼んでいるのであります。

日本人は国籍を同じくする国民であり、ユダヤ人はユダヤ教徒であって、日本人もユダヤ人も人種とは言えないのであります。

人種に関する誤った考え方は、歴史的に見ても、恐しい闘争を繰り返して来たのであります。

このように、地球上の人種も、皮膚の色のみで白色・黄色・黒色の三人種に区別されても、人間的には相違がないのであります。自我我欲を捨て、同じ人間同志として平和な社会建設のため、専念することが神への報恩であり、宗教でも、思想でもない、人種でもない、神の子として、平等に生活をすること とであります。

大自然の三体現象を人心開発の根本として、過去の聖人君子は哲学的に真理を、解明して来たのであります。

「智・情・意」の真理も

「真・善・美」の真理の解明についても、「天・地・人」と自然の哲理を説いて来たのでありますが、時代の進歩と文明の変化によって「美・利・善」と、その説き方も変って来たのであります。

しかし、現代社会における真の幸福は、精神的・肉体的・経済的の三要素を充実することによって、得られるものであります。

それは真の正法による、自我我欲を捨て、徳を施し、万物を独占せず、他人に大善を尽すことこそ神への報恩の生活であります。

人類の幸福は、人類自身が分ち合うことにより平和があるのです。平和な生活は、理屈ではなく神

意であります。

大自然界は

「大宇宙生命と、私達生命の波動が調和されるには、正法を悟り、自分自身の一念力による実行努力が総てを解決する」

ということを教えているのであります。

エネルギーの恒存も、物質の質量不変説も、また生命不変の輪廻も、大自然の波動であります。

私達の、日常欠くことの出来ない数も、極大から極小まで限界なく組み立てられて行きます。

この数も、大自然の三体現象に代入して、見ますと波動の近似値を知ることが出来ます。

この数について考えて見ることにします。

14　数と波動

数は私達の日常生活から切り放すことは不可能であります。

計量・計測総て、日常に密着されており、生活の基準となっております。

万物の諸現象も数によって示され、私達は納得することが出来るのであります。

電子計算機も数の基本であります。

数も大自然の真理を教えており、不変妥当性であり、欠くことが出来ないのであります。

そのため、人類が何処に行っても、通用する唯一の通達法であります。

この数を、大自然の法則に代入して考えると、私達の波動がどのように変化して来るか、予測することが出来るのであります。

数の名称から説明することにします。

a　変化数

大自然界の万物は大別して三体三性に区分されますが、この三体三性は物理的・化学的・心理的・霊的にそれぞれが組み合って変化します。

そして相互関係も持っているのであります。

色の、三原色もこの組み合せによっては、何万色にも変えることが出来ます。

このように「3」の組み合せは、あらゆる諸現象によって変るので「変化数」と言います。

b　基本数

大自然は陰陽中間的因子によって安定を保っております。

この順位を1・2・3に分類し、万物の基準として考えたのであります。

陰性・中性・陽性の三性に数を代入すると、月は陰性で地球を中心に運動を続けており「1」のグループと考えます。

地球は太陽と月の中間的存在であります。気候や総ての、環境が地上界における生物生存に、慈悲を大自然が与えております。

中性と考えられ「2」のグループに定めます。

太陽はエネルギーの源であり、地球は太陽の惑星として、三番目に当る居住遊星であります。この太陽を陽性と考えます。

「3」は陽性のグループとして12との関係が、強い位置を占めているのであります。

1・2・3を基本数といいます。

c　根本数

数の基本数1・2・3を延長して行けば数は無限大に伸びて行きます。

どんな大きな桁の数も、単数の総和を出しますと一桁の数になります。

この一桁の数を根本数といいます。

1 2 3 4 5 6 7 8 9を根本といい、この組み合せによって電子計算機も出来ているのであります。

例

67→6+7=13=1+3=4 ……基本数

108→1+0×8=9 ……基本数

1960→1＋9＋6＝16＝1＋6＝7…根本数

太陽系の惑星は　　9星

人体の関節　　108＝9

如何なる三角形の角度の総和も

180度　9

如何なる四角形の角度の総和も

360度　9

如何なる円も　360度　9

根本数の最高は9であり、二桁以上の数はその数を逆にして引いた差の単数の和は9になります。

例

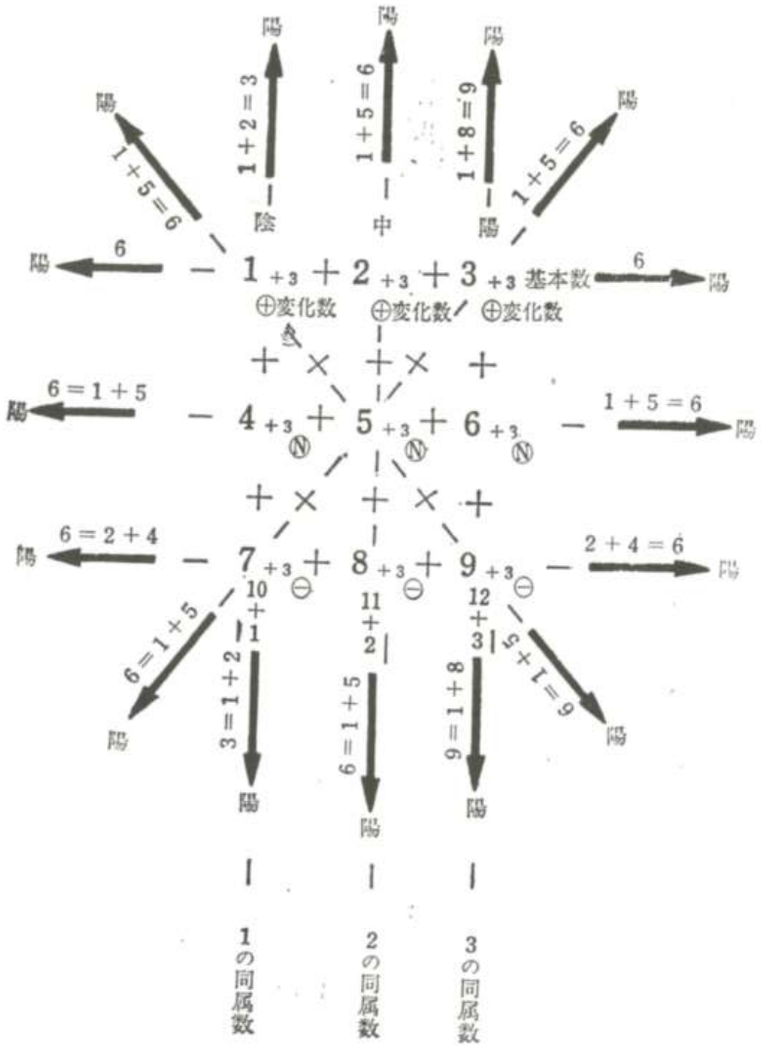
69
×
−96
27
＋
∨
9

561
−165
396
＋＋＋
∨
18
＋
∨
9

5691
−1965
3726
＋＋＋＋
∨
18
＋
∨
9

15　数の組み合せ

基本数1 2 3にそれぞれ変化数3を加算すると、1の組・2の組・3の組に分類され、この三組の各延長は無限になります。



三体現象に数を代入

第 25 図

基本数に、変化数を加算し、二桁の数を根本数に直すと基本数に循環することになります。

1の基本数に変化数3を加えると4になります。4の根本数に変化数3を加えると7になります。7の根本数に変化数3を加えると10になる。1＋0は1となり、根本数は基本数に循環します。

2の基本数に変化数3を加えても、また、3の基本数に変化数3を加えれば、根本数は基本数に還えることになります。

大自然界の輪廻と変る所がなく、この数の配列は、不変妥当性を持っております。

各数の配列の縦線・斜線・横線の総和の根本教は、総て陽性であり、大自然界の神より与えられた太陽エネルギーの源の姿であります。

私達の使用している電子計算機もこのような仕組みによって造られています。1の同属数は永遠に伸び続けます。

2の同属、3の同属もそれぞれ不変で循環をしているのであります。

16　数と大自然

大自然界の陰性・中性・陽性を基本数に当てはめると、陰性に属する「1」の系列を1の同属数と呼び、中性に属する「2」の系列を2の同属数、陽性に属する「3」の系列を3の同属数といいます。

陰性「1」の同属数は1(+)・4(N)・7(−)に分類されて陰性の性質を持っているのでありますが、その中には更に⊕(N)⊖の性質を含んでいるために記号を含めたのであります。

これは同属の数、即ち位置のエネルギーを考えますと当然波動の変化が生ずるはずであります。

中性「2」の同属数は、2(+)・5(N)・8(−)に分類されて、中性の性質を持っており、同属2は中性のなかに(+)を含んでおり、5は(N)を、8は中性のなかに(−)分を含んでいます。

このように同属数の中にも位置のエネルギーの差があり、中性分の強いなかにも(+)(N)(−)の波動差があるのであります。

陽性「3」の同属数は、3(+)・6(N)・9(−)であり、陽性の性質を含んでおり、同属の中でも位置のエネルギー差があり、(+)(N)(−)の波動差があります。

このように、大自然界の中に太陽があり、更に地球が存在し、その衛星として月が運動を続けております。更に、地球の中にも分析すると陰性分・中性分・陽性分の含んだ種々雑多な物質が存在しているのであります。

また、物質界の一部を分析しても、矢張り陰中陽に分類することになるのであります。

当然、陰性分の中にも、更にその強弱即ち波動差の生ずることは、大自然の理法であり、仕組みであります。

17　生年月日の秘密

私達の、肉体は両親の先天的・後天的因果によって、母親の排卵と父親の精子の結合によって、神より生命を与えられ、胎児の第一歩が始まるのであります。

小宇宙である私達の春夏秋冬のスタートであります。受胎はその小宇宙の春であり、大自然界における、陽春の環境に若芽の出るが如く、生命の躍動が始まったのであります。

胎児は、母体のエネルギーを吸収して、細胞分裂を生じ、五体は形付けられ、大自然界の植物も、太陽のエネルギーを吸収するように、地中母体のエネルギーを吸収して、細胞分裂は活発化し、生長を続けて、行くのであります。

胎児も小宇宙の春は過ぎ、夏の季節に入って行き、受胎後六ケ月となり、五体の諸器官は完成されて行くのであります。

植物は、二酸化炭素と強い光のエネルギーによって澱粉・脂肪・蛋白質・その他の有機物質を造り出し、実りの秋を迎えるのであります。私達の生命も、このような、大自然の波動と調和しつつ、九ケ月目に胎児は母体より、現世に生れて来るのであります。

植物は秋の収穫時には、地中に果実と共に眠り、再び地上界に成育するリズムの到来を待ち、寒い冬を迎えるのであります。

乳児も、その生れた現世の位置は、冬のリズムで、自分自体の意思はない不自由な姿であり、生命保存に対して、最も不安なシーズンであります。

この現世に生れた位置は私達の人生航路波動の決定的瞬間であり、最も重要な意味を持っているのであります。

即ち生年月日の

生れた年は

その年の太陽の位置のエネルギーを示しています。

生れた月は

地球を中心に運動している、その月の位置のエネルギーを示しているのであります。

生れた日は

その日の地球の位置のエネルギーを示しているのであります。

大自然界と、私達はあらゆる関連によって結ばれているのであります。

今まで述べた三体性も私達の将来に起り得る現象の近似値を見付け出す為の説明であり、真理と科学との一致を見出す為なのであります。

私達の絶対位置生年月日と春夏秋冬の波動が組立てられて、人生航路の波動を見出すことが出来る

のであります。

私達はこの現象界で生存するのに、単独で生活して行くことは出来ないのです。

その為には、両親・兄弟・夫婦・更に事業所内の対人関係等、総てが、関連して来るものであり、自分自身の絶対位置と自分以外の絶対位置を総合して、人生航路の波動を知ることが出来るのであります。

しかし、如何なる人生航路の波動を自分自身が確認しても、自分自身の一念力による努力と実行力を無視してはならない。危い波動を知ったなら、自分の進路を誤らないように気を付けて進まなくてはならないのであります。

真暗な夜道を通る時、一寸先の障害も分らないと非常に危険であります。懐中電燈の発明により目前の障害物を確認して避けて通るようになったのです。

人生航路の波浪を無鉄砲に進むことは自滅であり、自ら困難を招来するようなものであります。

大自然の真理を悟れば、自らの肉体生命を神の光によって保護され、霊感によってあらゆる事象を未然に知ることが、出来るのであります。

しかし、肉体人間は五官の作用によって自然のリズムを外すことが多いのです。

その為には自分自身の日常生活を反省し、二度と間違いを繰り返さない、生活を続けて行くならば

人生航路を平穏無事に過すことが出来るのです。

私達の、日常生活を毎日記録しているならば、誰でも自分の波動を知ることが、出来るのであります。

その波動は自分自身の盛衰を示しており、将来起こり得る事象を知ることが出来るのであります。

必ず波動の過程において、原因は結果となって循環されて来るものです。

大自然の三体性変化を基本にした、波動の変化も前述と変る所がないのであります。

以降更に具体的に説明することにします。

第三章　波動の法則

私達の過去・現在・未来の盛衰を生年月日によって具体的に知り、人生航路を科学的に霊的に調整して行くことが幸福な人生を送る第一歩であります。

私達は生れながらにして、自分の生涯の波動を持っているのである。その波動は次の方法によって示されます。

法則(一)

生年月日の陰・中・陽

根本数を陽性・中性・陰性に区分して、太陽・月・地球の位置のエネルギーとして考え、循環して来る、その年月日のエネルギーの波動を比較対照して決定するのであります。

この組み合せをトランスのエネルギー方式に考えて見ると、生命力の波動が具体的に示されます。

私達の意識より与えられた考えるエネルギーは脳電流に関連しており、脳波という波動が生じるのであります。脳波は電気的現象であるし、考える時は一つの複雑なトランスと考えられます。

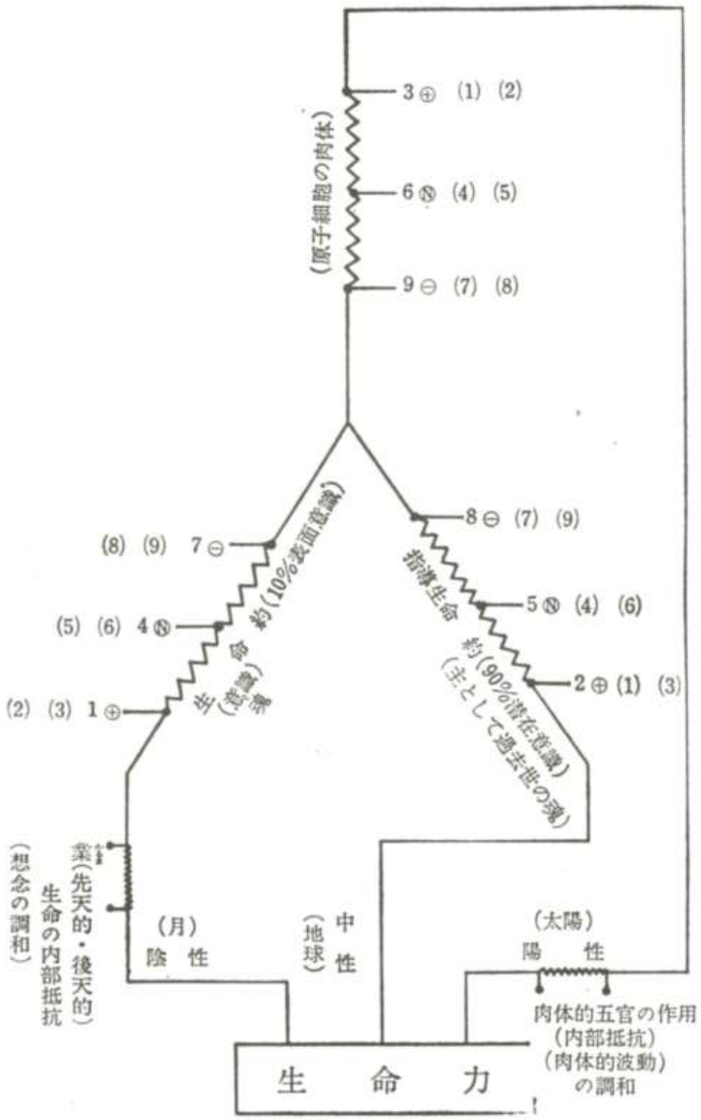
陰性	中性	陽性
1(+)	2(+)	3(+)
4(N)	5(N)	6(N)
7(−)	8(−)	9(−)

数の組合せ　第26図

生命の流転の経過に積み重ねた、過去世の業(かるま)、また、後天的の業(かるま)と肉体の持つ先天的、後天的因果による内部抵抗があるために、一〇〇%の生命力を発揮することが出来ないのであります。

この問題は前編を参考にして自分の波動を調和する以外にありません。

(一)　生れ年の根本数と陰・中・陽



生命・指導生命・肉体
第27図

世界各国の年号を一つに統一してその年の太陽の黄道のポンテンシャル・エネルギーを決定します。

明治・大正・昭和は次のようになります。（昭和・大正・明治は日本以外に通じません）

例一　昭和の基本数から(1)を引く

昭和21年は1を引く
（基本数）
2＋1＝3－(1)＝2　となる

昭和21年は西暦1946年である。

西暦1946年の基本数は1＋9＋4＋6＝20＝2＋0＝2　となる。

2は法則一によって中性㊥である。

昭和二一年は西暦一九四六年と同じ　2中性㊥という太陽の位置のエネルギーを持っていると定めます。

(A)　昭和は根本数から「1」を引く。

(B)　大正は根本数に「3」を加える。

(C)　明治は根本数に「4」を加える。

年代の根本数を右のように調整することによって西暦の根本数も日本の皇紀の根本数も全部同じ太陽の位置のエネルギーとなります。

	一月は1陰㈠	二月は2中㈠	三月は3陽㈠	四月は4陰(N)	五月は5中(N)	六月は6陽(N)	七月は7陰㈠	八月は8中㈠	九月は9陽㈠	十月は1陰㈠	十一月は2中㈠	十二月は3陽㈠
1		9	8		7	6	5		4	3		2
10		18	17		16	15	14		13	12		11
19		27	26		25	24	23		22	21		20
28									31	30		29
陰		陽	中		陰	陽	中		陰	陽		中
性		性	性		性	性	性		性	性		性
(+)		(−)	(−)		(−)	(N)	(N)		(N)	(+)		(+)

日の陰・中・陽

例2，3の陰・中・陽
第28図

㈡　生れ月の根本数と陰・中・陽生れ月の根本数はその時における月の位置のエネルギーと考えます。

例二

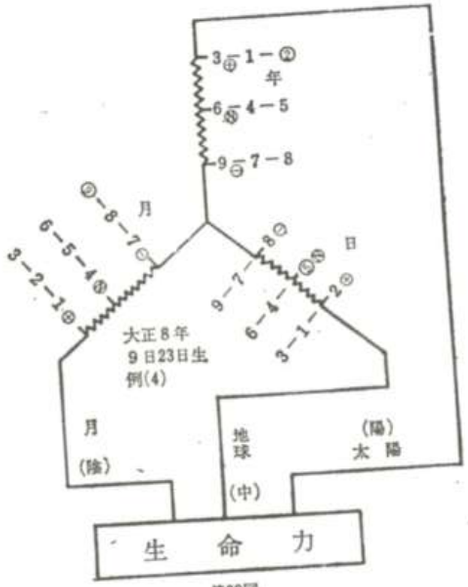
二月生れは2中㈠の月の位置と考えられます。

㈢　生れ日の根本数と陰・中・陽生れ日はその時の地球の位置のエネルギーと考えられます。

例三

二五日生れの地球の位置のエネルギーは　25＝2＋5＝7

7陰㈠の位置と考えられます。生れ日の陰・中・陽は次の様になります。



第29図

例四

大正八年九月二三日生の陰・中・陽

大正は数本数に3を加える。

大正8年であるから 8+(3)=11=1+1=2

即ち2中性㊥という太陽の位置を示す。

9月の数本数は9である

即ち9陽性㊀という月の位置を示す。

23日の数本数は2+3=5

即ち5中性㊁という地球の位置を示す。

この生れの人は次のような位置を持っている。

生れ年は2中性㊥月は9陽性㊀日は5中性㊁となります。

○印は位置のエネルギーを示しています。

例五

明治三六年七月二日生の陰・中・陽

明治は数本数に4を加える。

明治36年であるから 3+6+(4)

=13=1+3=4

即ち4陰性㊁という太陽の位置を示す。

7月の数本数は7である。

即ち7陰性㊀という月の位置を示す。

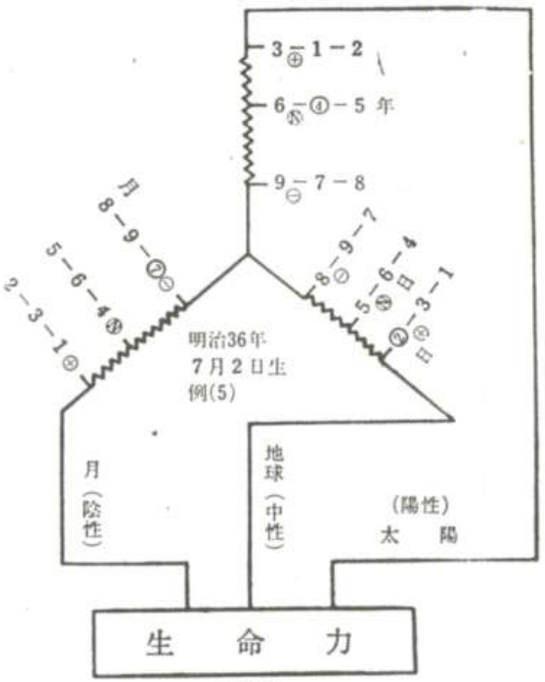
2日の数本数は2である。

即ち2中性㊥という地球の位置を示す。この生れの人は次のような位置を持っている。生れ年は4陰性㊁月は7陰性㊀日は2中性㊥である。

○印は位置のエネルギーを示している。

例六

昭和十六年四月八日生の陰・中・陽



第30図

昭和は雄本数から1を引く

昭和16年であるから

1+6=7−(1)=6

即ち6陽性㊋という太陽の位置を示す。

第31図

4月の雄本数は4である。

即ち4陰性㊋という月の位置を示す。

8日の雄本数は8である。

即ち8中性㊀という地球の位置を示す。

この生れの人は次のような位置を持っている。

生れ年は6陽㊋月は4陰㊋日は8中㊀である。

○印は位置のエネルギーである。

例七

西歴一九二七年二月九日生の陰・中・陽

西歴1927年の雄本数は

1+9+2+7=19=1+9=10

10=1+0=1

即ち1陰性⊕という太陽の位置を示す。

2月の雄本数は2である。

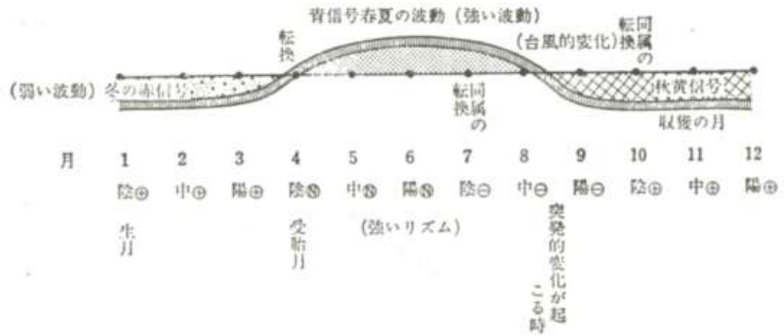
即ち2中性⊕という月の位置を示している。

第32図

9日の雄本数は9である。

即ち9陽性⊖の地球の位置を示していると考えられます。この生れの人は次のような位置を持っている

生れ年は1陰⊕月は2中⊕日は9陽⊖である。



1月生れの春夏秋冬の波動
青・黄・赤

第33図

法則（二）

私達の生年月日の春夏秋冬

私達は、大自然界を無視して、一秒たりとも現世に生存することは出来ないのであります。

大自然の法則は、私達の法則であり、否定することは出来ません

前節で述べた通り、私達は小宇宙であります。その小宇宙も大宇宙現象界の波動の影響を受けるのであります。

生れ月は、現世における慈悲を受けていない時であり、始めて大自然に肉体生命の実在を示し、人生航路の第一歩であります。

母体内で春夏秋の九ヶ月を経て小

宇宙の第一歩は、冬のリズムに入るのであります。

即ち大自然現象界に、魂の修行を目的として、修養道場入門の新入生であります。

この三ヶ月は、自分の意思を持たず、神の意思によって母体からの、エネルギーを吸収し、また、その他の栄養分で、生長を続けるのであります。

生後三ヶ月を過した乳児は、体もしっかりとして感情を示すようになります。

大自然界における凍結した土壌も陽春の熱エネルギーによって、陽炎が上り、やがて草木は新芽を地上に現わすシーズンが訪れて来るのであります。

この生後三ヶ月は私達の一生に色々な変化を起こす時であります。

私達は赤信号を使って、あらゆる事象に注意を換起します。

(イ)　冬のリズム赤信号

凍結している、大地に草木は繁茂しないことは、南極や北極の気象条件が教えております。

私達の、日常生活の中にも思わしくない諸問題が発生する時です。またこのような時に、悪い原因を造らないことであります。

新しいことは一切慎しむことであります。

今までのことを実行するように努めることであります。

新築・増築・移転・見合い・就職・開店・新たな取引等、将来の暗雲を示しているのであります。学校の成績等も一年を通じて、余り良くない時であります。また思いがけない病気等に見舞われ、入院等の現象が生ずるのです。

従来から行って来ていることは、良いのでありますから、無理をしない生活が必要であります。

運が悪いと嘆く人々は、このような月に殆んど原因・結果を現わしているのであります。

自分のリズムを知ることです。

友達の赤信号のリズムを、貴方は予言することもまた、過去の変化を言い当てることも出来るのです。これを、冬の赤信号の波動というのです。何時までも冬は続きません。地球も自転公転の運動を続けているのです。

(ロ)　春夏のリズム青信号

春の訪れは、私達小宇宙にも救いが与えられているのであります。

大自然界の春は、若芽の成長によってやがて花が咲き、蜂や蝶の天国が再現されるのです。

自然は美しく色どられ、私達の心も何となく浮かれるシーズンであります。

この春は、青信号と名付けます。

私達の魂が、躍動するときであります。

新しい計画・就職・移転、開店・見合い・交際・取引・旅行・結婚等、総てに良い結果を生ずるときであります。しかし、赤信号の冬に悪い原因を造れば結果となって、現象が生じます。

青信号のときは少し位の難題も解決されます。法則(一)の波動との関係も左右されますから、総合的に考えなくてはなりません。

循環して来る年の波動と自分の生れ年の波動によっても違いますから、法則(一)と法則(二)の相互関係を研究して下さい。

そのことは、今後の項に述べて行きます。今迄は自分の陰中陽と春夏秋冬を記しているのです。焦らずにじっくりと読んで下さることを望みます。

大自然の春夏は大自然界が賑やかになるシーズンです。

若葉は強い太陽のエネルギーを吸収し、緑は大自然を覆います。

万物の生命は躍動し、子孫保存の本能に燃えている時であります。蝶や密蜂等の媒介や自然の風雨によって、草花は実を結ぶ時が来たのです。

(ハ)　秋のリズム黄信号

やがて秋の訪れであります。

秋は収穫のシーズンであり、私達は黄信号といっております。

黄信号　秋のシーズンは、今迄の結果を出す時であり、新に種を蒔く時ではありません。

また着着と、冬の準備をする時であります。

私達の波動も、大自然と変ってはいないのです。

この波動を図示するとつぎのようになります。

勿論大自然界の春夏秋冬は、各国それぞれ地球・太陽の自転・公転によって異ります。

私達も、この世に生命を受けたその瞬間から、私達自身の春夏秋冬があるのですから、大宇宙の春夏秋冬と小宇宙の春夏秋冬を混同してはなりません。

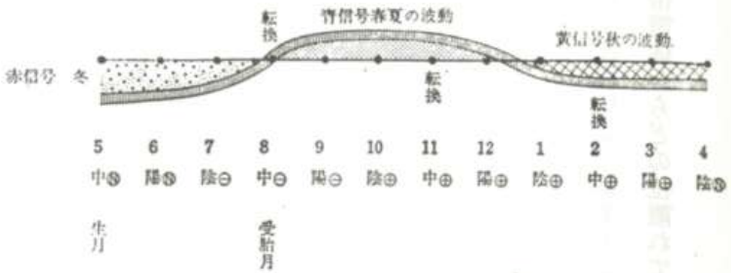
1月生れ　冬の赤信号・春夏の青信号
秋の黄信号の波動
第34図

リズムの変転・波動の原理は少しも変っていないのであります。

国によっては春夏秋冬がないではないか、と申されますが、これは大自然界の法則であります。

例八、一月生れの春夏秋冬の波動

1陰⊕　4陰⊗　7陰⊖　10陰⊕



5月生れ　春夏秋冬の波動
第35図

の月は同属の反発を招きやすい（法則㈠により）

例九

五月生れの春夏秋冬の波動

5中⊗・8中⊖・11中⊕・2中⊕

月は同属数で反発が起こりやすい。

（法則㈠より）

私達の生年月日は大自然の諸現象に深い関係があることは今迄も説明しましたが、更に年月日の陰中陽と春夏秋冬について詳しく説明することにします。

法　則　㈢

大自然界における現象が電気・磁気のように陰性分・中性分・陽性分、又はN極・S極によって相互の変化が起こるように、私達にも、大自然界と同じような変化が起こるのであります。

私達の体内に流れている血液も、血液型によっては受けつけない現象が起こります。

脳の電気的変化も物質と生命との差こそあっても、大自然の法則を無視して考えることは出来ないのであります。私達の考えるエネルギーは、教養・品性・徳及び環境とその目的によって、差異のあることは当然であります。

感応力も人それぞれ異り、その人の努力の一念の実行力によっても異っているのであります。

大自然の三体現象を根本にした陰・中・陽も、陰性・陽性と中性と陽性・中性と陰性このように異性との変化が生ずるのであります。

また、同性間の(+)(N)・(N)(−)・(+)(−)も位置のエネルギーと考えれば、物理的現象と同じような変化が起きるのであります。

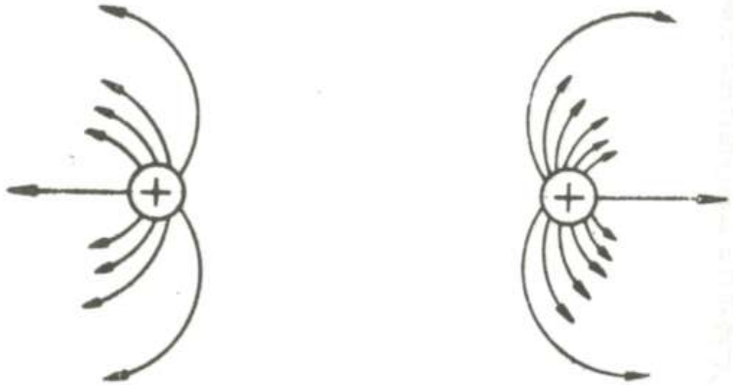
例一

物理的な電界について考えて見ます。

帯電体の周囲において、電気力の作用する所を電界といいます。

電気力は帯電体からどの位離れていても、多少は作用しています。

異極の電界
第36図



同種の反撥
第37図

電界は無限の限界まで広がっており、実際は電気力の作用は距離の自乗に反比例して減るもので、帯電体の近くの部分だけであります。

今(+)と(+)及び(+)と(−)の電気的現象を図によって考えて見ましょう。

右図の上は(+)と(−)等量の電気が相対した時の電力線を表わしたものであります。

下の図は同種の電気(+)と(+)の電力線を表わしたものです。

磁力線の場合と同じように電力線の密度は電界の強さを表わしています。

(+)と(+)の場合は反発し、(+)と(−)の電界の場合は相互に引き合い、電界が強いことを示しております。

更に磁力のことを考えて見ましょう。

例二

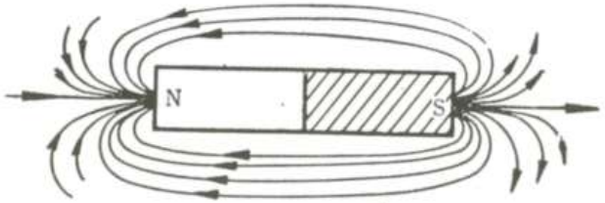
物理的磁界について

磁界にある、鉄粉は誘導によって磁界の方向に向き変えられ、互に連なりあって多くの曲線を作るのであります。

この曲線を磁力線と言います。

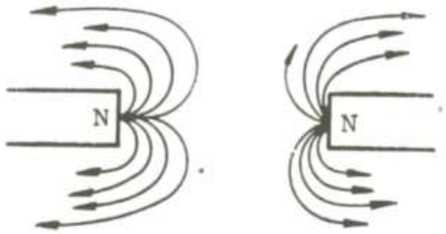
磁力線は常にN極からS極に向っています。同種の極から出た磁力線は互に反発し、異る極から出

た磁力線は互に引き合います。



第38図

N極とS極は磁界が強く吸引されている。



第39図

N極とN極は相反撥する。

例三

電動機（モーター）

モーターは電気エネルギーを磁石のエネルギーに変えて電動子を回転しているのです。

電気エネルギーを供給しない限り、電動子は回転しません。

電流が流れますとN極からS極へ、S極からN極へと回転をします。

N極とN極で停止している電動子も反発してS極に回転をし、NS極へ循環されて行くのであります。

モーターもエネルギーの供給によって連動されるのであり、私達の肉体も動物・植物・鉱物のエネルギーによって肉体生命を保っているのです。

以上のように同性は反発し、異性は相吸引する姿が自然界であります。

次は雷雲について考えて見ましょう。

例四

雷雲について

温度の上昇変化によって生ずる帯電した雷雲も、陽性(+)の電荷を帯びている所には、同性の電荷が集っております。

陰性(−)の電荷を帯電している場所は陰性のみが集っているのであります。

風の外力によって陰陽の電気が莫大なエネルギーと化すのであります。

例五

蓄電池

希流酸と鉛の格子によって、外装は絶縁物によって覆われている蓄電池も、一定電圧の直流を流して充電すると(+)(−)の電力を貯わえることが出来ます。

(+)イオンは一ヶ所に集り、(−)イオンは陰性の場所に集っております。

(+)と(−)を負荷に接続すると電気エネルギーは光・熱・磁力等のエネルギーに変って行きます。

以上の物理的な例から見ましても、私達の生年月日の陰・中・陽もこの現象と同じような結果が起

きるのであります。

それは私達の生年月日もその時の位置のエネルギーとして考えられるからであります。

そこで私達の生年月日の陰・中・陽の相互変化について、次の項は自然界の法則を当てはめて考えたものであります。

法則三の一項　夫婦の場合

男女は陰陽自然の組合せでありますが、各生年月日の陰・中・陽は同属でない方が良いのであります。年の陰・中・陽、月の陰・中・陽、日の陰・中・陽がそれぞれ同属でないことが理想であります。

夫婦は互にエネルギーの交渉を持ちます。生れた年月日の陰・中・陽が同属でない場合は反発的現象を起こさないのであります。

但し陰陽同属の場合は子供の生年月日の陰・中・陽によって家庭の調和が計られます。

法則三の二項　友人または会社の場合

妻以外の交際者は自分の生年月日の陰・中・陽が合致し、即ち同属の方が良い。

肉体的エネルギーの交渉を持たないからであります。丁度同性の電荷を帯電している雷雲のように、また、バッテリーの(+)(−)のように、同属同志の集りは安定しているのであります。

会社の上役との関係も同じ結果になります。

法則三の三項　循環して来る月日

私達の生年月日の陰・中・陽と循環して来る年月日の陰・中・陽は同属同性でない場合が良い。反発現象が起こり易いのであります。今迄のあらゆる不運な人々の現象を見ると、一〇〇％結果は合致しているのであります。

不幸な結果は必ず自分の生年月日の陰・中・陽の波動と合致しています。

法則二の一項

自分の生年月日の春夏秋冬のリズムを知ることであります。

以上の四項を知ることによって、あらゆる諸現象を具体的に説明して行きます。

自分の生年月日の陰・中・陽と春夏秋冬の波動の動きを具体的例によって考えて見ましょう。

第四章　自分の波動を知る法

(1)　自分の生年月日の陰性・中性・陽性を確認すること。

(2)　自分の春夏秋冬の赤信号・黄信号・青信号を確認すること。

この確認方法は第三章波動の法則(一)(二)(三)及び例一、二、三、四、五と一項、二項、三項を参考にすれば分ります。

しかし、読者になって考えますと具体的な実例が欲しいのではないかと思いますから、今実例を以て説明致します。

一つ疑問に応えなくてはなりません。

同じ生年月日の人は世界中に沢山いるはづであります。

全員が同じリズムを持っているかといいますと、そうとは限らないのであります。

私は生れた時間を入れていないのです。時間の何分何秒が必要ですが殆んどの人は、そこまで確認出来ないのです。

そこで、自分独りで生れて来たのではないことに気がついて頂き度い。

両親がいるはずです。あるいは兄弟や子供がおれば皆自分自身の生年月日が定っています。

この陰・中・陽と春夏秋冬の赤信号・黄信号・青信号の位置と自分の位置を確認すれば、正確な判断が出来るのであります。

一つの家庭を考えて見ますとよく分ります。

家族の一人に不幸が起これば、家族全員が不幸な要素を持っているのです。

家族の不幸は、家族全員の最も悪い一日か、月か、年の波動に現われて来るのであります。

であるからその中の最も起こり得る、一日を警戒することによって、免れることが出来るのであります。

勿論同年同月同日生れの人々は、この世における同期生であり、親和力によって結ばれる人々であります。

波動による日常生活が異るのは、家族環境と過去世の業（かるま）によって違うことを記しておきます。

また、自分自身の波動も近似値にしか過ぎないのです。それは自分自身の努力によっても、また人生航路途上の諸現象の結果によっても、転換するからであります。

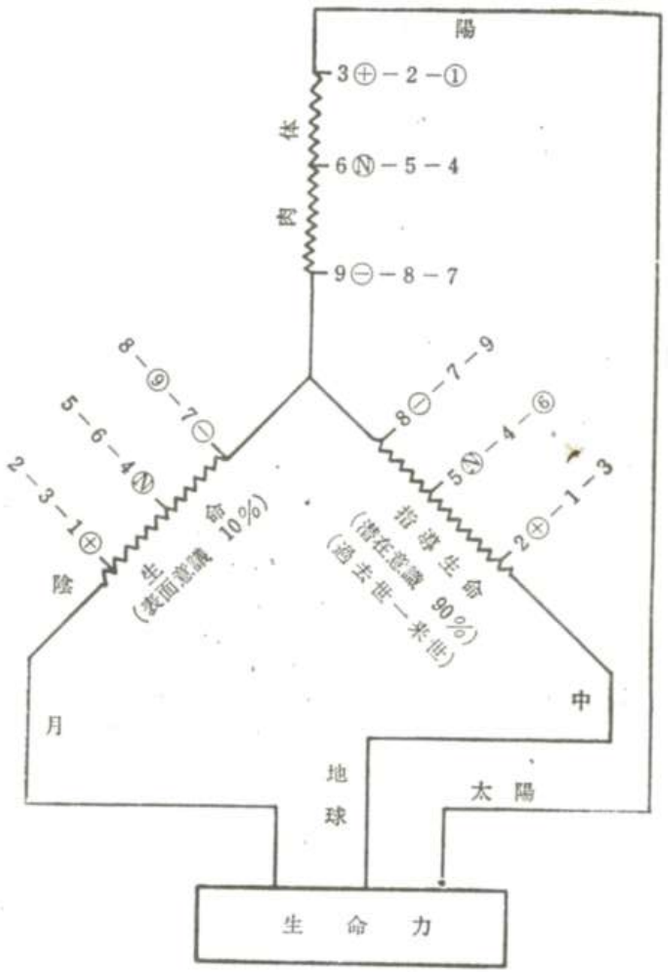
しかし、読者の皆さんが自分自身を、この法則を応用して、過去の波動を想い出し、自分の経験と波動の一致を発見したならば、恐らく人生航路の伴侶として、応用せられて行くことでありましょう。

私は易学は全然分りません。電子計算機の原理や大自然の三体性を考えて行くとこのような現象が結果となって出て来たのであります。

例　(一)

昭和二年九月六日生の波動を考えて見ましょう。

先ずこの人の陰中陽を定めましょう。



生年月日の波動

1陰⊕　9陽⊖　6陽Ⓝ

生年月日の位置

第40図

昭和2年の積算数は 2－(1)＝1

生れ年は1陰性㊥の太陽の位置のエネルギーを持っています。

月は9月でこの積算数は9である。

生れ月9は陽性㊀の月の位置のエネルギーを持っています。

日は6日でこの積算数は6である。

生れ日は6陽㊋の地球の位置のエネルギーを持っています。

1陰性⊕の年の位置と、9陽性⊖は位置の差が大きいのです。㊥と㊀を持っているから、生命力の強い人であります。人の上に立つ生命力を持っています。

例

アイゼンハウァー米国大統領(元)

一八九〇年十月十四日生

9陽性⊖　1陰性⊕　5中性㊋

ドゴール　フランス大統領

一八九〇年十一月十二日生

9陽性⊖　2中性⊕　3陽⊕

指導者的人物に多い㊥㊀が生年月日に含まれている人々は、生命力は、強いが盛衰の変化も多いことになります。

1陰性⊕・9陽性⊖・6陽性㊋　の年の波動と月の波動、日の波動を図示してみますと、自分自体の栄枯盛衰が分ります。

年と月と日の三性を見なくてはならないのですが、年月日を区分して説明します。

1陰性㊥の波動は次のようになります。

1陰性㊥の年に生れた人々は昭和20・21・22年は苦難の年であった。

また、大東亜戦争において戦死した兵隊も殆んど大正生れの人々が多かったのであります。

大正7年、8年、9年近くの人々は最も弱い波動や変動の波動にぶつかっています。

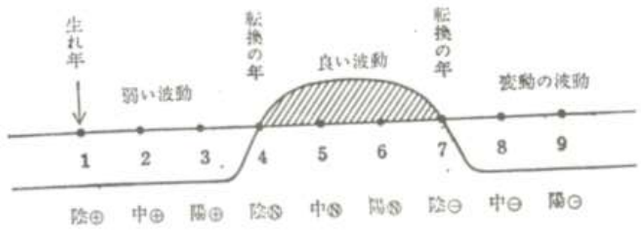
1陰性⊕の人は更に和年29・30・31・38・39・40年が弱い波動を受けています。

また、強い波動、良い波動の年昭和25・33・34・42・43年は最も強い波動の年であります。

成功者はこの波動を、意識しないが、良い波動に乗っている人々であります。

この年に、身内が亡くなる場合は殆んど天命を完うした高令の人々が多いのです。

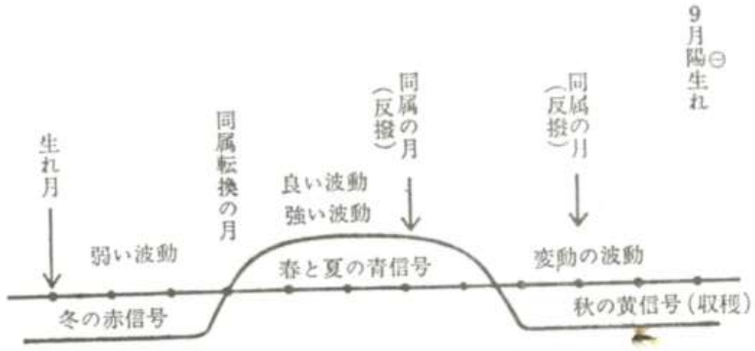
不幸は月の位置によっても違って来ます。年の位置は大雑把(おおざっぱ)な一年の波動を知る為には良いのであります。



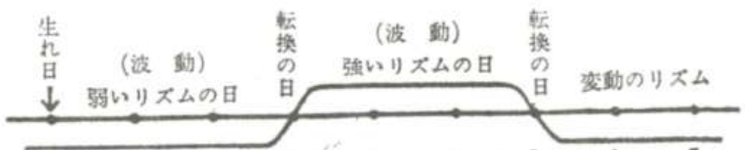
昭和	12年	13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	32	33	34	35	36	37
38	39	40	41	42	43	44	45	46

生年1　陰性(+)の波動
第41図

昭和の根本数は1を引くことを忘れては地球上のリズム即ち波動が合いません。



生月9陽(−)の波動
第42図



				1日	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30	31	

生日9陽(N)の波動
第43図

月の波動について考えて見ましょう。

この9月生の人は8月9月10月11月頃は体に故障が生じたり、思いがけない問題が起こったり、余り良くない結果が出る時であります。

親しい人と別れたり、また、失業等がある月です。

一般的に事故に襲われ易い、冬の赤信号は慎重に過さないといけない月であります。このような月には、見合い、新しい取引、移転、就職、その他一切を青信号、春のシーズンまで見送ることが懸命であります。

前々からの仕事を熱心にやっていることがリズムに乗る条件です。

運の悪いという人々は、このような月に事を起こし、失敗している方が多いのであります。

12月に入れば、今までの暗雲も晴て、上昇運に乗る月であります。

青信号の春リズムの中においても、同属の月　3月は変化が起こりますから、慢心してはならない月であります。

見合い、新しい計画、移転、就職総てに良い月であります。

しかし、如何に良い月であっても、年の波動の弱い時は慎重に行動しなくてはならない。

9月生れの人は4月入学の友達とは非常に縁が深い人々が多いのです。

青信号で知り合った人々は、人生航路における良い相談相手になる人が多いのであります。赤信号の時と青信号の月を比較すると非常に面白い結果が出て来ます。

営業マンは赤信号ではなかなか註文が取れず、トラブルの原因が多く、青信号の月は営業成績が上昇する現象を見ても分ります。

強いリズムの月に、自分の目的に対し、一念力のエネルギーを燃して、努力・実行し、弱いリズムの月を乗り切るような波動を自分自体で造り上げる生活こそ、成功の秘訣であります。

青信号の月もやがて収獲の月、秋の黄信号に入ります。

この月は取り入れの月であり大自然界と同じように台風的現象の起きるときであります。

幸、不幸が突然起きる月でありますから、用心して生活をしましょう。

ある者は収獲に喜び、ある者は台風の被害によって、苦しむような変化が起る場合が多いのであります。

このような月に病気をすると、永引く場合が多いのです。

特に年の波動の弱い時は注意しなくてはなりません。

しかし、今までは自分自体を中心に考えて来たのでありますが、自分の身近な親子・兄弟のリズムの強い時に突発的な災害は起こりません。

家族が悪い波動の重った場合に起きるのですから、身近な人々の波動を図示して考えれば、起こり得る年・月の予想が立てられる訳です。

読者は、自分のリズム即ち波動を調べて、余りにも的中しているので家族や友人・上役・恋人の波動を知ろうと焦って来ます。

もう少しゆっくり研究して行きましょう。

生れ日の波動を考えて見ましょう。

6日ですから6陽(06)になります。波動は次のようになります。

生れた日の波動は自分の年・月・日の陰中陽が同属の場合は特に反発的現象が生ずる場合が多いから、気をつけた生活をすることであります。

このような時に風邪を引いたり、思わぬ事故が起きる場合が多い。

変動の波動や弱い波動の日と、弱い波動の月、弱い波動の年がかさなった日は一日の行動に注意して暮すことであります。

自分の波動を知った場合において、自分自身が波動に支配されるようではいけないのです。

波動の良否に拘わらず、自分自身の意識の中に強い波動の支配力を持つことが必要であります。

第五章　生命力と波動

私達が小学校に入学した時は、殆んど同じ考え方をしていた友達も、学校を卒業する頃には人間的に常識も発達して来ます。

更に中学校に入り、上級学校えと進むに従って、人それぞれの道も、考え方もその差を開いて行きます。

社会人として人生航路の荒波に揉まれるに従って、その人々の努力と実行の差は、開いて行く一方であります。

同じ会社に勤めていても十年、二十年と経過して行くうちに、社長になる者と相変らず下級幹部でいる者もあります。

実力と環境がその社会に合っていたから差が出来たのであります。

しかし、人の上に立つ人間と、参謀的な人間等それぞれ目的の仕事に向いた生命力があります。

この生命力が一般社会にどのような形で現われているか考えて見ましょう。

(1)　陰・中・陽の生命力

この位置のエネルギーを持っている人々は生命力が強大であります。

自分の意思が強く、性格は孤独な人が多い。それは自己主張が強いからであります。

事故やその他で奇跡を起こす人も多い。それは生命力が強いからです。政治家に多いタイプであり、指導者になる生命力を持っています。

弁護士・検事・判事・組織の指導者に適しています。

生命力が強いために目上の人と意見の喰い違いを起こす場合が多いから、円満な人格を造ることによって偉大な人物になる生命を持っています。

生年月日に陰性・中性・陽性の三性の位置を持って、更に(+)(−)の位置で生れた人々であります。

アイゼンハウアー元大統領 1890年—10月—14日生	9 陽 (−)	1 陰 (+)	5 中 (N)
アインシュタイン 1879—3—14	7 陰 (−)	3 陽 (+)	5 中 (N)
ニクソン元副大統領 1913—1—9	5 中 (N)	1 陰 (+)	9 陽 (−)
マレンコフ 1913—1—9	3 陽 (+)	1 陰 (+)	8 中 (−)
鈴木茂三郎 1893—2—7	3 陽 (+)	2 中 (+)	7 陰 (−)
河上丈太郎 1889—1—3			
吉田松陰 1830—8—4			

生年月日陰・中・陽の生命力
第44図

(2) 同属の中に(−)と(+)又は異属の(N)の生命力

生年月日の各根本数に9陽(−)・8中(−)・7陰(−)いずれかを含み、(+)又は(N)の組み合せによる位置を持っている人は実行力があり、社会的に名声を挙げ、立身出世する人が多い。

政治家・実業家に多い生年月日であります。

5 中 (N)	9 陽 (−)	8 中 (−)
9 陽 (−)	3 陽 (+)	2 中 (+)
9 陽 (−)	4 陰 (N)	1 陰 (+)
4 陰 (N)	9 陽 (−)	6 陽 (N)
8 中 (−)	1 陰 (+)	8 中 (−)
8 中 (−)	2 中 (+)	3 陽 (+)
3 陽 (+)	2 中 (+)	9 陽 (−)
2 中 (+)	3 陽 (+)	8 中 (−)

生年月日に(+)(−)を含む生命力
第45図

南原　繁元東大学長
明治22年9月5日

佐藤　栄作
1901—3—9

五島　慶太
明治15—4—18

吉田　　茂
1878—9—22

マッカーサー元帥
1880—1—26

毛沢　　東
1893—11—26

ドゴール大統領
1890—11—12

孫　文
1925—3—12

(3)　一般的な生命力

生年月日の陰陽のバランスがとれている人々で、盛衰の変化が少ない人々であり、努力次第で安定した環境の中において、平穏な生活の出来る生命力であります。

人望を集めて人の上に立ち、自分の意思により人の意見の上に自分の行動を律する人々であり、徳望家である。学者・医者・技術者・実業家等がよい。

	年	月	日	生
	2中(+)		6陽(N)	3陽(+)
	1陰(+)		4陰(N)	2中(+)
	1陰(+)		2中(+)	4陰(N)
	2中(+)		1陰(+)	1陰(+)
鳩山　一郎 1883—1—1	3陽(+)		4陰(N)	3陽(+)
広川　弘禅 1902—3—31	2中(+)		3陽(+)	2中(+)
松永安左衛門 明治18—12—1	1陰(+)		1陰(+)	3陽(+)
金田一京助 1882—5—5	2中(+)		1陰(+)	1陰(+)
	3陽(+)		3陽(+)	4陰(N)
	3陽(+)		3陽(+)	1陰(+)
	1陰(+)		5中(N)	5中(N)

生年月日の中に(+)(−)を含む生命力
第46図

（4）同属の位置を持つている生命力

生年月日の根本数が同属同性である生命力は幼少時代に体の弱い人や、両親に縁の薄い人が多い。同性の生年月日を持つている人々は頭の良い人達が多く、同属同性の中に(+)(−)の位置を持つている人は社会的にも名声を挙げる人が多い。強い意思と実行力で努力すれば必ず成功する。変り者扱いされる人が多い。

芸術家・医学者・科学者・学者等が良い。

第47図　生年月日の同属の生命力

生年	月	日
9陽（−）	3陽（+）	6陽（N）
8中（−）	5中（N）	5中（N）
8中（−）	2中（+）	2中（+）
9陽（−）	3陽（+）	3陽（+）
3陽（+）	3陽（+）	9陽（−）
6陽（N）	3陽（+）	9陽（−）
6陽（N）	3陽（+）	3陽（+）
7陰（−）	1陰（+）	1陰（+）
7陰（−）	7陰（−）	7陰（−）
1陰（+）	1陰（+）	1陰（+）
2陰（+）	2陰（+）	2陰（+）
3陽（+）	3陽（+）	3陽（+）

同属の(+)と(−)又(N)を持つている生命力は実業家として大成する人がある。

第六章　家族の波動

家族の構成は、殆んど肉身によって造られている場合が多いのでありますが、たまたま血縁に関係なく、構成員の一人として入っている場合もあります。

それは過去世における因縁による場合が多いのであります。

俗にいう仏縁というものであります。

このような人は、平和な家庭を築く上において良い波動を構成する因になる場合があります。必ず見えない糸で結ばれているものです。

欲心の深い家族は必ず破滅します。一時の栄華も必ず不幸が訪ずれて来るものであります。家族の幸福は、精神面において親和力を持ち、他人に対し慈悲心を持ち、自分の魂の過去世に感謝し先祖や両親を敬い、このような家は笑いの絶えない家庭であり、明るい想念が満ち満ちている家族は、病魔に襲われず、肉体的にも、経済的にも、不安のない家庭が、築かれて行くものであります。

心に欲心を持ち、人の幸福を妬み、不幸を喜び、一時の栄華に自己慢心し、先祖両親に対しては敬

護の念はなく、自分自身の欲望を求めている家庭は必ず精神的な安らぎを得ることは出来ない。大自然の万物を独占するような人は悪魔であり、必ず破滅を免れない。

神は万物を平等に与えているのであります。

互に報恩の心を持ち、互に慈悲心を施し合わなくてはならない。

如何に波動の組み合せが良くとも、人の道を踏み外せば、不幸は訪れる。幸と不幸は裏表である。

波動の組み合せが余り良くない家庭も、それぞれ神より与えられた使命であり、魂を修養するための修練場と自覚し、正しく明るい家庭を造るために努力し、実行することが幸福を得る結果となるのであります。

また、波動の組み合せ方によって不幸を転換させることも出来ます。

(1)　子供は両親の波動を受ける

父親が3陽性(+)即ち3月に生れた場合に、子供は3月・6月・9月・12月　陽性の同属で生れて来る場合が多い。

年・日の根本数が同属の場合を含めて性格は父親に似ているものであります。

この場合陽性に拘わらず陰性・中性でも親子が同属の場合は同じ結果になります。

母親が1陰性(−)即ち1月に生れた場合に子供は、1月・4月・7月・10月陰性の同属で生れて来る場合が多い。

年・月・日の根本数が同属の場合を含めて性格は母親に似ているものであります。

父母以外に祖父母系の波動に似る場合もあります。

次の家庭の組み合せを考えて見ましょう。

長男は母親の生年月日の陰中陽が同属であるから性格は母系であります。

長男が将来家を見るようになり、次男は分家に出ることになりましょう。

長女は父親の生れ年と同属で、生れた日が同属であるから父の性格に似ています。

次男は両親と合致していない。祖父母系であります。

長男と長女は性格が違うために意見が合わない点があり、長女と次男は性格が合っています。

長男は陰・中・陽全部の波動を持っているから、ワンマン的性格があります。

長女は中性分の強い波動を持っているから協調的な性格である。

長女は母親の胎教の良い時に生れている。

それは母体の春、青信号の波動を示しているからである。

母親は1234月まで冬の赤信号で、567789月までは青信号の強い時であるから安産であった

	年	月	日
父親			
昭和3年6月3日生	2	6	3
3－(1)＝2	2	6	3
（根本数）	中(+)	陽(N)	陽(+)
母親			
昭和7年1月5日			
7－(1)＝6	6	1	5
（根本数）	陽(N)	陰(+)	中(N)
子供（長男）			
(1) 昭和31年10月11日			
31－(1)＝30＝3＋0＝3	3	1	2
（根本数）	陽(+)	陰(+)	中(+)
子供（長女）			
(2) 昭和33年5月6日			
33－(1)＝32＝3＋2＝5	5	5	6
（根本数）	中(N)	中(N)	陽(N)
子供（次男）			
(3) 昭和35年11月4日			
35－(1)＝34＝3＋4＝7	7	2	4
（根本数）	陰(−)	中(+)	陰(N)

両親と子供の波動　第48図

ことを示しています。

家庭内において、母親が青信号の時、父親が赤信号というような組み合せが理想であります。

一戸の家庭に誰か青信号の強い波動を持っている人がおれば、非常に良い組み合せである。

この家庭においては、長男が青信号の時、母親が赤信号となっているからよいのです。

長女と父親は赤信号が重ります。このような時は父親と長女が一所に旅行等をすることは避けることが必要です。

このような家庭の構成は理想であります。

このような家庭には大変化は来ないのです。父と母は相性が違っているのではないかと疑問を持ちますが、夫婦はこの組み合せが理想であります。

常に青信号の家族がいることは幸福である。青信号の月でも自分の生れ月と同属の月は悪い波動が生ずることがあります。

一般的に母親の青信号の時に生れる子供は胎教が良く赤信号の場合は胎教が悪い。

そのために小児麻痺、その他の奇病の子供を持っている母親は赤信号で子供が生れている場合が多いのです。

勿論正しい心を持って、生活している母親は赤信号であっても悪いということはありません。

(2)　平穏な家庭の波動

一般的に、家庭は両親を中心とした家族の構成であり、社会の縮図であります。

平穏な家庭とは、生年月日の波動の組み合せによって、構成された姿をこの章では言います。

私達はあらゆる波動を知らなくては正しい将来の進路を見出すことが難しいのであります。大自然の春夏秋冬と同じように私達にもその法則が適応されるのです。

何故かと申しますと、私達も大自然界の慈悲なくしては生存は出来ないのであります。

その法則に従って家族の構成を考えることにします。（法則(一)(二)(三)参照）

親子四人の波動を考えて見ましょう。

父親は3陽(+)・1陰(+)・9陽(−)の年月日の位置を持っております。(+)(−)を持っているから、生命力も強い方です。人の上に立つことの出来る方であります。

母親は7陰(−)・6陽(N)・5中(N)の年月日の位置を持っております。陰・中・陽の全部を持っていますから性格的には強い人です。

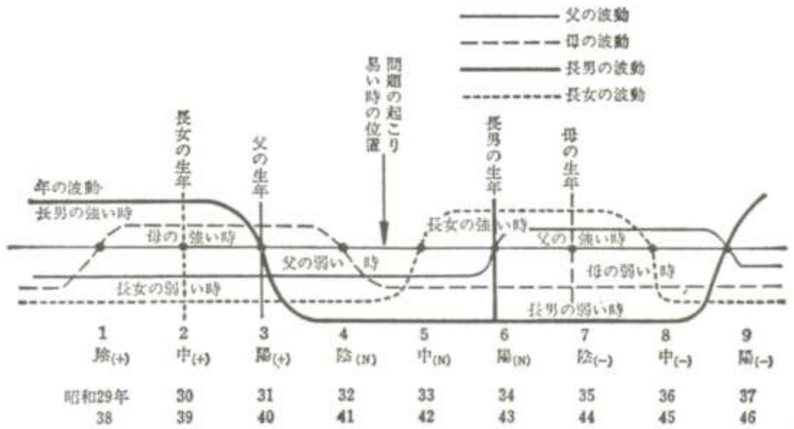
月に(N)と日に(N)がある為、調和性があります。物質界における中性分は中立の姿をいうのです。

長女は2中(+)・1陰(+)・5中(N)の年月日の位置を持っています。中性分が多い中には陰性(+)を持っているから調和がとれています。

性格はおとなしい良い子で女性的であります。

父	昭和 4 年	1 月	9 日	
	3陽(+)	1陰(+)	9陽(−)	
母	昭和 8 年	6 月	5 日	
	7陰(−)	6陽(N)	5中(N)	
子(長女)	昭和 30 年	10 月	14 日	
	2中(+)	1陰(+)	5中(N)	
子(長男)	昭和 34 年	12 月	5 日	
	6陽(N)	3陽(+)	5中(N)	

平穏な家庭の波動
第49図



平穏な家庭の年の波動
第50図

両親とも調和されています。父親とは月が同属であり、母親とは生れ日が同属であります。

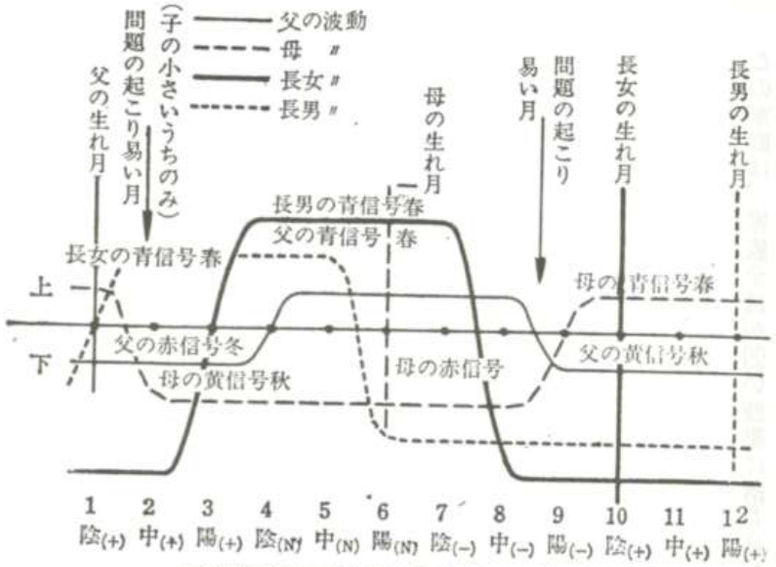
長男は6陽(N)・3陽(+)・5中(N)の年月日の位置を持って、両親、長女とも調和がとれています。長女より性格は強いものを持っていますが、姉弟は仲の良い姿であります。

しかし、これだけでは調和の合成方向が分りません。

次は家族の年と月と日の波動を図示して考えて見ますと家族の構成と波動が分ります。

(イ)　年の波動

この家族の年の波動は非常に調和がとれています。問題の起こり易い年は昭和32・33・34年であり、父の弱い年には母が強く、母の弱い年には父が強く、また、子が強い波動を持っている。



平穏な家庭の春夏秋冬の波動　第51図

一家族の波動の弱い時に色々な問題が起きるのであります。若し父が事故を起こしても家族全員が心配するのです。

全員が弱い波動の年か、月か、日が重なるものであります。

年の波動の組合せは理想的に出来ております。

月について考えて見ましょう。

父親の赤信号冬のリズムの時、母親は青信号夏のリズムで、2月3月は黄信号のリズムに入る為に突発的現象が生じ易い月である。

小供が大きくなれば、長女が青信号に入る為、波動の変化は良いリズムとなります。

9月10月は弱い波動になっています。また、生れ月と同属の月はたとえ青信号春のリズムであっても個人的に弱い変動があります。

一家庭の場合は、中心になる人物の波動に影響を受ける場合が多いのです。

弱いリズムの時は、総てに、気を付けて生活をすることであります。

波動が上段の時は強いときであり、下段の時は気を付けることが必要であります。

個人の弱い波動、赤信号の時は特に気を付けなくてはなりません。

大変化は、家族の弱いリズムの合成された時、即ち問題の起こり易い月と年に気を付けて下さい。

読者が家族の波動を図示して研究して下さい。過去は殆んど合致しています。

過去が合致していることは将来起こり得る、結果を知ることになります。

今例として、図示している家族は極めて変化の少ない波動を示したのであります。

次には生れ日のリズムを考えて見ましょう。

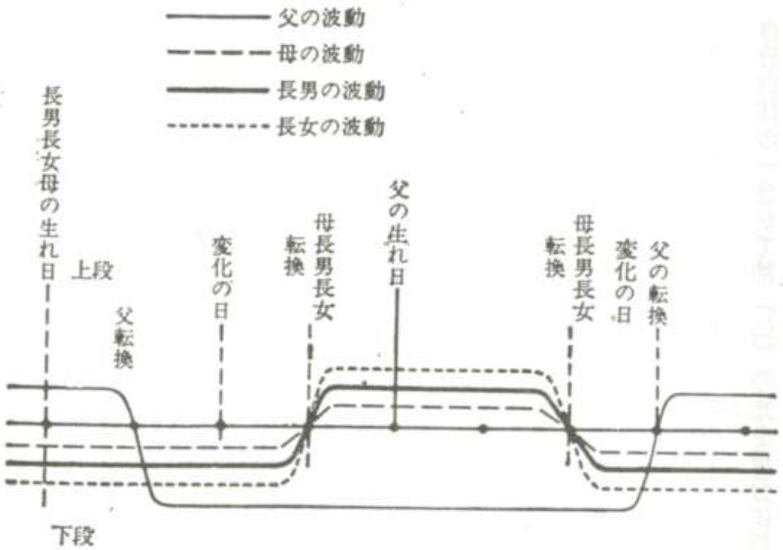
家族の生れの日のリズムは転換の日と7陰2中性が弱い波動の日であります。

上段階は強い波動であり、下段は弱い波動を示しています。

年・月・日の三体の位置が弱い波動の時は特に警戒し、強いリズムの年月日に新築や見合い、移転その他の行事をすることが理想であります。

同属の月は上段の波動であっても転換されますから気を付けて下さい。

この家庭は、家族全員が弱い波動に落ち込むことが尠いので平穏な家庭であります。



5	6	7	8	9	1	2	3	4
中(N)	陽(N)	陰(−)	中(−)	陽(−)	陰(+)	中(+)	陽(+)	陰(N)
					1日	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29	30	31

平穏な家庭の生日の波動
第52図

如何に良い波動によって合成された家庭であっても、報恩と慈悲心を忘れては苦難が来ます。人生航路は魂の修練道場であり、私利私欲に走ることを諫めています。

家族の中心と共に調和して、更に良い家庭を築き上げることに努力しなくてはいけません。

(3)　変化の多い家族の波動

家族の波動が全部一致している家庭は、大自然生命本体より魂の修練を特に与えられていることを自覚し、弱い波動に打ち勝つための強い意思と努力によって、必ず神の光の保護を受けることが出来るのであります。

そのため、人の羨むような子供に恵まれたり、思わぬ幸福を与えられることが出来るのです。

正しい自然の法を得て、真の真の努力の一念力と、実行努力は光となって、神の波動に調和されるのであります。

飽くまでも、正しい目的のために一家族が一団となり、精神的調和を計ることが必要であります。

決して苦難に負けてはなりません。

自らの一念力の想念で、正しい目的を達せられることを信じ、波動の弱い時には冥想によって常に反省し、自分自体の一念がで神（仏）の光を自分に与えることにより幸福が得られます。

自分の意識即ち心で正法を悟り、自分の家庭及び自分自身を正しい神の光でカバーすることによって、光の保護を受けることが出来るのであります。第一編、第二編を読者は良く読んで下さい。

必ず幸福になるという自信を持つことです。自分自体が、自覚する以外にないことを重ねて申し上げます。

もう一回繰り返えそう。

第53図　家族の波動

父	大正13年 1＋3＋(3) 7陰(−)	3月 3陽(+)	6日 6陽(N)
母	昭和8年 8−(1) 7陰(−)	3月 3陽(+)	15日 6陽(N)
長男	昭和29年 1陰(+)	2月 2中(+)	24日 6陽(N)
長女	昭和32年 4陰(N)	4月 4陰(N)	5日 5中(N)

（大正の根本数は3を加算し、昭和の根本数は1を引く。）

不調和な組み合せの家庭は、より良い魂を造るための修練場である。より以上の調和を造り出す第一歩であることを、悟らなくてはなりません。

その組み合せについて説明をします。

父と母は9歳違いで7陰(−)、月は同じく3陽、生れ日は日違いの6陽(N)と年月日共に同属の位置に生れています。

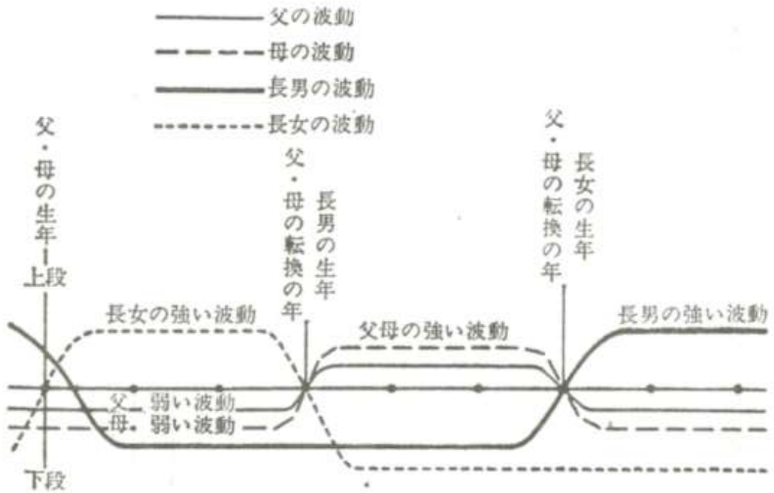
双子のような夫婦であり、このような夫婦は親の反対を押し切っても、結婚に踏み切る波動を持っています。

この、夫婦と同じように、年月日の何れかに同属の位置を持っている夫婦は、殆んどが恋愛結婚に近い経過をたどります。

逢引きをしている内は良いのですが、家庭に入ると反発的現象が生じる場合が多いのです。

生年月日の中に、同属の位置を持っている夫婦は、離婚率が多いのであります。離婚は己れの意識に黒い想念を生む。更に不幸を自から造って行くである。しかし、子供の生年月日によって夫婦の波動を正しい方向に持って行く場合が多いのであります。また、同属同性の場合、心中するような現象が起こりやすい。これは余りにも考え方が正邪に拘わらず調和しやいからであります。

自殺等は人生の逃避でありますが、来世に行って更に苦しみが倍加され、決して逃避にならないこと



	7	8	9	1	2	3	4	5	6
	陰(−)	中(−)	陽(−)	陰(+)	中(+)	陽(+)	陰(N)	中(N)	陽(N)
昭和	26	27	28	29	30	31	32	33	34
	35	36	37	38	39	40	41	42	43
	44	45							

生年の波動　第54図

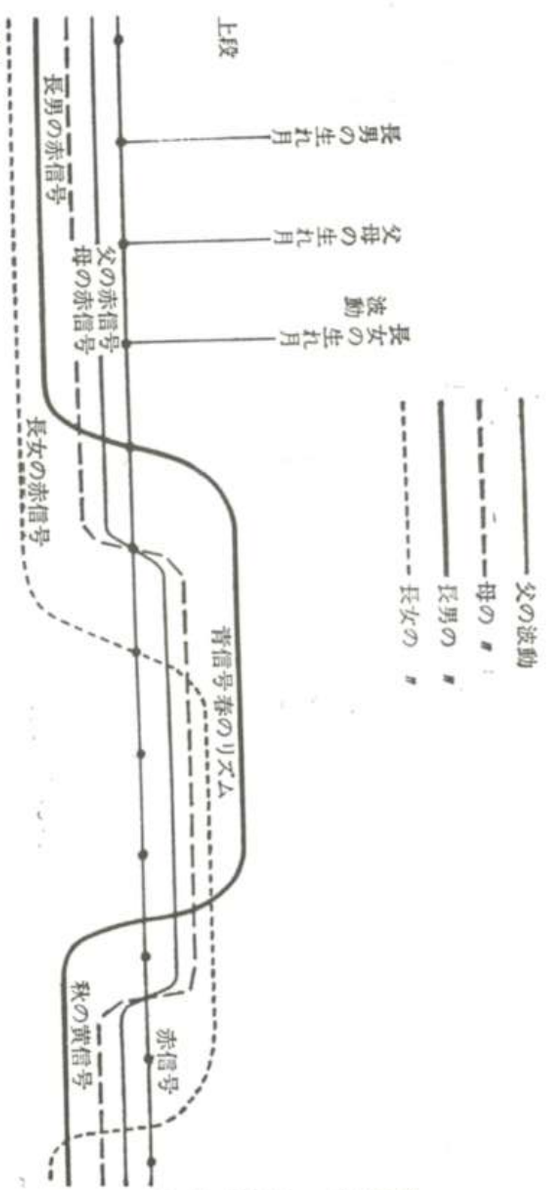
と、を悟らなくてはならないのです。地獄において魂を磨かなくてはなりません。

死は自らの意識によって自分の行為を裁かねばならないのであります。

地獄界・極楽界行きも、自分自身が定めるのです。

生命は苦と楽の波浪の中で磨かれるのであります。苦しみの後には楽が循環して来るのです。唯、自分自身の正しい行為の中に、自分自身する世界が開けるのであります。

さてこの家庭の年の波動を考えて見ましょう。



生月による青・黄・赤信号　第55図

年の波動は父・母は同じ年に弱い波動に見舞われますが、特に昭和26・27・28年は変動期でありましたが、長女の波動は上段に入り、強い波動に変っています。

昭和30・31・32・39・40・41年は良い波動を示しています。長男は父母が下段に入り弱い波動に移ると共に強い波動に入っています。

このような場合、転換の年には一家族、特に悪い変動に留意することが必要であります。

また、月の波動との関係を知ることも必要であります。

この波動を見ると、1・2・3・4・5・6月の前半は赤信号冬のリズムに重っているから、体の状態が悪かったり、心配事の生ずる波動であります。

長女は、母親の赤信号冬の波動に生れていることは、胎教が悪く難産の場合が多いことを示しています。また、生れ月と同属の月は気を付けて生活をすることであります。

家の中で生ずる困難なことは、前半にあるから、強い青信号の月に家族が心を一つにして頑張ることによって、生活の向上が計れるのです。

極端な夏から極端な厳寒に変化するような組み合せでありますから、備えあれば憂い無しという生活が必要であります。

強い波動の月に良い原因を造り、弱い波動の月に結果の生れる生活が良いのであります。

年の弱い波動・月の弱い波動が重った時は重ねて病気・金銭問題等に気を付けて下さい。

その苦難な月が過ぎれば、陽炎が上る楽しい春が訪れて来るのであります。

如何なる苦楽も、神から与えられた試練であることを悟り、一家団結して、自らを正しい想念の一念力で、光神に祈り、神の光にによって保護していただくことであります。

必ず幸福が訪れて来ます。

自分自身が与えられた、弱い波動を強い意思によって、改めて行かなくてはならないのです。

赤信号の弱い波動の時は、悪い原因を造らないように、また、従来の諸問題がある人々は、結果となり、精神的にも肉体的にも苦難が多い月でありますから、保守して攻勢に出ない行動が理想であります。このような場合に、類は類を呼ぶが如く赤信号で苦難な人々が集るものであります。決して辛抱の一念力で来る春の青信号まで無理な行動を避けて、生活をすることであります。

また、特に夫婦間も、身心共に調和のとれた生活を忘れて、対立的行動は慎しまなくてはなりません。

真の正しい心の調和が出来ますと、大自然界の意識即ち神仏に、波動は伝わり、困難な波動を、自分自身の力で必ず支配出来ることを忘れてはならないのであります。

私利私欲から心を放し、報恩・感謝の心で人生航路を生き抜かなくては、心の調和が生れないのであります。自分の目的に対して一念力の努力・努力・努力こそ良い結果を現象化することが出来るの

です。

それは自分自体の目的に対して自信を持つことであります。自信は努力なくして生れるものではありません。

私達の一念力は万物を、支配出来るのです。物質に支配されてはなりません。

大自然から与えられている私達の波動は、自分の意のままにコントロールすることが出来るのであります。

日について考えて見ましょう。

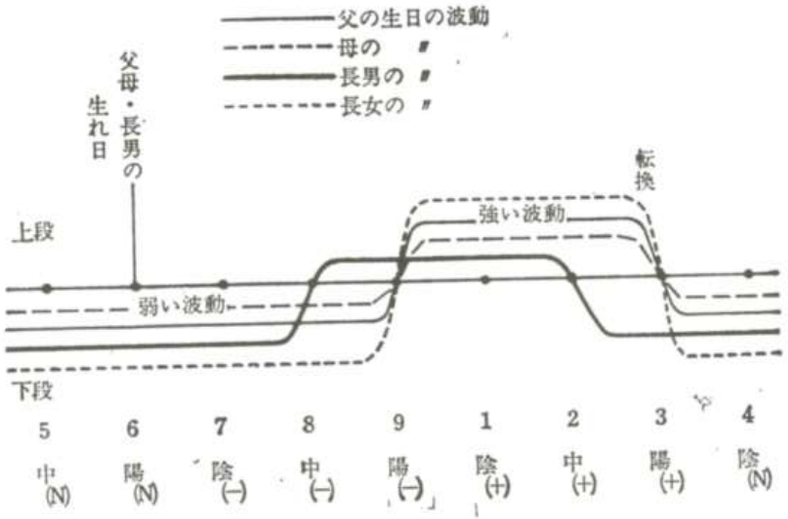
生れ日は殆んど同じ波動でありますから、先に説明した通りに行動するのが理想的です。

5中(N)・6陽(N)・7陰(−)と同属の日は余り無謀な行動を慎しまなくてはならない。

年・月・日が重なった位置は強い波動の時ではないから、従来行って来た生活を保守するよう努力して下さい。

家庭内の波動の組み合せは、一年を通して誰か青信号春のリズムを持っているような姿が理想的であり、平穏なのであります。

波動が一致していると如何しても弱い波動が一家を包んで仕舞うのです。また反発的現象が起こるのであります。



家族の波動
第56図

逆にこのような組み合せの家族も一つ心を調和して、目的に向ってそれぞれが一念を燃やして努力すれば立派な家庭を造り、より以上な生活をしている人も多いのですから、決して落胆してはなりません。

それは波動のリズムが教えております。一般家庭と違って、波は盛衰に抱わらず大きく循環されて来るのであります。また大盛況の波に乗ることの出来る切符を持っていることを忘れてはなりません。

また大自然界の熱も光も誰彼なく平等に与えられているのであります。

万物もまた平等なのです。自分自体の正しい努力の一念力が、自分自体を幸福にする乗車券であり、平穏も波動の変化も大自然生命本体は平等に幸、不幸を与えているのです。

起伏の波形・組み合せが違うだけなのです。

幸・不幸は自分が定めているのであり、魂の修練なのであります。

自分のみが幸福でない、自分のみが不幸者ではない。正しい反省の冥想は、魂を磨き、人間性を高揚し、真の人間に成長して行くものであります。

自分の波動を知ってこそ、正しい進路を見付け出すことが出来るのであります。

第七章　男女の波動

現象界における肉体生命は魂修行の目的を達するために造くられた仮の姿であり魂、流転の仮の宿であります。

男女の陰・陽の調和によって中性として子供が生れ魂の宿（舟）を誕生させるのです。

総て大自然生命本体より与えられている本能であります。

恋愛も結婚も因念因果によって定められているのです。

それは魂の流転における、自分自身の潜在意識の中にきざみ込まれていることを知らなくてはなりません。因念因果によって、結ばれている男女自身が、自分自身の調和を忘れて、なやみ苦しむことが多いのである。

それは意識の感応度が低いために、不調和な結果が生れて来るのです。

自我我欲が不調和をつくりだすのであるから、自分の波動を知ることも、調和をつくるために良いことであります。

（1）恋愛の波動

自分の生年月日が同属の場合恋愛しやすい。

例えば、9月生れは　9陽㈠であるから　3陽㈾　6陽㈣　9陽㈠　12月は3陽の場合同属の位置の波動を持っているために調和しやすいのであります。

生れ日が10日だとしますと、1陰㈾であるから　1日4日7日10日即ち陰性の位置の波動を持っているため意見が合うのです。

生れ年・月・日が合致している同性の人々は恋愛しやすいのであります。

しかし、男女は陰・陽自然の波動の組み合せでありますから、同じ年月日生れ（同性の位置の波動）

が結婚に結びつく場合が少いのです。（第三章第三項参照）

例　1　男女の生年月日と波動

男　昭和16年1月29日生　6陽㈣1陰㈾2中㈾

女　昭和19年10月5日　9陽㈠1陰㈾5中㈣

生れ年の太陽の位置が陽性で、生れ月が陰性㈾陰性㈾生日が中性㈾と㈣であるから、地球・月・の位置が同属であります。

このような組み合せは恋愛しやすいのです。同性の位置を持っているため、意見が調和しやすいのです。

外で会っている時は良いのですが家の中で同居するようになると月日に反撥を起す、場合が多いのであります。

別居しているときは、相思相愛であり同居すると反発を起す組み合せです。

また、交際中お互に、長所欠点を知りすぎるため別れる場合が、多いのであります。人生航路の盛衰が同じに来るため苦境の時に調和しない欠点があります。

しかし生年は陽㈣と㈠　生月が1陰㈾と10月1陰㈾で差があり、生日も中㈾と㈣の差があるから救いがあります。

盛衰の波動が男女同時期に来ると苦労する場合が多いのであります。

この組み合せは心中する男女に多い波動です。（生命論を参照）

このような組み合せに限って、冬のリズム赤信号の弱い期間に交際を始めている場合が多いのであります。

恋愛の機会も生れ月の、春のリズム青信号の波動を選ぶべきである。（第三章第二項参照）

例　2　理想的な恋愛

生れ月の青信号春のリズムに交際を始めて生年月日の異性の場合が理想的な組み合せであり結婚に結びつく場合が多いのであります。

男　昭和19年2月8日　9陽(−)2中(+)8中(−)

女　昭和23年6月13日　4陰(N)6陽(N)4陰(N)

このような男女は仲々恋愛しにくい組み合せです。生年が9陽(−)と4陰(N)の太陽の位置を持っており陰・陽・自然の姿であります。

生月の月の位置は2中(+)と6陽(N)で、中陽自然の姿・生日は地球の位置で8中(−)と4陰(N)自然の姿を示しています。

このような組み合せは恋愛から結婚へと進む理想的なリズムを持っております。

男性の弱い波動の時に、女性が強く、また女性の弱い波動の時に、男性が強いリズムを示しており、盛衰の調和がとれているからであります。

しかし、意見の相違が起りやすいのでありますが、結果としては調和される組み合せです。

以上2例から見まして、次の条件が備った交際が良いのであります。

(1)　春の青信号のリズムで交際を始めること。これは将来に幸福な結果が生れることを示している波動です。

(2)　冬の赤信号のリズムで交際を始めないこと。将来の苦難を示しているのです。（特くに女性）

(3)　生年月日が男女陰陽自然の組み合せを理想とすること。

(4)　年・月・日の波動が必ず合致しない組み合せのこと。

それは、常に男性の波動の弱い時に、女性の波動が強い組み合せが良いのです。

前述の四条件を満した男女の交際が結婚につながる、理想的な組み合せであり、友人家族からの反対の出ない交際法です。

同性の交際も自分の波動を知って、自我我欲を慎しむことによって必ず幸福な恋愛も出来るのであります。

（2）結婚と波動

結婚話が春のリズム青信号で来た場合は非常に縁のあることを示しています。

将来具体化を示しており、幸福になれるリズムであります。

逆に、赤信号冬のリズムの時に来る話は将来問題が起ることを示しています。

理想の時期は、春のリズム青信号で話を進めた場合が、まとまりやすいのであります。この場合女性の青信号を主体に考えます。

恋愛の波動と同じように、自分の生年月日の陰・中・陽の組合せが、相手の生年月日の陰・中・陽と同属でない場合が良いのであります。

夫婦は、調和するためにエネルギーの交渉がありますので、陰陽、互にバランスがとれている場合の組み合せが良いのです。（第三章参照）

また、年の位置・月の位置・日の位置が男女、異り波動の上段と下段に別れていることが理想であります。即ち男性の強い波動の時に女性が弱く、女性の強い時には、男性が弱い波動に位置するような、組み合せがよいのであります。

一年を通じて家庭の中に常に男女いずれかの、波動の強い方がいることは非常に良いのです。

3 陽(+)　4 陰(N)

家庭争議が起っても、強い青信号春のリズムに入っている者が、不調和を打破ることができるのであります。

1 陰(+)　8 中(−)

しかし自分自身の心即ち意識が自我我欲を調整出来る家庭は心配ないのであります。調和されている、家庭であっても、人間は肉体を持っている以上、ながい月日にはトラブルが生じるものであります。

8 中(−) 男性　3 陽(+) 女性

トラブルは必ず赤信号冬のリズムの時に起りやすいことを知っておく必要があります。

起り得る、波動を知ることにより、むりした生活をしてはなりません。

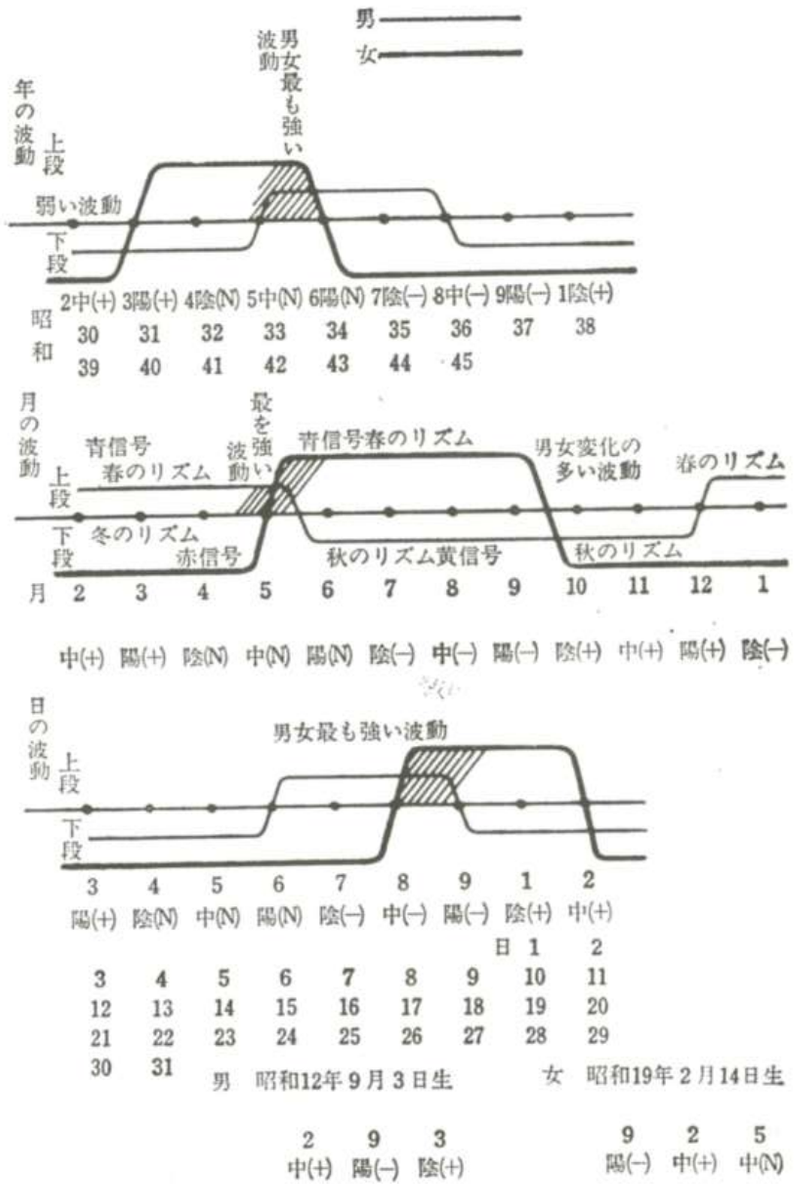
信ずると信じないに拘らず、変化の波は循環して来るのであります。

例1のような男女の組み合せの場合を考えて見ますと次のような結果が出ます。

年の位置を見ますと9陽㈠・1陰㈪・2中㈪の年は男女ともに不調和の時が多いのであります。

このような年に、男女に拘らず思いがけない不調和な結果が生れやすいから、常に自分の意識を清らかに保ち、自我我欲を捨て、神の光につつまれた生活をすることが必要であります。

4陰㈫・5中㈫・6陽㈯・7陰㈭・8中㈠　の年の位置は男女ともに、強い波動の時でありますか



生年・月・日の波動　第57図

らリズムに乗った環境を造りだすことが出来ます。

5中(N) 6陽(N)の年の位置は男女ともに強い波動の年でありますから、見合い、結婚には最適のであります。

月について考えて見ますと、男性の赤信号冬の波動の時に、女性が青信号春の波動でありますから理想的な組み合せであります。

見合い・結婚の時期としては、5中(N)・6陽(N)の月が最適であります。

女性としては1陰(+) 2中(+) 3陽(+) 4陰(N)の月は、見合い・結婚を延ばした方が良いのです。

冬の赤信号の波動は将来の危険を示しています。

この男女の組み合せで10月1陰(+)・11月2中(+)の月は変動期で波動の弱い時ですから、特に気をつけて生活をすることであります。

年月の組み合せは理想的な波動であります。

日の波動について考えますと、6陽(N)・7陰(−)・8中(−)・9陽(−)・1陰(+)・2中(+)の日が強い波動を示しております。

特に8中(−)・9陽(−)の日が最も調和されている日であります。このような時に見合い、結婚が理想であります。

男女の陰陽のバランスも、年・月・日の位置の波動も理想的な組み合せを示しています。
このような男女は家庭内に入ると、離婚のようなことは、殆んど起りません。
但し、家庭を思う一念から意見の食い違いが起りますが、結果においては調和します。
組み合せが、大自然の理法、陰陽のバランスがとれているからであります。
性格が違うのではないかと疑問を持つことがありますが、心配のない組み合せです。
弱いリズムが年月日の重なっている時は、特に不調和な結果が起りやすいのであるから自分の心即ち意識の世界を調和することに、心掛けなくてはなりません。

例　2　不調和を起しやすい組み合せ

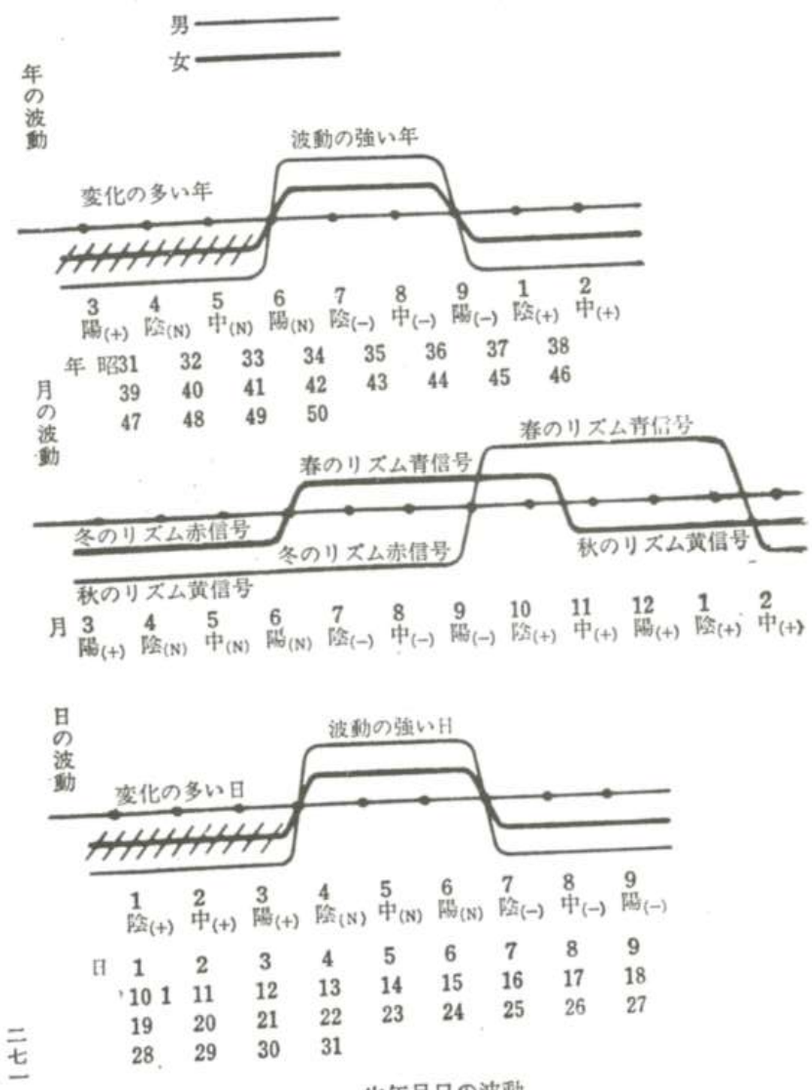
男女の生年月日が全部同性の場合は大自然の理法から見て不自然な組み合せであります。

男	昭和	13	6	10
		3 陽(+)	6 陽(N)	1 陰(+)
女	昭和	13	3	19
		3 陽(+)	3 陽(+)	1 陰(+)

生年が男女共に3陽(+)と3陽(+)　反撥
生月が男女共に6陽(+)と3陽(N)　反撥
生日が男女共に1陰(+)と1陰(+)　反撥
同性反発の組み合せでありますが、恋愛型のコースをたどる人々に多いのです。

交際中は互いに強い愛で結ばれているのでありますが、一戸の家庭に入ると反発を起し、不調和な結果が出るのです。考え方も同じような男女であり、離婚の場合も考え方が一致する組み合せであります。

別居して、互いの道に進んでいる夫婦に多い組合せです。
このような夫婦には子供が生れて来ると変った組み合せになります。
子は鎹（かすがい）ということになります。
大自然には必ず不調和に対して、調和される原因が与えられているのです。
若し自分達が、このような組み合せであっても、心配することはないのであります。五体の支配者は自分自身であることを忘れてはなりません
自分の波動を知って、常に調和のとれた共同生活をしていることによって、必ず幸福が得られるのであります。
男女の波動を図示して考えて見ましょう。
この男女の波動を見ると三年ごとに人生航路の波動に、盛衰の変化を与えられます。
強い波動の時に力を調和して行動し弱い波動の時を乗り切るように考えなくてはなりません。完全に調和された夫婦でありますと、立派な家庭を築き天才的な子供に恵まれることになります。



生年月日の波動
第58図

大自然の意識（神）と調和されている家庭は、幸福に満ちた生活を送ることが出来るのであります。慈悲心と愛の生活が必要なのであります。生年の波動を見ますと、3陽(+)・4陰(N)・5中(N)・6陽(N)の年には不調和が起りやすいのです。男女ともに、同性の波動を持っているために、7陰(−)8中(−)9陽(−)の年に男女調和して、荒浪に負けない、家庭を造りあげておくことであります。

自己保存自我我欲の不調和は家庭の破壊を来たすのであります。

苦しい時に、一家心中するような考え方を捨てなくてはなりません。

例え現象界より、苦難をのがれようとも霊界は甘い世ではありません。地獄に落ちて更に苦しみを受けるのであります。現世において苦の次は楽も循環されて来るのであります。

決して与えられている寿命を縮めるような、考えを持ってはならない。

人間は肉体を持ち魂の修行をしている生命であります。

月の波動を見ますと、3陽(+)・4陰(N)・6陽(N)の月は冬のリズム赤信号と黄信号であるから、このような月は不調和を作ってはならないのです。6陽(N)・7陰(−)・8陰(−)・9陽(−)・10月1陰(+)と上昇の波動であります。

一年を通じ、前半に苦しい波動があります。後半は強い波動に接しますから、このような月に躍進することを忘れてはなりません。

赤信号冬のリズムは、誰も循環して来る波動であります。必ず強い波動が来ることを知ることであります。

日の波動も、また、月と同様下段の波動の時は、気をつけて強い波動の日に積極的に行動をするよう努力して下さい。

男女生年月日の組み合せは、自然の法に従っているのであり多種多様でありますが、二例を基本にして考えて見て下さい。

自分の過去を振りかえって考えて、見ると心ず理解出来ること思います。

自分自身を良く知ることは、人生航路の勝利者になれるのです。

幸不幸は自分自体の行動の蓄積によって、定められていることを悟らなくてはなりません。

いかに良い男女の組み合せであっても、自分が不調和な生活をしている人々は、幸福を得ることが出来ないのであります。

自分自身を自覚して、調和のとれた家庭を築かなくてはならないのです。

不調和な行動は、自分自体におそって来ることを、忘れてはならないのであります。

第八章　事業と波動

事業の経営に対して、卓越した経営能力を持った経営者でも、大自然の四季同様に盛衰の波動を無視することは出来ません。

経営者の品性と慈悲心は、労使の対立を防ぎ、精神・肉体・経済的調和のとれた事業体は、心ず発展し、苦難の波を調和しています。

労使の不調和は滅亡に至るのであります。その不調和な波動は殆んど経営者の弱いリズムの時期に循環されて来るものであります。

現代の経営者は、事業の発展に命を賭けて、従業員との調和を考え、満足した人生を送ることに生き甲斐を感じている人が多いのであります。そのためには、如何なる苦難も甘受して、一念力を持って日進月歩の経営法を実行しなくてはならないのであります。それも己れの修業であります。

利益の独占は、労使の対立を造り、利益は労使に循環されてこそ、大自然法に帰納されるのであります。

しかし、如何に優秀な経営者であろうとも、社会の経済変動や社内各個の諸事情により、自分自体

不可解な事件にぶっつかり、どうすることも出来ない事態が起ることがある筈であります。

このような、事態で自分を見失う経営者はそれこそ落伍者であり、非運に終るのであります。

経営者の内部組織の波動や、各個人の能力によっても社運の盛衰を左右するものでありますが、最高責任者の不思議なリズムが、大きく影響することを見逃すことは出来ません。

また、如何に社会的に偉大な実力者であっても大自然の循環と同じように、自分自身のリズムの変化を調和させることは、非常に困難であります。

社会状勢の変化や、会社の波動を未然に見透し、自分のリズムと他の経営陣の組み合せを考えて経営することにより、不況を乗り越すことが、出来るのであります。

自分の、リズムを知らない経営者は、一つリズムを外すと却って裏目の循環をして、益々苦難に落ち入るのであります。

それは己れが正法を悟っていないためであります。

(1)　経営者と組織

経営陣の中で派閥の出来るような対人関係は、必ず組織を破壊して、会社を倒産させる、大きな原因となります。

今まで倒産した大企業体の多くは、経営陣の派閥が原因を作る場合が多く、業績悪化が更に内紛を呼んでいます。

苦境の時程、和衷協同、全員が一丸となって苦境突破に邁進すべきであります。

経営力・生産力・販売力の三要素を確定づけるものは、労使協調によって生み出すことが出来るものであります。

ところが、大自然界の万物には総て物の中心があります。原子の核、細胞の核、家庭の両親、皆中心があって調和されています。

会社の中心は社長である。

この中心である最高責任者の波動が、一番社運に影響するものです。最高責任者の弱い波動の時に、他の協力者の波動の強い組み合せが理想であります。

今実例を以て説明します。

一九六四年　2中(十)の年における二、三の会社について考えることにしましょう。

1　重電機メーカーF会社

この会社は歴史のある日本の重電機メーカーの一つであります。

経営者の持つ波動が弱いリズムに入り、会社内外の諸問題から遂に役員の交替を余儀無くされたの

	（生年	月	日）
会長 W氏	6 陽（N）	2 中（＋）	3 陽（＋）
旧社長 K氏	5 中（N）	5 中（N）	4 陰（N）
新社長 I氏	8 中（－）	2 中（＋）	4 陰（N）

であります。

不況乗切り策としては一つの方法であり、躍進する為には良い結果が生れるのです。

役員の波動を見ると、

会長の生月は2中(＋)・旧社長5中(N)・新社長2中(＋)　同属で合議の姿であり、相互協力の姿であります。

新旧社長は生年月日が同属であり、以心伝心的な組み合せを示しています。

このような組み合せを馬が合う間柄というのであります。（波動の法則一(二)(三)　を参照）

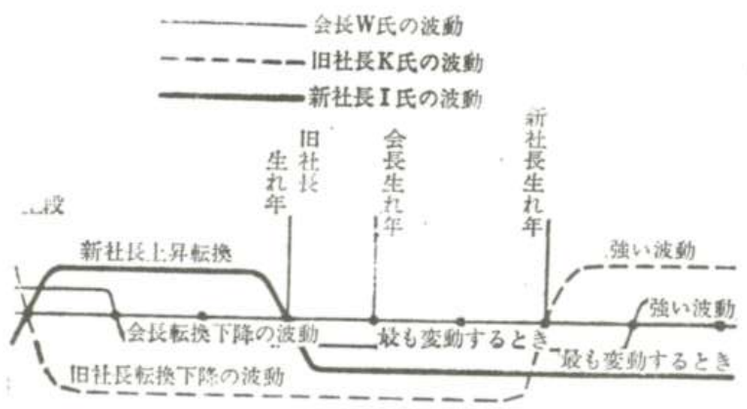
中性分が多い旧社長は人望によって人から突き上げられて指導者になる波動を持っているのでありますが、従業員や対外的事象に対し、中道的な性格の人で、経営者として決断に欠ける点があるのです。

自分自体より、他人を考えることを第一とする波動の位置を持っている人格者であります。

しかし、波動のリズムは無情であり、僅かな心の隙間に苦難な波が近寄って来るのです。

それは自分自身の心の迷いと、波動を殆んどの人は知らないからなのであります。

諸問題悪条件が重ると、自分を見失うからであります。



	2	3	4	5	6	7	8	9	1
	中(＋)	陽(＋)	陰(N)	中(N)	陽(N)	陰(－)	中(－)	陽(－)	陰(＋)
昭和	30年	31	32	33	34	35	36	37	38
	39	40	41	42	43	44	45		

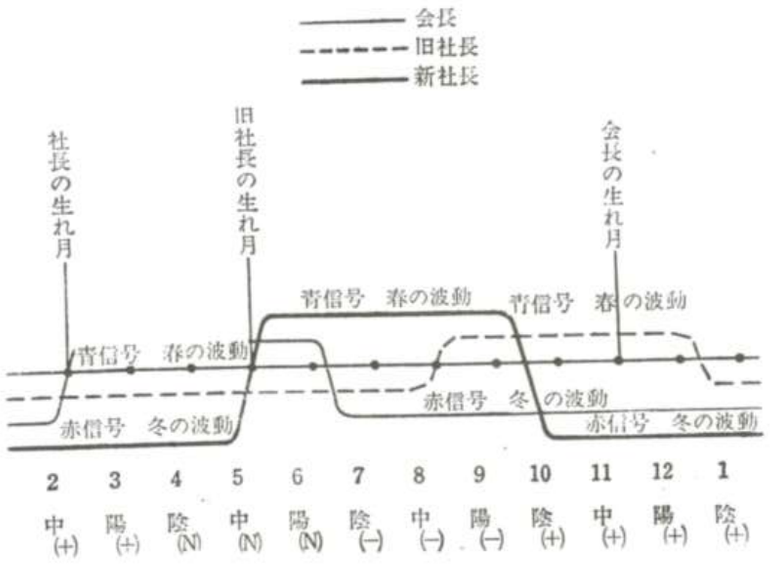
生年の波動　第59図

さて年の波動を考えて見ましょう。

昭和39年は2中性(＋)で、旧社長K氏にとっては同属反発の年であり、苦難な諸問題が結果となって現象化される時である。新社長I氏は逆に上昇転換の年であります。

月の波動を見ると、三者共に中性の同属であり、旧社長の生れ月は5月であるから2月は台風的突発現象の起こる月、秋の黄信号でT発動機の会長に就任した時、昭和36年　8中(－)また、転換同属の年でもあった。39年2月・2中(＋)の年で、2中(＋)の月に会長を引退し、会社更正法を適用される運命に至ったのである

またO電機も4月14陰(N)のリズムにT社と同じ運命に見舞われたのです。



生月の波動
第60図

自分の悪い波動で翻弄され、昭和39年2中(+)の年に会長であるW氏はF会社の社長に返えり咲き、その月が11月生れ2中性(+)赤信号冬の波動、W氏も自分の悪い波動に引き廻わされた訳で、本当に不運というより外ないのであります。

このF会社の苦難の中でW社長は引退して、K工業社長であったI氏と交替したのでありました。

新社長I氏を考えて見ると次のようになります。

就任の年は昭和39年、2中性(+)の年で、I社長は8中性(−)の位置で生れています。

生年と就任の年が同属であるから転換の年であり、中性(+)と中性(−)の差があるから反発を減少させています。また上段の強い波動に入る転換ですから苦難の中より必ず社運が上昇する姿であります。

昭和40年は3陽性(+)の位置であるからI社長の生れ年8中性(−)とは波動差が強い年である（年の波動図参照）

生れ月は2月で2中(+)であり、赤信号2・3・4・5月冬のリズムを過して6月青信号春の指針で、社長に就任されたことは、F会社の将来に光明がさしたことを示しております。

I社長の生命力は、8中(−)・2中(+)・4陰(N)の年月日の波動を持っており、(−)(+)(N)の三性を持っていることは、意思力も強く、判断力も強く、中道的性格も理想的なリズムを示しています。中性の年、赤信号の月及び同属の日を特に警戒することによって良い転換が計られることになります。

以上のように、経営者である役員間の波動は殆んど同居の組み合せが多いのですが、年を通じ、月を通じ、常に強い波動の役員がいることが理想であります。

役員の波動が調和されていることが、会社の発展に如何に作用するかは、多くの実例がその正否を示しています。

2　日通事件と役員の波動

原因と結果の循環は、大自然界における春夏秋冬、昼夜のリズムと同様に、原因の善悪を問はず結果となって現象が現われるのであります。

如何にリズムの合致している、経営者の集りであっても、自分の我欲、自己保存でありますと、天知る、地知る、人知るで、大自然生命本体の波動のリズムと一致する事が出来ず、自分の自我だけを頼り、自分自身を見失ない善悪の因果の現象を阻止することが出来なくなるのであります。

七万五千人の社員を擁するマンモス会社、日通の最高経営指導者の無軌道も、社会の批判を受けるべき時が、来たのであります。

経営者としての教養と品性を失い、会社を私物化した、福島社長以下五名の持つ因果のリズムを説明することにします。

如何なる結果も原因が無くして生ずるものではありません。今、悪い結果が生じる時は自分のこの

社長　福島俊行氏	明治	28 年	3 月	23 日生		
	5中(N)	3陽(+)	5中(N)			
副社長　小幡清氏	明治	36 年	2 月	20 日生		
	4陰(N)	2中(+)	2中(+)			
副社長　池田幸人氏	明治	32 年	3 月	5 日生		
	9陽(−)	3陽(+)	5中(N)			
副社長　西村隆男氏	明治	35 年	9 月	15 日生		
	3陽(+)	9陽(−)	6陽(N)			
副社長　入江庸晃氏	明治	35 年	3 月	3 日生		
	3陽(+)	3陽(+)	3陽(+)			
事件逮捕	昭和	43 年	4 月	8 日生		
	6陽(N)	4陰(N)	8中(−)			
業務上横領罪で起訴	昭和	43 年	4 月	29 日生		
	6陽(N)	4陰(N)	2中(+)			

世に生れたその時の太陽の位置・月の位置・地球の位置が、私達の宿命的絶対位置を示しており、一定のリズムに従って盛衰の変化が循環して来るのであります。

悪い結果は自分に定められているリズムによって現象となって現われて来るものです。

年即ち太陽の位置、月即ち月の位置、日即ち地球の位置を基にして、この大自然の波動が各人の盛衰にどのように現らはれるか示しています。

福島社長は太陽の位置が中性(N)の年に生れており、図示のように最も弱い昭和43年、6陽(N)の年を示しています。小幡副社長も同様4陰(N)の年に生れており、5中(N)・6陽(N)・7陰(−)まで弱いリズムの年に当っている。

池田副社長は9陽(−)の位置で生れ、生命力の強い昭和42年とは異り下降運になり、昭和43年は6陽(N)で転換の年である。

西村副社長と共に3陽(+)の位置の年に生れており、苦難な原因を過去に作り上げ、昭和43年は、6陽(N)転換の年で、原因結果の生ずる年である。

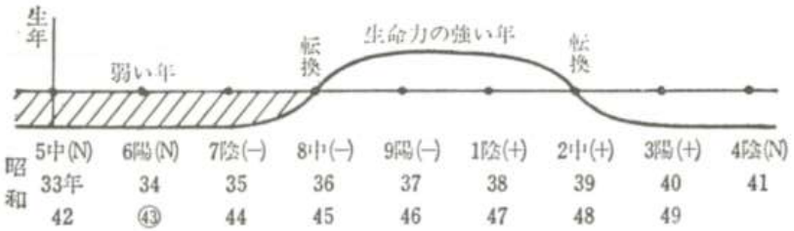
五者何れも生れ年のリズムと昭和43年6陽(N)は弱いリズムであり、大転換の年を示しています。

月について述べますと五者のリズムは次の通りであります。

日通の問題が終末にきた月　3月　3陽(+)

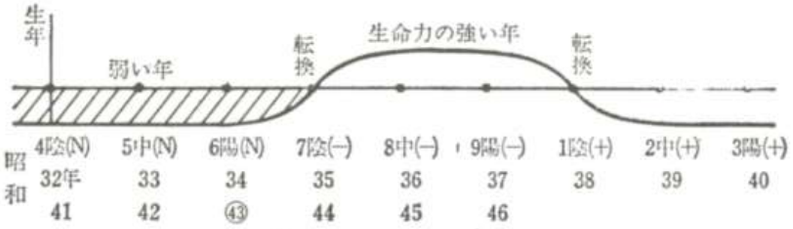
① 福島社長　明治28年生

5中(N)太陽の位置のエネルギー



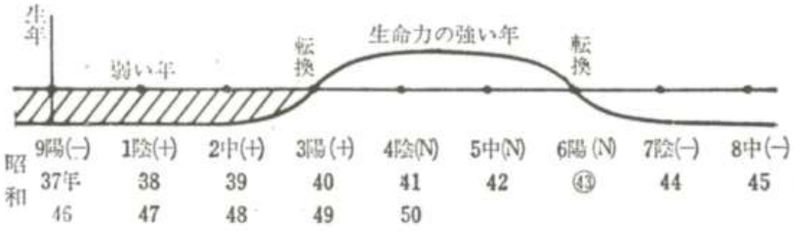
② 小幡副社長　明治36年生

4陰(N)太陽の位置のエネルギー



③ 池田副社長　明治32年生

9陽(−)太陽の位置のエネルギー

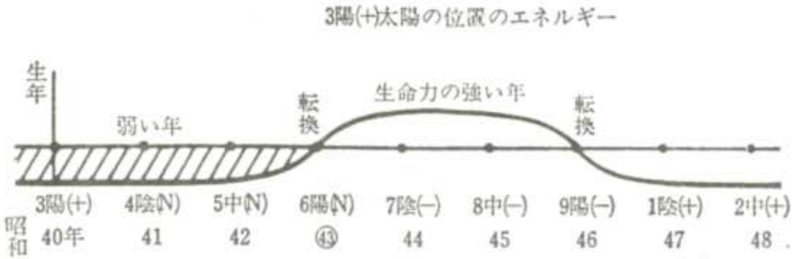


生れ年の波動

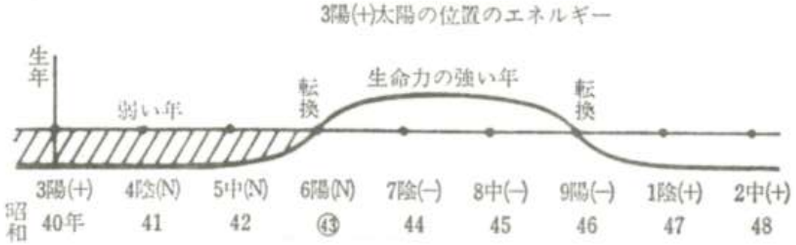
第61図

第62図　生れ月の波動

④　西村副社長　明治35年生



⑤　入江副社長　明治35年生



逮捕された月　4月　4陰(N)

この図を見ますと、西村副社長は春のリズムの時でありますが、問題の起きた時は3月、西村社長の生れ月は9月で同性の月であり、同性同屋は相反発のリズムであるから、突発的な変化の起きる時である。他の四人は全員赤信号のリズムを示しています。

月の位置のエネルギーの弱い時には、悪い結果が出る時であります。

苦難な姿を示しています。私達の絶体位置この世における生年月日は、その変化の姿を未然に知ることが出来るのであります。

五人の役員のリズムが同じであることは、善悪に拘わらず、同じ姿で循環して来るものです。生れ日もまた同じ変化を示しています。

一つの家族も国家も会社の組織もこの組み合せと同じリズムを持っていることは当然であり、盛衰のリズムを良く考えて人事を組むことが心要です。

悪い結果が生ずる時も、全員が衰退の年月日に現象となって現われることを示しました。

3　経営者の理想的組み合せ

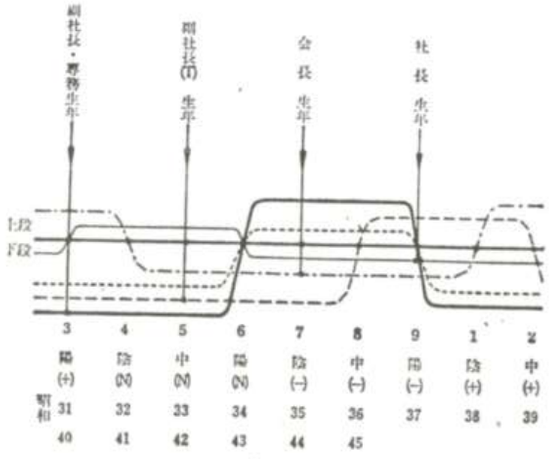
自動車産業の花形T社について考えて見ると役員の構成は次の通りであります。

（一九六四年における組み合せ）　2中性の年

役員の生年月日における位置は常に波動の強い人が一年を通して入っています。

	生年	月	日
会長(I)	7 陰(−)	11月 2 中(+)	7 陰(−)
社長(K)	9 陽(−)	12月 3 陽(+)	6 陽(N)
副社長(T)	5 中(N)	9 陽(−)	3 陽(+)
副社長	3 陽(+)	3 陽(+)	8 中(−)
専務	3 陽(+)	6 陽(N)	1 陰(+)

昭和41年現在



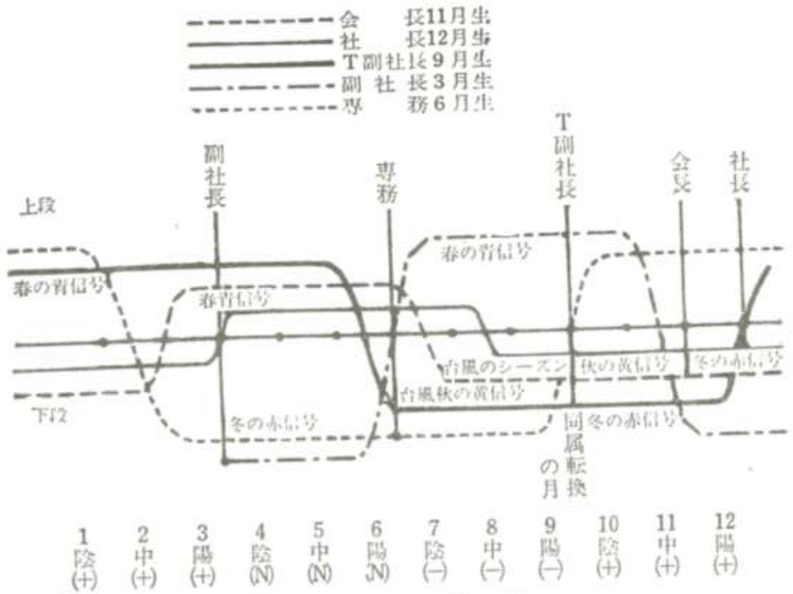
生命の波動
第63図

しかし、殆んど社長と同じ波動の位置を持っていますから、意思の統一が出来る理想的な組み合せであります。会長は、その上で判断を下す形である。丁度先生が自分の教え子を見守っているような姿を示しています。

社長は、陽性の(−)(N)(+)を持っていますから、意思力は強いのですが、同属の生年月日のため、体力的には良否の波が激しかった人であったと思いますが、思いきった性格を持ち生命力は頭悩的であります。

元総理大臣池田勇人も陽性（(+)(N)(−)）の生年月日の位置を持っていたのであります。

年の組み合せから考えて見ますと、会長・副社長・専務の四人が弱い波動の年にいろいろな変動が起こるのです。



生年の波動　第64図

その波動を図示すると盛衰の曲線が解明されます。

昭和42年は社長一人のみが上段の波動を示し、他の四人は弱い波動を示しています。

このような波動の波が下段階にあるときは、変動が起こりやすいのです。

社長は年・月・日が陽性のため、更に強い他の重役の波動に影響される場合があります。

しかし、全般として強い波動の組み合せであります。また月日の波動も考えて見ましょう。

一九六四年現在

弱い波動の月は7・8・9月で、下段に波が下っていますが、専務の波動が上段の青信号に変っています。しかし、9月は同属転換の月でありますから、対外的、人事的に変化が生じ

やすい時で、下段の波が集っている時に、思いがけない変動が生じます。

年の波動は、昭和42年頃が変動の時期に当る。このような年は精神的な面が多く作用します。

組み合せとしては盛衰の波動が常に強い人が年間を通しているのです。

T副社長の生命力は、9陽(−)の月・3陽(+)の日・年が5中(N)であり、異性の5中(N)が非常に良い組み合せを示し、実力者となります。しかし5中(N)・6中(N)の時が変動期であります。

事業は人なりと諺にありますが、波動のバランスが互にとれている組み合せが良いのです。

発展する会社の組み合せは、心ず大自然の理法に合致しているものです。

この組み合せの中において、精神的に正しい正法を悟って結合されている組織は、不敗であり、隆盛を続けるのであります。

第九章　受験と就職

私達の人生航路において、最も重要な基礎的な問題であります。

いずれの問題に対しても、常日頃の努力が、結果となって出る試練の時であります。

正法を信じて、自分の心を調和することによって問題は解決されるのであります。

しかし波動を知ることによって、自分がわかります。
私達の日本は殆んどが三月と二月が試験に当ります。
そのために12月3陽(+)1月1陰(+)・2月2中(+)・3月3陽(+)・の月に生れた人々は、赤信号冬のリズムに当ります。
そのために苦労することは人一倍であります。人並以上の努力が心要であります。学期末の3月の成績が余り良くないことが証明します。
弱い波動が作用するためです。強い青信号の時に努力・努力の結果、赤信号、冬の波動を乗りこえることが出来るのであります。
誰も強弱の波動がありますから、努力の配分を考えなくてはなりません。年中、学問ばかりでは(はりつめていること)体のためにも良くない結果になります。
波動から見ますと7・8・9・10・11月生れの人々は3月は青信号であるから、波動が強いために運が強い結果が生じます。
2学期の12月は、余り良い結果が出ませんが、赤信号冬の波動のため弱い時であります。
アメリカのように、秋の入学の場合は、2・3・4・5月生れの人々が、青信号春のリズムに迎えられているために、波動の強い月にめぐまれます。

赤信号冬のリズムに、就職・入試等は、私達にとっては弱い波動であるから人一倍の努力でカバーする以外にありません。
自分が正法を悟って、神の光を受けることにより、心ず保護せられることを忘れてはなりません。
努力することは、自分の魂を磨くことになりますから、私達にとっては良い修行であります。
苦しみがなくては、楽しみがわかりません。
就職の場合も、赤信号冬の波動をさけることが心要であります。
殆んどの人々が、会社を退職する時は、赤信号冬のリズムで辞める場合が多いのであります。
生年の波動と辞める年の波動の弱い時が、重なるものであります。
このような年月はさけなくてはなりません。リズムの強い人々は必ず、弱い波動の年月を過して強い波動の年・月に変っています。
赤信号冬のリズムで入社しても必ず会社に満足しない人々が多いのであります。
自我我欲の不調和が原因であり、自分自身がそのような結果を造り出すのであります。
正法を悟ることによって、解決致します。理想としては青信号春のリズムに入社することが良いのです。
友達も良い人々が出来ますし、縁のある人々になるのであります。

強い波動の時に原因を作り、弱い波動の時に結果を出すような、努力が必要であります。

親しい友達は必ず、自分の生年月日の陰中陽、いずれか合致した生年月日を持っています。これは原理を読めばわかります。

恋愛などは、殆んど生年月日の陰中陽いずれかが、自分と合致しています。

外の友達は合致していた人々が、特に親しみを感じます。

会社の友達も同じことがいえます。その点、会社の上役が同じ陰中陽を持っている場合は、引立が良いことがあります。

いずれにしても正法を悟って、日々の行動を正すことによって、総て解決することを知って下さい。

第十章　現象の実例

1　日蓮聖人と波動

聖人は安房（千葉県）小湊の貴名重忠邸で承久四年西暦一二二二年二月一六日に生れました。

嘉禄十三年　西暦一二三七年一〇月八日清澄山で剃髪し、建長五年　西暦一二五三年四月二八日清澄山において立宗宣言を行いました。

日蓮宗はこの日を以て開宗の日と定めております。

この頃、地頭の東条景信が日蓮聖人の庇護者であった領家の尼の領地を侵略したので、日蓮聖人は彼と争って取り戻しました。

この為に聖人は、念仏信者でもあった、景信に憎まれるようになり、鎌倉に移りました。

建長九年　西暦一二五七年二月一四日に父妙日が逝去しまし、日蓮聖人はこの地に草堂を結び、街頭に出ては当時勢力のあった念仏宗、禅宗、真言宗、律宗等に対して、厳しい批判をして歩いたので、遂に四宗の僧侶や信者達から、迫害を受けるようになりました。

それというのも、その頃は国の政治は乱れ、人々の心は餓鬼・畜生道におち、自分の事以外は考えず、関東諸国には疫病・大風・地震等の天変地変が、次々と起こるのは、原因を教典の中より探り出し、法華経の信仰が沈滞しているからだと称しておりました。

そして、若しこのままの状態で放置したら、内乱と他国からの侵略を受けるだろうと説いて、この趣旨を「立正安国論」にまとめ上げ、時の執権、北条時頼に進言したのであります。

ところが、この進言は採り上げられないばかりでなく、逆に念仏信者達の恨みを買い、松葉ケ谷の

庵室を焼打ちされてしまいました。

これが、後世松葉ヶ谷の法難と言われています。

この時は、西暦一二五九年八月二七日の出来事でありました。それから鎌倉幕府によって追放され、伊豆国（伊東市）に流された時は　西暦一二六一年五月一二日でした。

日蓮聖人は、放免を受けた後、西暦一二六四年に再び安房に帰りましたが、東条景信に小松原で襲撃を受け、危うく一命を取り止めるような難に遭いました。これが、小松原の法難であります。

それからまた、聖人は鎌倉に戻り、熱心に法華経の教えを説き広め、弟子や信徒も出来ました。文永五年西暦一二六八年蒙古の使者が来たので、日蓮聖人や弟子、信徒等は、立正安国論で説いた他国の侵略の予言が的中したので、法華経の信徒の行動も急進化して行きました。文永八年　西暦一二七一年九月一二日再び聖人は捕えられ、竜の口でいよいよ打ち首ということになりましたが、危うく危難を逃れることが出来たのであります。これが日蓮聖人の竜の口の法難と言われています。

文永八年　西暦一二七一年一〇月一〇日遂に佐渡へ流罪の身となり、その時、弟子や信徒の中には逮捕、監禁される者、所領を没収される者まで出ました。聖人は最初佐渡の塚原におりましたが、一の谷に移り、「開目妙」「観心本尊妙」を述作して、その教理を体系化したのであります。

文永一一年　西暦一二七四年鎌倉にまた戻り、北条時宗の被官、平頼綱等と会見して、蒙古の問題

やその他のことで大いに論じましたが、遂に聖人の説は容れられず、身延山に引きこもりました。

弘安二年　西暦一二七八年一〇月一二日出世の本懐であった本門の戒壇を建立しました。

弘安五年　西暦一二八二年健康を損ね、九月常盤の国（茨城）の温泉に湯治する為、身延山を下山し、そして一〇月八日に、日什・日朗・日興・日向・日頂・日持の高弟六人を本弟子に定め、各地元布教の中心者にしました。

弘安五年　西暦一二八二年一〇月一三日　日蓮聖人は六十一歳を以てその生涯を終えたのであります。

以上述べた法難は聖人のリズムを明かに示しておるものです。

これ等の諸難を根本数に直して三体現象に代入し、大自然生命本体の波動と日蓮聖人の持つ自分のリズムを対照・検討して見ますと、次のようになります。

日蓮聖人の波動

日蓮聖人は立宗宣言の月を自分の赤信号のリズムの時にしております。

しかも、生れた日、七日7陰性(−)と同属同性(+)の1陰性の日に宣言したことは、将来の苦難を招く姿を示しております。

日蓮聖人の生年月日　西暦 1,222 年 2 月 16 日
7陰(-) 2中(+) 7陰(-)

			生れ月 春夏秋冬の信号
生年月日	西暦 1,224 年 2 月 16 日 7陰(-) 2中(+) 7陰(-)		
蒙　古	西暦 1,237 年 10 月 8 日 4陰(N) 1陰(+) 8中(-)		青信号～黄信号に入る
立宗宣言	西暦 1,253 年 4 月 28 日 2中(+) 4陰(N) 1陰(+)		赤信号
父の死	西暦 1,257 年 2 月 14 日 6陽(N) 2中(+) 5中(N)		赤信号
松ヶ谷の法難	西暦 1,259 年 8 月 27 日 8中(-) 8中(-) 9陽(-)		青信号
伊豆流罪	西暦 1,261 年 5 月 12 日 1陰(+) 5中(N) 3陽(+)		赤信号 転換の月
竜の口の法難	西暦 1,271 年 9 月 12 日 2中(+) 9陽(-) 3陽(+)		青信号
佐渡流罪	西暦 1,271 年 10 月 10 日 2中(+) 1陰(+) 1陰(+)		黄信号

出世の本懐　西暦 1,278 年 10 月 12 日 青信号より黄
9陽(-) 1陰(+) 3陽(+) 信号に入る

聖人死去　西暦 1,282 年 10 月 13 日 青信号より黄
4陰(N) 1陰(+) 4陰(N) 信号に入る
（台風的現象）

立宗宣言より　34年　7陰(-)　年令　61　才　7陰(-)

父の死去も聖人の赤信号冬のリズムの時であります。

松ヶ谷の法難は、聖人の生年月日とは異性であるため、反発のない良いリズムであり、しかも、春のリズム青信号でありました。

このようなリズムの時に奇跡と言われるものが起こるのであります。

伊豆の流罪は、赤信号の、五月で生れ月の二月、2中(+)と同属同性で、反発的現象が起こって、この時の苦難は大変であることを示しております。

竜の口の法難は、陰・陽のバランスの良い時であり、九月は青信号・春のリズムで、奇跡が起こる時であります。

日蓮聖人は、釈迦の仏教に通じた法華経の行者であり、また仏教哲学者であります。

偉大な生命力を持っていたために、青信号のリズムには大自然の波動と完全に一致し、奇跡が起きたのであります。

この年の一〇月に佐渡に流されましたが、その日も生れ日と同属

の陰性でありました。

佐渡の流罪から鎌倉に戻り、時宗の被官に蒙古問題等でいられなくなり、身延山にこもったが病気となり、常盤の国へ湯治に行くため下山し、その途中、池上の本門寺に入りました。

この時、日蓮聖人は黄信号、秋のリズムで、台風、突発的現象の起こる時であります。

その年西歴一二八二年4陰(−)で、生れ年7陰(−)と同属であり、また生れた日も陰性の同属です。

また年令六一才七陰(−)、立宗宣言以来三十四年、7陰(−)の時、日蓮聖人は生涯を閉じたのであります。

日蓮聖人の法難を受けた時は、何時も青信号で、その苦難の中に、自分の良いリズムに乗っておりました。

しかし、常に困難に襲われる原因は、日蓮聖人の意識が強いために、反発が起きたのであります。

闘争意識が不調和を招き、他の宗教を邪宗と決めつけ、常に対立の中に生活をしていたことは、日蓮の真実ではないと思います。仏教は万物との調和であります

日蓮聖人が学んだ仏法を説く人々の心が、正しい真の正法を得てこそ、真の日　聖人の教学を会得することが出来るのであります。

私達人間が何んの目的によって、この現象界に生れて来たかを自覚しなくてはならない。

自覚することによって大自然生命本体神（仏）に調和し、正しい生活が出来るのであります。

心の中に対立闘争を捨てない限り、心の安らぎを得ることが出来ないことを、悟らなくてはなりません。

2　全日空　元社長の波動

岡崎さんは、全日空事故の遺族への責任感と、経営者としての〃スジ〃の板挟みに苦悩し、更に「経営者の無過失責任」と業界再編成を唱える政府筋、「私企業へのスジ違いの圧迫は受け入れられぬ」と頑張る岡崎社長も、「辞めて、済むものなら、こんな易いことはない」といわれ、責任感の強い筋の通った経営者の一人であります。また信念の人でもあり、実行の人でもあります。

しかし、定められた自分のリズムは如何することも不可能でありました。

これは人間一人一人に決められた、大自然への波動であります。この大自然の波動に自分のリズムを調和させることにより、不可能であることも可能になるのであります。

そのために一人一人が自分のリズムを知ることが一番大事なことです。

岡崎社長の波動

陰性分の強い生年月日であり、頭のきれる財界人であります。

美土路昌一氏の招きによって全日空社長となった。

岡崎社長　生年月日			
明　治			
	30年	4月	16日
	7陰(−)	4陰(N)	7陰(−)
美土路社長　生年月日			
明　治			
	19年	7月	16日
	5中(N)	7陰(−)	7陰(−)

美土路氏とは同郷であり「この人なら」と白羽の矢を当てたのでありました。

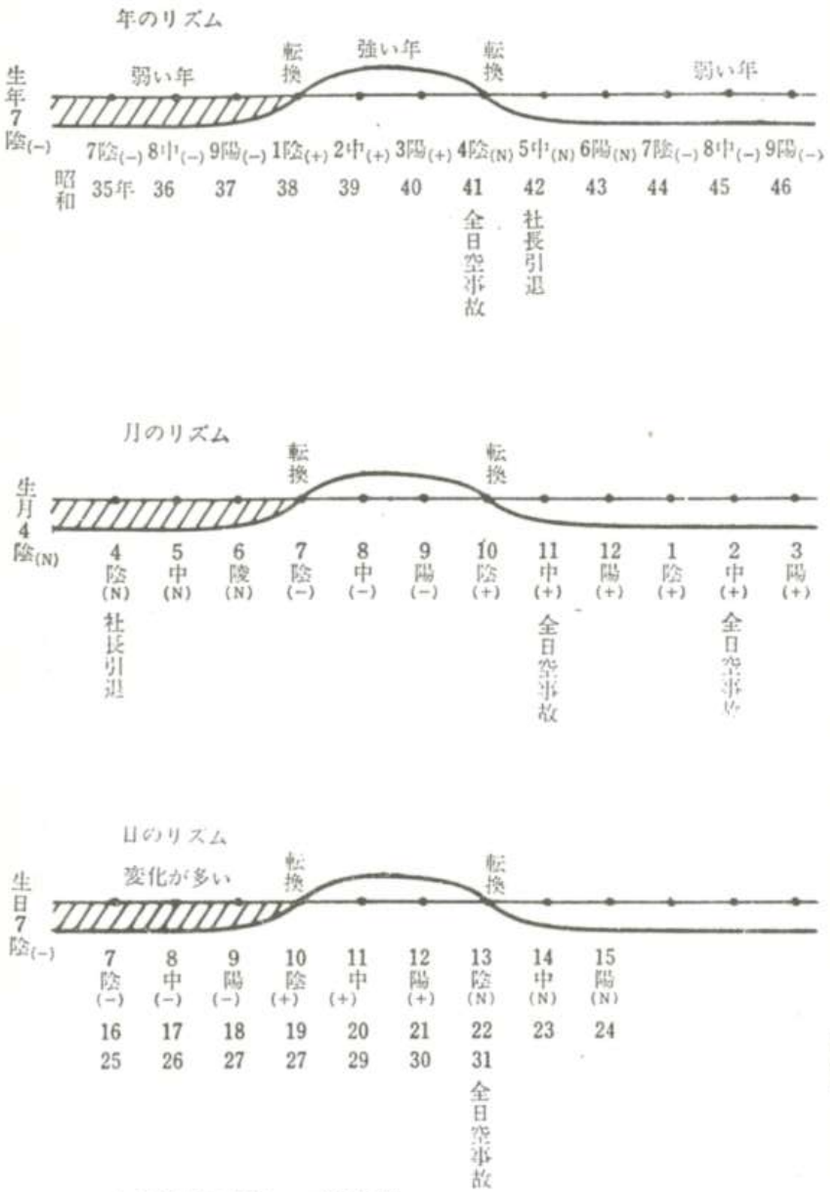
お互いの信頼は両者生れ月日が陰性の同属であるから、外における同性同属の波動が集るように、自然の結び付きであります。

これはお互いに信頼と協力・調和でありますが、同性の場合、同じ時期において、お互いの苦悩が一緒に来てしまうのでなかなか解決策が浮かばず、共に悩んでしまうのです。

そこで先ず自分のリズムを知って行動すべきです。

生年月日の、リズムを図示すると、右図のようになります。

大自然の定められた年月日の波動と、自分の生れた時の位置、即ち年月日のリズムから来る所の、原因、結果の循環を見て下さい。



生年月日の波動　第65図

スカルノ大統領の生年月日 西暦１９０１年－６月－６日	２中(+)	６陽(N)	６陽(N)
デヴィ夫人の生年月日 西暦１９４０年－２月－６日	５中(N)	２中(+)	６陽(N)
大統領	２中(+)	６陽(N) ↑補給	６陽(N)
夫人	５中(N) ↓ 半反撥	２中(+) ↓ 自然	６陽(N) ↓ 反撥

3　インドネシヤ元大統領スカルノ大統領とデヴィー夫人の波動

スカルノ夫婦の生年月日の陰・中・陽の波動は次のようになります。

(1)　生れ年の波動が２中(+)と５中(N)の同属反発でありますが、(+)(N)の差があるために、強い波動と弱い波動が、夫婦共、交互に循環されているので、幾分苦難反発が免れる場合があります。

しかし、中性の年に夫婦共に盛衰が転換するリズムになりますので、充分行動に注意することが必要です。

年のリズムを図示すると、次のようになります。（第66図）

(2)　生れ月の波動の相似点については、大統領は６陽性(N)、夫人は２中性(+)の月に生れております。

月から見たその時の位置のエネルギーは、陽性(N)、

	2	3	4	5	6	7	8	9	1
	中	陽	陰	中	陽	陰	中	陽	陰
	(+)	(+)	(N)	(N)	(N)	(−)	(−)	(−)	(+)
昭和	30年	31	32	33	34	35	36	37	38
	39	㊵	㊶	㊷	43	44	45	46	47
		クーデター起こる	夫人日本に帰る 終身大統領の称号を剝奪される	大統領権力をスハルト陸相に譲る	夫人女子を出産　3月夫人の赤信号の時である				

生　年　の　波　動
第66図

生　月　の　波　動

第68図

中性(+)で理想の姿でありますが、デヴィー夫人と最初に会った月のリズムが大統領の誕生日、即ち六月六日、赤信号冬のリズムの月であります。赤信号冬のリズムに知り合った、夫婦の将来には、苦難な姿が待ち受けていたのであります。しかし、デヴィー夫人は青信号春のリズムでありましたが、主人である大統領のリズムに大きく左右されたのであります。

生れ年と、生れ日が同属であるから、一目で、恋愛の組み合せと分ります。

外においては同性は相和するが、内に入ると相反発に変ります。

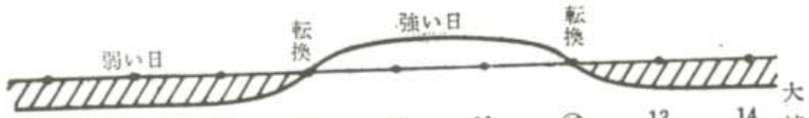
生れ年と生れ日が同属ではあるが、デヴィー夫人の青信号という条件が、日本人としての無名の一女性が、大統領夫人となり得たのであります。しばしば、昔から奇跡が生れるということは、このように、自分の最も良いリズムの時に現われるのであります。

デヴィー夫人は、六月に大統領と会ったことは、今述べた通りでわかりますが、夫人は6・7・8・9・10月が最も良い月であります。（第68図）

二人の月のリズムを図示すると、次のようになります。（第67 68図）

(3)　生れ日の波動は大統領が六日生れの6陽性(N)、夫人も六日生れの六陽性(N)、日の位置は即ち地球のその時における位置のエネルギーで、同性のリズムであります。この同性同属のリズムは苦楽が共に同じ周期で循環して来ます。外に在る時は相吸引し合い、それが内に入れば相反発のリズムに変

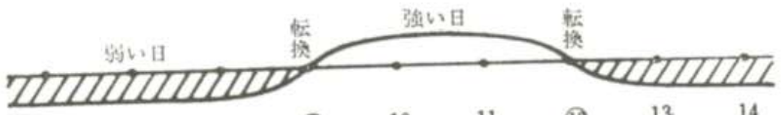
大統領の生れ日　6日　6陽(N)



大統領と夫人の生れ日のリズム

⑥	7	8	9	10	11	⑫	13	14
⑮	16	17	18	19	20	㉑	22	23
㉔	25	26	27	28	29	㉚	31	
				1	2	3	4	5
陽性	陰性	中性	陽性	陰性	中性	陽性	陰性	中性
(N)	(−)	(−)	(−)	(+)	(+)	(+)	(N)	(N)

デヴィー夫人の生れ日　6日　6陽(N)



⑥	7	8	⑨	10	11	⑫	13	14
15	16	17	18	19	20	㉑	22	23
24	25	26	27	28	29	㉚	31	
				1	2	3	4	5
陽性	陰性	中性	陽性	陰性	中性	陽性	陰性	中性
(N)	(−)	(−)	(−)	(+)	(+)	(+)	(N)	(N)

○印：変化の多い日

生月の波動

第69図

化して行きます。

上昇運の時は、思いがけないリズムに乗るが、一旦下降に入ると、崩れるような下運に襲われるリズムであります。

このように6陽性同志の場合は同じような気持ちで、いるために一つの問題が起きた場合、良い解決法を見出すことが困難で、ますます悩み、苦しむのであります。

大統領と夫人の日のリズムを図示すると、次のようになります。（第69図）

年月日のリズムのバランスが、余りにも合致することは、不幸の結果が生じやすいのであります。夫婦何れかが、苦難に襲われた場合、必ず一方が救うリズムの構成が理想であるから、この場合、夫婦の間にリズムに乗っている子供がいますと、両親が同属の同じリズムにあっても、その不幸をカバーします。

しかし、殆んどの場合、子供は両親のリズムの年月日に生れるものであります。

さて大統領とデヴィー夫人の組み合せの結果について反発の事例を説明しましょう。

暗曇　その一

9陽(−)　2中(+)　4陰(N)

この日はデヴィー夫人にとって、忘れることの出来ない悲しい知らせを受けなくてはならない日で

昭和三七年二月四日

ありました。

父親は既にこの世には亡く、母親の手で育てられ、弟と共に一番大事な肉身の母を、交通事故によって失い、危篤の知らせを、遠いインドネシアのジャガルタで受けたのであります。

飛び帰って来ましたが、母は既にこの世の人ではありませんでした。

暗曇　その二

9陽(一)　2中(十)　6陽(N)

昭和三七年二月六日

母親の死後、デヴィー夫人の誕生日に、この世にいる、たった一人の弟、八曽男さん（当時早大理学部一年生）が下宿先で、ガス自殺によって、亡くなってしまいました。

不幸なデヴィー夫人はこの時、たった二人の肉身を一度に失い、悲しみのどん底に落とされましたが、再び大統領のいるジャカルタに帰ったのであります。

かつて、夫人は弟の八曽男さんを誰よりも可愛がり、大学を卒業した後、アメリカに留学させて、将来インドネシヤに引き取ろうとまで考えていたのでありました。

夫人の住むヤスオ宮殿は、この八曽男さんの死を悲んで、スカルノ大統領がその名前をつけて夫人

に贈ったのだそうです。

2月は夫人にとっては、赤信号冬のリズムであり、同性反撥の月であります。

日もまた、弱いリズムの日でありました。

このように自分のリズムが赤信号の時に、病気になったり、肉親と死別したり、また内外の嫌な出来事を、背後に背負い込んで自分が、苦しい立場に置かされるのであります。

暗曇　その三

2中(十)　2中(十)　4除(N)

昭和三九年一一月四日

大統領が来日中、たびたび赤坂の料亭に通い、赤坂の芸者や某歌手と親しくなり、この愛情問題から自殺未遂事件が起きたと噂をされております。年と月の同局、即ち、デヴィー夫人は昭和一五年の生れ5中性(N)、昭和三九年は2中性(十)、また、月も二月生れの2中性(十)、その月も一一月2中性(十)、これは同局の反発が生じるのであります。一一月は黄信号秋のリズムであり、突発的現象の生ずる時であります。

大自然界における、日本の気候では丁度八月末から九月の台風の時期であります。

しかし、スカルノ大統領は、青信号春のリズムの月でありました。

昭和三四年九月即ち生れ年は、6陽性(N)、生れ月九月、九陽性(−)・スカルノ大統領の赤信号冬のリズムに招待され、しかも、夫人も弱いリズムの年でありました。（第66図参照）

6陽(N)　2中(+)　3陽(+)

昭和三四年一一月三日、夫人にとっては弱いリズムの年で、生れ月と日が同性同属で反発し、このような弱いリズムの日に形式的な結婚式を挙げたことは将来の苦難な姿を示しています。

9陽(−)　3陽(+)

昭和三七年三月、二人の肉親を同時に失った傷心のデヴィー夫人が、大統領のもとに、帰国するや、正式に大統領夫人として、入籍したのであります。

しかし、夫人にとっては、赤信号冬のリズムで、最も悪い月に入籍するようになったのも、良いリズムに乗っていない事実であります。

暗曇　その四

3陽(+)　9陽(−)　3陽(+)

昭和四〇年九月三〇日

親衛隊の第一大隊長である、ウントン中佐が、「反スカルノ派の暴動を事前に押える」という名目で、クーデターを起こしました。クーデターは二転、三転し、同年一〇月五日遂に制圧されたが、こ

の問題が発火点となり、大統領の責任を追求される、原因となったのであります。

スカルノ大統領にとっては、弱いリズムの年であり、月は赤信号同属反発の月、しかも、日は、生れ月と同性同属の日、将来の赤信号を暗示していたのであります。

暗曇　その五

九月三〇日のクーデター以降、青信号春のリズムに入ったので、直接、大統領に対する批判の声が静まっていたように見えたが、反スカルノ学生行動戦線「ＫＡＭＩ」の運動は、日増しに激化の様相を呈して来たのであります。

4陰(N)　2中(+)　3陽(+)

昭和四一年二月一二日

この時、デヴィー夫人は赤信号冬のリズムで、年も弱いリズムであり、日は同属反発のリズムとなり、大統領は黄信号秋のリズム、台風の突発的波動の起こる時、赤信号冬のリズムに起こした悪い原因の結果が生ずる時が来たのであります。

デモ隊は日増しに先鋭化し、インドネシアの経済は困窮著しく、国民はインフレーションにより、生活はどん底に落ち入りました。

インドネシア共産党の幹部は殺され、ある者は投獄されて、壊滅状態となり、大統領側近も裁判に

引き出されるに至り、大統領退陣を迫る、国民の声は全国に波及するに至ったのであります。

4陰(N)　7陰(一)

昭和四一年七月

弱いリズムの年と大統領の赤信号冬のリズムに、国民暫定評議会（最高国権機関）で終身大統領の称号を剣奪されたのであります。

4陰(N)　2中(十)　1陰(十)

昭和四一年一一月一〇日

デヴィー夫人出産の為、突如帰国、大統領は青信号春のリズムであり、夫人は生月と同属のリズムで転換し、新しい生命の発育に気分を一転する機会でもありました。

5中(N)　2中(十)　3陽(十)

昭和四二年二月一二日

二月一一日に終了する予定であったインドネシア暫定国民評議会は、スカルノ大統領の一切の権限を、スハルト議長に委任することを翌一二日決定したのであります。

スカルノ大統領にとっては、自分の生れ年と同属であり、転換の年でもあります。

二月は黄信号秋、台風のリズムでもあります。デヴィー夫人は赤信号冬のリズムであり、同属の年

月日であります。夫の苦難は矢張り妻の苦難でありました。

5中(N)　3陽(N)　7陰(一)

昭和四二年三月七日

このような嵐の中で、遂に女子、カルテカサリー（星の精）ちゃんが信濃町の慶応病院で生れて来たのであります。

赤信号冬のリズム、胎教の弱い時の子供でありますが、デヴィー夫人にとっては国を思い、夫を思う一念が大自然に通じ、中・陽・陰、を持って、生命力の強い子供が生れたのであります。

しかし、公私共に変化の多い時に生れた子供であり、父母のリズムを持っています。

昭和四二年十月頃には帰国する予定であると申されておりましたが、大統領が冬のリズムに入る時であったため、大統領自身でさえ、インドネシアにいられない状態であり、とうとう帰国することが出来ませんでした。

自分に与えられている大自然のリズムをよく知って、強いリズムの時に良い結果を生み、弱いリズムの時は保守して攻勢を慎しむような人生航路を送ることが、幸福を得る条件であります。夫人にとっては昭和42年は弱いリズムであり、43年と衰えて行く時であるから、困難を克服して将来の新しい希望に向って進むべきであります。

大自然から与えられている所の自分の大事なリズムを知らないで、行動を起こし、悪い原因を作り、その結果は自分の弱いリズムの時に循環されて来るものです。

4　実例

例一　千葉医大　鈴木　充（殺人犯）

7陰(−)　4陰(N)　2中(+)

昭和八年四月一一日　生

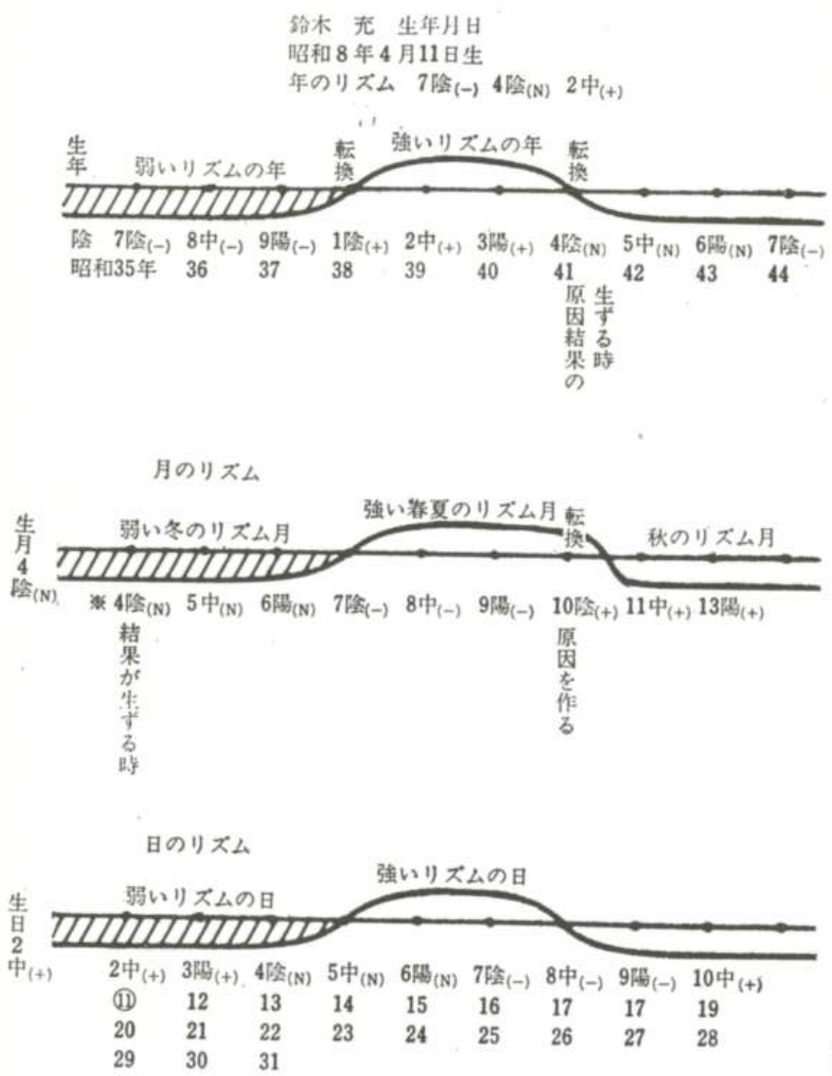
鈴木　充の場合、年月日のリズムが自分の生年月日と完全に一致してます。同属の時に今迄の犯行が結果となって生ずるよい例であります。彼は昭和四一年、4陰(N)　四月、4陰(N)　五日　5中(N)遂に今迄の原因が結果となって現われ、犯歴に終止符を打ったのです。

例二　田中彰治代議士の場合

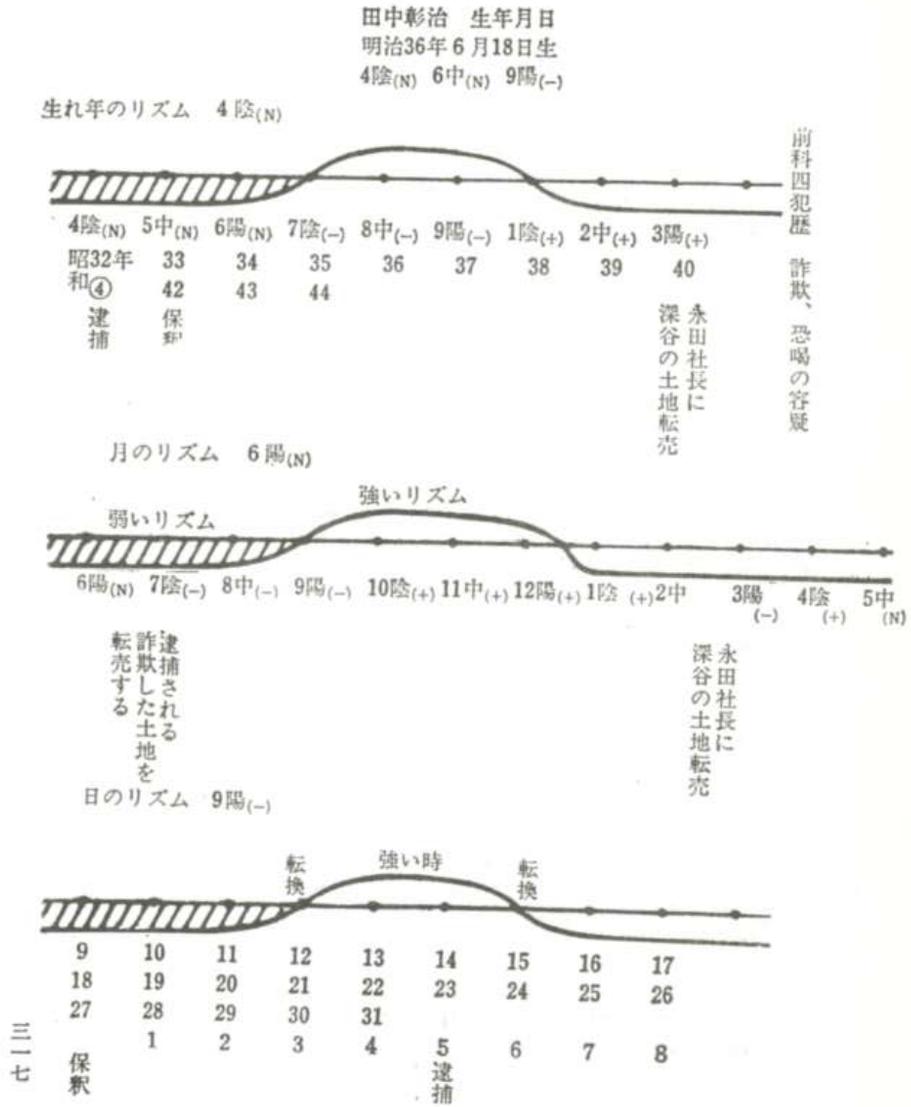
4陰(N)　6中(N)　9陽(−)

明治三六年六月一八日　生

田中は先天的に強い生命力を持っており、国民の代表としての、自覚を持って自分のリズムを大自然の波動と合せた生活をしていたなら、偉大な指導者になれる人間であったが、自分の力を過信し、品性を失い、唯、自我、欲望を自己保存のために、自分の首を自分で締める、羽目に落ち入ったのであ



生年・月・日の波動
第70図



生年・月・日の波動
第71図

ります。

特に弱い赤信号冬のリズムに、土地の詐欺問題や恐喝等の原因を作り、循環して来る弱いリズムの時に結果が生じています。

悪は必ず滅びる。私達は、原因と結果について、もっと日常生活の中で注意して暮すことが必要であります。自我、我欲も、リズムを知ることによって調整出来るはずであります。

弱いリズムの年に生ずる諸問題

今二〜三の例を挙げて年のリズムが如何に影響するかを説明します。

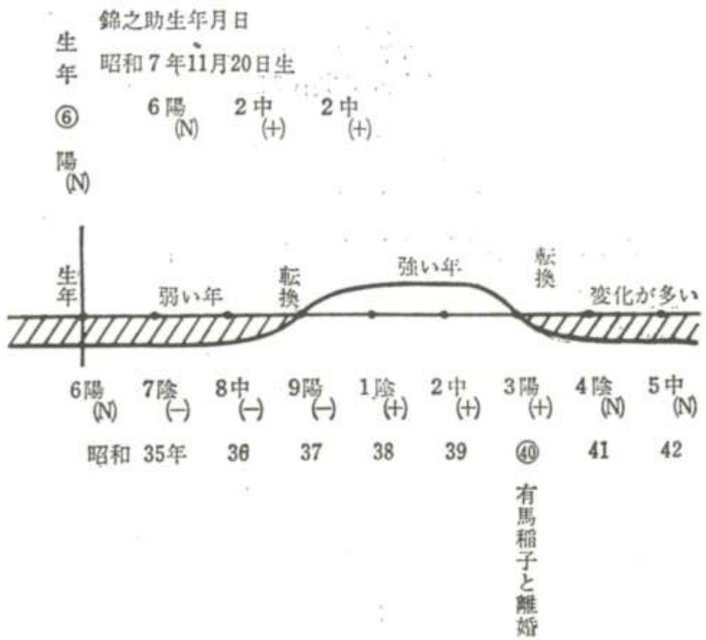
強い年から弱い年に転換する時が一番波乱が起こりやすいから、自分のリズムを良く知って悪い原因を作らぬように気をつけることが必要であります。

強いリズムに計画された問題は、殆んど成功率が高いのであるが、月が赤信号冬のリズムの弱い時であっては、良い結果が得られない。

結婚の時期が余り良くない年と月に、有馬稲子さんが式を挙げている。赤信号の月であり、非常に弱いリズムの年・月であった。（72図参照）

三橋美智也さんは、昭和四一年4陰(N)の年であり、最も苦難な年であった。四〇年のリズムの下り坂から妻と別居生活に入っている。原因と結果は時間の経過と同様に、私達の未来に循環して来るの

例　映画俳優　中村錦之助の離婚



生年の波動
第72図

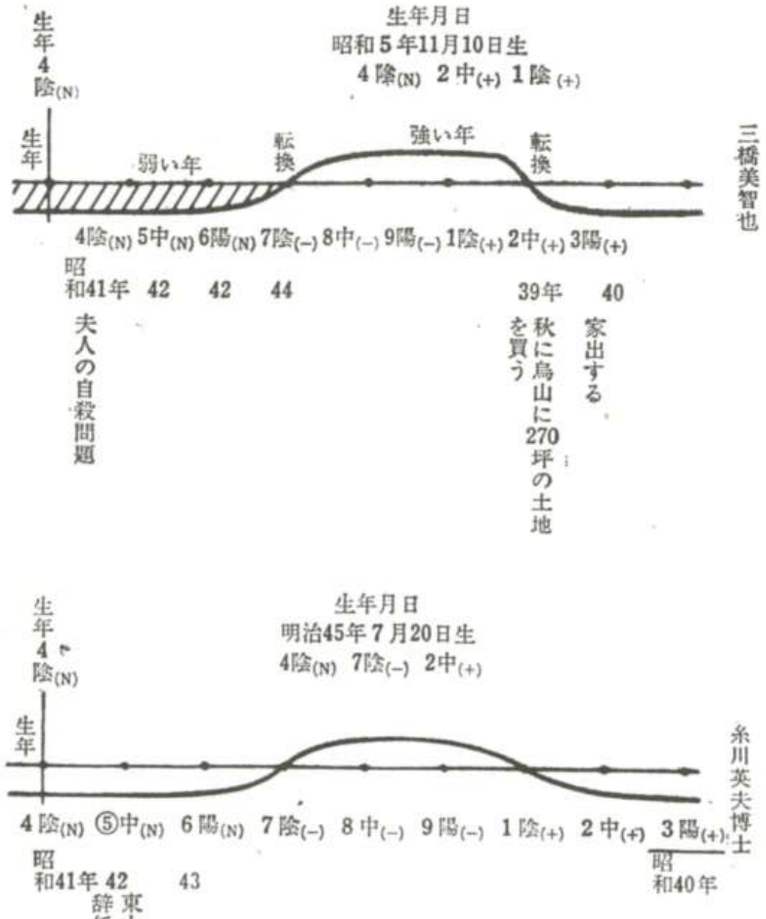
であります。（73図参照）

糸川博士も昭和四二年三月二七日に東大を去った。人々の博士に対する憶測はさておいて、糸川ロケットを世界的水準に、いや、それ以上に評価されたのも、博士の永い間の研究と実行力の賜物である。

しかし、弱いリズムに入ると共に、出る釘は打たれる例の如く、博士にも変動期が訪ずれたのである。

三月は博士にとっては、黄信号秋のリズムで台風的現象の生じやすい時であった。（74図参照）

相沢重明参院議員　明治四三す生2中(+)



生年の波動
第73図

生年の波動
第74図

共和製糖事件に関連して昭和四二年三月二二日収賄容疑で起訴された。相沢議員は三月二二日社会党を除名され、更に議員辞職勧告を迫られていました。自分の生れ年は2中(+)で、昭和42年は5中(N)、転換のリズムである。変化の多い年であることが分ります。

例三　賞と波動

西歴一九六五年一〇月三日　この年のノーベル物理学賞は、朝永博士、リチャード・ファイマン博士、ジュリアン・シュナイダー博士の三氏に決定されました。この栄誉に輝いた三物理学者も、不思議な因縁によって結ばれております。先ず西歴一九六五年の根本数は、3陽(+)でありますから、各人の生れ年と関係のない年であり、陰陽バランスのとれた良い年を示しています。

受賞日には朝永博士だけは出席することが出来ませんでした。これは生れ月が受賞月と同属同性の3陽(+)の月であり、更に生れ日が受賞日と陰性の同属同性の日であったからであります。このような時は突発的なことが起こって、自分の思い通りに事が運ばないことが多いのであります。

しかし、この三学者は年令が、同じ中性であり、生れ年が、陰性であるということは、三人のリズムが一致している事を、示しております。

私達の生活にもこのような規則正しいリズムがありますが、一つのリズムを外すと苦難に襲われます。大自然の波動の中で組み立てられている私達各個人の波動が人生航路であります。

朝永博士生年月日	明治	39	年	3	月	31	日	59 才
		7		3		4		5
		陰(−)		陽(+)		陰(N)		中(N)
リチャード・ファイマン博士	西暦	1,918	年年	5	月	2	日	47 才
		1		5		2		2
		陰(+)		中(N)		中(+)		中(+)
ジュリアン・シュナイダー博士	西暦	1,918	年	1	月	12	日	47 才
		1		1		3		2
		陰(+)		陰(+)		陽(+)		中(+)
受賞日	西暦	1,965	年	12	月	10	日	
		3		3		1		
		陽(+)		陽(+)		陰(+)		

受賞決定は全員青信号春のリズムである。

例四　一代の快男子　力道山の波動（第75図）

力道山の突然の死は多くの日本人にショックを与えた。

そして彼の自信と慢心が彼を死に追いやったのである。彼の自信・慢心は大自然の波動に余りにも逆ったリズムであった為にこのようになったのではないだろうか。

7陰(−)　2中(+)　5中(N)

力道山　大正13年11月14日　生

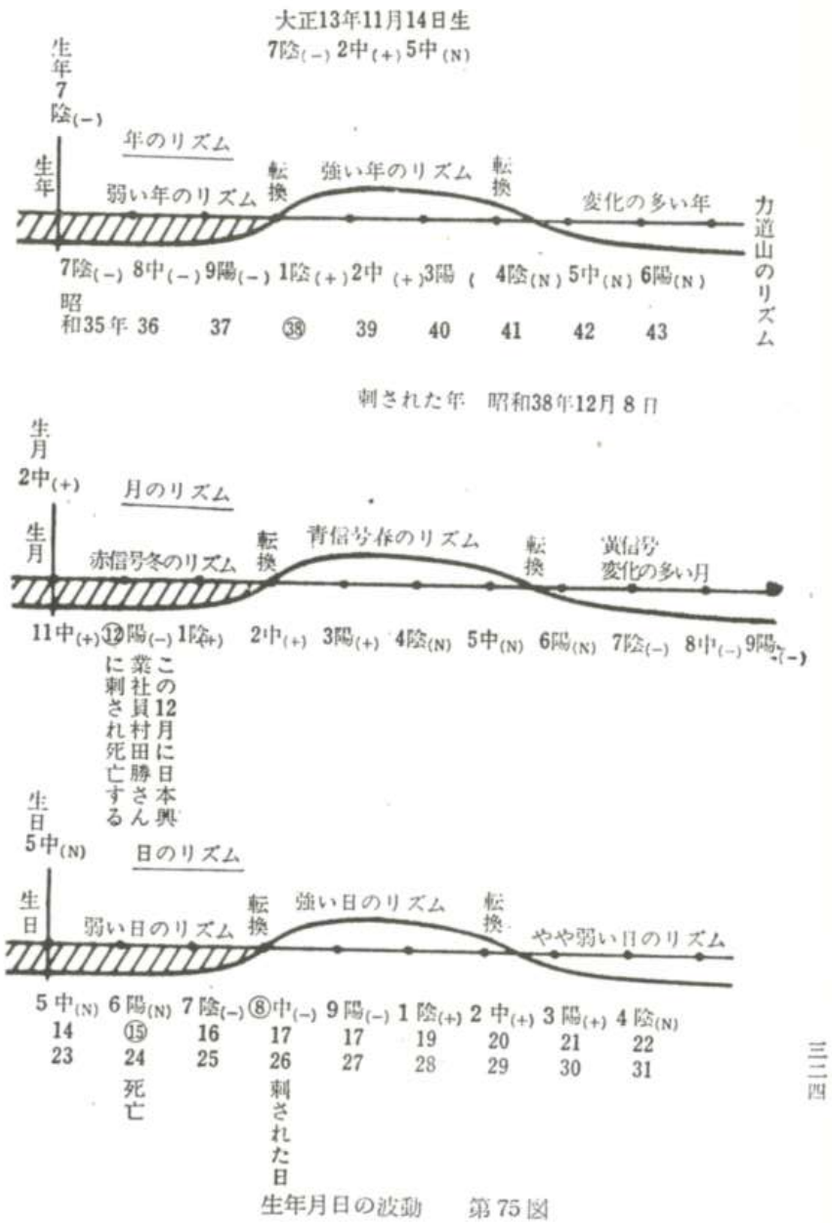
力道山の生年は7陰(−)であり、刺された三八年は一陰(+)で同属同性の年である。月も一二月は赤信号冬のリズム、また、日も同属同性の日である・理性を失った行動は、身を破滅に落し込むことがあります。

ちょっとした不注意から人生を狂わすのであり、赤信号冬のリズムと弱いリズムの日に起こった突発的大変化を示しています。

誰でも赤信号冬のリズムと自分の生れ日のリズムが重った時は、自制心を強く持って、無謀を慎しまなければなりません。

例五　人間衛星船「ソユーズ1号」

船長コマロフ大佐のリズム



生年月日の波動　第75図

昭和四二年四月二四日のモスクワ放送によると、二三日打ち上げられたソ連の人間衛星船「ソユーズ一号」のコマロフ船長は二四日、試験飛行完了の際に着陸に失敗して死去しました。

この報告はソ連共産党中央委員会最高会議幹部会、ソ連政府がコマロフ船長の家族へ哀悼の表明という形で明かにしました。

ソ連全土の期待と、全世界の注目のうちに行われたソ連の人間衛星船「ソユーズ一号」の宇宙飛行は、宇宙開発史上、初めての飛行中の飛行士の死亡という悲劇に終ったのです。

悲劇の秘密は、コマロフ大佐の生れ月は三月で、最も弱いリズム、4月は赤信号冬のリズムに当っていました。

例六　コマロフ大佐の生年月日

2中(+)　3陽(+)　7陰(−)

西歴一九二八年三月二五日　生

ソユーズ一号で死亡したウラジルミン・ミハイロビッチ・コマロフ技術大佐は、西歴一九六四年一〇月一二日、青信号春のリズムに打ち上げられた史上初の三人乗り衛星船ヴォストーク号の船長を勤めた。宇宙飛行のベテランでありました。

過去、パラシュート降下の教官として七十七回以上の降下記録を持ち、ジェット飛行歴五百時間の

飛行記録を持っていた。

三月二五日は四十歳の誕生日を迎えた。

この事故の年は四二年　5中性(N)・大佐の生れ年は西歴一九二八年2中性(+)で、転換の年であり、更に赤信号冬のリズム、最も弱いリズムで、新しい実験等はいろいろな問題が重さなり失敗することが多いのです。失張り自分の最も強いリズムの時を選ぶべきであります。

5　突発事件と波動

全日空の大惨事

昭和四一年二月四日　北海道千歳空港を飛び立った。全日空機ボーイングB七二七、機体番号TN八三〇二は、同日夕刻千葉上空を過ぎてから、東京保安事務所に宛「有視界飛行に移る」と報告したまま、消息を絶ちました。

同機には高橋正樹機長（昭和二年一月一九日生）外乗務員六名、乗客一二六名、計一三三名が乗っておりましたが、全員絶望となりました。このような多数死亡者の出た惨事は、世界航空史上始めての出来事でありました。

この事件の一ヶ月程前のことでしたが、私の友人で、同じ電気関係の会社を経営している仲間ですが、丁度この日の飛行機を利用して北海道旅行から帰京する予定の計画を立てておりましたから、私

は忠告をしました。

彼は1月生れの冬の赤信号、最も悪い時期でありましたので、自分の悪いリズムを自認して、この旅行を思い止まりました。その結果この突然の惨事から免れることが出来ました。

ではうこして、その災難を未然に悟ることがなぜ出来たのでしょうか。

それは難かしい理屈ではありません。

私達は誰でも、はっきりと未来の変化を知ることが出来るのであります。私達の生年月日の春夏秋冬のリズムが教えている法則によって容易に解明出来るのであります。

これは決して神がかり的な霊感ばかりによるものではありません。大自然界においても春夏秋冬があるように、私達にも春夏秋冬があるのです。

そのリズムの変化を知って人生航路の行く手に横たわる、危難を避けることであり、単に運命と諦めてしまうのは、余りにも非科学的といえましょう。

では、この事件を解明して見ます。果して大自然の波動、即ち陰陽のバランスがとれているか、図示致します。

これを見ると事故の年と機長の生れ年は陰性の同属同性の年であり、良くない反発現象の起こりやすい年であります。また生れ月は1月であるため、4月までは冬の赤信号の期間であるから、最も悪

いリズムの月であります。更に生れ日と事故の当日も矢張り陰性で同属同性で、大反発の生じやすい日でありました。

こうして、この事故は機長にとっては起こるべくして起こった惨事であります。

昭和四一年の根本数は、4陰(N)の年でありますから、この年に起こる悪い変化は、殆んど陰性で起こりやすいのであります。

事故とリズム

全日空惨事の内容をもっと掘り下げて考えて見ると全部陰性でありました。

事故のあった日

昭和	41	年	2	月	4	日
	4		2		4	
	陰(N)		中(+)		陰(N)	

機長の生年月日

昭和	2	年	1	月	19	日
	1		1		1	
	陰(+)		陰(+)		陰(+)	

比較対照

	年	月	日	
事故の日	陰(N)	中(+)	陰(N)	
	—	—	—	同性反撥して、よくない。
機長生年月日	陰(+)	陰(+)	陰(+)	
	—	—	—	1月生れの機長は赤信号。冬のリズム
				同性反撥して、よくない。

（1）事故の41年の根本数	4	陰(N)
（2）事故のあった日の根本数	4	陰(N)
（3）乗務員数7人の根本数	7	陰(−)
（4）搭乗者全員 133人の根本数	7	陰(−)
（5）ボーイングB727の根本数	7	陰(−)
（6）飛行時間1600時間の根本数	7	陰(−)
（7）機体番号W8302の根本数	4	陰(N)
（8）機長の生れ年昭和2年の根本数	1	陰(+)
（9）機長の生れ日19日の根本数	1	陰(+)

このように調べて見ると、九項目が全部陰性の同属同性であります。この事は単なる遇然として見逃すことが出来るものでしょうか。

何か教えられている一つの法則を、私達は自覚しなければなりません。

更に驚いたことは、この事故当日は、全日空の会社全役員が揃って、最も悪い年月日でありました。私達の生年月日、年令と循環して来る年月日の陰陽の変化がどうして一致するか、電気的現象・磁気現象における反発的作用であり、大自然の波動と自分のリズムが一致しない悪い時なのであります。

右のように全役員が、事故当日は悪い月日で、全日空の会社にとっては、最悪の日と共に、大災難の日でありました。

事故当日	昭和 41年 2月 4日 4 2 4 陰(N) 中(+) 陰(N)	事故とその原因
岡崎社長	明治 30年 4月 7日 7 4 7 陰(−) 陰(N) 陰(−)	岡崎社長は年と日が同性の反撥で悪い日であり、又2月は黄信号で、突発的な事故に遭う時。
副社長・福本氏	明治 29年 8月 10日 6 8 1 陽(N) 中(−) 陰(+)	日が同属の反撥で悪い日である。8月は青信号であるが、2月は同属の月で変化の多い月。
専務・鳥井氏	明治 38年 1月 3日 6 1 3 陽(N) 陰(+) 陽(+)	生れ月1月であり、2月は赤信号で最も悪い。
常務 鈴木氏	明治 40年 1月 7日 8 1 7 中(N) 陰(+) 陰(+)	生れ月1月は赤信号
常務・山本氏	大正 元年 11月 1日 4 2 1 陰(N) 中(+) 陽(+)	生年月日に同性同属で反撥、而も11月生れで、2月は赤信号。
常務・松前氏	明治 37年 9月 1日 5 9 1 中(N) 陽(−) 陰(+) （最高責任者の波動が一番作用します）	生れ日のみか陰性の反撥

最高指導者の六人中五人は、事故の日と同じ陰性の生れ日を持っております。

しかし、松前常務のみは、生れ日は陰性の同性同属でありますが、生れ月九月、9陽㊀で、2月は青信号春のリズムで生命力が強い時であったため、事故処理においては、的確に遂行出来る生命力を持っていたのが、せめてもの救いでありました。

会社の突発的大事故は、殆んど最高指導者の一番悪いリズムの時に発生するものであります。

家庭内においては、親子で最も悪いリズムが重なった時に発生するものであります。

私もかっては航空兵であり、冷静沈着に、一秒の差が死と生につながる重大な鍵であると、認識はしておりましたものの、自分のリズムが分からなかったために、生死の間をさまよった事がありました。

私達は、必ず自分のリズムを知って、人生航路を無難に歩むよう、心掛けなくてはなりません。大宇宙の波動に合わせ、一日、一日を感謝の気持ちで過ごし、大善をして生きることであります。

おわりに

読者の皆様は、この三編を読まれて、私達と大自然の因果関係がわかったと思います。物質論の、数学的理論は殆んど略して、生命と物質の因果関係を、具体的に説明しました。大自然と私達が、いかに深い関係にあるかを知って、いただきたいのであります。

現象論は、飽くまでも正法を悟ることによって、弱い波動も、打破することが出来ることを、強調致します。私は、生命論を多くの人々が、知って人間性を高め、最も調和のとれた社会を作り、最も人間らしい生活が、出来ることを願っているのです。

只々、拝む拝むの宗教では、私達の心は、磨かれないのであります。

先ず人間として、自分の使命を知り、調和された生活の中で自分を自覚して、いただきたいのであります。

説教がましくなりましたが、必ず人生航路の参考になることを、心から祈ります。

本書は、実在界より、現象界において、正法を悟っている霊能者に、通信されていることを記しておきます。良く考え熟読された読者は、約90%の潜在意識が開き、読者の守護、指導霊が霊感を与え、約10%の表面意識に作用して、胸がこみあげて来ます。そのような、現象が出た場合は、自分の本性である過去世が、よろこびの姿を貴方に伝達したのであります。

若し、本書を熟読して、自分の本性を悟ったり、他に疑問がありましたなら、私に連絡されますことを希望します。

東京都大田区大森西三ノ四ノ四

著者　高橋信次

検印を省
略する

大自然の波動と生命　　高橋 信次著

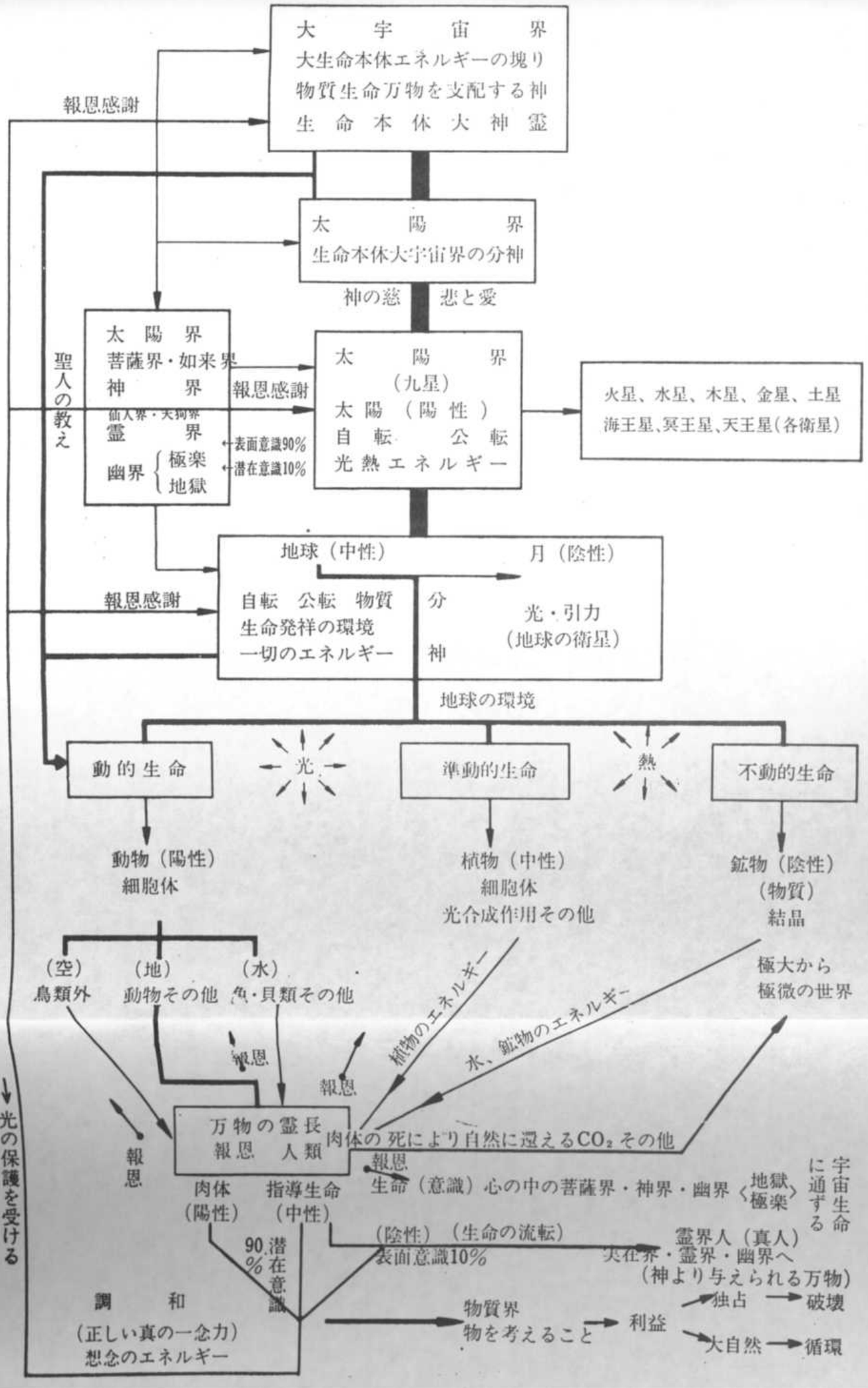
昭和44年1月8日　発行

定価1,000円
送送　200円

発行所　第十五興生社出版部　郵便番号　105
東京都港区西新橋2—3—2
電話東京 (591) 1008. 1604—5番
振替東京 3 8 3 9 番

印刷所　日本製版株式会社　東京都千代田区有楽町1—7

本書を無断で複製，引用することを禁じます。


大宇宙界
大生命本体エネルギーの塊り
物質生命万物を支配する神
生命本体大神霊
報恩感謝
太陽界
生命本体大宇宙界の分神
神の慈悲と愛
太陽界
菩薩界・如来界
神界
仙人界・天狗界
霊界
幽界
極楽
地獄
表面意識90%
潜在意識10%
聖人の教え
報恩感謝
太陽界
(九星)
太陽(陽性)
自転 公転
光熱エネルギー
火星、水星、木星、金星、土星
海王星、冥王星、天王星(各衛星)
地球(中性)
月(陰性)
報恩感謝
自転 公転 物質
生命発祥の環境
一切のエネルギー
分神
光・引力
(地球の衛星)
地球の環境
動的生命
光
準動的生命
熱
不動的生命
動物(陽性)
細胞体
植物(中性)
細胞体
光合成作用その他
鉱物(陰性)
(物質)
結晶
(空)
鳥類外
(地)
動物その他
(水)
魚・貝類その他
植物のエネルギー
水、鉱物のエネルギー
極大から
極微の世界
報恩
報恩
報恩
光の保護を受ける
万物の霊長
報恩 人類
肉体の死により自然に還えるCO₂その他
報恩
肉体
(陽性)
指導生命
(中性)
生命(意識)心の中の菩薩界・神界・幽界
地獄
極楽
宇宙生命に通ずる
90%潜在意識
(陰性)(生命の流転)
表面意識10%
霊界人(真人)
実在界・霊界・幽界へ
(神より与えられる万物)
調和
(正しい真の一念力)
想念のエネルギー
物質界
物を考えること
利益
独占
破壊
大自然
循環

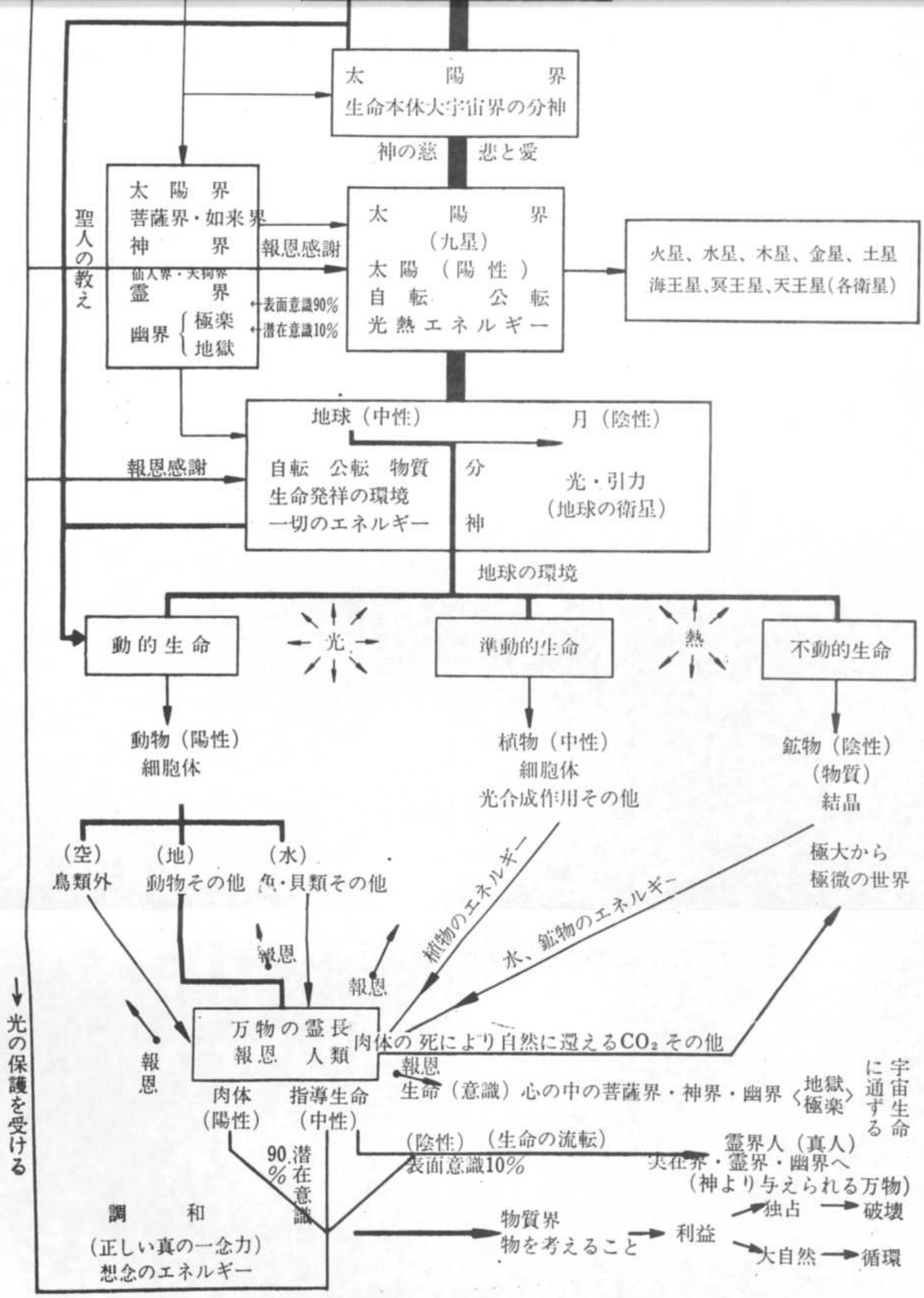
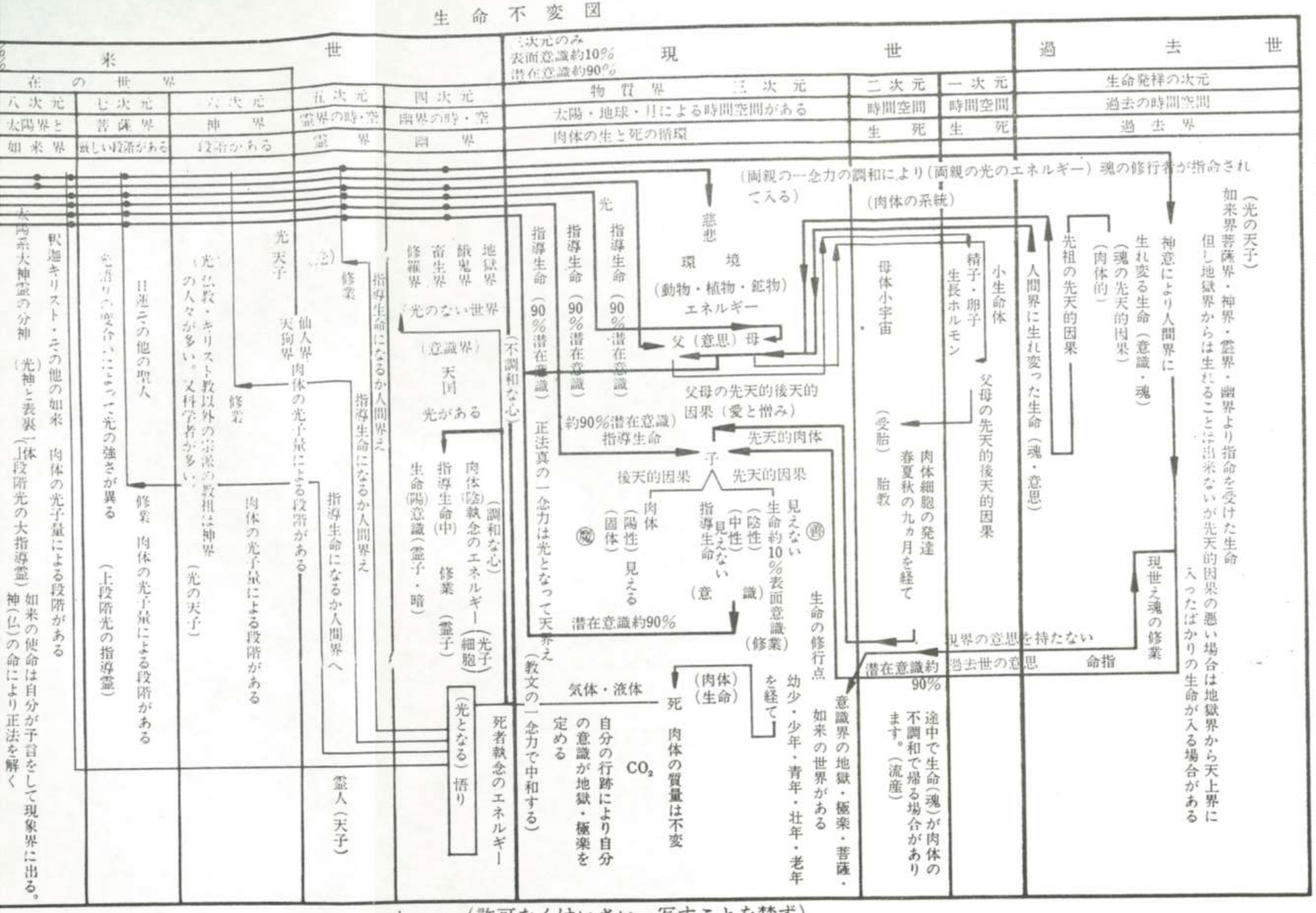


図 表 (1)

(許可なくけいさい・写すことを禁ず)

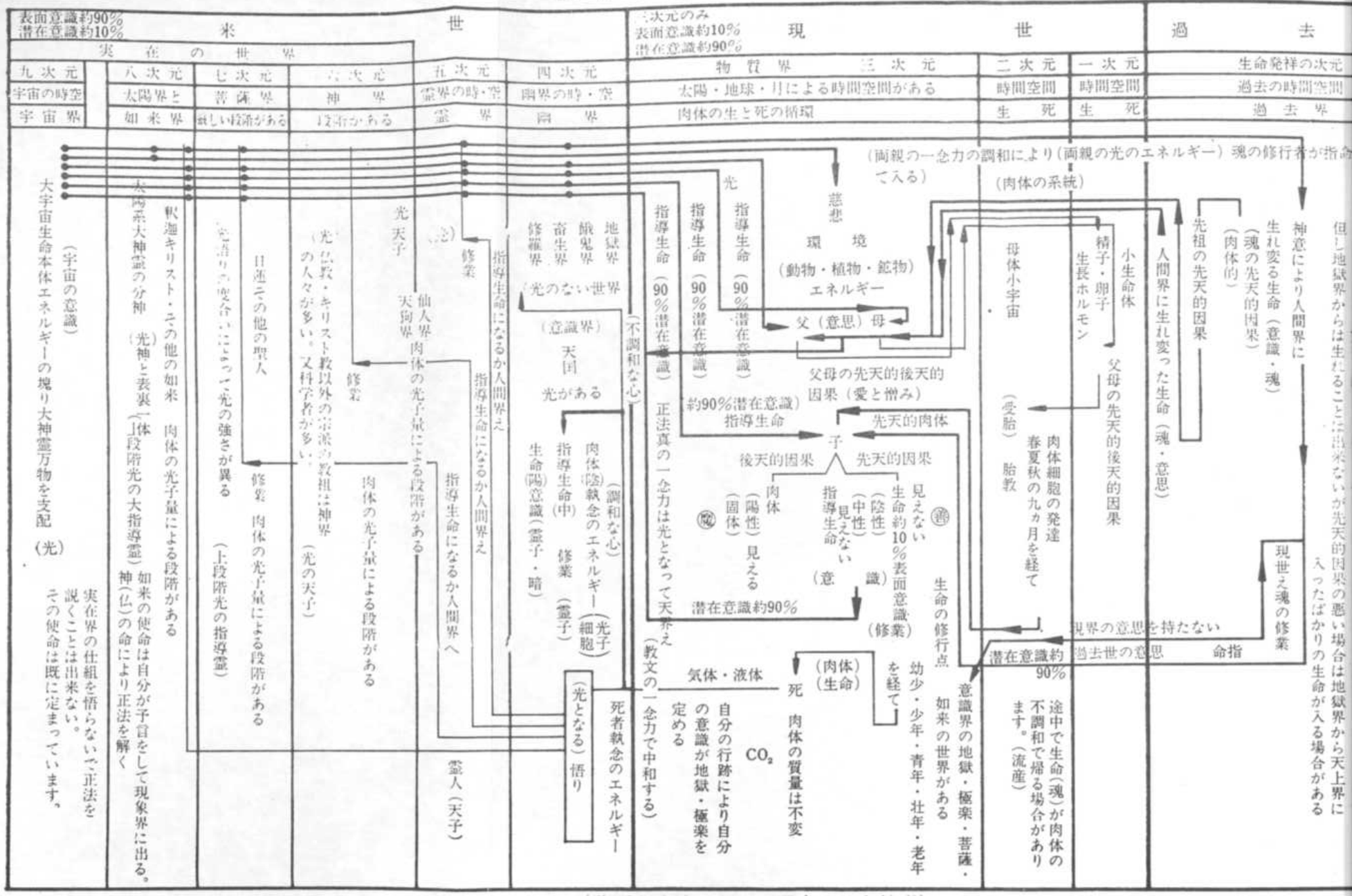
三世を修業する
（魂）

第二図　生命の循環（仏教的な名称を使用）（過去世は来世に通じている）
（循環は円型である）



（許可なくけいさい・写すことを禁ず）

生命不変図



(許可なくけいさい・写すことを禁ず)